

転生 神竜の滅竜魔導  
士シーズン1～フェア  
リーテイル編～

ゾーン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

軽い神様のミスで死んでしまった主人公。

FAIRY TAILの世界に行くことになったがその世界で何を見る。

エロ描写はR-18で書きます。

# 目次

## ようこそ!! 妖精の尻尾編

第1話 ようこそ妖精の尻尾へ!!

1

第2話 ルーシィ・ハートフィリア

7

第3話 鉄の森

第4話 100年クエスト

## 幽鬼の支配者編

第5話 ヒーローは遅れてくるもんだ

24

第6話 光VS闇

## 楽園の塔編

第15話 ルーシィデビュー戦

76

第7話 謎の女

第8話 エーテリオン

第9話 覇竜

バトル・オブ・フェアリーテイル編

第10話 バトル・オブ・フェアリーテ

イル

第11話 VSラクサス

第12話 ファンタジア

六魔將軍編

第13話 連合軍

第14話 VS六魔將軍(1人離脱)

28

|          |            |     |      |              |     |
|----------|------------|-----|------|--------------|-----|
| 第16話     | 無の彼方へ      | 91  | 第26話 | 2人のレイ        | 167 |
| 第17話     | 仲間の力       | 97  | 第27話 | 壮行会          | 177 |
| 第18話     | 緋色         | 106 | 第28話 | HOME         | 187 |
| 登場人物&技一覧 |            | 113 | 天狼島編 |              |     |
| エドラス編    |            |     | 第29話 | 修行           | 196 |
| 第19話     | ギルダーツ      | 120 | 第30話 | みんなで夜はやること1つ |     |
| 第20話     | V.S. ギルダーツ | 128 | だろ!  |              | 205 |
| 第21話     | エドラス       | 133 | 第31話 | 接收           | 213 |
| 第22話     | 魔法文化       | 140 | 第32話 | V.S. グレイ     | 218 |
| 第23話     | 休息         | 151 | 第33話 | ナツV.S. グレイ   | 223 |
| 第24話     | 拉致         | 156 | 第34話 | S級魔導士昇格試験    |     |
| 第25話     | レアグローブ     | 162 | 228  |              |     |
|          |            |     | 第35話 | 最悪の組み合わせ     | 240 |



大魔闘演武編

|      |              |     |      |                |     |
|------|--------------|-----|------|----------------|-----|
| 第57話 | 戦いの後         | 407 | 第69話 | 女の涙            | 495 |
| 第58話 | ファイオーレー1へ!!! | 415 | 第70話 | 再臨『妖精女王』       | 503 |
| 第59話 | 星座の世界        | 422 | 第71話 | 妖精の闇           | 512 |
| 第60話 | Bチーム         | 433 | 第72話 | フードの人物         | 521 |
| 第61話 | 空中迷路         | 437 | 第73話 | リュウゼツランド       | 526 |
| 第62話 | 開会式          | 445 | 第74話 | 統合             | 532 |
| 第63話 | かくれんぼ        | 453 | 第75話 | 覚醒             | 543 |
| 第64話 | OP           | 460 | 第76話 | Happy Birthday | 550 |
| 第65話 | 聖十対決         | 467 | 第77話 | 魔導士バトルロワイヤル    | 556 |
| 第66話 | 仲間のために       | 473 | 第78話 | 新しい造形          | 563 |
| 第67話 | 愛する者の為に      | 479 | 第79話 | 風神と弟子          | 572 |
| 第68話 | 人魚と虎         | 488 |      |                |     |

第80話 優勝

第88話 冥府の男

581

第81話 結束

第89話 妖精対冥府

586

第82話 開かれた扉

第90話 不協和音

590

第83話 大舞踊演舞

第91話 謎

599

主な登場人物&技一覧 Part.

第92話 鏡

603

第93話 表裏一体

603

番外編

番外編 歌姫

615

冥府の門編

第84話 新たなる冒険へ

630

第85話 月の村

634

第86話 月を崇める者たち

638

第87話 妖精の唄

642

673

669

664

655

650





# ようこそ!! 妖精の尻尾編

## 第1話 ようこそ妖精の尻尾へ!!

主「んゝここはゝ？」

あたりを見渡すと木々が生い茂っていた。

しばらくあるくと街が見えてきた。

主「マグノリア周辺の森か・・・」

おそらく原作開始前・・・

ひとまずフェアリーテイルに行くか」

フェアリーテイルに入ると周りがざわつきだした  
さつそくマスターを見つけ 声をかけた

主「フェアリーテイルに入りたいんですけどが」

マカロフ「お前さん名前は？」

名前か、・・・どうしよう？

主「レイ・グローリーです」

RAVE混ぜたけどいいかw w

マカロフ「レイか、いいじやろう

紋章はどこに入れる？」

レイ「右肩に黒で」

マカロフ「これでおぬしもフェアリーテイルの一員じや」

なんか入るのあつさりw

そう思っていると突然ナツが突っ込んできた。

ナツ「俺と勝負しろ!!」

いきなりか・・・

レイ「ああ、いいぞ。表に出ろ。」

外に出るとギャラリーが集まってきた。

マカロフ「どちらかが倒れるまでじや・・・始め！」

ナツ「よっしゃー! 『火竜の鉄拳!!』」

さっそく魔法試してみるか

ナツは火の滅竜魔導師だから水で打ち消すのがセオリーだな

そう考えながら右の拳に水を纏う

レイ『水竜すいりゆうの鉄拳』

2人の拳がぶつかり合いナツの炎を消した。

ナツ「な!?!」

イメージの方も試すか。

頭の中で瞬間移動をイメージした。

すると・・・

『シユン!!』

ナツ「消えたあ!?!」

レイ「こつちだ

すいりゆうのほうこう  
『水竜の咆哮!!』

瞬間移動でナツの背後に移動しブレスを放った!!

ナツ「ぐああああ!」

マカロフ「そこまで!レイの勝ちじゃ。」

正直楽勝だったなく

まあ、魔法を使うって感じはなんとなく覚えられるな

ナツ「お前も滅竜魔法使うのか?」

レイ「まあ、いちおう」

? 「このくらいいの強さなら私たちがいけば勝てるだろう」

そういいながらギルドの方からエルザ、ミラ、グレイ、ラクサスが歩いてきた。

レイ「IVS4か。いいぞ、かかってこい。」

ラクサス「水属性なら俺が有利だ! 『レイジングボルト!!』」

レイ「水だけじゃないぜ

『岩竜の層撃』」

レイが腕を振るうとラクサスの足元から岩が突きだしてきた。

ラクサス「がっ!!」

ラクサスは空中に投げだされそのままレイは、ラクサスに追撃を見舞う

レイ「『岩竜の剛拳!!』」

ラクサスに岩で纏った拳をぶつけ地面にたたきつけた。

ラクサス「があああ!!」

ラクサスK・O

次はどういつだ?

グレイ「『アイスメイク・槍騎兵』!!」

いきなり氷の槍が飛んできた。

しかしレイは軽くよけた

レイ「氷属性か（知ってたけど）」

グレイ「いきなりで悪いな。もういつちよ！」

レイ「なら『火竜の翼撃!!!』  
かりゆうのよくげき

遠距離系でグレイの技を相殺する

グレイ「ナツと同じ!？」

レイ「よそ見は禁物だぞ。『アイスストーム』」

一気にグレイの目の前まで詰め寄り氷の竜巻で吹き飛ばす。

グレイ「氷まで……」

グレイK.O

ミラ・エルザ「『イビルエクスプロージョン!!!』」

『天輪・繚乱の剣!!!』  
てんりん・ブルーメンブラット

2つの攻撃がレイを直撃した

しかし……

レイ「2人合わせてこの程度か? 『幻竜の吐息』  
げんりゆうのといき

幻覚、睡魔を司る竜の魔力を2人に放つ

するとミラとエルザは崩れ落ちた。

マカロフ「それまで、レイの勝ち。それよりどういう魔法じゃ？」  
レイ「滅竜魔法全部とある程度の魔法使えます。」

どこからかつかっこいいやらチートすぎだろと、声が聞こえてきた。

そんなこんなで加入初日からタバタだった。

次の日から女の子に追いかけてまわされることをレイはまだ知るよしもなかった…

## 第2話 ルーシィ・ハートファイリア

レイ「ふう〜やつと着いたー」

レイは仕事でハルジオンに来ていた。

仕事内容は「女性誘拐事件の犯人の捕縛」

レイ「たしかナツもイグニール探しに来てるって言ってたな

奴隷船の出航は夜らしいから宿で寝るかー」

・・・4時間後

レイ「やつばい!!」

時間ぎりぎりだ!!」

レイは飛び起きそう言いながらカバンから魔力で空を飛ぶスケボーで窓から飛び出した。

レイ「寝過してクエスト失敗とかシャレになんね〜!」

しばらく飛ぶと船を見つけた。

レイ「あれか!」

レイが船を見つけ、飛び込もうとした次の瞬間船が一瞬で港まで押し戻された!!

レイ「はぁー！？」

なにか起こったんだよ・・・」

そういいながらレイは港へと向かう

ナツ「おらー！？」

レイ「なんだナツが暴れてたのか

おい！ナツ！」

ナツ「あ？なんだレイか」

レイ「なんだじゃねえよ

そいつは俺の仕事の獲物だ、あんまボコるな」

ナツ「こいつフェアリーテイルの名前勝手に語ったんだぞ」

レイ「わかったからそいつは評議員に引き渡しとく」

ナツ「ちっ、しょうがねえ」

ボラ「勝手に引き渡すとか言われても困るね!!」

ナツが捕まえていたボラという男がナツの腕を振りほどき巨大な火の玉を作りだし

た

レイ「めんどくさいから抵抗すんなよ」



ナツ、炎食ベといて」

ナツ「お前も食えるだろ!？」

レイ「ヤーよ、あんなマズそうな炎食いたくないし」

ナツはブツブツ言いながらもボラが作り出した火の玉を喰らい尽くす

レイ「そんなじゃまあ、大人しく捕まってもらおうか」

レイは刀を抜く様な型をとり水竜の剣を生成する

レイ『『水竜剣すいりゆうけん アブソリユート・ゼロ』』

ルーシィ「なにあの魔法？」

ハッピー「あい、ナツが使ってる『滅竜魔法』の最高位魔法『神滅竜魔法』だよ」

ルーシィ『『神滅竜魔法?』』

ハッピー「ナツが使うのは火の魔法だけでしょ？」

レイはいろんな属性を同時に使ったりすることができんだよ」

レイ「さあ、お前の罪を数えろ

『『氷竜剣ひょうりゆうけんノ型 氷竜旋尾ひょうりゆうせんび !!』』

レイは刀に氷の魔力を溜めて抜刀の勢いに乗せ氷の斬撃を飛ばしボラを凍りつかせ

た

レイ「で、そこにいる女は誰だ？」

ナツ「ルイージーだ

今日出会った」

ルーシィ「ルーシィよ!!（レイって人ちよつとかっこいいかも♡）」

レイ「そうか、よろしくな。じゃあ俺はこいつは評議員に引き渡しとく

それとナツ、お前早く逃げたほうがいいぞ」

ナツ「はっ?」

ハッピー「ナツく! あっちから検東部隊がくるよ!」

ハッピーが指さした方向からたくさんの人が・・・

ナツ「まずい! 逃げるぞ!」

ルーシィ「なんであたしまでく」

ナツ『妖精の尻尾』に入りてえんだろ? じゃあ来いよ!」

ルーシィ「っ!! うんっ!!」

こうしてまたフェアリーテイルの始末書が増えることになる・・・

## 第3話 鉄の森

ルーシイ「みてみて〜ナツ、レイ！あたしも紋章いれてもらっちゃった〜♪」  
ナツ・レイ「よかったなルーシイ」

ルーシイ「ルーシイよ！」

レイ「しつかし暇だな〜」

隣でナツとグレイが喧嘩しているが気にする様子のないレイ  
すると・・・

ロキ「大変だー！エルザが帰ってきた！」

ナツ・グレイ「なにっ！」

レイ「やつとか・・・」

ロキの言葉にナツとグレイは顔を合わせ、レイは重い腰を上げる  
ルーシイ「エルザさんってどんな人なの？」

ナツ・グレイ「・・・化け物」

レイ「純情な女の子」

みんな「「どこがっ!」」

そんなこんなでいろいろあり現在『鉄の森』アイゼンワルトの連中の前にいる

レイ「多勢に無勢だな

ナツ、グレイ、エルザはエリゴールを探しにいけ」

「「了解」」

ルーシィ「この数レイだけで大丈夫なの?」

レイ「ああ・・・」

ちよつと魔法の組み合わせも試したいしな」

「「かかれー」」

レイ「よしじゃあ、右手に『氷竜』左手に『雷竜』『モード雷氷竜!!』」  
するとレイの体が冷気と雷に包まれた

ルーシィ「なにあれ・・・」

レイ「滅竜魔法のあわせ技だ

喰らえ『雷氷竜の咆哮!!』らいひょうりゆう ほうこう

「「ぐあー……!」」

氷と雷のブレスの威力はすさまじく駅のターミナルを半壊させ『鉄の森』の3分の1が吹き飛んだ

ルーシイ「まだあれだけいる。さすがに数が・・・」

レイ「しようがない・・・『滅竜奥義・改 雷光氷竜剣!!』」  
らいこうひょうりゅうけん

雷のスピードで氷の剣となったレイが敵に突っ込んでいく

その姿はまさに無双・・・

「「ギャーッ」」

レイ「ふう、さすがに魔力の消費が激しいな

さて、次行くぞルーシイ」

ルーシイ「かっこいいー!!（やばい、惚れそう／＼）

ひと段落したところに別行動をしていたエルザが戻ってきた

エルザ「レイ!! エリゴールの目的がわかったぞ!!

マスターたちのいるクローバーの街だ!!」

レイ「そんなところだろうと思った

大方ララバイで定例会中のじいさん達を殺すつもりだろ」

ルーシイ「けど外には魔風壁が・・・」

レイ「そんなの俺に任せろ

所詮はただの風魔法・・・俺の敵じゃない」

そういうとレイは魔風壁の前に行き

レイ「『滅竜奥義 照破・しやうは天空穿!!』」

レイは風の結界を自分の風の結界で包み滅竜奥義をぶつけて相殺したのだ  
ルーシイ「すごい!!」

レイ「当たり前だ

それとハッピーお前の持つてる『処女宮の鍵』ルーシイに渡してやれ」

ハッピー「あつ、そうだった」

ルーシイ「どうしてそんな大事な事先に言わないの!」

レイ「じゃあ俺は先にエリゴール追うから」

素晴らしいスケボーを作り出し颯爽と飛んで行った。

エリゴール「ここまで来れば大丈夫だろう」

レイ「なにが大丈夫なんだ?」

エリゴール「!?!」

突如背後に現れたレイに驚くエリゴール

エリゴール「なぜおまえがここに!?!」

魔風壁が破れるはずがない！」

レイ「お前のしよぼい風魔法と俺の滅竜魔法と一緒にするな」

エリゴール「クソ！『暴風波!!』」

レイ「『天竜の翼撃!!』」

『暴風波』と『天竜の翼撃』がぶつかり合体してエリゴールに跳ね返される

エリゴール「なにっ!？」

ぐあああああ!!」

レイ「どうした？そんなもんか？」

エリゴール「くっ！『暴風衣』」

喰らえ!!『翠緑迅!!』」

強力な風の刃がレイに向かって飛んでいく!

レイ「そんなしよぼい魔法で俺を倒せると思ってるのか？」

『モード白天竜!!』『滅竜奥義・改 閃華裂風刃』

エリゴール「ぐあああああああ．．．」

レイ「うん

使えこなせるようになってきた」

そう自画自賛していると原作とは違うタイミングで笛がララバイになった。

レイ「原作ブレイクしすぎたか!!」

ララバイは暴れ始めた

レイ「しかも自我もってねー！ー！ー！」

「レイー」

レイ「お前らか」

ナツ「なんじやこりや〜！」

レイ「ララバイだ」

エルザ「なににしろこのまま暴れさせるわけにはいかん！」

素晴らしい『天輪の鎧』に換装するエルザ。

レイ「まあ、さすがにもう魔力が限界に近いから今回はお前らに援護してもらおう」

ナツ・グレイ「よっしやー！ー！ー！」

グレイ「『氷雪砲!!』」  
アイスキャノン

エルザ「『天輪・五芒星の剣!!』」  
ペンタグラムソード

次々とララバイを穴だらけにしていくグレイとエルザ

レイ「ナツ！俺達で決めるぞ！」

ナツ「おし！」

レイとナツは足に炎を纏いララバイの顔面に叩きこむ



レイ・ナツ 「『合体魔法 ユニゾンレイド 火竜爆炎脚!!』」

ララバイ 「ぎやあああああああ！」

ルーシイ・ハツピー 「やったー！ー！」

とりあえず定例会会場は破壊せずにすんだな。

これでマスターにどやされなくてすむ・・・

と一人安心するレイであった

## 第4話 100年クエスト

ララバイを撃破した数日後・・・

レイはS級のクエストボードから1枚の依頼書を取っていた

レイ「じいさん、俺この仕事行つてくるよ」

素晴らしいマカロフに渡したのは・・・

マカロフ「レイ！お前去年この仕事にいつてどんな目にあつたか覚えとらんのか!!」

マカロフに見したのは100年クエスト「霊峰の双竜の討伐」

レイ「ああ、よく覚えてる

だがあの時よりあきらかに強くなつてるのはじいさんだつてわかつてるだろ！」

そうレイは1年前霊峰の双竜にズタズタにされ、それ以来レイは毎日修行し続けた。

マカロフ「・・・わかつた。しかし無事に帰つてくることが条件じゃ」

レイ「そんなの当たり前だろ」

その時エルザ、カナ、ミラ、レヴィが引き留めにきた。

エルザ「行かなくていいじゃないか！レイにはまだ早い！」

レイ「そんなことねえ」

今のナツじや無理だしドラゴンを狩れるのは滅竜魔導士だけだ」

そういうと全員うつむく

レイ「そんな心配すんな

帰ってきたら全員相手してやる」

「／／／／」

エルザ達が一気に赤くなる。

エルザ「わかった

無事に帰ってくるんだぞ」

レイ「さつきじいさんにもいわれたろ。じゃくなく」

レイは素晴らしいギルドを出ていった

——霊峰リスター——

レイ「ここらへんか」

レイがギルドをでて5日

ようやく霊峰リスタにたどり着いた

霊峰リスタはその美しさから『聖域』とされている

レイ「ん？」

突如レイの上空が暗くなる

その瞬間2体のドラゴンが空から舞い降りた。

??? 「お主何者だ」

レイ「レイ・グロリー、滅竜魔導士だ」

??? 「あの時の小僧か」「性懲りもなくのこのこやってきたか」

レイ「どうでもいいがどうして人を襲う？」

時竜エンパイア・邪竜ベリアル

エンパイア「人間を食物としかおもってないからだ」

レイ「そうか」

ならお前らを殺しても問題ないよな？」

ベリアル「やれるものならな！」

レイ「最初から全力でいくぞ！『モード雷炎竜!!』」

レイは炎と雷を纏い、2体のドラゴンに向かっていく

ベリアル「ほう成長はしているようだな」

レイ「当たり前だろ!!」

『雷らいえんりゆう炎竜の咆哮ほうこう!!』

エンパイア「だがまだまだ」

双竜はブレスで相殺する

もちろんそう簡単にいくと思っていないレイは2体のドラゴンの間を跳び回り次の魔法を構えていた

レイ「これならどうだ!! 『滅竜奥義・改ぐれんぱくえんじん紅蓮爆雷刃くわんねんばくえんじん!!!』

双竜「ぐう」

2体のドラゴンは地面に叩きつけられたさすがに滅竜奥義は効果があるようだなベリアル「ほう、なかなか

我らを地に落とすとは・・・」

エンパイア「だが、これならどうだ」

双竜「竜合」

すると双竜は光りながら合体していく。

レイ「なっ!?!」

双竜「この姿は久しいな」

2体のドラゴンは合わさり、禍々しき姿へと変貌した

レイ「なんだよそれ……」

双竜「……そんな顔されたら戦いにくいんだが……」

レイ「悪い、ならこちらもぶつつけ本番で使わせてもらおう!!」

そういうと右手に『火竜』左手に『天竜』胴体に『白竜』を。

レイ「『モード白火天竜』!」

双竜「3体目までいけるのか!?!」

レイ「今初めてできた

正直魔力の消費が激しすぎ……次で決める!!」

双竜「おもしろい『ロード・オブ・ペイン』!!」

ここにきて最初に最後の魔法を双竜は繰り出してきた!!

その攻撃は禍々しい闇そのもの……

レイ「『真・滅竜奥義 アマテラスびやかじん 天照白火刃!!!!』」

レイの穢れなき白き魔力、双竜の禍々しき闇の魔力

ふたつの最大魔法がぶつかり爆炎が包む

煙が晴れた時、そこには双竜の姿はなく2つの魔水晶ラクリマが浮かんでいた

双竜「……見事……レイ、我らの力そなたに託そう」

双竜が消え2つの魔水晶ラクリマがレイの中に入っていく

レイ「はあはあ、さすがに限界だ・・・」

そういい気を失うレイ

??? 「ふふっ」

陰からレイを監視している者

その正体とは・・・

## 幽鬼の支配者編

### 第5話 ヒーローは遅れてくるもんだ

レイ「んゝそろそろ行くか」

双竜との戦い後、しばらく気絶していたレイだったが気がついた後

新たな滅竜魔法を試していたレイはマグノリアに帰ろうとした その時、通信用ラク  
リマが鳴り響いた

「レイっ！」

レイ「うわっ！」

なんだ通信用ラクリマか、ミラどうした？

ミラ「ギルドが大変なの！早く戻ってきて！」

レイ「!? わかった!!」

ミラの様子が見ただ事ではなかったと思ったレイはトップスピードでマグノリアへ向  
かった



——マグノリア『超魔道巨人ファントムMkII』上空——  
レイ「なんじゃこりゃ!?」

まあいい、とりあえず敵探しに行くか」

そういうジューピターの中から入っていく

すると・・・

ナツ「俺の炎だ!!」

勝手に操ってんじゃねえ!!」

兎兎丸「ぐあああああ」

ガタン!

とファントムが動き出す。

ナツ「まずい!これ乗り物か!」

兎兎丸「チャンス・・・我が最大魔法『七色の炎』レインボーファイアで塵にしてやる!」

ハッピー「ナツ!」

そのときグレイ、エルフマンが飛び出し兎兎丸を殴り飛ばした

レイ「お前らやるじゃねえか」

「「レイ!」」

グレイ「無事だったか!」

レイ「ああ、3日間寝続けたがギルドが大変だと聞いて飛んできた」  
エルフマン「さすがレイ、漢だ！」

レイ「お前らは残りのエレメント4を探せ！見つけ次第各自撃破！」

「「おうー」」

とりあえず俺はジュビアのところ行くか

ジュビアかわいいしw

レイ「たしかこの辺だったな

雨降ってるし間違いはなさそうだが・・・」

レイは原作でグレイが歩いていた場所を歩いていた

ジュビア「しんしんと」

ピンゴ！

レイ「お前がエレメント4『大海のジュビア』だな？」

ジュビア「そう、ジュビアは雨女・・・しんしんと」

レイ「速攻で終わらせてやる『雷竜方天戟つらいりゆうほうてんげき!!』」

レイはジュビアをロックオンし片腕で雷の投槍を作りだしジュビアに投げつけた!!

ジュビア「ああああああつ！

あ・・・つジュビアが一撃で!？」

レイ「ジュビア、お前はこんな事してて楽しいのか？」

ジュビア「ジュビアは・・・」

レイ「迷つてるなら『妖精の尻尾』フェアリーテイルに來いよ！」

レイはその時太陽の光に包まれていた

さつきまで雨が降っていたのに・・・

ジュビア「これが青空」

レイ「そうだ・・・お前の心の雨も晴れたんじゃないか？」

そういうながらジュビアに爽やかな笑顔を向ける

ジュビア「ジュビーン♡」

ぱたっ・・・

ジュビアは幸せそうな顔をして気絶した

レイはジュビアをそのまま寝かせておき、次の敵を探しに行った・・・

## 第6話 光VS闇

レイ「くそっ！どこだ？（禍々しい魔力をかんじた・・・）

あれはマスタージョゼの魔力・・・誰かがジョゼと戦うのはマズイ!!」  
通路を走っているとエントランスが見えてきた。

そのときレイの目に入ったのはジョゼに首を絞められ苦しんでいるミラ  
その瞬間レイの心の中には怒りと殺意しか湧いてこなかった

レイ「ジョゼエエエエエエ!!!」

レイはトツプスピードでジョゼに殴りかかりミラを抱きかかえる

ミラ「レ・・・イ」

ミラはレイの腕の中でそのまま意識を失った

レイはミラを床に横たわらせる

ジョゼ「おやおやレイ様ようやくご到着ですか」

レイ「そんな話はいいんだよ! 『火竜かりゆうの咆哮ほうこう!!!』」

それをジョゼはシャドウで止める

ジョゼ「そんなブレスなどわたしのは届きませんよ」

レイ「なら！」

『火竜剣 クリムゾン』

するとレイの両手に2つの刀が現れた

炎竜剣は炎の双剣・・・その刃は全てを焼き尽くす

ジョゼ「そんなちんけな剣でわたしを倒せるわけないでしょう」

レイ「ほざけ！グレイ技借りるぞ!!」

『火竜剣壱ノ型 炎刃えんじん・七連舞ななれんぶ!!』

ジョゼ「ぐうっ！」

ジョゼに7発の斬撃をくらわす

レイ「まだだっ！」

『火竜剣貳ノ型 爆竜乱舞ぼくりゆうらんぶ!!』

『火竜剣参ノ型 紅蓮爆炎刃べんれんぼくえんじん!!』

『火竜剣四ノ型 業炎竜塵牙ごうえんりゆうじんが!!』

『火竜剣五ノ型 紅蓮鳳凰剣べんれんほうおうけん!!』

怒りに身を任せ、レイは炎竜剣技を次々とジョゼにぶつける

ジヨゼ「ぐうううううう！

まさか聖十の称号をもつわたしがっ!!」

レイ「そんな肩書かんげえねんだよ！

お前は俺の家族を傷つけた！『火竜剣零ノ型

ごくえん獄炎・れつかのたち烈炎ノ太刀!!』

ジヨゼ「がああああああ!!!」

ジヨゼはレイの連撃を喰らい続け、ファントムの外へと吹き飛ばされていった

レイ「うつ・・・さすがにきつついわく」

ミラ「ん・・・レイ大丈夫!？」

レイ「ははっ！もう魔力がほとんどねえや。お前こそ大丈夫か？」

ミラ「今は人の事いいから自分の心配しなさい!!」

レイ「はい！すみませんっ！」

ミラ「もう終わったんだから私の膝の上で寝てていいわよ」

レイ「おうサンキュー」

そういつてミラの膝に頭を乗せるとレイはすぐに眠りについた

ミラ「もう、いつもいっつも頑張りすぎよ」

そういいながらレイの頭を撫でるミラ

ミラ「そんなだからみんな惚れちゃうのよ／＼」

グレイ・エルフマン「「ひっ！」」

この時エルザが黒いオーラを出しているのをミラは気付かなかった・・・

## 楽園の塔編

### 第7話 謎の女

ナツ達があカネリゾートに行っている頃

レイは久しぶりの修行に来ていた。

レイ「同時に使える属性の数増やすか」

あと魔力の器もだな」

以前双竜とたたかった時結構ぎりぎりだったからな

ジョゼとの時も魔力ギリギリだったし・・・

レイ「ふうっ！」

レイは右手に2つの属性、左手にも2つの属性を集めた

そのまま4つの属性を合わせようとするが・・・

「ぽんっ」

4つの属性は互いを打ち消し合い魔力が破裂してしまった

レイ「やっぱ4つはむずいなく



3つまではうまく魔力が混ざり合うんだけどなく」

??? 「クスクス、神滅竜魔導士はそんなものなの？」

レイ「誰だ？」

突如感じた強い魔力・・・

岩陰からきれいなブロンドの髪の毛の女が現れる

??? 「私はルカ

始まりの滅神魔導士よ」

レイ「あつそう、興味ないな」

ルカ「そんなこと言わないでっ！」

レイ「くっっ！」

ルカはいきなり黒い氷をぶつけてきた

レイ「くそがっ！ 『火竜の咆哮かりゆう!!!』」

火と氷がぶつかり水蒸気になる

ルカ『『炎神えんじんの怒号どごう!!』』

「ドオンンン！」

あたりが爆炎に包まれる

レイ「くっ、水蒸気爆発か」

ルカ「逃げてばかりじゃ倒せないわよ」

爆炎の中からルカの攻撃が放たれてくる

それを避けながらレイは雷の竜剣を生成する

雷竜剣は空間を轟かせる雷の剣

レイ『雷竜剣 ボルテックス』

レイの右手に刀が現れる

レイ「おらあつ！」

雷竜剣を一振りすると電撃が辺りを駆けまわる

「バリバリバリ！」

ルカ「ふくん、まだまだ弱いよね『雷炎神』『雷炎神の宝らいえんじん クラウ・ソラス剣!!!』」

ルカが作りだした剣は雷竜剣を簡単に砕きレイの体を斬りつけた!!

レイ「ぐあああああああ！」

ルカ「そんなものが神と竜をも倒す滅竜魔法なの？笑わせないで！」

レイ「ぐつ、なんの事かは知らないが、押されっぱなしでのも癪にさわる。『モード氷

雷竜』

ルカ「2属性ね

さつきよりはマシかしら？」

た  
レイは右手に氷竜剣、左手に雷竜剣を生成し2つの剣を合わせ新たな剣を創りだし

その名も『氷雷剣 コールドブリッツ』

レイ「期待に答えてやるよ。『氷雷剣零ノ型 雷迅氷華槍』！」

レイが氷竜剣を地面に突き立てると

あたりに絶対零度の雷の槍が降り注ぐ

ルカ「きやつ！」

レイ「きやつだって、かわいいところあるじゃんw」

ルカは顔を真っ赤にして言い返す

ルカ「もうギリギリのくせに！いいわ、また今度いたぶってあげる」

そういつてリアは飛びたつていった

レイ「くそっさっきのやつなんだったんだよ・・・かわいかったけどさ」

「はあ、さすがに魔力ねえしギルドに帰るか」

レイがギルドに帰ると大事件が起きていた

## 第8話 エーテリオン

ルカという女との戦闘を終えたすぐ後、レイの持っている携帯用通信魔法<sup>ラクリマ</sup>が鳴り響き、ミラから衝撃のひとことが告げられた

レイ「はあ!？」

エーテリオンが投下されようとしてるだど!？」

ミラ「ええ、しかも楽園の塔にはエルザ達がいるの・・・」

レイ「くそっ次から次へとっ!!」

レイは急いで評議院に向かった

「ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ!!」

評議院は建物自体がポロポロに崩れ始めており人々が逃げ惑っていた

その中の一人をとっ捕まえレイは問いただした

レイ「なんだこれ？なにが起こっている？」

評議員「建物が急激に老朽化を始めてるんだ。あんたも早く逃げろ！」

レイ「ウルティアの『時のアーク』か！」

レイは建物の中に入って行った

レイ「まずエーテリオンの魔水晶ラクリマを壊す!!

『モード白炎竜・白炎剣!!』『滅竜奥義・改 白火衝霸斬!!!』

レイは即座に竜剣を生成し、白い炎の斬撃を魔水晶ラクリマにぶつけ、粉々に砕いた

レイ「これでエーテリオンは大丈夫だな」

そしてウルティアを探す

レイ「ウルティア!!」

ウルティア「あら、レイ・グローリーじゃない？」

「こんなとこでなにをしているの？」

レイ「こっちのセリフだ

人が何も言わずに評議員で泳がしておけば・・・今すぐ老朽化を止めろ」

ウルティア「なら無理やり止めてみなさい

『フラッシュフォワード』!」

レイ「そんなの効くか!

『火竜の翼撃』!」

ウルティア 『『レストア』『フラッシュフォワード』』

レイは1つ1つの水晶を的確に射抜き粉々にしていく

しかしウルティアは時を戻し水晶を元通りにしてもう1度レイに攻撃する

レイ 「ぐううううう！」

『時のアーク』・・・やっぱ厄介だな『モード氷幻竜』

ウルティア 「私に氷で挑むなんて、挑発のつもり？」

レイ 「さあな？」 『氷点霞月』ひょうてんおぼろづき

レイが指パツチンをするとあたりが一瞬で氷に包まれる

ウルティア 「っ!？」

この氷時が戻せない!？」

レイ 「当たり前だ

この氷は幻・・・俺の意思なく解くことはできない」

ウルティア 「ならあなたを殺さないといけないということね」

レイ 「やれるものならな」

ウルティア 「正直この技は使いたくないけれど、『アイスメイク・薔薇の王冠!!』ローゼンクローネ

氷のバラがレイに向かって咲き乱れる

「ザクザクザク！」

ウルティア「あっけなかったわね」

レイ「どこ見てんだ？」

ウルティアが突き刺しにしたのは幻で作ったレイの分身・・

ウルティア「!？」

レイ「『滅竜奥義・改 氷幻零魔槍!!!』」

レイが作りだしたのは無数の氷の槍

しかし実体はなく、精神にダメージを与える幻術の一種だ

ウルティア「きゃあああああ!!」

レイは倒れたウルティアに面識のあったウルティアの母、ウルの話 시작했다

レイ「お前自分の母親がお前の事を捨てたと思ってるだろ？」

ウルティア「ならどうだっというの！」

レイ「お前は勘違いしている

お前の母親、ウルはお前の事捨ててなんかいない！」

ウルティア「そんなはずない！私は母親に研究所に預けられ2人の弟子と楽しそうに

笑ってた！」

レイ「お前の母親は預けたんじゃない！」

お前は小さい頃病気にかかってウルは病院にお前連れて行った

しかし治療法は無く医者は専門の機関をお前の母親に紹介したけど研究所でお前は死んだと聞かされたんだ！」

ウルティア「!!」

レイ「わかったか・・・それが真実だ」

ウルティア「・・・そんな・・・」

レイ「いますぐ『悪魔の心臓』<sup>グリモアハート</sup>を抜ける」

ウルティア「・・・できない！私は『大魔法世界』に行くの！」

レイ「なら力づくで・・・」



## 第9話 覇竜

樂園の塔事件から数日後・・・

ナツ、グレイ、エルザ、ルーシイ、ハッピーが帰ってきた

「「ただいまー！」」

レイ「お前ら大丈夫だったか？」

ハッピー「あい！でもなんでかエーテリオンが落ちてこなかったんだ」

レイ「ああ・・・それ俺だわ」

「「・・・(なにやってんだこいつ)・・・」」

レイの爆弾発言を受けた4人を尻目にマカロフは新入りの紹介を始めた  
マカロフ「そうじゃ、新入りを紹介する

ジュビアとウルティアじゃ。かわいいじやろ〜」

グレイ「!? (ウルに似てる・・・)」

ジュビア「ジュビアです

よろしくお願いします！」

ウルティア「ウルティアよ

グレイ「私にはあなたの師ウルの娘よ」

グレイ「ウルの・・・娘!？」

ウルティア「そんな事だからよろしく」

マカロフ「それと・・・ほれ、あいさつせんかい」

ルーシイ「まだ誰かいるの？」

4人はマカロフの視線の先にいる人物を見ると・・・

ナツ「なっ！」

グレイ「お前！」

エルザ「ガジルッ！」

マカロフ「これこれ仲良くせんかい」

レイ「喧嘩すんなよ？」

俺がキレるから」

ガジル「ちっ」

グレイ「つかギルド新しくなったんだな」

ナツ「前と違ってる・・・」

ルーシイ「立て替えたんだから当たり前でしょ」

突然ギルドの照明が消えステージにミラが現れた

ナツ「おおミラ、ただいまー」

ミラ「お帰りなさい。それじゃナツ達の無事とギルドの新築祝いをこめて歌います」

ミラはギターを手に美しい声で歌い始めた

『貴方のいない』

机を撫でて

影を落すとす

今日もひくとり

星空見と上げ

祈りをとかくけて

貴方は同じいまま空のしくた

涙こらえ震える時も闇に挫けそうな時でも

忘れなういで

帰る場と所が

帰る場所があるから

待つてるひとが

いるから〜♪』

レイ「いつ聞いてもミラの歌は聞いてて落ち着くな」

ガジ「ギヒツ！」

「ガスッ！」

ナツ「いつってえ！誰だ！俺の足踏んだやつ！お前かグレイ！」

グレイ「はあ！ざけんな！」

レイ「（ああ、また始まった・・・）じいさんこの仕事行ってくる」

レイは握りしめていた依頼書をマカロフに投げつけた

マカロフ「おう・・・ってこの仕事100年クエストじゃぞ！」

レイ「ああ、余裕余裕」

100年クエスト「覇竜の討伐」

レイ「『覇竜』か・・・どんな感じだろ」

現在地、アカネビーチから300キロ先の無人島

レイ「ここだよな」

レイが空を見上げると・・・

「ズドオオオオオン!!」

空から明らかにでか過ぎる竜が降り立った

レイ「・・・でかすぎ・・・」

『霸竜』はいきなりブレスを吐いてきた

レイ「いきなりかよ！おい話聞けよ！」

レイは軽々と避けると霸竜は次々と小型ブレスを吐いてくる

レイ「くそっ！聞く耳持たずか！

『滅竜奥義 紅炎鳳凰閃!!』

淡い赤色の炎を纏ったレイが『霸竜』の翼を貫く

霸竜「グアアアア!!」

レイ「さすがに効いたみたいだな

巨体だから狙うのは楽だわ」

霸竜「があ！」

翼は傷ついて飛ぶことはできないが手負いの竜は最後の抵抗を続ける

レイ「『モード白影竜』おらあああああ！」

レイは光のスピードで攻撃を入れていく

そして両手に光と影の魔力を溜めて滅竜奥義を放った!!

レイ「『滅竜奥義・改 聖影竜閃牙』」

「ズダアアアアアアーン！」

覇竜 「ぐう・・・なかなかやるの」

レイ 「・・・しゃべったー！ー！」

覇竜 「誰も喋らんとはいつとらんわ」

レイ 「けど速攻で攻撃してきたじゃねえか！」

覇竜 「お前を試そうと思つてな」

レイ 「なんの為に？」

覇竜 「我の力に相応しいかどうか」

レイ 「なんでそんな事？」

覇竜 「ルカという者にあつただろう」

レイ 「・・・ああ」

覇竜 「やつはすべての『滅神魔法』を扱う

それに対抗できるのはお前だけだ・・・しかしお前にはまだ力が足りない」

レイ 「・・・」

レイはルカと戦つた時のことを思い出していた

勝つたことは勝つたがあれはただのマグレ、余裕勝ちというわけではない

覇竜 「思い当たることがあるようだな」

レイ「ああ」

覇竜「だから私の力を分け与える」

レイ「わかった・・・けどなんであの女に対抗しなければならぬ？」

覇竜「お前の心が白だとすればやつは純粋な白だ

純粋な白は黒にも染まる・・・その時はお前が止めなければならぬ」

レイ「なるほど・・・」

覇竜「私の力は全属性の魔力を底上げする

その力は仲間に分け与えることも可能だ

そして『ドラゴンフォース』の上位形態を使うことも可能となる」

レイ「なるほどな」

覇竜「我はいつでもお前の力になろう・・・名をなんと？」

レイ「レイ・グロリーだ」

覇竜「そうか・・・我が名はオルフェウス・・・我が魔力に呼びかければ駆けつけよ

う」

レイ「おう、よろしくなオルフェウス」

オルフェウス「では行くでしょう」

オルフェウスは無人数島を飛び立っていった。

レイ「ちよつと待てよ・・・」

仕事内容は『覇竜の討伐』だったよな・・・てことは・・・!!」  
レイ初めてのクエスト失敗だった



## バトル・オブ・フェアリーテイル編

## 第10話 バトル・オブ・フェアリーテイル

今日は1年に1回の収穫祭

街は活気にあふれている中・・・

ナツ「よっしやく喰えるもん片っ端からくうぞく」

ハッピー「喰うぞく」

ナツはなぜかグロッキー状態だった

レイ「あれなにがあつたんだ？

ずいぶん気分悪そうだけど？」

ルーシイ「昨日の仕事で間違つて水属性の魔力食べちゃつたのよ・・・」

レイ「ナツには弱点だし、違う属性だもんな・・・」

グレイ「バカだよな・・・」

ナツ「今なんつてたグレイ!!」

グレイ「素敵な食生活ですわっていったんだよ!」

レイ「そこら辺にしないと塵にするぞ」

レイは殺気を漂わせる

ナツ・グレイ「ひいひいひいひい！」

ルーシー「あつミス・フェアリーテイルコンテスト始まつちやう！私の家賃」

ジュビア「ジュビア、レイ様の為ルーシーには負けません」

レイ「お、おお・・・がんばれ」

レイはジュビアの闘志に冷や汗をかきながら2人を見送った

—— 『フェアリーテイル妖精の尻尾』——

マックス「マグノリアにお集まりの皆さん

妖精たちの美の祭典、ミス・フェアリーテイルコンテスト開催でーす」

司会はこの俺、砂の魔導士マックスが務めます!!

それではエントリーNo.1!!

異次元の胃袋を持つエキゾチックビューティ!! カナ・アルペローナ!!

大きな歓声のもと、カナはステージに現れた

「オオオオオオオ！」

マックス「さあ魔法を使ったアピールタイム！」

カードがカナの姿を隠して・・・水着に着替えたー!!」

カナ「レイ、どう?♡」

ウィンクをレイに向けて向けると同時に周りの視線が一気にレイの元へ集まった

「「ギロ」」

レイ「!? (なんだ!?今の悪寒は?)」

マックス「エントリーNo.2!

新加入ながらその実力はS級!雨も滴るいい女・・・ジュビア・ロクサー!」

「「わーわー!」」

「ザバア〜」

ジュビアは体から水を発生させ自分の周りに纏わせる

マックス「オオオ!水着が似合う演出をつくり出したー!!」

ジュビア「レイ様〜見てますか〜!!」

「ゾクゾク!」

レイ「(さつきからなんだよ!)」

マックス「エントリーNo.3!

ギルドが誇る看板娘!その美貌に大陸中が酔いしれた!ミラジエーン!!」

「優勝候補だ〜」

ミラ「私、変身魔法得意なんで変身しまーす．．．顔だけハッピー!!」

「「えー！？」」

ルーシイ「優勝候補が自滅した!!」

ハッピー「あははははっ！」

グレイ「喜んでんのお前だけだぞ」

レイ「あいつはかわいいがバカすぎる．．．」

マックス「エントリーNo.4！

『最強』の名の下に剛と美を兼ね備えた魔導士!!ティターニア妖精女王のエルザ・スカ-

レット!」

「「キター!! エルザだー!」

エルザ「私のおきのおきの換装を見せてやろう．．．とーっ!」

エルザは感想と同時に煙が巻き起こりその煙が晴れると．．．

ルーシイ「ゴスロリ!!」

エルザ「フフ．．．決まった!」

レイ「へ〜似合ってるじゃねえか」

マカオ「あいつもキャラが変わったな」

マックス「エントリーNo.5！」

小さな妖精、キューティ&インテリジエンス！レビイ・マクガーデン！」

「エントリーNo.6！西部からのセクシースナイパー！ビスカ・ムーラン！」

「エントリーNo.7！突如移籍したクールビューティ！ウルティア・ミルコビツ

チ！」

ウルティア「ふん！」

レイ「ぶつ！なんであいつ出てんだ？」

マックス「エントリーNo.8！」

我ががギルドのスーパールーキー。その輝きは星霊の導きか・・・ルーシイ・

ハ

ルーシイ「だー！ー！ラストネームは言っちゃダメエ！」

「「なんだ？」」

ルーシイ「えーと、あたし星霊と一緒にチアダンスします」

???「エントリーNo.9」

ルーシイ「！ちよっ・・・ちよっと、あたしまだアピールタイムが・・・」

???「妖精とは私の事、美とは私の事

そう・・・すべては私の事。優勝はこの私エバーグリーンで決定♡」

グレイ「エバーグリーン！」

エルフマン「帰ってきてたのか!？」

ルーシィ「邪魔しないでよ!あたし・・・生活がかかってんだからね！」

グレイ「ルーシィ!そいつの目を見るなっ！」

ルーシィ「え？」

エバ「なに?このガキ」

ルーシィ「!!」

エバがメガネを外しルーシィと目を合わせると・・・

「カチン」

ルーシィはエバのセカンドの魔法『石化眼ストーンアイズで石化してしまった

マックス「マズイ!みんなは早く逃げて！」

「「うわああああ」」

エバのいき過ぎた行動にさすがのマカロフに怒鳴り散らした

マカロフ「何をするエバーグリーン!祭りを台無しにする気か!？」

エバ「お祭りには余興がつきものでしょ？」

ステージの垂れ幕が上がっていくとすでに石化されたエルザ達の姿が・・・

「「なっ!？」」

エルフマン「姉ちゃん！」

ハッピー「エルザまで！」

マカロフ「バカたれが！今すぐ元に戻さんかっ！」

ラクサス「よお・・『妖精の尻尾』フェアリーテイルの野郎ども・・祭りはこれからだぜ」

マカロフ「ラクサス！」

グレイ「フリードとビックスローも!？」

レイ「雷神衆！ラクサス親衛隊か！」

ラクサス「遊ぼうぜ、ジジイ」

マカロフ「バカなことはよさんかい！」

ラクサス「さあて何人生き残るかな？」

「ズドオオン！」

石化ルーシイの側に雷が落ちる

ラクサス「この女たちは人質に頂く

ルールを破れば1人ずつ砕く」

マカロフ「冗談で済む遊びとそうはいかぬものがあるぞ、ラクサス」

ラクサス「もちろん俺は本気だよ

ルールは簡単、最後に生き残った者が勝者だ

・・・バトル・オブ・フェアリーテイル!!」

ナツ「いいんじゃないやねえの? わかりやすくして」

ラクサス「ナツ・・・俺はお前のそういうノリのいいところは嫌いじゃねえ」

ナツ「祭りだろ? じつちゃん。行くぞ!」

ラクサス「だが、そういう芸のねえところは好きじゃねえ」

ナツ「おらあー!」

ラクサス「落ちつけよナツ」

「ズドオオオン!」

ナツ「びぎやあああああ!」

ハッピー「ああ、せっかく復活したのに・・・」

ラクサス「バトル・オブ・フェアリーテイル開始だ!!」

そのころレイは・・・

レイ「まあ、時間帯的にそろそろか・・・」

なんでかしらねーけど滅竜魔導士は結界から出れねーから外いて正解だ」

まあやつは最初はエバ狙うか・・・最初に石化解除しとけばナツ達早く出れるし一般人の混乱に乗じて一緒に外に出たレイ・・・1人先にラクサス撃退に発つ!!!



## 第11話 VSラクサス

レイはエバを家に運んだあと、石化が解けたかを見にギルドへ戻っていた  
ナツ「どこ行ってたんだレイ？」

レイ「ちよつと野暮用

石化は解けたみたいだな」

エルザ「ああ、私はすぐ解けたがな」

レイ「なら作戦を伝える

ナツ、ガジルは結界が解け次第カルデア大聖堂へ向かえ、そこにラクサスが  
いる

レイビイは今すぐ結界の解除を始めろ

エルザ、カナ、ルーシイ、ミラは負傷しているもの達を回収しろ」

「了解」

ナツ、ガジル、レイビイ以外は急いでギルドを出ていった

レイ「レビイ、解除までどのくらいかかりそうだ？」

レビイ「ん〜20分はかかりそう」

レイ「15分以内にできたらご褒美をやる」

レビイ「がんばる！」

レビイはすさまじいスピードで術式を解除していく

「レビイレビイレビイ」

が、そのとき突如術式の情報ボードが無数に現れる

ラクサス「聞こえるかじじい、ギルドの奴ら

ルールが1つ消えちまったからな、今から新しいルールを追加する

『神鳴殿』を起動させる」

マカロフ『『神鳴殿』じゃと?』

ラクサス「残り1時間10分・・・さあ、俺達に勝てるかな?」

マカロフ「何も関係ない者まで巻き込むつもりかラクサス!!」

ラクサス「フハハハハハ！」

情報ボードが次々に消えていく

マカロフ「うぐっ！」

突然マカロフが胸を押さえ倒れこんだ

ナツ「じつちゃん！」

レイ「くそっ！こんな時に！ビスカ、ポーリュシカさん呼びに行け！」

ビスカ「わかった！」

レビィ「解けた！」

レイ「よし、上出来だレビィ！」

レビィ「へへっ／＼」

レイ「よし！ナツ、ガジル行くぞ！」

そーいいレイはカルディア大聖堂に飛んで行った

ーカルディア大聖堂ー

レイ「ラクサース！」

ラクサース「ほう最初についたのはレイか」

???「わたしもいるぞ」

ラクサース「お前も参加しているとはなミストガン」

ミストガン「今『神鳴殿』を解除すればまだ余興の範疇でおさまる可能性もあるぞ」

レイ「そうだ、考え直せ」

ラクサース「おめでたいねえ・・・知ってんだろ？」

『妖精の尻尾』最強は誰か・・・俺かお前らか噂されてるのは」

ミストガン「興味はないがわたしはギルダーツを推薦しよう」

レイ「ねえ、ちよつとまって、俺は？」

ミストガン「・・・おい」

レイ「冗談だつてw」

ラクサス「レイはいいとしてあいつはダメだ、帰つてこねえ」

レイ「どうでもいいが早く始めようぜ」

ラクサス「ふん、『レイジングボルト』！」

レイ「『岩竜壁』！」

レイがラクサスの雷を岩の防御壁で遮断する

レイ「ミストガン！」

ミストガン「ああ！」

2人は魔力を合わせラクサスに向け幻術を放つ

「『合体魔法 幻竜協奏曲!!』」

ラクサス「なんだこれは！」

ラクサスは幻覚に振り回されている

レイ「さて今のうちに『神鳴殿』どうするか考えるか」

ナツ・エルザ「ラクサス!!」

レイ「あつバカ!」

ラクサス「おらあ!」

ラクサスはナツとエルザのバカみたいな大声で幻覚から覚め、直後ミストガンに向けて魔法を放った!

ミストガン「ぐっ!」

ミストガンの顔を隠しているフードが飛んでいき・・・

エルザ「ジェラール!」

お前・・・生きて!!」

ナツ「なっ!! どうなってんだ?

ミストガンがジェラール?」

ミストガン「エルザ・・・あなたには見られなくなかった」

エルザ「え?」

ミストガン「ジェラールという人物の事は知っているが私ではない

すまない、あとは任せる」

ミストガンは消えていく

ナツ「ややこしい事は後回しだ!ラクサスは俺がやる!!」

いいよな？ レイ、エルザ！」

レイ「お前には実戦経験が必要だよってみる」

ナツ「よっしゃー！勝負しろラクサス！」

ラクサス「てめえのバカ一直線もいい加減煩わしいんだよ・・・うせろザコが！」

ナツに向け雷撃を放つがナツは余裕で避けカウンターに切り替える

ナツ「よつと!!」

『火竜の鉤爪!!』

「がしっ！」

が、そのカウンターはいとも簡単に受け止められてしまった

ラクサス「逃がさねえぞコラ!!」

ラクサスはナツにパンチを入れていく

ナツ「逃げるかよ。てっぺんとるチャンスだろ!!」

ナツも負けじと反撃していく

レイ「ナツはたぶん大丈夫だ

エルザ、俺達は『神鳴殿』をどうにかするぞ！」

エルザ「わかった」

カルディア大聖堂の外に出てレイとエルザは空中に浮かんでいる『神鳴殿』を見上げる

レイ「さて、始めるか」

エルザ「わたしはどうすればいい？」

レイ「そこで見てろ『白炎・覇竜モード!!』」

レイが白炎竜の魔力に覇竜の魔力を混ぜ込むとレイの背後に白と赤の王輪が浮かび上がり右手には刀身の輝く竜剣が生成された

竜剣に魔力を溜めると竜剣の刀身に王輪がハマり、高速回転をする

レイ「さあ〜って『真・滅竜奥義 白<sup>びやつかはりゆうけん</sup>火覇竜剣!!!』」

「ドガガガガガガン!!!」

エルザ「そんなことしたらダメージが！」

レイ「なんのことだ？」

「ズドオオオオオオオオン！」

レイ「雷なら喰えるぞ」

そっくりすべてを食べつくしたレイだった

## 第12話 ファンタジア

レイ「さすがに雷喰いすぎた・・・気持ち悪い・・・」

エルザ「魔法の食べすぎでも気持ち悪くなるんだな」

レイ「うぷつ・・・さて、ナツはどうなったかな」

レイたちはカルディア大聖堂に向かった

レイ「レビイ!どうなった?」

レビイ「うん、ナツが勝ったよ」

『滅竜奥義』使ってた」

レイ「へえ、あいつがねえ、(そろそろナツ達にも修行つけるか)」

時は流れて数時間後・・・

エルザ「わたしがレイと出よう」

カナ「いいや、あたしよ」

ジュビア「ジュビアです!!」

ミラ「私よね、レイ」



ルーシイ「わ、わたしも立候補する!!!」

いつも通りのレイ争奪戦に珍しくルーシイも参戦していた

ぶつちやけ俺からしたら誰と出てもあんま大差ないしどーでもいいんだよね・・・

毎年毎年なんで懲りないんだろ・・・

レイ「もう誰でもいいから・・・」

ウル「あなたも大変ね〜」

レイ「お前軽く楽しんでるだろ？」

ウル「さあ?♪」

レイ「つかお前出ないのか？」

ウル「まだ、入ったばっかだしね」

レイ「そうか・・・お前らいつまでもめてんだ!!」

ちやつちやと決めないと俺は出るのやめるぞ!!

毎年毎年やんややんや揉めやがって!!

もうじゃんけんで決めろ!!!」

「「はっ!!」」

じゃんけんの結果ミラと出ることになった

レイ「で、なんで王子の格好なんだ？」

ミラ「いいじゃない

よく似合ってるわよ？」

レイ「はあ・・・」

いよいよファンタジアが始まった

ジュビアはグレイと一緒に参加し氷と水の見事な城をつくり出した  
カナ、ルーシイ、ビスカは3人で踊りをエルザは剣を舞わせる

いよいよ俺達の番だ

「「「ぎゃー！レイ様——！」」」

レイとミラは神々しい馬車の上で手を振ってる  
すると、ミラは変身魔法で天使の姿へ変身する

「「「おお——！」」」

男性陣から歓声があがる

レイ「それじゃ！」

レイはそれぞれの属性を次々と切り替え空に花火で「FAIRY TAIL」の文字  
を打ち上げていく

「「「わあ——！」」」

ウル「・・・キレイ・・・」

ラクサス「ふっ」

ラクサスの頭の中にマカロフとの思いでが浮かんでいく

「マスターだ！」

「なんか妙にファンシーだ！」

ギルドの仲間たちの様子を見て満足したのかラクサスは街から出ようとする  
すると・・・

「ぼっ！」

ギルド全員が同じポーズをした

ラクサス「!？」

マカロフ「(わしはいつでもお前を見ているぞラクサス)」

ラクサスは涙を流してマカロフを見つめていた

ラクサス「(元気でな。じいじ・・・)」

この日ラクサスはギルドを抜けた

## 六魔將軍編

### 第13話 連合軍

ある馬車の中、レイ達最強チームはゆったりと場所に揺られながらとある場所に向かっていた

ルーシイ「・・・なんでこんな事になるのよ」

さかのぼる事数時間前・・・

ギルドではミラがとある組織図を説明していた

ルーシイ「ミラさんこれ何ですか？」

ミラ「闇ギルドの組織図よ」

レイ「こんなにあんのか？」

俺けっこう潰したんだけどな」

ルーシイ「この大きなくくりはなに？」

ミラ「闇ギルドの3大勢力『パラム同盟』よ」

レイ「『六魔將軍』<sup>オラシオンセイイス</sup>『悪魔の心臓』<sup>グリモアハート</sup>『冥府の門』<sup>タルタロス</sup>のことを指すんだよ」

ジュビア「ジュビアとガジル君が潰したギルドが全部『六魔將軍』<sup>オラシオンセイイス</sup>の傘下でした^^」

グレイ「『六魔將軍』<sup>オラシオンセイイス</sup>って噂じゃ6人らしいぞ」

ワカバ「どんだけしょぼいギルドだよw」

レイ「考えろ、6人で最大勢力の1つなんだぞ」

ミラ「そうよ、それにどんな魔法を使ってくるかわからないの」

マカロフ「その『六魔將軍』<sup>オラシオンセイイス</sup>じゃが・・・ワシらが討つことになった」

定例会から戻ったマカロフのひとことで誰もが思った・・・ハズレくじ引いたな・・・

と

ーームスターボブの別荘前ーー

ナツ「まだ着かねえのか？おぶ・・・」

ハッピー「着いてるよナツ」

レイ「おい、トライメンズ!! いるんだろ」

ヒビキ「やあレイ

『<sup>ブルーベガサス</sup>青い天馬』に入ってくれる気にはなった?」

レイ「やだよバーカ

こつちのほうがおもしろいし」

ルーシイ「わあ！トライメンズだ！」

ルーシイはイケメンに目を輝かせていた

レイ「イケメンなら誰でもいいのね・・・」

ルーシイ「そ、そんなことないわよ!？」

エルザ「今日はよろしく頼む」

イブ「かわいい・・・ずっと憧れてたんだ」

エルザ「はっ？」

レイ「おい、うちの女を口説くのはやめろ

次やったら殺す」

ガチな殺気をトライメンズに向ける

トライメンズ「「うっ・・・」」

???「ようこそ『妖精の尻尾』フェアリーテイルのみなさん」

ルーシイ「なに？この甘い声〜？」

エルザ「この声は!？」

レイ「はあ〜」

おびえた顔をするエルザとあきれた顔をするレイ  
??? 「くんくん、いいパルファムだ・・・とおっ！」

エルザ 「お前は！一夜！」

一夜 「エルザさん、相変わらぬいいパルファムだ」

レイ 「一夜も相変わらぬだ」

トライメンズにも言ったが口説いたら殺す」

一夜 「メエーン・・・」

レイ 「あとは『蛇姫の鱗』と『化猫の宿』か」

一夜達と談笑していると入り口に1人の男が現れた

ジユラ 「おお、レイ殿!!」

レイ 「ジユラか!？」

『蛇姫の鱗』ラミアスケイルからはお前だけ?」

ジユラ 「いやあともう2人・・・」

??? 「久しいなグレイ」

グレイ 「リオン!？」

レイ 「誰?」

ルーシイ 「グレイの兄弟子」

ルーシイがリオンの紹介をしていると突如床の絨毯がひとりでに動き出した

??? 『人形撃 カーベットドール 絨毯人形』!」

ルーシイ「あたしい!？」

てかこの魔法・・・」

??? 「忘れたとは言わせませんわ」

ルーシイ「シエリー!？」

ナツ「お前からギルドに入ったのか？」

レイ「あとは『化猫ケットシエルターの宿』か」

??? 「きやあ!」

入り口で小さな子供がこけた・・・

??? 「あ、あの遅れてごめんなさい

『化猫ケットシエルターの宿』から来ましたウエンデイです

よろしく願います!」

ルーシイ「子供!？」

ナツ「ウエンデイ?」

ジュラ「これで全てのギルドがそろった」

グレイ「話進めるのかよ!!!」



シエリー「こんなおおがかりな討伐作戦にお子様1人よこすなんて・・・

ケットシエルター  
『化猫の宿宿』はどういうおつもりですか?」

???「あら1人じゃないわよ、ケバいお姉さん」

ウエンデイの後ろからハツピーのメスバージョンがテクテク歩いていた  
ウエンデイ「シャルル着いてきたの!」

シャルル「当然よ・・・あなたが1人じゃ不安でしょうがないもの」

ハツピー「キュピーン♡」

あつシャルルがハツピーから目そらした

ハツピー「ルーシィあの子にオイラの魚あげてきて」

ルーシィ「きっかけは自分でつくらなきやダメよ」

ハツピー「じゃあレイ」

レイ「男なら積極的にいけ、それが恋愛だ」

ハツピーは早速シャルルにアピールしに行ったが無視された

ありや無理だな・・・

レイ「そろそろ始めようぜ」

敵は6人、目的は『ニルヴァーナ』だろ?」

リオン「聞かぬ名だな」

レイ「ヒビキ6人の紹介を」

ヒビキ「わかった」

ヒビキは『古文書』で6枚のパネルを出す

ヒビキ「毒蛇を使う魔導士コブラ

その名からスピード系の魔法を使うと思われるレーサー

天眼のホットアイ

心を覗けるという女エンジエル

情報がすくない男ミッドナイト

オランオンセイス  
『六魔将軍』の司令塔ブレインだ」

一夜「我々の作戦は戦闘だけにあらず奴らの拠点を見つけてくればいい」

エルザ「拠点を見つけてどうするのだ？」

一夜「奴らを拠点に集めて我がギルドが誇るクリスティーナで拠点もろとも葬り去る

！」

「おおっ!!」

ナツ「おしっ！燃えてきたぞ！

6人まとめて俺が相手してやる!!」

レイ「お前らは先にいけ！」

エルザ「お前は？」

レイ「ちよつと用がある」

レイは屋敷の中に戻って行った

レイ「おらあ！」

レイは一夜を蹴り飛ばした

ジユラ「レイ殿、なにを!？」

レイ「こいつは偽物だ」

「????」 「「ピーリピーリ、ばれちやったね」

「????」 「もういいゾ、ジエミニ」

柱の物陰から1人の女が姿を現した

レイ「お前がエンジェルか」

エンジェル「ふふっ」

## 第14話 VS六魔将軍（1人離脱）

レイ「あそこか！」

レイが走っているのと土煙をあげている場所が見えてきた

レイ「お前らだらしねえな〜」

ナツ「レイ！」

ブレイン「うぬは？」

レイ「レイ・グロリーだ」

ブレイン「そうか、うぬがルカがいつていた滅竜魔導士か」

レイ「・・・あいつを知っているのか？」

ブレイン「だつたらどうすると言うのだ？」

レイ「力づくで吐かせてやる！」

ブレイン「やれコブラ、レーサー」

レーサーは高速で攻撃を仕掛けてくるがスロウの魔法は俺には効かない

レイ「遅い!!」

そういつてレーサーを殴り飛ばす

レーサー「なに!?!」

コブラ「こいつ!」

『毒竜双牙!!』  
どどくりゆうそうが

レイ「俺の方が上だ『毒竜剛牙!!』」  
どどくりゆうこうが

レイとコブラの魔法がぶつかり競り合うがレイの魔力の方が高くせり返した

コブラ「ぐあっ!」

毒属性の滅竜魔法だ?!」

レイ「お前1人だと思ったか?」

コブラ「くっ」

ブレイン「やるようだなしかし・・・『常闇回旋曲』」  
ダークロンド

「(お)お(お)お(お)お」

禍々しい魔力が放出されていく

しかし岩陰に隠れているウエンディを見つけるとブレインは魔法を止めた

ブレイン「・・・ウエンディ・・・」

ウエンディ「え?え?」

レーザー「どうしたブレイン？」

コブラ「知り合いか？」

ブレイン「間違いない・・・天空の巫女」

グレイ「天空の・・・」

ヒビキ「巫女？」

ウエンデイ「なにそれくへ」

ブレイン「これはいいものを拾った。来い！」

ウエンデイ「きやあ！」

ブレインは雲のようなものでウエンデイを捕まえる

シャルル「ウエンデイ！」

ナツ「何しやがる・・・」

ホットアイ「金に・・・上下の隔て無し！」

レイ「なっ!？」

地面が！

ウエンデイ「シャルルー！」

シャルル「ウエンデイー！」

ウエンデイはしっかり手をつかんだ。

が、掴んだ手の主は . . .

ウエンデイ「あ」

ハッピー「あれ？」

シャルル「!!」

ウエンデイが掴んだ手はなぜかハッピーのものだった

ウエンデイ「きゃあああああ！」

ハッピー「ナツ——うわ————！」

シャルル「ウエンデイ——！」

ナツ「ハッピー——！」

ブレイン「うぬらにもう用はない、消えよ！」

禍々しい闇の魔力がレイ達に迫る

レイ「くそ——！」

ジュラ「『岩鉄壁!!』」  
がんでつへき

レイ「ナイスタイミングジュラ！」

ナツ「くそ——！逃げられた！」

レン「完全にやられた」

イブ「強すぎるよ」

レイ「俺がいながら・・・」

ルーシイ「レイ！エルザが蛇にかまれたの！」

レイ「コブラの蛇か」

レイはエルザの解毒を始めた

ナツ「あいつらウエンデイとハッピーをく!!! どこだー!？」

ルーシイ「ナツ！」

ナツ「んがつ！」

ナツはシャルルに止められた

グレイ「羽？」

イブ「ネコが飛んでる」

シャルル「これは『翼』<sup>エーラ</sup>という魔法

驚くのも無理ないわね」

ナツ「ハッピーとかぶってる」

シャルル「なんですすって！」

レイ「とりあえず俺が作戦をたてる

俺、ナツ、グレイ、ルーシイ、リオーン、シエリー、ヒビキ、シャルルはウエンデイ

達の捜索



ジュラ、レン、イブ、一夜は『ニルヴァーナ』の在り処を見つけてくれ  
ナツ「よっしやー！行くぞお！」

「「おおー！」「」

## 第15話 ルーシィデビュー戦

レイ「邪魔だあ!!」

はあはあなんでこんなにザコが多いんだよ!?

原作ブレイクした罰か?

レイ「くっそこで使うのもだるいが『白雷竜!!』」

もう魔力なんて気にしない・・・

レイ「『滅竜奥義・改 白雷はくらい・・・麒麟キリン!!』」

空から白い雷が麒麟の姿となりザコに降り注いだ

うん、パクリ技だがハンパない威力だな・・・

レイ「これで全部か・・・」

さてどうすつかなく

ヒビキ「レン君聞こえるか？」

レイ「ヒビキか、どうした？」

つくづく『念話』って便利だな

ヒビキ「ナツ君達がウエンデイちゃん達を助け出したみたいだ。フロローに向かって

くれ」

レイ「わかった」

森の中を走って数分後、開けた道でナツと出会うことができた

レイ「ナツ！」

ナツ「レイ！」

レイ「これからどうする！」

ナツ「ジエラールがいるんだ!!」

俺はあいつを探す!!」

レイ「そうか

俺はとりあえず『ニルヴァーナ』を探す」

と言いつつ、ルーシイのどこ行くか

『ウラノ・メトリア』見たいしエンジェルからかいたいし・・・

ナツ「あ！グレイ！」

こんなとこでなにやってんだよ」

川でグレイがぐったりしているがこいつたしかジエミニだったな

「グレイ」………

ナツ「おい、しつかりしろよ！」

グレイは突然起きロープを引っ張った

ナツ「いかだの上!?! ……うぷっ」

あ、やっぱり

ルーシィ「グレイなにしてるの!?!」

レイ「ルーシィこいつグレイじゃないぞ」

ルーシィ「じゃあこいつは……?」

「ぼんっ!」

グレイが煙に包まれてルーシィになった

ジェミニ「あんたらみたいなのは男は女に弱いでしょ?」

そういうジェミニルーシィは服をめくった

レイ「みるなあ!」

「ゴス!」

ヒビキ「なんで!?!」

レイ「俺がまだ見てねえんだ、他の奴になんかみせねえよ」

ルーシィ「もうバカッ!! / /」

ジエミニ「どうする？…どうする？」

殺しちゃえばいいのよとエンジェルが現れる

ジエミニ「そっかー」

エンジェル「はーいルーシイちゃんエンジェルちゃん登場だゾ…つてお前は！」

レイ「よう、また会ったな」

ルーシイ「なに？知り合い？」

レイ「ああ、さつき一緒に遊んでた

意外とかわいいやつだぞ」

エンジェル「なツ…な…な…／＼」

ルーシイ「なにしてたのよ!？」

レイ「そんなことはない

ルーシイお前あいつを倒してみろ」

ルーシイ「え？？」

エンジェル「私がこんな小娘に負けるはずないゾ」

レイ「自信あるようだな…なら賭けをしよう

ルーシイが勝ったらお前を評議員に引き渡す

お前が勝ったら俺を殺してもいい」

ぶっちゃけルーシィは負けねえからな

ルーシィ「ちよつとレイ！」

エンジェル「いいゾ♪」

レイ「それじゃルーシィ頼んだ」

そーいいルーシィの肩に手を置き『覇竜』の魔力を流し込む

ルーシィ「え？（なにこの魔力？）」

レイ「俺の『覇竜』の魔力だ」

ルーシィ「よし！開け！『宝瓶宮の扉』アクエリアス！」

エンジェル「ジエミニ閉門」

ルーシィ「やっちゃって！

あたしも一緒でかまわないから！」

アクエリアス「最初からそのつもりだ」

ルーシィ「最初からって・・・」

エンジェル「開け『天蠍宮の扉』」

ルーシィ「王道十二門!？」

アクエリアス「え？」

エンジェル「スコーピオン!!」

やば、星霊の相関図の事わすれてた・・・魔力渡した意味ないじゃん・・・

アクエリアス「スコープピオおおん♡」

ルーシイ「はいいつ!？」

アクエリアス「スコープピオン♡ わたし・・・さびしかったわ」

ルーシイ「・・・!!」

あそこまでかわんのか・・・正直引くわ

ルーシイ「ま・・・まさか」

アクエリアス「わたしの彼氏♡」

スコープピオン「ウィーアー、初めましてアクエリアスのオーナー」

ルーシイ「ギターーーーー!!」

レイ「ルーシイ!今すぐアクエリアスを閉門しろ!」

ルーシイ「くっ! (最強の星霊が封じられた・・・いやもう1人いるじゃない!)」

まずいな・・・この場面の打開策がみつからない・・・原作どおりにいくか・・・

ルーシイ「開け!『獅子宮の扉!!』ロキ!!」

ヒビキ「レ・・・レオ・・・」

ルーシイ「お願い!あいつを倒さないとギルドが!」

ロキ「お安い御用さ」

エンジェル「クス、大切なのは星霊同士の間関図よ

開け『白羊宮の扉』……」

「!!!」

エンジェルの掲げた鍵を見てルーシィとヒビキは目を見開いた

エンジェル「アリエス！」

アリエス「ごめんなさいレオ……」

ロキ「アリエス……」

ヒビキ「カレンの星霊……」

ルーシィ「そんな……これじゃロキまで戦えないじゃない……」

だくここで俺が倒すわけにもいかないしな……

ルーシィ「なんであんたがカレンの星霊を!?!」

エンジェル「わたしが殺したんだもの

これはその時の戦利品だゾ」

エンジェルの言葉にヒビキの目には憎しみの色が出ていた

レイ「ヒビキ!!」

しっかりしろ!!」

ヒビキ「!! すまない……」



レイ「ヒビキ俺の頭の中に『ウラノ・メトリア』を送ってくれ  
もうこれしかないからな・・・」

ヒビキ「どうする気だ？」

レイ「俺の魔力で増幅させてルーシイに送りこむ」

ヒビキ「・・・わかった」

「ピーーーーーピロン」

レイ「よし」

「がっー」

ヒビキ「グッ！」

ヒビキこのままなら闇に落ちそうだからな気絶させといたほうが楽だな

ルーシイ「きやああああああ！」

エンジェル「人に頼む時はなんて言うのかな？」

レイ「ルーシイ！そんなやつに頼まなくていい

ロキ達を一緒に居させてやるのはお前だけだろ」

ルーシイ「レイ・・・」

レイ「お前の中に一度だけ超魔法の知識を与える」

ルーシイ「うあっ・・・なにこれ・・・頭の中にしらない図形が・・・」

エンジェル「おのれ！カエルム！やるよ！」

ルーシィ「天を測り天を開き あまねく全ての星々

その輝きをもつて我に姿を示せ・・・テトラビブロスよ・・・

我は星々の支配者 アスペクトは完全なり 荒ぶる門を開放せよ

全天88星、光る『ウラノ・メトリア!!!』

エンジェル「きやあああああああああ」

俺の魔力で増幅させたから威力は数倍だな

エンジェルも立ち上がれないだろ

「ザパーン」

ルーシィ「ひっ・・・!? あれ？」

ルーシィも修行すれば原作より強くなれるな

## 第16話 無の彼方へ

未だに状況をのみ込めていないルーシイは混乱していた

ルーシイ「なにがあつたの!?

てかナツ!」

「がこん!」

あ、イカダが・・・

ルーシイ「ナツーーー!」

ナツ「う・・・うご・・・うごいて」

ルーシイ「しっかりしなさい!手を伸ばして!」

ナツ「おおお・・・」

ルーシイ「もお!きやつ」

ルーシイはナツの手を掴んだもののイカダが傾いたせいで一緒にイカダに乗りこんでしまった

ナツ「うぷ」

レイ「その先滝だから気をつけろよ」

ルーシー「なに〜〜〜!」

さてどうすつかなく

「ゴゴゴゴゴゴゴ」

この音は・・・『ニルヴァーナ』か!

レイ「・・・でかいな・・・リアルで見るとこんななのか・・・」

ああ、もうめんどい、帰りたい・・・

レイ「はあ、行くか・・・」

久しぶりにスケボーを出して飛び立つ

レイ「上も広いな」

ナツ「うオオオオ!!!」

この声はナツか、さっそくやってるなく

レイ「俺はブレインボコリに行くか」

完璧に潰しとけばあの爆発トラップは起きない・・・と思う!!

レイ「ブレイン!」

俺はブレインがいる部屋に乗り込んだ

ブレイン「またお前か」

レイ「今度こそひねり潰してやるよ『雷竜剣　ボルテックス!!』」

ブレイン「なんだその刀は？」

レイ「さあなんでしょう？」

アタックチャーンス！

某パネルクイズ番組風に高速で突っ込んでいく

ブレイン「うぬはもう失せろ！」

『ダークカブリチオ常闇奇想曲!!』

見るからに貫通性の魔法か

ならこつちも貫通性で!!

レイは高速回転しながら雷のスピードで正面からぶつかりにいく

レイ『らいこうせん雷光閃!!』

2つの魔法は互いを打ち消し合いブレインに一瞬の隙ができた

ブレイン「な!?!」

レイ「お前を倒して俺は休む!!」

『らいおうしでんそう雷竜剣零ノ型　雷皇紫電槍』!」

ブレイン「ぐあああああつ!」

おおっとレイの技がブレインの肩をぶち抜いたー！

レイ「もう『ニルヴァーナ』を止めろ」

ブレイン「『ニルヴァーナ』は止まらない！」

まてよ・・・後でゼロ出てくるなら今ここで殺して戦闘回避するか？

いや、そんなことしたらナツがだめだな・・・

レイ「お前を見張っておく余計なまねをするな」

ブレイン「ふん！」

ウエンデイ「レイさーん！」

レイ「どうしたウエンデイ？」

ウエンデイ「大変なんです！

このまま行ったら私のギルドが・・・『化猫ケットシエルターの宿』があるんです！

やばい、すっかり忘れてた・・・

レイ「心配すんな俺達が止めてやる」

さてどうすっかな・・・

ブレイン「ぐっ！」

なんだ？突然ブレインが苦しみ出したぞ？

・・・顔の模様全部消えてやがる・・・

レイ「シャルル！ウエンディを連れて今すぐ逃げろ！」  
シャルル「!!」

凄まじい魔力に辺りの空気がビリビリと痺れ始めた

ゼロ「久しいなこの感じ・・・」

レイ「くそっ！このタイミングかよ！」

もう魔力はほとんどのこつてない・・・いけるか？

ゼロ「この体をボロボロにしたのはお前か？」

レイ「っ！『炎天・覇竜モード』『真・滅竜奥義

煉火絶空!!!』」

これが俺の最後の魔力だ！

ゼロ「空間を切り裂く炎の斬撃か、だが・・・

開け鬼哭の門、無の旅人を!!

その者の魂を!! 記憶を!! 存在を喰いつくせ!! 消えよ!! 無の彼方へ!!」

レイの魔法は突如現れた黒い靄のようなものに吞まれ、レイの存在をも吞みこもうとする

レイ「俺の魔法が!? まずい！」

ゼロ「『ジェネシス・ゼロ!!』消えろ! ゼロの名の下に!!」

レイ「ぐっ!くそおおおおお!」

・  
・  
・  
俺は無に消えた  
・  
・



## 第17話 仲間の力

あー呑まれちゃったけどどうすつかなく

さすがに漫画読んでるだけじゃ脱出方法とかわかんねえ・・・

??? 「おいレイ」

レイ 「あ？あ・・・」

・・・神だ・・・

レイ 「なんであんたが居るんだよ？」

神 「いや、このまま君殺したら転生させた意味ないじゃん？」

レイ 「いや、まあ・・・」

神 「だから、今回だけ助ける」

おお！

神 「今回だけだぞ。それ」

以前のように手をかざすと俺は光に包まれた

「パリンッ！」

空間が割れ、飛び出た先にはナツがゼロと対峙していた

レイ「よつと」

ナツ「レイ!!」

ゼロ「なに!? 貴様どうやって無の空間から出てきた!」

レイ「さあ?」

ジエラールは倒れてるな、

咎の炎は喰ったようだな・・・

ナツ「レイ! こいつは俺がやる!」

レイ「わかってるつもの、手をだせ」

ナツ「なんで?」

レイ「俺の『覇竜』と『火竜』の魔力を渡す」

「がし」

ナツ「すげえ! こんなに暖かい炎は初めてだ・・・」

レイ「いけ、ナツ!」

ナツ「おう! 『火竜の鉄拳!!』」

ゼロ「ぐう！」

ナツ『『火竜の鉤爪・翼撃・炎肘!!!』』

ゼロ「ごさかしい！『ダークグラビティ!!!』』

ナツ「がつ！」

ゼロ「てめえごときゴミが一人で俺にかなうわけ訳ねーだろうが」

ナツ「一人じゃねえ・・・」

ゼロ「あ？」

ナツ「伝わってくるんだ・・・みんなの声・・・みんなの気持ち・・・

俺一人の力じゃねえ・・・みんなの思いが・・・俺を支えて・・・

俺を！今ここに！立たせている!!」

リアルに聞いたら泣けてくるな・・・

ナツ「仲間の力が俺の体中をめぐっているんだ!!」

ゼロ「粉々にするには惜しい男だがもうよい・・・貴様に最高の無をくれてやる」

ナツ『『滅竜奥義・・・紅蓮爆炎刃』!!』

ゼロ『『ジェネシス・ゼロ!!!』』

レイ「俺の魔力とジェラルルの魔力を喰ったんだ、威力が違う」

ナツの魔法はゼロの魔法を打ち消した

ナツ「うおおおおおおお！」

ゼロ「ぐおおおお！」

ナツ「全魔力開放！『滅竜奥義』しらぬいがた不知火型ぐれんほうおうけん紅蓮鳳凰劍！！」

ゼロ「ぐああああああああああああ！！」

ナツ「ああああああああああああ！！」

「バキンー！」

「ドドドドドドドドドド」

レイ「他の所も破壊できたようだな。ナツ！ジエラール！脱出するぞ！」

ナツ「俺もうギリギリ・・・」

ジエラール「俺もだ」

レイ「世話のやけるやつらだな！」

ナツとジエラールを背負ってスケボーで出口へと向かう

くっそぞんどん崩れてやがる！

ナツ「レイ！どんどん崩れてるぞ！」

レイ「言われなくてもわかってるよ！」

よっしや出口みつけ!!!

レイ「おらあああああ！」

ナツ「おっしやー！ー！」

エルザ「レイ！」

ルーシイ「無事だったのね！」

レイ「俺がこんな所で終わるわけねえだろ！！

ルーシイあとで覚えとけよ」

ルーシイ「ごめんなさい、ごめんなさい」

グレイ「で、そいつ誰だ？」

天馬のホストか？」

エルザ「ジエラールだ」

グレイ「なに!？」

ルーシイ「あの人が!？」

さて、ラハール達に来るがどうするかな」

いちよ面識はあるし

一夜「メエーン」

ほら来た・・・

グレイ「どうしたオッサン!!」

一夜「トイレのパルファムをと思っただらなにかにぶつかつた」

ウエンディ「なにか地面に文字が・・・」

ジュラ「こ、これは・・・」

「術式!!」

グレイ「いつの間に？」

ルーシイ「閉じ込められたの？」

ナツ「誰だコラア！」

???「手荒な事をするつもりはありません

しばらくの間そこを動かさないでいただきたいのです」

ハッピー「!!」

???「私は新生評議院 第四強行検束部隊隊長、ラハールと申します」

ナツ「んなっ！」

グレイ「新生評議院!？」

ルーシイ「もう発足してたの!？」

ラハール「我々は法と正義を守るために生まれ変わった。如何なる悪も決して許さな

い」

ハッピー「おいらたち、何も悪いことしてないよ！」

ナツ「お、おお」

ナツよ・・・もつと自信持て・・・  
 ラハール「存じております」

我々の目的は『六魔將軍』オラシオンセイイスの捕縛

そこにいるコードネーム ホットアイをこちらに渡してください」

ジユラ「っ!! 待ってください!」

ホットアイ「いいのですよジユラ」

ジユラ「リチャード殿・・・」

ホットアイ「たとえ善意に目覚めても、過去の悪行は消えませんが」

私は一からやり直したい。その方が弟を見つけたとき、堂々と会える! デ

スヨ」

ジユラ「ならばワシが代わりに弟殿を探そう」

ジユラの言葉に驚いた様子のホットアイ

ホットアイ「本当ですか!？」

ジユラ「ああ。弟殿の名を教えてください」

ホットアイ「名前はウォーリー、ウォーリー・ブキャナン」

「ん?」

エルザ「ウォーリー?」

その時ナツ達の頭の中で「だぜ！」というセリフが響く

「四角ー!?」

レイ「え?ごめん、ついて行けない」

ホットアイ「アイツは・・・ウォーリーは、本当に素直で・・・優しい弟でした」

昔のことを思い出し弟の事を思うホットアイの顔は優しい兄のものだった

エルザ「その男なら知っている」

ジユラ「なんと!」

エルザ「私の友だ。今は元気に大陸中を旅している」

ホットアイ「これが・・・光を信じる者だけに与えられた奇跡と言うものデスカ・・・」

ありがとう・・・ありがとう!!」

うれしさのあまり泣き崩れるホットアイ

ありがとうという言葉が何度もその口から溢れ出た

ルーシイ「なんか・・・かわいそうだね」

ハッピー「あい・・・」

グレイ「仕方ねえさ」

一夜「もういいだろう!術式を解いてくれ!漏らすぞ!」



ラハール「いえ、私たちの本当の目的は『六魔將軍』オランオンセイイスごときではありません」  
一夜「へ？」

ラハール「評議院への潜入、破壊、エーテリオンの投下・・・もつとんでもない大悪党がそこにいるでしょう」

その言葉にエルザは目を見開きだれもが冷や汗が伝った

ラハール「貴様だ、ジェラール!!」

来い!! 抵抗する場合は抹殺の許可も下りている」

ウエンデイ「そんな!!」

ナツ「ちよつと待てよ!!」

ラハール「その男は危険だ・・・二度とこの世界にはなつてはいけない、絶対に!!」

レイ「エルザ・・・」

エルザの瞳はなにを見る・・・

## 第18話 緋色

ラハール「ジェラール・フェルナンデス連邦反逆罪で貴様を逮捕する」

・・・エルザはいろいろ考えてるみたいだな・・・しようがない

レイ「ラハール、ちよつと待て」

ラハール「レイどうした？」

レイ「いや、ジェラールの事俺に任せてくれないかな？」

ラハール「!!」

レイ「いやね、こいつを『妖精の尻尾』フェアリーテイルに入れて俺が監視するのはどうだ？」

ラハール「ダメだ!! こいつだけは世に放つわけにはいかない!!」

レイ「お前はこいつがまたなにか企むのが怖いのか？」

ラハール「当たり前だ!!」

レイ「ならこいつが何かしでかそうとしたら俺がこの手で殺す。それでどうだ？」

ラハール「こればかりは俺が決められない・・・」

レイ「わかった。なら直接評議院に行く」

ラハール「・・・いいだろう」

エルザ「本当か!？」

レイ「待て、ジェラールお前はどうしたいんだ？」

ジェラール「俺は・・・」

ナツ「来い、ジェラール!!」

お前はエルザから離れちやいけねえ!!

ずっと側にいるんだ!! 俺達の側に!!」

ジェラール「ナツ・・・」

ナツ「俺達がついてる!仲間だろ!!」

ジェラール「っ!!」

エルザ「ジェラール・・・」

ジェラール「エルザ・・・」

ラハール「どうするんだジェラール?」

ジェラール「俺は・・・『妖精の尻尾』フェアリーテイルに入つて罪を償う・・・

罪が償いきれるわけじゃないが・・・」

レイ「よし!じゃあ評議院にいつてくるよ」

ジエラール「ありがとうレイ……」

レイ「いいんだよ、仲間だろ？」

ジエラール「ふっ」

ラハール「一応ジエラールは評議院に連れていく

どうなるかわからないからな」

レイ「わかった、いいなジエラール」

ジエラール「ああ……そうだエルザ」

エルザ「なんだ？」

ジエラール「お前の髪の色だった……」

エルザ「!？」

エルザは驚き目に涙を浮かべる

ラハール「お前は先に行け

1人の方が早いだろ」

レイ「おう」

よし行くか

——評議院——

グラン・ドマ「レイ・グローリーよ

ジェラールの件聞き入ってやらんこともない」

レイ「マジ・・・本当ですか？」

グラン・ドマ「しかし2つ条件がある」

レイ「・・・条件とは？」

グラン・ドマ「1つはお前が言ったジェラールの抹殺

もう1つはレイお前の『聖十大魔道』の称号をうけることだ」

レイ「俺が!？」

グラン・ドマ「お前がマスタージョゼを倒したせいで1枠空いてしまったのだ

受けられないならジェラールを拘束する」

レイ「・・・いいだろう」

グラン・ドマ「ではこれが『聖十』の称号を証明するバッジだ」

レイ「ちっ！」

気にくわねえな

そう思いながらバッジを手取る

グラン・ドマ「それとこれが制限無しジュエルのJカードだ」

レイ「・・・マジか？」

「――『フェアリーテイル妖精の尻尾

レイ「ただいま」

帰ったとたんエルザにジエラールは？と飛びつかれた

レイ「大丈夫だよ

明日には帰ってくるって」

エルザ「よかつた」

エルザは泣きながらぺたりと地面に座り込んだ

レイ「よかつたなエルザ」

と頭を撫でながらいうと

エルザ「・・・うん・・・」

泣きながら「うん」だつて

やばいギャツプ萌えつてやつか・・・

ナツ・グレイ「信じらんねえ・・・」

レイ「ああ、そうそう俺『聖十大魔道』になった」

「「・・・」」

レイ「いやジエラールの件の交換条件として出されたんだよ」

ウル「まあ、レイならふさわしいんじゃない？」  
レイ「そうかねえ」

次の日

「がちやつ」

エルザ「ジエラール!!」

ジエラール「やあ、エルザ」

レイ「来たか」

俺はにやにやしながら答えた

ミラ「それじゃあギルドマークはどこにいれるの？」

ジエラール「左胸に黄色で頼む」

ミラ「はい」

マカロフ「それじゃ今日はウエンデイ、シャルル、ジエラールの歓迎の会じゃー!」

「!」  
「!!」  
「!!!」

ワカバ「ミラちゃんビール!」

ミラ「はいはい」

ジユビア「レイ様浮気とかしてませんよね？」

レイ「・・・なんだよそれ？」

ウル「今ちよつと間空いたわよ？」

カナ「怪しいんじゃないの？」

レイ「お前らへんな事言うなよ！」

ハツピー「シャルルーオイラの魚いる？」

ナツ「うおおおお燃えてきたー！」

ルーシイ「きゃーあたしの服ー！」

レイ「ナツ！なにしてくだめてえ！」

俺がまだ見てねえのに見せるかー！」

ナツ「ぐはあ！」

とりあえずナツに一発

ルーシイ「さらつと変な事言うなー！」

レイ「ぐあ！」

なんで俺まで!?



## 登場人物&amp;技一覧

レイ・グロリー

S級魔導士

年齢 16歳

容姿 黒髪に赤みがかかった目 イケメン

性格 基本やさしい・女に弱い・敵に容赦なし

魔法 神滅竜魔法

創造魔法

## 『火竜』

・火竜の鉄拳

・火竜の咆哮

・火竜の翼撃

・滅竜奥義 紅炎鳳凰閃

：一瞬で貫く紅蓮鳳凰儉の上位魔法

・火竜剣 クリムゾン

? 火竜剣零ノ型 獄炎・烈炎ノ太刀 : 火竜剣最強の居合の型

火竜剣壹ノ型 炎刃・七連舞

火竜剣貳ノ型 爆竜乱舞 : 爆発する火の球を複数飛ばす

火竜剣参ノ型 紅蓮爆炎刃

火竜剣四ノ型 業炎竜塵牙 : 払っても纏わりつく爆発する粉塵

火竜剣五ノ型 紅蓮鳳凰儉

『水竜』

・水竜の鉄拳

・水竜の咆哮

『岩竜』

・岩竜の剛拳

・岩竜の層撃 : 地面から地層を引きずり出しぶつける

・岩竜壁

『氷竜』

・アイスストーム : 氷の竜巻を巻き起こす

- ・氷竜剣アブソリュート・ゼロ

? 氷竜剣壱ノ型 氷竜旋尾 : 柔らかい氷を氷竜剣に纏い鞭のように振るう

『幻竜』

- ・幻竜の吐息 : 簡単に言えば息を吹きかけるだけの催眠術

『天竜』

- ・天竜の翼撃

- ・滅竜奥義 照破・天空穿

『雷竜』

- ・雷竜方天戟

- ・雷竜剣 ボルテックス

? 雷光閃

雷竜剣零ノ型 雷皇紫電槍 : 雷の速さで貫く紫電槍

『毒竜』

- ・毒竜剛牙

『雷炎竜』

・雷炎竜の咆哮

・滅竜奥義・改  
紅蓮爆雷刃

『白炎竜』

・白炎剣

?・滅竜奥義・改  
白火衝覇斬  
：白き炎の巨大なる斬撃

『雷水竜』

・雷水竜の咆哮

・滅竜奥義・改  
雷光水竜剣  
：水を纏い雷のスピードで敵に切り込む

『白天竜』

・滅竜奥義・改  
閃華裂風刃  
：光の速さで花のように咲き乱れる風の刃を放つ

『氷雷竜』

・氷雷剣 コールドブリッツ  
 ? 氷雷剣零ノ型 雷迅氷華槍

：落雷と同時に降り注ぐ絶対零度の氷槍

『氷幻竜』

・氷点霞月

・滅竜奥義・改 氷幻零魔槍

：無数の氷の槍しかし実体はなく  
 精神にダメージを与える幻術の一種

『白影竜』

・滅竜奥義・改 聖影竜閃牙

『白雷竜』

・滅竜奥義・改 白雷・麒麟

：空から白い雷が麒麟の姿となり降り注ぐ

『白火天竜』

・真・滅竜奥義 天照白火刃

：触れたものは灰燼にするほどの聖なる白き炎の斬撃

『白炎・霸竜モード』

・真・滅竜奥義 白火霸竜剣  
：白火衝波斬の強化版

『炎天・霸竜モード』

・真・滅竜奥義 煉火絶空  
：斬ったものを異空間へ引きずり込む斬撃

『合体魔法』

・火竜爆炎脚 (ナツ) : 大爆発を巻き起こす火竜の鉤爪  
・幻竜協奏曲 (ミストガン) : 存在する幻術の中で最強の幻術だが外からの刺激

で簡単に解けてしまうのが難点

ルカ・ハート

年齢 16歳

容姿 金髪ロング 美少女

サイズ 約92 56 89

## 魔法 真滅神魔法

## 『炎神』

- ・ 炎神の怒号

## 『雷炎神』

- ・ 雷炎神の宝剣 : 触れたものを雷と炎の熱で溶かすほどの古くから伝わる宝剣

## エドラス編

### 第19話 ギルダーツ

ルーシイ「ウエンデイ、ギルドにも慣れてきた？」

ウエンデイ「はい！」

レイ「ルーシイも最初はすごかったんだぞうウエンデイ

傭兵ゴリラ倒したりしてなう」

ウエンデイ「ええ！本当ですか!？」

ルーシイ「それ全部ナツだから・・・」

「ゴーンゴゴーン」

おつ来た！そろそろだと思っただよなう

ルーシイ「何？」

ウエンデイ「鐘の音？」

ナツ「この鳴らし方は！」



ハッピー「あい！」

グレイ「まさか！」

ナツ「ギルダーツが帰ってきた！」

ハッピー「あいさー！」

ウエンデイ「ギルダーツ？」

ルーシイ「あたしも会ったことないんだけど・・・

『妖精の尻尾』もう一人の最強の魔導士なんだって」

ウエンデイ「うわあ！」

レイ「もう一人は俺だけどなく」

ルーシイ「自慢しなくていいわよ！」

どうでもいいけどこの騒ぎよう何!？」

ウエンデイ「お祭りみたいだねシャルル」

シャルル「ほんと騒がしいギルドね」

ウル「同感だわ」

ミラ「みんなが騒ぐのも無理ないわ」

ルーシイ「ミラさん」

ミラ「3年ぶりだもん・・・帰ってくるの」

ルーシイ「3年も!?何してたんですか?」

レイ「100年クエスト行つてたんだよ。それよりお前ら外に出てみる」

ルーシイ「なんで?」

レイ「いいからいいから」

俺は素晴らしい5人を外にできるように促す

「ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ」

ジェラール「な!?!」

ウル「ええ!?!」

ルーシイ「う・・・うそ!?!」

「「街が・・・割れたーーーーー!」」

おお、ウルとジェラールもいりアクションだなw

ミラ「ギルダーツは触れたものを粉々にする魔法を使うんだけど

ぼーつとしてると家突き破っちゃうの」

ルーシイ「どんだけバカなの!?!」

ナツ「来たーーーーー!」

ギルダーツ「ふう」

ナツ「ギルダーツ!俺と勝負しろ!」

ミラ「おかえりなさい」

ルーシイ「この人がギルダーツ」

ウル「すごい魔力・・・」

ギルダーツ「む、お嬢さん確かこの辺りに『妖精の尻尾』ってギルドが

あつたはずなんですが・・・」

ミラ「ここよ、それに私ミラジエーン」

ギルダーツ「ミラ？ ずいぶん変わったなあお前！ つーかギルド新しくなったのかよ  
!!」

ナツ「ギルダーツ！」

ギルダーツ「おお！ ナツか、久しぶりだなあ！」

ナツ「俺と勝負しろっていつてんだろー！」

ギルダーツ「また今度な」

ナツ「ごぼっ！」

あ、めり込んだ

グレイ「変わってねえなオツサン」

ギルダーツ「いやあ見ねえ顔もあるし・・・ホントにかわったなあ」

マカロフ「ギルダーツ」

ギルダーツ「おお！マスター久しぶりー！」

マカロフ「仕事の方は？」

ギルダーツ「がっはっはっはっ！」

ふうとため息をつくじいさん

これはダメだなと俺でもわかった

ギルダーツ「ダメだ、俺じゃ無理だわ」

「何!？」

「ウソだろ？」

マカロフ「そうか・・・主でも無理か・・・」

レイ「いいんじゃないやねえの？失敗なんてだれにでもあるだろ？」

ギルダーツ「レイか。レイ、ナツ後で俺んち来いみやげだぞ」

じゃあ失礼とギルダーツは壁をつき破って出ていった

ナツ「レイ！みやげって外国の珍しい炎かな？」

レイ「炎なんて持って帰れねえだろ」

そんな話をしながらギルダーツの家の前へたどり着いた

ナツ「よお」

レイ・ハッピー「お邪魔します」

ギルダーツ「来たかレイ、ナツ、ハッピー」

お前らリサーナとはどうなんだ？」

このタイミングでこの話はちよつとな・・・

ナツ「はあ？」

レイ「・・・」

ギルダーツ「テレヤがつて〜」

ナツ「リサーナは死んだよ2年前に」

レイ「・・・」

俺はリサーナの死を止められなかった

正確には死んでないが・・・

俺はあとから気づき急いで向かったが目の前で消えていくリサーナを見ていること

しかでしなかつた・・・

ギルダーツ「マ・・・マジかよ・・・そつか・・・それでミラの奴・・・」

ナツ「そんな話なら帰んぞ」

ハッピー「ナツつてば」

ギルダーツ「仕事先でドラゴンに会った・・・」

ナツ「?!？」

ギルダーツ「ナツの探してる赤い奴じゃねえとは思うがな・・・黒いドラゴンだ」

レイ「黙示録にあるアクノロギアか？」

ギルダーツ「ああ」

ナツ「ど、どこで・・・」

ギルダーツ「霊峰ゾニア、おかげで仕事は失敗だ」

レイ「ナツ行くな」

ナツ「なんで!!」

レイ「普通に考えろもう居るはずがない」

ナツ「それでも何か手掛かりがあるかもしれないねえ！」

ギルダーツ「ナツこれを見ろ」

ギルダーツは自分の羽織ってるマントを取った

ナツ・ハッピー「?!？」

ギルダーツ「ほとんど一瞬の出来事だった。左腕と左足、内臓もやられた」

レイ「アクノロギアは1頭で国1つを滅ぼしたという、まだ俺たちじゃ無理だ」

ナツ「くそっ！」

ナツは家を飛び出していった

レイ「バカだなく、まだって言ったのに」

ギルダーツ「ああ、ナツならきつと・・・」

レイ「そうだギルダーツ、明日俺と勝負だ！」

ギルダーツ「いいぞ〜50勝50敗だからな」

レイ「明日は俺が勝つぜ」

ギルダーツ「言ってる〜」

明日が楽しみだ！

## 第20話 VS. ギルダーツ

ギルダーツとの決闘の日・・・

「がやがや」

ふっふっふ・・・

3年ぶりにギルダーツをぶちのめす日が来たぜ

マカロフ「勝負はどちらかが倒れるまでじゃ・・・始め！」

レイ「最初から本気でいく!! 『白火・霸竜モード!!!』」

ギルダーツ「ほう属性のかけ合わせが出来るのか・・・使えるのも増えたみたいだな」

レイ「ただ使えるだけじゃねーっつーの!!!」

お前のいない3年の間のんきに仕事してたと思うなよ!?

『真・滅竜奥義 びゃっかはりゆうけん 白火霸竜剣!!!』

「どいっ! おお おお おお おんー!」



た  
 レイの魔法が直撃したギルダーツはマントがボロボロになっただけでほぼ無傷だっ

ギルダーツ「ぐううう!!!」

さすがにきくなく、だが・・・」

ギルダーツがクラツシユを放ちレイの足元を分解し足場を奪う

レイ「そんなもん効くかつ!!」

『魔装・火竜!!!』

レイが炎に包まれる

炎が消えると赤い紋様が浮かんだ黒装束を羽織ったレイが姿を現した

ナツ「なんだあれ!？」

初めてみるぞ!!!」

さすがにみんな驚いてるみたいだな

もーナツなんか目が輝いてるし・・・

レイ「ギルダーツ!! この技の実験台になってもらう!!!」

『火竜の神拳』!!!」

ギルダーツ「ふっやられるか!!!」

レイの炎でブーストさせた火竜の鉄拳とギルダーツのクラツシユがぶつかり2人の

足場を残し大きなクレーターが砂浜に残る

レイはすぐさま両手に火竜剣

レイ「『火竜剣六ノ型 炎刃・五十連舞!!!』」

一瞬にて50もの回転斬りをギルダーツにたたきこみ

その回転を利用してレイは次の攻撃に移る

レイ「『炎竜剣七ノ型 紅炎旋回塵!!!』」

回転したまま連鎖爆発する火花を散らしギルダーツを攻撃する

今の俺には魔装使ってもここまでが限界だ!

ギルダーツ「強くなったなレイ

だが・・・『破邪顕正・一天』!」

しまっ!

レイ「ぐあああああああああ!」

マカロフ「そこまでえい!!!」

勝者ギルダーツ!!!」

ギルダーツ「これで俺の51勝だ」

レイ「くそっ!」

ギルダーツ「修行して出直してこいw」

やなオツサンだな、たくつ・・・

ミラ「さてきて、毎度恒例のケガの手当てでもしましょうね」

レイ「毎度すまん・・・」

ミラ「レイが初めてギルダーツに勝ったのつてリサーナに初めて応援された時だったわよね」

ミラは治療バッグを広げながら昔話を始めた

レイ「・・・そうだったか？」

ミラ「あなたが一番わかってるくせに

あの子、レイが大好きだったもの」

レイ「ん・・・」

ミラ「レイもリサーナのこと大好きだったもんね？」

レイ「なっ!!？」

ミラの予想外の一言に柄にもなくレイは顔を真っ赤にした

ミラ「好きな人の好きな人くらいなんとなくわかるわよ

・・・はい、治療おしまい!!」

レイ「ん、サンキュー・・・」

あいつを守れなかった俺にあいつを好きでいる資格なんかないよ」

そう言ってレイは突然降ってきた雨に打たれながらギルドを後にした

## 第21話 エドラス

ん？ここはどこだ？

・・・とりあえず暑い・・・

俺は今ミストガンにエドラスに飛ばされて砂漠をさまよっていた

数時間前・・・

レイは雨に打たれながら1人マグノリアの街を歩いていた

すると突然、雷が鳴り響き、いつの間にか意識を失い、気が付くとマグノリアの町並みは真つ白なさら地に変わり、目の前にはミストガンが立っていた

ミストガンによればアースランドはアニメに吸い込まれギルドのみんなもアニメに吸い込まれた・・・と

俺はこの日をずっと待ってたんだ・・・あいつに会うために・・・

「ドオオオオーン！」

レイ「な．．．なんだあ？」

レイが砂漠をフラフラと歩いているときなり目の前に木でできた建物が現れた

レイ「エドラスの『妖精の尻尾』か．．．てことはナツ達も！」

レイは『妖精の尻尾』に駆け込んだ

レイ「ナツ!!」

ウエンデイ!!」

ナツ「レイ!!」

ウエンデイ「レイさん!!」

エドルーシイ「レイ!」

．．．ん？

エドグレイ「なんでお前が生きて．．．」

え．．．俺こつちじゃ死んでんの？

レイはエドラスのみんなに自分たちの存在や世界について事細かく説明を始めた

モブ「つーと何か？」

お前らはアースランドとかいうもう一つ世界から

仲間を救うためにこの世界に来たってことか？」

レイ「ああ、そんなとこだ」

エドウエンデイ「で・・・この子がそっちの世界の私!？」

ウエンデイ「ど・・・ども」

レイ「ウエンデイお前将来こんなになるのか？」

ウエンデイ「し、知りませんよ!」

「がちゃ!」

突然ドアの閉まる音がしたが誰も入ってきた様子はない

リサーナか・・・

ナツ「レイ、どこいくんだ？」

レイ「外の空気吸ってくる」

レイ「リサーナ・・・」

はっとした顔でリサーナは振り返る

リサーナ「どうしたのレイ？」

レイ「お前・・・アースランドのリサーナだろ？」

リサーナ「!!」

「な、何の事？」

レイ「俺が気づかないと思うなよ

じゃあなんで泣いてたんだ？」

リサーナ「そ、それは・・・」

「ぎゅっ！」

リサーナ「レ、レイ!？」

レイ「昔言っただろ

お前が居なくなっても俺が必ず見つけるって」

リサーナ「レイ・・・会いたかった」

レイ「俺もだ・・・俺が本気で好きになったのお前だけだからな」

リサーナ「もう／＼」

「ちゅ」

2人の影が1つになった

リサーナ「レイ、大好き♡」

レイ「ああ俺もだ」

リサーナ「で、私がない間に何人抱いたわけ？」

レイ「そ、それは・・・」

痛いところかかれたな・・・



リサーナ「誰と寝たの！」

レイ「はい!!」

カナ、エルザ、ミラ、ジュビア、エバ、ウル、ルーシイです!!」

リサーナ「お姉ちゃんにも手だしたの!？」

信じられない！」

レイ「ご、ごめんなさい・・・」

やばい、ここまで怒られたらさすがにへこむ

リサーナ「はあ、私こんな女ったらしに惚れてたんだら、シヨックッ」

レイ「いや・・・でも俺からはあんまし迫ってないぞ？」

リサーナ「言い訳しない！」

レイ「すみません！」

こいつ・・・楽しんでないか？

リサーナ「まあ、久しぶりに会えたから許す」

レイ「なにが許すだけカ」

リサーナ「ふふっ」

リサーナは最高の笑顔で笑っていた

うん、かわいい！

レイ「ナツ達にはホントの事言わないのか？」

リサーナ「うん……」

レイ「……そうか」

リサーナ「……もう行っちゃうの？」

レイ「ああ、みんなを助けねえと」

リサーナ「そっか。そうだよね」

レイ『『モード氷炎竜』』

リサーナ「何？」

レイは滅竜魔法で氷の中に炎を閉じ込めそれを透明な水晶で固めて指輪を作った

レイ「手だせよ」

リサーナ「え？」

いいからとレイはリサーナの手をとると薬指に指輪をはめた

リサーナ「わあ！綺麗！」

レイ「俺も同じのをつける。これで俺達はいつでも繋がってる」

リサーナ「うん！／＼」

レイとリサーナは再び唇を交わした。すると……

ハッピー「レイーそろそろ行くって……さ……」

レイ「ハ、ハッピー・・・」

ハッピー「でえきてえる〜」

レイ「巻き舌風に言うな！」

リサーナ「(ハッピーも変わらないな〜)」

ナツ「よし！行くぞ！王都へ！」

レイ「道わかんのか？」

ハッピー「シャルルが覚えてるよ」

ウエンディ「レイさんその指輪どうしたんですか？」

レイ「これか？お守りだ」

ハッピー「レイさつきさく、むぎゆ！」

レイ「(さつきの事しやべらなかつたら後で特上マグロやる)」

ナツ「ハッピーどうした？」

ハッピー「なんでもない」

レイはちらつとリサーナをみた

すぐ会える・・・それまでの辛抱だ

そう自分に言い聞かせるレイだった

## 第22話 魔法文化

「ウゲロ・ウゲロ・」

ナツ「とらあ！」

「ウゲロ」

あいつなんで蛙？を捕まえようとしてんだ？

ハッピー「王都まではまだまだかかるのかな？」

シャルル「さつき出発したばかりじゃない」

ウエンデイ「5日は歩くって言ってたよね」

レイ「はあ、遠い・・・」

俺だけスケボーで飛べるんだけどなく・・・

ナツ「んがっ！」

ナツはトラブル持ち込んでくるしよ

ナツ「どわー！」

ハッピー「でっかー！」

ウエンデイ「きやああああああ！」

ナツ「よし！『火竜の・・・』」

レイ「お前魔法使えねーだろ」

ナツ「くつそー不便だー！」

エドルーシイ「ど・・・りやあ！」

カエルの背後からエドルーシイが現れ、鞭でカエルを一蹴した

「ウゲローー！」

ハッピー「怖いルーシイ！」

ウエンデイ「怖いルーシイさん！」

レイ「ツンデレルーシイ」

エドルーシイ「いちいち怖いとかっけんな！」

てかツンデレ言うな!!」

シャルル「なんであんたが？」

エドルーシイ「まあ・・・その・・・この辺りは危険だしな

なんつーかその・・・」

ナツはうれしそうな顔をした

エドルーシイ「し、心配してる訳じゃねーからなっ

(レイに会いたかったなんて絶対言えない!!)

レイ「やっぱツンデレじゃねえか」

エドルーシイ「うるさい！」

・・・怒鳴られた・・・

ナツ「なんだかんだ言ってもやっぱルーシイだなお前」

エドルーシイ「どんなまとめ方だよ！」

ナツ「そーゆーつつこみとか」

ールーエンの街ー

エドルーシイ「ちよつと前までは魔法は普通に売り買いされてたんだ」

レイ「けど王国がギルド狩りを始め魔法の売買が禁止されたつとこだろ？」

エドルーシイ「ああ、それどころか今は魔法を所持してるだけで罪になる」

ナツ「持つてるだけで罪って・・・」

ウエンデイ「元から使える人はどうなるんですか？」

エドルーシイ「どうって魔法を手放せばいいだけだろ？」

つーか元から使える人ってなんだよ？」

「・・・!?!」

シャルル「どうやらこつちの世界じゃ『魔法』は『物』みたいな感じらしいわね」  
ハッピー「物？」

シャルル「魔力が有限ってことは私たちのように体内に魔力を持ってないってことよ」

レイ「魔力を持つてるのは魔水晶ラクリマみたいな物質で

それを武器や生活用品に組み合わせた道具を『魔法』としてるようだな」  
ナツ「こつちの魔導士って道具使うだけなのか？」

レイ「そーゆーことになるな

よーするに魔力を持たない所持系魔導士ホルダーって感じで考えればいいわけよ」

ハッピー「納得」

エドルーシイ「着いたよ・・・この地下に魔法の闇市がある

旅をするなら必要だからね」

ウエンディ「闇市・・・」

ナツ「しようがねえ、こつちのルールにのっとって魔法使うか」

ハッピー「あい」

シャルル「順応・・・早いわね」

ウエンデイ「私これがいいです！」

シャルル「なんで？」

ウエンデイ「だってかわいいじゃない」

シャルル「そんな基準で選んじやダメでしょ！」

ナツ「親父！炎系の魔法あるか？」

店主「炎系ならこちらの『封炎剣』がおすすめです」

ナツ「しょぼい魔法だけじゃないよりマシか」

レイは珍しそうに魔法道具を眺めていた、そこにエドルーシイが声をかける

エドルーシイ「レイはいいのか？」

レイ「ああ、俺魔法使えるし」

ナツ「・・・は？」

ここでいったらナツがうるさそうだからスルー

エドルーシイ「てかお前ら金持ってんのかよ？」

レイ「払つといてくれルーシイ」

頭をポンポンしながら笑顔でエドルーシイにお願いする

エドルーシイ「わ、わかった（レイの頼みならしようがないな／＼）」



レイ達は闇市を後にし、カフェでエドルーシイにアースランドのことを話していた  
エドルーシイ「あはははははははっ!!」

なに大爆笑してんだよ・・・そんな笑える事か？

エドルーシイ「あたしが小説書いてんの？

そんでお嬢様で・・・鍵の魔法使って・・・あーはっはっは!」

ナツ「やかましいトコはそっくりだな」

エドルーシイ「やかましい言うな!」

うるせーな・・・俺のティータイムを・・・

ウエンデイ「さっき買ったコレどうやって使うんですか?」

エドルーシイ「バカ!人前で魔法を見せるな!

魔法は世界中で禁止されてるって言ったろ!」

ウエンデイ「ごめんなさい・・・」

シャルル「でも魔法は元々生活の一部だったんでしょ?」

エドルーシイ「そうだよ・・・」

王国はあたし達の文化を1つ奪ったんだ。自分達で独占する為に!!」

ナツ「じゃあ王国の奴らやつつけければまた世界に魔法が戻ってくるかもな」

エドルーシイ「何バカな事言ってるんだよ!

王国軍となんて戦える訳ねーだろ!？」

あーもう我慢できねえ・・・

レイ「なんでやる前からあきらめんだよ？」

エドルーシイ「それは！」

レイ「やってみなくちやなにもわからないだろ」

エドルーシイ「レイ・・・」

王国兵「いたぞ！」

「街の出入り口を封鎖しろ！」

エドルーシイ「王国軍!？」

王国兵「『妖精の尻尾』フェアリーテイルの魔導士だなーそこを動かすな！」

ナツ「よーしさっき買った魔法試してやる！」

エドルーシイ「よせ！」

ナツ「ファイヤー！」

ウエンデイ「シャルルこれどうやって使うんだっけ!？」

シャルル「知らないわよ！」

ナツは『封炎剣』を振り回しながら高笑いするが相手は盾を取り出し防御体型を取る

ナツ「はっはー!・・・あ?盾!？」

レイ「もういい俺がやる・・・」

ナツ「レイ魔法は！」

レイ「さつき使えるって言ったろ『氷竜の・・・』」

「ぼんっ！」

・・・は？

「どごご」おおおおおおー！」

竜巻「ー！ー！？」

ナツ「なにしたウエンディー！」

ウエンディー「ごめんなさーい！」

レイ「俺の見せ場がー！」

「あああああああ」

「どかーん」

無事不時着・・・

エドルーシイ「なんとかまけたけどこのままじゃ街を出れないよ」

・・・四つん這いであのコースであのケツはエロイな・・・

エドルーシイ「レイ！なにじろじろ見てんだよ！」

レイ「いや、別に・・・」

ナツ「こつちの魔法不便だなー」

ウエンディ「ですねー」

ハッピー「どうしよう」

シャルル「他の出口は無いの？」

エドルーシイ「難しいな」

王国兵「いたぞぞ！」

『妖精の尻尾フェアリーテイル』だ！

「ギクツ！」

ルーシイ「離してよお！」

王国兵「おまえはルーシイだな？」

ルーシイ「確かにルーシイだけど何なの!？」

外にいたのはまさかのアースルーシイ、ルーシイはこの世界の事情そんなに知らなさ

そー・・・

ナツ「ルーシイ!？」

エドルーシイ「あたし!？」

ルーシイ「痛いつてばー」

あいつら女に乱暴しやがって・・・

我慢できなくなったレイは外に飛び出す

エドルーシイ「おい！レイ！」

レイ「どけえっ！！！！」

『アイスストーム！！！！』

王国兵「ぎやあああああ！」

ルーシイ「レイ！」

レイ「大丈夫か？ルーシイ」

ルーシイ「うん！大丈夫！」

エドルーシイ「これがアースランドの魔法・・・」

ルーシイ「みんな！会いたかったー！」

エドルーシイ「ま、まさかこいつがアースランドの」

ルーシイ「あたしー！？」

レイ「うるさいから鏡漫才はあとでにしてくれ」

Wルーシイ「やらんわ！！！！」

ハッピー「また来るよ！」

レイ「ちっ！ルーシイ、アリエス呼んでくれ！」

ルーシイ「わかった！」

開け『白羊宮の扉』アリエス!!」

レイ「アリエス!!」

俺と合わせられるか？」

アリエス「が、がんばります! 『ウールボム!!』」

レイ「『幻<sup>げんりゆう</sup>竜の咆哮<sup>ほうこう</sup>!!』」

レイ・アリエス「『合体魔法<sup>ユニゾンレイド</sup> クラウドイストーム!!!』」

ルーシィ「星霊との合体魔法!?!」

幻覚効果をもった雲が王国兵達に向かっていく

「うわーーーーー!」

アリエス「これでよかったですんでしょっか?」

レイ「ああ、サンキューなアリエス」

ポンとアリエスの頭を撫でた

アリエス「あう／＼」

ルーシィ「(いつの間にレイの毒牙にアリエスもかかったのかしら?)」

## 第23話 休息

の  
ルーシィ「……という訳でアニマが街をのみ込む瞬間ホロギウムが助けてくれた

空間の歪みを感じたとか言ってるね

で、1人何もない荒野に取り残されて、ミストガンが現れて  
事情聞かされたあとエドラスに飛ばされたって訳

ハッピー「でもなんでルーシィとレイだけ魔法使えるの？」

ルーシィ「うーん……もしかしてあたし……伝説の勇者的な!!」

ナツ「無いな」

レイ「エクスボール飲んでからだバカ」

ルーシィ「いじけるわよ？」

てかエクスボールって？」

レイ「エドラスで魔法を使えるようにする薬だ

ミストガンになんか飲まされたろ？」

ルーシイ「・・・そーいえば・・・」

ナツ「それ俺にもくれ!!」

レイ「持つてねえよ」

エドルーシイ「てめーら本気で王国とやりあうつもりか？」

ナツ「とーぜん」

ルーシイ「ここは『妖精の尻尾』現最強女魔導士のあたしに任せなさい！燃えてきたわよ！」

ナツ「ぶつちやけレイだけで十分だと思いが・・・」

ウエンデイ「がんばれルーシイさん！」

・・・こいつ大丈夫か？

ーーシツカの街ーー

俺達が体を休める為に宿に泊って一休みしていた

エドルーシイ「見ろよ！こいつとあたし体までまったく同じだよ！」



ルーシイ「だーっ！そんな恰好で出ていくなー！」

ウエンデイ「エドルーシイさん！レイさんとナツさんがいるんですよ!!」

エドルーシイ「別にあたしはかまわないけどね」

レイ「俺、ルーシイの体見たことあるから別にいいぞ」

ルーシイ「かまうわ！てかいらんこと言うな！」

レイ「まあ、中まではわかんねーけどな」

ルーシイ「だーかーらー！」

ウエンデイ「中って？」

ルーシイ「ウエンデイにはまだ早いわ」

ハッピー「にぎやかだねダブルーシイ」

シャルル「それ・・・うまい事いつてるつもり？」

ナツのやつどうしたんだ？ジーとみて？

エドルーシイ「なんだナツ？みたいのか？」

ルーシイ「やめてー！」

ナツ「ぶ！」

ルーシイ「な、何がおかしいのよ？」

そおかあ・・・あたしよりエドルーシイの方がスタイルいいとか

そーゆーボケかましたいのね？」

エドルーシイ「ふふん」

ナツ「自分同士と一緒に風呂入るなよ」

ダブルーシイ「……言われてみれば！」

ウエンデイ「それにしても見分けがつかないほどうり2つですね」

エドルーシイ「まさかケツの形まで一緒とはな」

ルーシイ「そーゆー事言わないでよ！」

ナツ「そうだ！鏡のモノマネ芸できるじゃねえか！」

ダブルーシイ「だからやらんわ！」

ウエンデイ「ああ……息もぴったり」

シャルル「悲しいわね」

エドルーシイ「お前、髪をいじつてくれる星霊とやらがいるんだよな？」

ルーシイ「うん、キャンサー？」

エドルーシイはルーシイにキャンサーを呼び出してもらい髪を短くしてもらった

キャンサー「こんな感じでいかがでしょうエビ」

エドルーシイ「うん！これでややこしいのは解決だ」

ルーシイ「本当によかったの？」

エドルーシイ「ん？アースランドじゃ髪を大切にしている習慣でもあるのか？」  
レイ「そんなのねえよ」

俺はシヨートの方が好きだぞ」

ルーシイ「!?」

エドルーシイ「そ、そっか／＼」

ルーシイ「・・・シヨートか」

ルーシイ、いちいち短くとかすんなよ・・・？

## 第24話 拉致

ルーシイ「信じられないっ！」

ナツ「朝からテンション高えーな」

ハッピー「どうしたの？」

ルーシイ「エドラスのあたしが逃げちゃったの！」

「王都へは東へ3日歩けば着く」

あたしはギルドに戻るよ

じゃあね幸運を！byエドルーシイ」

ルーシイ「手伝ってくれるんじやなかったのー!?

もおー!どーゆー神経してんのかしら！」

ハッピー「ルーシイと同じじやないの？」

ルーシイ「うるさい！」

レイ「まあ、迷ってたみたいだしな」

ウエンデイ「しょうがないですよ．．．元々戦う気はないって言っていましたし」  
ナツ「だな」

ルーシイ「あたしは許せない！

同じあたしとして許せないの！」

ナツ「まあいいじゃねーか」

レイ「お前もそういう時あるじゃんか」

ルーシイ「うるさい！むきー！」

ナツ「さて出発すつか」

ハッピー「あいさー」

エドルーシイ「(あいつらなら世界を変えてくれるかもしれねーだと?)

なに甘えた事考えてるんだあたしは．．．

本当に世界を変えたければ．．自分たちの手で変えなくてどうする  
！)」

めちやめちや怒っていたルーシイだったがふらつと立ち寄った本屋から戻るとめ  
ちやめちや機嫌が良くなっていた

ルーシイ「ふん♪」

ハツピー「うわ・・・もう機嫌直ってる」

ウエンデイ「珍しい本見つけて嬉しいんだろーね」

ルーシイ「あんたたちこの世界について少しは知ろうと思わないわけ？」

ナツ「別に」

レイ「なんか得すんのか？」

ルーシイ「歴史書が物語ってるわ！

この世界っておもしろい！」

レイ「あつそ」

本好きってうるさいの多いのか？

「ゴゴゴゴゴゴゴゴ」

「!!!」

ルーシイ「何？」

ナツ「ん？」

ハツピー「あそこ！」

シャルル「あれは！」

レイ「でかいな」

「飛行船！」

レイ「あれに乗るぞ！」

ナツ「よっしゃー！奪うぞ！」

ハッピー「ナツが乗り物に賛成するなんて珍しいね」

ナツ「ふふふ、ウエンデイの『トロイア』があれば乗り物など」

ウエンデイ「あたしたち魔法使えませんかよ」

ナツ「・・・レイこの案は却下だ」

シャルル・レイ「おい！」

ルーシイ「あたしは賛成よ！」

それに奪わなきゃ間に合わないじゃない」

ウエンデイ「でもどうやって？」

ルーシイ「あたし達の魔法で♡」

レイ「俺もか？」

ルーシイ「当たり前でしょ！」

まあ見てなさい！」

王国兵「何者だ！」

ルーシイ「開け！『獅子宮の扉』・・・ロキ！」

・・・ってあれーっ!？」

ルーシイはロキを呼び出したはずだがなぜか出てきたのはバルゴ・・・

バルゴ「申し訳ありません姫」

ナツ「バルゴだ」

王国兵「くらえ！」

漫才をかましている所に王国兵が迫る

まずいルーシイが!

「グサー！」

レイ「・・・は？」

俺の腹から槍の先端が突き出ている

ルーシイ「レイ!!？」

ナツ「な!？」

レイ「くっ・・・」

くそっ意識が・・・

「バタッ」

ルーシイ「レイちよつと起きなさいよ！」



ウエンデイ「レイさん!!」

王国兵「こいつを連れて行け！」

ナツ「おい！レイをどこに連れていきやがる！」

ハッピー「レイー！」

ナツ「くっそー！」

## 第25話 レアグローブ

あーここどこだ？

確か俺腹刺されてー

レイ「痛ッ！」

腹を見ると包帯が巻かれていた

??? 「目ー覚ましたか。ここは飛行船の中だ」

この声・・・まさか！

レイ「エドラスの・・・俺！」

そこには金髪の俺が居た

??? 「ああ、俺の名はレイ・レアグローブ」

レイ「レアグローブ・・・」

俺がグローリーだからこっちはじゃレアグローブなのか？

レイ「お前死んだんじゃないのか？」

エドレイ「あれはこっち側に着く為のちよつとしたジョークよ？」

俺はあいつらを裏切ったんだ」

そういう事か・・・

エドレイ「俺はマスターを殺し王国側に寝返った」

レイ「なんでそんな事・・・」

エドレイ「自分の有利な立場に立つのは当たり前だろ？」

こいつ俺のくせに腐ってやがる

レイ「仲間じゃ無かったのか？」

エドレイ「知るか、まあ女どもは上玉ばっかだったな

裏切る前に喰つとけばよかったぜ・・・特にリサーナ」

その言葉が出たとたん俺の頭からなにもかもが吹き飛んだ

レイ「お前が気やすくあいつの名前口にすんじゃねえ!!」

エドレイ「がっ!なんだあいつに気があんのか？」

レイ「『氷竜剣アブソリュートゼロ』『氷竜牙!!』」

氷の牙がエドレイに向かって飛んでいく

エドレイ「そんなもんか? 『ヴァルツアーフレイム!!』」

な!?

ダークブリング!?

レイ「ぐああああああ！」

くそ！『ヴァルツアーフレーム』は水につければ消えるんだったな

レイ「『魔装・水竜!!』」

「シユウウウウ・・・」

エドレイ「へこの魔法の弱点を知ってたか『漆黒弾』」  
ブラックゼニス

レイ「うお！」

たしか物質を消滅させるやつだな

もう面倒だ！

レイ「『モード氷幻竜!!』」

エドレイを氷の幻で閉じ込める

エドレイ「くそが！出しやがれ！」

レイ「そこで閉じこもってやがれ！」

お前との決着はまた今度だ！」

今は逃げるのが先決だ！

レイ「とお！」

俺は窓から飛び降りた

レイ「あれは！」

俺の眼下には巨大なラクリマが置いてある浮遊島についた

これはハッピー達が見つけるはずのとは別物だな

レイ「確かめるか『魔装・火竜』『火竜剣六ノ型

炎刃えんじん・五十連舞!!』」

「ズガガガガガガ！」

これで充分だと息を整えるレイ

するとラクリマが光り出した

レイ「誰だ？」

ウル「私達よ」

光の中からウルティアとジェラールが現れた

レイ「お前達か！」

ミストガン「レイ」

レイ「うわ！なんだよミストガンかよ」

ジェラール「俺!？」

レイ「エドラスのな」

ウル「じゃあ私もいるのかしら？」

レイ「いや見てねえ

俺はいたが敵だ」

ジエラール「レイが敵とは厄介だな」

ミストガン「2人にこれを渡しとく」

ミストガンはエクスポールを渡した

ウル「これは？」

レイ「エドラスで魔法を使えるようにする薬だ」

ジエラール「そういえば他のみんなは？」

ミストガン「エルザ、グレイは開放し残りのみんなはアースランドへ戻った」

レイ「俺が飛行船にいた間にずいぶん時間たってんな」

ミストガン「わたしはアニメを逆展開させる」

レイ「俺達は？」

ミストガン「ルーシー達の援護に向かってくれ」

レイ「わかった。いくぞ！」

「了解！」

## 第26話 2人のレイ

ルーシイ「きやあああああ！」

ルーシイの悲鳴！

近くか！！

レイ、ウルティア、ジェラールは急いで悲鳴のもとに向かう

レイ「待たせたな」

ルーシイ「レイ、ウル、ジェラール！」

ハッピー「無事だったんだ！」

レイ「ああ」

ウル「ちよつと敵の数多いんじゃない？」

ジェラール「手ごたえがあるじゃないか」

レイ「じゃーやるか！」

レイ達は数えきれない軍勢にたった3人で立ち向かう

ウル『フラッシュユフオワード!!』

ジエラール「七つの星に裁かれよ『七星剣グランシャリオ!!』」

レイ『滅竜奥義 ホーリーノヴァア!!!』

それぞれの魔法はとも強力で軍勢の6割は吹き飛ばしただろう

ルーシイ「すごい!」

レイ「はあ・・・結構残ってるな」

ウル「グレイ、まだやれるでしょ?」

グレイ「当たり前だ!」

ルーシイ「あたしだって!」

王国兵「やつらを潰せー!」

グレイ『ワールドエクスカリバー氷 聖 剣!!』

ウル『ローゼンクローネアイスメイク・薔薇の王冠!!』

グレイ・ウル『ユニゾンレイド合体魔法 ローゼンエクスカリバー氷薔薇の聖剣!!!』

グレイが薔薇を装飾した氷の剣を振るうと薔薇の花びらの様に氷が舞い散り敵を

襲っていく

レイ「へえ〜」

すると上空から甲高い笑い声が聞こえてきた

ルーシイ「だれ!?!」



エドレイ「遊ぼうぜ！レイ・グローリー！」

レイ「レアグロブ！」

グレイ「あれはエドラスのレイ!?!」

エドレイ「行け！レギオン達！」

「ぎやおおおお」

エドラスのレイが指示を出すとエドラス兵の軍勢の後ろからレギオンが現れレイ達を襲い始めた

グレイ「ぐああああ！」

ルーシイ「きやああああ！」

ウル「うううう！」

ジェラール「くっ!!!」

レイ「お前ら！」

くそ！まだ来ないのか！

「くそきり」

王国兵「なんだ木が生きものみたいに！」

「まさか・・・逃げてばかりの奴らが！」

『フェアリーテイル  
妖精の尻尾!!』

やつと来たか・・・遅えよ！

エドレイ「グロリーー！」

エドラスのレイはすぐさまレイに飛びかかった!!

レイ「くっ！レアグローブ！」

エドレイ「決着をつけようぜ！」

エドルーシイ「あれは！」

ルーシイ「エドラスのレイでしょ？」

エドルーシイ「死んだはずだろ!!」

エドレイ「ははは！久しぶりだな『妖精の尻尾!!』  
フェアリーテイル

エドルーシイ「くそっ！」

レイ「よせ、あいつは俺がやる」

エドレイ「くくく・・・かかってこい!!」

レイ「『モード氷天竜』『魔装・氷天竜!!』」

エドレイ「『ネオ・デカログス』『デスペラードボム!!』」

レイ「『滅竜奥義・極 氷天百華葬』  
ひょうてんひゃっかざう

あたりにすさまじい冷気と爆風が巻き起こる

エドレイ「『闇の爆発剣!!』」  
テネブラリス・エクスペロージョン

レイ「『魔装・白雷竜』『聖雷砲!!』」  
ホーリーホルトキャノン

ルーシイ「す、すごい……」

エドルーシイ「次元を超えてる……」

レイ「はあはあ……強すぎだろ……」

エドレイ「なかなかやる……だが……」

「ヒュンツー！」

「きやあー！」

レイ「な！リサーナ！」

リサーナ「レイー！」

エドレイ「これならどうする？」

エドラスのレイはリサーナの喉元にネオ・デカグロス突きつけ人質にとる

それを見たレイの体からすさまじい量の金色の魔力が溢れ出た

レイ「お前だけは許さねえ……レアグローブー！」

エドレイ「それでいい！もつと俺を楽しませろ!!」

レイ「はあああああ！『魔装・火竜』！」

エドレイ「『王樹の刃!!』」  
アルベロフレード

レイ「リサーナを放しやがれ！ 『火竜剣零ノ型 獄炎・烈火ノ太刀』」

木の剣を燃やしエドレイのリサーナを掴んでる方の腕が吹き飛ぶ

エドレイ「ぐあああああ！」

レイ「リサーナ！」

リサーナ「レイ！ あたしはもう大丈夫だから」

後ろに下がってハッピー達を守つてると岩陰に隠れさせる

エドレイ「俺の腕がああああ！ ・ ・ ・ なんちゃつて」

な!?

あいつの腕が戻っていく!?

エドレイ「『アナスタシス』」

はあ、再生のダークブリングか・ ・ ・

レイ「ダークブリング・ ・ ・ やっかいだな」

エドレイ「俺はこの力を手に入れた！」

俺以上の最強はありえない！」

レイ「お前は俺が止める！」

エドレイ「やってみやがれ！」

エドラスのレイは一気に距離を詰めレイの腕をつかんだ

レイには掴まれた瞬間になにをされるかが一瞬で頭をよぎった

エドレイ「『アルティメットベイン極限の痛み』!」

レイ「ぐあああああああああ!!!」

レイの体に今まで受けた傷が再生し傷付けていく

エドレイ「今までそうとう激しい戦いを繰り広げてきたみたいだな」

レイ「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

エドレイ「残念だったな、お前はここまでだ」

俺がここで終わり・・・そんなわけねえだろ!

レイの思いと呼応するかのようにレイの指輪が光り出した

レイ「なんだ?」

指輪から光が放たれリサーナの指輪に繋がり光が強くなる

レイ「暖かい・・・」

リサーナ「(レイ、私達はいつでも繋がってる)」

レイ「ああ、そうだったな・・・」

エドレイ「悪あがきを・・・次で終わらせてやる!」

レイ「『モード神竜』・・・」

レイの体に全ての属性の魔力が纏われ黄金に輝く

レイ「お前だけは絶対に許さない！」

エドレイ「死ねえー！ 『ダークエミリア!!』」

レイ『『神竜剣 レイヴェルト!!』』

光と闇がぶつかり2人を中心に全てが無になる

レイ「はあ・・・はあ」

エドレイ「はあ・・・はあ・・・くっ・・・」

「バタ・・・」

倒れたのはレイ・レアグロープだった

エドレイ「俺が・・・負けた？」

レイ「お前は自分の力を過信しすぎだ

この世で一番強い力は人と人の『絆』

エドレイ「なにふざけた事を言ってやがる・・・とどめをさせよ」

レイ「お前には死すらもつたない・・・永遠の闇に送ってやる」

エドレイ「ふはははははは！」

レイ「・・・なにかおかしい？」

エドレイ「闇だかなんだか知らねえが俺が全て飲み込んでやる！」

レイ「・・・『モード邪影竜』『エターナル・ダークネス』」

エドラスのレイの体を影が包みこんで地面に引きずり込んでいく

エドレイ「ははははは！また会おうぜ、レイ・グロリー！」

レイ「会うかバカ

そこで永遠に過ごしてろ」

エドレイ「はははははははははは！」

エドラスのレイがのみ込まれると同時にレイは糸がキレたように地面に倒れ込んだ

レイ「・・・終わった〜！」

リサーナ「レイー！」

リサーナが飛びついてきた

レイ「うわ！」

リサーナ「バカ！死んじやったと思ったじゃない！」

レイ「泣くか怒るかどっちかにしてくれ・・・」

リサーナ「うるさい・・・ううっ・・・」

レイ「まあ、お前のおかげで助かった・・・サンキューな」

リサーナ「さすが私でしょ？」

レイ「自分で言うな」

レイは呆れながら答える

レイ「まだ戦いは終わってねえよ」

リサーナ「どこへ行くの？」

レイ「ナツ達の所・・・まだドロマ・アニメと戦ってる」

リサーナ「・・・わかった・・・」

レイ「どうした？」

リサーナ「もう会えないかもって思ったの」

俺はリサーナの額にキスをした

リサーナ「え？／＼」

レイ「またすぐに会えるさ」

リサーナ「うん・・・」

レイ「じゃあ行ってくる」

リサーナ「いってらっしゃい！」



## 第27話 壮行会

ナツ達の所へ向かっている途中

??? 「あなたがレイ・グローリーね」

なんだこの銀色のエクシード？

リリーみたいに大きいな・・・胸も

レイ「お前は？」

??? 「私はアビー、レアグローブに捕まってたの

あなたが彼を倒したおかげで助かったわ」

レイ「そうか、よかったな

そんじゃ・・・」

ん？

こいつを俺の相棒にするってのもいいな・・・俺エクシードいないし・・・

レイ「おい、お前俺と一緒に来ないか？」

アビー「え？」

レイ「だってお前エクスタリアなくなっちゃたし行くところないだろ？」

アビー「いいわ・・・同じレイについてくのは変な気分ね」

レイ「安心しろ」

俺はあいつみたいなクズじゃねえよ」

アビー「ふふ、そうかもね」

素晴らしいアビーは俺を掴みナツ達の所へ目指した

レイ「ナツ！」

ナツ「レイ！こっちは終わったぞ！てかこれどうなってるんだ!？」

上空を見ると浮遊島の落下が始まっていた

レイ「この世界の魔力が失われているんだ！

その王様つれて城下へ行くぞ!!」

ナツ「どうするんだ？」

レイ「悪役になるんだ」

ウエンディ「レイさんその子どうしたんですか？」

ウエンディはアビーを見ながら言った

レイ「俺の相棒になった」

アビー「アビーよ、よろしくね」

ナツ「あとはガジルだけだな」

ガジル「ギヒツ、楽しみにしてろ」

——エドラス城——

王国兵「パンサーリリー様！大変です！」

リリー「アニマの事ならわかつている

見ての通り我々が……」

王国兵「止めようとなさっているのですね」

リリー「いや、そうじゃない」

王国兵「それより城下で暴れているもの達が……」

ミストガン「予想よりひどい混乱のようだな

早くなんとかしなければ……」

リリー達は街の様子を見に行った

——城下——

「ドオゴオン！」

リリー「暴徒の数は？」

王国兵「4人です！」

リリー「4人だど!？」

なぜ抑えられん？」

王国兵「そ、それがものすごく強くて・・・」

レイ「ふっふっふっふっふ」

リリー「!？」

レイ「俺の名は大魔王グローリー」

この世界の魔力は俺が頂いたあ!!」

我ながら似合ってるぜ・・・この衣装

リリー「な・・・」

ミストガン「レイ・・・」

レイ「お前らの王は俺が仕留めた、命だけは助けてやった・・・感謝しろ！」

ナツ「いや、倒したの俺達だけど!!？」

「陛下!？」

「いやー!？」

レイ「ドラグニル! レッドフォックス! マーベル! 街を破壊しろ!」

ナツ「おらあ！」

ガジル「ギヒヒ！」

「ドガガガガン!!!」

ミストガン「何をしている！よさないか！」

リリー「(あいつらまさか・・・)」

「あいつらがエドラスの魔力を！」

「魔力をかえせ！」

レイ「やーよ、俺に逆らうやつらは・・・失せろ!!!」

素晴らしい俺は右腕に雷を集める

「バチバチバチバチ！」

ミストガン「よせー！レイー！」

「今の誰だ？」

「城にいるぞ？」

レイ「俺は大魔王グロリーだ」

ミストガン「バカなマネはよせ・・・」

王は倒れた・・・これ以上王都に攻撃など・・・」

レイ「おらあ！」

「バリバリバリ！」

俺は街に雷を放った

もちろん人のいないところにな

ミストガン「よせえ!!」

レイ「止めてみるよ・・・エドラスの王子さん？」

「王子だつて？」

「7年前に行方不明になったジエラル王子!」

レイ「来いよ、来ねえとこの街塵にするぞ？」

ミストガン「レイ!そこを動くな！」

レイ「レイではない、大魔王グローリーだ」

早く来てくれ・・・このキャラ正直しんどい・・・

ミストガン「バカ者め、お前のやろうとしている事はわかつてる

だがこの状況を收拾できる訳がない!!!」

レイ「うるせえよ!やってもねえのにうだうだ言ってるんじやねえ!!」

ミストガン「ぐつ!お前になにがわかる！」

原作とは違う展開だな

レイ「そんなもん知るか!俺がやるのは俺流の『妖精の尻尾』フェアリーテイル式壮行会だ!」

ミストガン「!!」

レイ「どちらあ! 『妖精の尻尾』フェアリーテイルを抜ける者には3つの掟を伝えなければならない!

ミストガン「ぐう!!」

レイ「1つ!! 『妖精の尻尾』フェアリーテイルの不利益になる情報は生涯他言してはならない!

ミストガン「はあ!」

レイ「痛つ! 2つ! 過去の依頼者に濫りに接触し個人的な利益を生んではならない!」

ミストガン「ふ!」

レイ「お前人が話してんのにちよつとは加減しろよ!」

ミストガン「街を壊したお礼だ!」

こいつ根にもつてやがる・・・

レイ「たくつ・・・3つ、たとえ道は違えど強く力の限り生きなければならない!!」

決して自らの命を小さなものとして見てはならない・・・愛した友の事を・・・

ミストガン「生涯忘れてはならない!」

レイ「おらあ!」

ミストガン「はああ!」

「ドーン！」

レイ「ぐっ……」

ミストガン「……」

レイ「お前とガチで殴りあうのは最初で最後だ

『妖精の尻尾』<sup>フェアリーテイル</sup>のギルドマークを背負ってる以上できないことなんかねーよ」

「オオオオオオオオ！」

ミストガン「レイ……」

「王子が勝ったー！」

「やったー！」

「キイイイイイイン」

ミストガン「お前体が……」

ウエンディ「始まった」

ガジル「さあて、派手に苦しんでやるか」

レイ「お前は『妖精の尻尾』<sup>フェアリーテイル</sup>で過ごしたんだ諦めることは俺が許さねえからな」

ミストガン「ああ！」

アニメに吸い込まれながらフワフワ浮いているとルーシィやエルザ達も浮かんできていた



ルーシイ「レイ、ナツ！」

グレイ「無事だったか、お前ら！」

レイ「お前ら俺が死んだと思ったのか？」

グレイ「いやまああんなのが相手だったからな・・・」

レイ「・・・グレイ、お前あとで俺が修行つけてやる・・・ありがたく思え」

グレイ「うっ・・・!!」

「うおお！魔王が空に吸い込まれて行くー」

「王子万歳ー！」

ミストガン「さようなら、リリー・・・」

レイ、ナツ、ガジル、ウエンデイ、そして我が家族・・・『妖精の尻尾』・・・」

そして俺達は帰って行った。

俺達の家『フェアリーテイル妖精の尻尾』へ

ミストガン「魔王グロリーはこの私が倒したぞ！

魔力などなくとも我々は生きていける!!」

「ウオオオオオオオオ!!」

その後もこの歓喜の叫びは鳴りやまなかつた

エドラスがどうなったかなんて誰にもわかんないがどーせミストガンのことだ、しっ  
かりやっているだろう

## 第28話 HOME

・・・ここどこだ？

俺アースランドに帰ったはずだよな？

俺はいつのまにか白い空間にいた

??? 「レイ・グローリーよ」

レイ「!!」

??? 「そう身構えるな・・・この体ではなにもできん」

後ろを見ると某錬金術師の真理的なのがいた

レイ「何者だ？」

??? 「名は無い」

なんだよこいつ・・・

レイ「で、何の用だよ」

??? 「お前とはいずれ出会う事になる・・・敵として」

レイ「あっそ、そのときはひねり潰してやるから安心しろ」

???「お前の強さはよくわかっておる・・・我々の目的はお前を闇に染める事」

レイ「はっ？俺が闇に染まるわけないだろ」

???「心は砕ければ闇にも染まる」

レイ「そんなやわなハートじゃねえよ」

???「光と闇の衝突が生むものはなにか・・・楽しみだ・・・」

素晴らしいやつは消えた

何だったんだよあれ？

そんな事を考えていると俺の体が光り出した

ーアーアースランドー

レイ「おわあああああ!!」

ハッピー「レイが戻ってきた！」

俺はエクシード達が飛んでいる横を落下していった

「ドゥースーン！」

痛ってー！

レイ「くそ、まじ痛い！」

ルーシイ「なんで遅かったの？」

レイ「知るか！てかエクシード達行っちゃまったのか？」

ハッピー「あい！みんな行っちゃったよ」

おいおいアビーがいねえぞ！

レイ「アビー見なかったか!？」

ナツ「いなかったよな？」

グレイ「ああ」

ガジル「リリーの姿もねえぞ！」

アビー「私たちならここにいるわ」

そっくりアビーとリリーが茂みから現れた

「「・・・ちっちゃ!!」」

ハッピー「ずいぶんかわいくなったね」

リリー「どうやらアースランドと俺達の体はあわなかったらしいな」

シャルル「あんた達・・・体なんともないの？」

アビー「ええ、不思議と大丈夫よ」

リリー「俺は王子が世話になったギルドに入れてえ

約束通り返入れてくれるんだろうな？」

アビー「私もレイの相棒だからね」

ガジルが俺とエルザにアイコンタクトを取る  
もちろんオツケーだ

ガジル「もちろんだぜ！相棒！」

ガジルは泣きながらリリーを抱きしめた

うわー・・・ギャップ・・・こいつでも泣くんだな・・・

リリー「で・・・それとは別に怪しい奴を捕まえたんだ」

ガジル「!!？」

リサーナ「ちよ・・・私・・・怪しくなんか・・・きやつ！」

その場にいる俺以外の全員が驚愕の顔をした

リサーナ「私も『妖精<sup>フェアリー</sup>の尻尾』の一員なんだけど・・・」

ナツ「リサーナ・・・」

リサーナ「なんなのこの猫？エクシード？」

リリー「パンサーリリーだ」

ガジル「なんだてめえ？」

俺のネコのケチつけようってか？」

グレイ「そんな・・・まさか・・・」

エルザ「リサーナ!？」

ハッピー「なんで？」

シャルル「もしかしてエドラスのリサーナが」

ルーシイ「こつちに来ちやつた訳!？」

ウエンデイ「ど、どうしよう・・・」

リサーナ「!」

俺はリサーナと目があった

リサーナ「レイー!」

レイ「ぐはあ!」

待て待て待て待て!

締まってる、首締まってる!!

リサーナ「また会えた!レイ!」

無言の訴えを続け俺はやつとリサーナから解放された

リサーナ「ハッピー!」

私よ!リサーナよ!

おい・・・ハッピーが死にそうだぞ?

リサーナ「ナツとエルザ、グレイも久しぶりだねえ!!」

うわあ懐かしいなあ……その子達も新しいギルドのメンバーかしら？

もしかしてルーシィ……と小さいウエンディ？」

グレイ「ちよつと待て……お前……まさか……こっちのリサーナ!?」

リサーナ「うん……」

ルーシィ「うそお！」

ウエンディ「ええー!?」

ナツ「生き返ったのかー!?」

ハッピー「うわーい!!!」

エルザ「ま、待て！」

お前は2年前死んだはずだ」

こいつららどんだけテンション上がってんだよ

リサーナ「私、死んでなんかいなかったの

2年前……ミラ姉たちと仕事に行った時……アニマに吸い込まれたんだ

と思う」

レイ「当時アースランドには小さなアニマが無数に存在していた……

ミストガンが塞いでたんだが運悪くその1つに吸い込まれたんだろ」

リサーナ「うん……あっちにも『妖精の尻尾』フェアリーテイルがあつてね、驚いたの



・・・私のしっているみんながそのいたから・・・」

レイ「エドラスのリサーナはすでに死んでたんだ・・・エドラスの俺に殺されてな」  
ナツ「!?」

リサーナ「最初は戸惑ったけどみんなに合わせてエドラスの生活にも慣れてきた

そして2年が過ぎ6日前レイ達が出てきた」

ナツ「あのときか・・・」

リサーナ「レイにはすぐバレちゃったけどね」

ナツ「!! なんて言わなかったんだよ!」

ナツはレイの胸ぐらに掴みかかる

レイ「言ったらどうしてた?」

ナツ「連れて帰るに決まってるだろ!!」

レイ「リサーナの気持ちを無視してもか?」

ナツ「そ、それは・・・」

リサーナ「そして私はもう1度アニメに吸い込まれアースランドに戻ってきた・・・」

エルザ達はまだ信じられないという顔をしている

レイ「話すことはこんなもんか・・・」

よし！カルディア大聖堂に行くか！

ルーシィ「なにをしに？」

レイ「家族の再会をね」

——カルディア大聖堂——

エルフマン「姉ちゃん、そろそろ行こう」

ミラ「もう少し……」

2人のはりサーナの墓の前にいた

「パシャツパシャツパシャツ」

りサーナ「ミラ姉えー！ミラ姉ええー！エルフ兄ちやーん！」

「……!!!」

ミラ「あ……ああ……」

自分達に走り寄ってくる人物に驚きを隠せない

りサーナ「はあ……はあ」

ミラの手から持っていた傘が滑り落ちる

ミラ「うそ……りサーナ……」

涙を流しながら駆け寄るりサーナの姿にミラとエルフマンも涙を流す

「パシャッ！」

リサーナ「ただいま」

ミラは笑顔で返した

ミラ「・・・おかえりなさい」

レイ「いいなく家族って」

ハッピー「あい！そういえばレイがあの時リサーナに渡してたあの指輪だったんだ

！」

「!!!」

ルーシィとエルザがすごいいきおいで俺とリサーナの手をみた

レイ「な、なんだよ？」

はあ、とため息をつきながらも俺達は笑っていた

雨に音にも負けず笑い声は高らかに鳴り響いた

## 天狼島編

### 第29話 修行

リサーナ帰還から数日後俺はナツとハッピー、リサーナ、アビーを連れて船に乗り修行に向かっていた

ハッピー「レイどこで修行するの？」

このままじゃナツが死んじゃうよ」

ナツ「うぷっ・・・レイ・・・まだ着かねえのか・・・？」

レイ「もう少しだ我慢しろ」

リサーナ「乗り物酔いも相変わらずね」

アビー「ナツ、なんでこんなに酔ってるの？」

ハッピー「ナツは極端に乗り物に弱いんだ

それよりアビー魚食べる？」

ハッピー・・・アビーにも手出そうとしてないか？

俺達はハルジオン港から船を出していた

リサーナ「でもホントどこに向かっているの？」

愛するリサーナの為だ答えてやるか

レイ「無人島だ」

リサーナ「・・・へ？」

レイ「1週間自給自足でキャンプをする」

「ええええええ!!!」

「・・・名もなき無人島・・・」

ハッピー「着いたよナツ」

ナツ「おぶ・・・」

リサーナ「わー！海が綺麗！」

アビー「ほんと！

ちよつとしたリゾートね」

レイ「よしこら辺でいいな・・・」

そうい俺は滅竜魔法を使って立派な家を建てた

「ゴオオオオオオ」

ナツ「・・・マジか？」

リサーナ「えー・・・」

レイ「なにか不満か？」

ナツ・ハッピー「結構なお手前で・・・」

レイ「よしナツまずは久しぶりに手合わせするか」

ナツ「よっしゃー！」

ハッピー「がんばれナツー！」

リサーナ「レイーがんばれー！」

アビー「レイってどんくらい強いのか？」

リサーナ「かなり強いよ」

俺は砂浜でナツと向かい合った

レイ「よし、受けてやるからマジでかかってこい」

ナツ「あとで吠え面かくなよ！『火竜の咆哮!!!』」

おいおい、いきなりブレスかよ

レイ「誰にももの言ってるんだ？」

俺は軽々と避ける

ナツ「この！『紅蓮火竜拳!!!』」

すべてを技とギリギリで避ける

レイ「よーよーw」

ナツ「なんで避けんだよ！」

レイ「お前の攻撃は単調すぎんだよ『業火双炎波!!!』」

ナツに向かって炎の波を放つ

ナツ「な!？」

動きが読めねえ!!

ぐああああ!!」

レイ「まだまだ終わらないぞ『水竜の咆哮』」

ナツ「うあああああ!」

ナツが海に吹き飛ばされた

リサーナ「・・・容赦ないわね」

アビー「・・・鬼があそこにいるわ」

ハッピー「あい・・・」

ナツ「まだまだー!」

なかなか耐えるな

そうじゃなきゃ修行の意味がないが・・・海か・・・

レイ「よーし今日は初日だしこころへんで切り上げるかー」

ナツ「俺はまだやれるぞレイ！」

こいつもタフだねー

レイ「じゃあ今日の晩飯の魚を多く取った方の勝ちだ」

ハッピー「魚ー！」

レイ「おつ、ハッピーもやるか？」

ハッピー「あいさー！」

アビー「私達はここで待ってるわ」

レイ「よし、じゃあスタート！」

今ここに晩飯魚強奪戦の火蓋が切って落とされた！

海に潜ると魚がうようよいた

まずは小さいのからいくか

レイ「『アイスバレット氷 弾!!!』」

俺は魚に向かって次々と氷の弾を当て氷漬けにしていた

鮮度は大事だからな

ハッピー「魚魚魚魚ー！」



あいつ魚の事になると闘争心ハンパないな

「ぬーーん」

そんなことを思っていると俺の背後に巨大な魚影が現れた

レイ「・・・でかくねーか？」

振り返ると超巨大マグロがいた

サイズ的には子クジラレベルだ

レイ「こいつがあれば晩飯十分だな」

しっかし『氷弾』アイスバレットじゃ無理だよなー

レイ「しょうがない『氷竜晶!!!』」ひょうりゅうしょう

『氷竜晶』でマグロを生きたまま氷の水晶の中に閉じ込めた

これで充分だろ

「パンパンパン」

お、終了の花火だな

俺は岸へと上がった

リサーナ「それでは結果発表ー！」

ハッピー「おいらが1番だね」

リサーナ「第3位！ナツの25匹！」

ナツ「俺最下位かよ」

リサーナ「第2位！ハッピーの41匹！」

ハッピー「おいら結構がんばったんだけどな・・・」

レイ「そんなことないぞ十分がんばったじゃねえか」

ハッピー「あい！」

リサーナ「では第1位！レイの57匹！」

レイ「までリサーナ、まだ1匹いる」

リサーナ「え？どこに？」

俺はそう言い海に戻り水晶を持ってきた

「でかー！ー！」

レイ「これだけでかけりや充分だろ？」

アビー「大きすぎじゃない？」

ハッピー「あい！いっぱい食べれるよ！」

レイ「じゃあ今日は俺が作るよ」

リサーナ「やったーレイの料理だ！」

ハッピー「レイの料理美味しいもんね！」

俺達はキャンプ地に戻った

リサーナ「そういえばこんなところに家建てちゃっていいの?」

レイ「聖十の称号でどうにかなるんじゃないかね?」

リサーナ「レイ『聖十大魔導』になったの!」

レイ「ああ、つい最近な

おかげで金には困らない」

アビー「『聖十大魔導』って?」

リサーナ「大陸でもっともすぐれた魔導士のことよ」

レイ「よし、始めるか」

俺は素晴らしい雷竜剣ライトニングを出した

ハッピー「剣でさばくの?」

レイ「でかいし電気で切れ味ますからな」

俺は素晴らしいまず赤身を切りだし半分を刺身にもう半分をマグロステーキにした

ハッピー「おいしー!」

リサーナ「ほんと!」

ナツ「こっちのステーキもうめーぞ！」

レイ「それだけで腹いっぱいにするなよ」

俺はその後も中トロ、大トロ、などを切り出し刺身や寿司などにしてふるまった

ナツ「ふー腹いっぱいだ」

アビー「ほんとにおいしかったわね」

リサーナ「私こんなおいしい魚初めて！」

ハッピー「これなら毎日食べられるよ！」

レイ「そうか、口に合ってたよかった」

こうして初日の夜はふけていく

## 第30話 みんなで夜はやること1つだろ！

「……2日目……」

レイ「よーしお前から起きろー！」

ナツ「まだバリバリ朝じゃねえか……」

リサーナ「まだ早いよー」

レイ「あ？」

「すみません……」

レイ「朝飯できてんだから早く喰え」

「はーい」

俺はお母さんか！

俺は飯を喰いながらナツに今日の修行について話した

レイ「ナツ、とりあえず今日は俺ともう一回組み手をしろ」

ナツ「は？また？」

レイ「ああ、ただし頭を使っただ

相手がどんな技で来ても臨機応変に戦えるようにな」

ハッピー「ナツにそんなことできるの?」

ナツ「うるせーっての!」

――海岸――

ハッピーは海に潜って魚をリサーナ達はガールズトークで盛り上がっている

レイ「ナツ今日は俺の攻撃を魔法で相殺してみろ」

ナツ「わかった!」

レイ「よーし『氷<sup>アイスバレット</sup>弾!!』」

この攻撃なら遠距離系の魔法じゃないとな

ナツ「『火竜<sup>かりゆう</sup>の翼撃<sup>よくげき</sup>!!』」

「ボシユボシユボシユ」

レイ「正解だ……だがこれならどうする? 『雷竜<sup>らいりゅう</sup>方天戟<sup>ほうてんげき</sup>!!』」

ナツ「えーと……『火竜<sup>かりゆう</sup>の炎肘<sup>えんちゆう</sup>!!』」

ひじから炎をだしてトップスピードの拳で止めたか……けっこー危なっかしい止め方だけど

レイ「次はお前の弱点だ『水竜すいりゆうの咆哮ほうこう!!』」

ナツ「『火竜かりゆうの咆哮ほうこう!!』」

「シューウウウウ」

ナツ「くうううう!」

レイ「バカ! 水で炎が消えるのは当たり前だろ! 今のは避けるよ!!」

その時俺の耳がある言葉をとらえた

アビー「そういうやりサーナはレイのどこが事好きなの?」

リサーナ「え? /」

レイ「『滅竜奥義 ホーリーノヴァ!!』」

ナツ「んな!? 『滅竜奥義 紅蓮爆炎刃!!』」  
ぐれんばくえんじん

話が気になる!

そっこうで終わらす!

「どかああああん!」

ナツ「まだまだ余裕だぜ!」

しぶたいなく・・・しようがない

レイ「ナツ・・・本気で避けるよ?」

ナツ「・・・へ?」

レイ『『モード氷幻竜』『滅竜奥義・改 氷幻零魔槍!!』』

ナツ「ちよ、ちよつと待てえええ!」

「ドカアアアアン!」

ナツ「やりすぎだろ・・・」

ハッピー「ナツー魚キレーだよ、つてナツ!」

リサーナ「ちよつとは手抜いてあげなよ」

レイ「それよりお前なんの話してたんだ?」

リサーナ「それわく／＼」

アビー「男がガールズトークに混ざつちやだめよ」

レイ「へいへい・・・ナツ昼飯探しに行くぞ」

ナツ「ちよつと休ませてくれ・・・」

レイ「しょうがねえな・・・ハッピー強くなりたいか?」

ハッピー「あい!」

レイ「よし、アビーと組み手をしてみる」

ハッピー「えー!」

アビー「私なら構わないわよ

レイあれ貸してちようだい」



レイ「オツケー」

素晴らしい俺は矢がない弓をアビーに渡した

これは俺が作った魔力を矢にする魔法武器だ

リサーナ「アビーって戦えるの？」

レイ「見くびらない方がいいぜ」

アビー「それじゃいくわよ」

ハッピー「あいさー！」

「シユン・・・ドゴオオン」

アビーが放った矢はハッピーの横を通り10メートル弱に水しぶきをあげた

ハッピー「・・・」

リサーナ「・・・」

レイ「俺の折り紙つきだ」

アビー「まだまだいくわよ」

ハッピー「やだー！」

アビーによるハッピー改造計画が始まった

ーレー宅別荘ー

レイ「ん〜今日もつかれたな〜」

リサーナ「私は修行しなくていいの?」

レイ「お前には新しい動物を『接収』テイクオーバーして欲しいんだ」

リサーナ「わかった!」

レイ「けど今日は遅いから明日な」

リサーナ「わかった・・・」

「ガラガラガラ!」

ナツ「まくら殴りするぞー!」

ハッピー「するぞー!」

ナツとハッピーが枕を持って寝室に乗り込んできた

レイ「まくら投げだよ?」

リサーナ「いいね〜やろやろ!」

アビー「チーム戦でやりましょ!」

リサーナ「さんせーい」

レイ、私、アビーね」

ナツ「よっしゃー!いくぞハッピー!」

ハッピー「あいさー!」

レイ「お前らなんか瞬殺だ！」

ナツ「まずはレイからだー！」

「バシィー！」

レイ「甘いな、おらあ！」

ナツ「がふっ！まだまだだー！」

リサーナ「えい！」

ハッピー「むぎゆう！」

あ、リサーナの投げた枕がハッピーの顔にめり込んだ

アビー「やあー！」

ハッピー「むーー！」

さらにアビーが追い打ちをかけたー！

レイ「おらおらおら！『まくら百連技』！」

俺の腕から次々と枕が飛んでいく。

途中で氷枕を混ぜといたw

ナツ「いててててて冷た！」

リサーナ「これでとどめよー！」

リサーナの剛速球がナツの顔面をとらえたー！

ナツ「ぐはあ!」

アビー「やったあ! 私達の勝ちよ」

リサーナ「イエーイ!」

レイ「さて眠いしそろそろ寝るか」

「はーい」

レイ「ナツとハッピー運んでくる、先寝とけよ」

リサーナ「おやすみー♡」

レイ「おやすみ」

2日目終了

## 第31話 接收

レイ「んゝ暇だなく」

自分で提案した割にはやることないな・・・

今ナツは海の中で『火竜かりゆうの咆哮ほうこう』の威力上げてるしなく

リサーナ「レイゝいい動物みつからないよ」

レイ「あくじやあ一緒に探すか」

リサーナ「いいの!？」

レイ「暇だからな」

俺達は島の森に入って行った

レイ「いいのいっぱいいんじやねえか」

森に入るとトカゲやらなんやらうじゃうじやいた

リサーナ「爬虫類なんていやよ！」

まあ、女の子だもんな・・・

「ガルルルル」

レイ「お?」

リサーナ「なにあれ!？」

奥に進むと白いトラが岩の上にたたずんでいた

レイ「かつけー!」

リサーナ「それに綺麗!あれにする!」

ホワイトタイガーが悪くないんじやね?

レイ「でもお前ネコとかぶるんじやね?」

リサーナ「あ・・・なんとかなるわよ」

そっくりリサーナはホワイトタイガーに近づいた

「ガルルルル」

リサーナ「大丈夫よ、傷つけないから」

ホワイトタイガーは警戒していたが次第にリサーナになついていった

レイ「へくそうやって『テイクオーバー接收』するんだ?」

リサーナ「まずは仲良くならないとね」

レイ「じゃあ先に戻るよ」

1人の方が集中できるだろ?」

リサーナ「うん、ありがとね」  
さて、どうしようかな・・・

「しようがない今日の夜実行するか・・・」  
レイ「肉でも取って帰るか」

「いただきます」

「ただいま絶賛晩飯中」

テーブルにはステーキやら刺身が並んでいた

ナツ「肉もあんじゃねえか！」

ハッピー「魚もいつもより多いよ！」

レイ「さあじゃんじゃん喰え」

リサーナ「レイなんで今日はこんな豪華なの？」

レイ「あとでわかるさ」

俺はウインクして答えた

「——港——」

「ドルルルル」

俺は出航の準備をしていた

リサーナ「んゝナツとハッピー置いていっていいの？」

レイ「あいつらの修行の為だ

家あるし大丈夫だろ」

アビー「サバイバルでもしたらたくましくなるでしょ」

リサーナ「そうかなゝゝゝゝ」

「――次の日――」

ナツ「レイー腹減ったーゝゝゝゝってあれ？」

ハッピー「ナツー！みんないないよ！」

ナツ「なんだとー！」

ハッピー「テーブルの上に手紙あったよ！」

「あと4日お前らにはサバイバルをしてもらう

家はあるしなんとかなるだろ

4日後に迎えに来る、お前らの為だゝゝ許せ byレイ」

ナツ「あのやろー！」



ハッピー「やるしかないよナツ・・・勝手に戻ってきたらレイが・・・」  
2人の頭には鬼と化したレイが浮かんだ

ナツ「くそ！レイを見返してやるぞハッピー！」

ハッピー「あいさー！」

こうして2人のサバイバル生活が始まったのであった

## 第32話 VS. グレイ

レイ「ただいまー！」

マカロフ「レイ！まだ3日しか経ってないぞ!？」

レイ「ああ、ナツとハッピーだけ鍛えるために置いてきた」  
マカロフ「まあ、お前がやるんなら口出しはせんが・・・」

グレイ「お！レイ帰ってきたか！」

すでに服脱いでるよこいつ・・・

レイ「ん？どうした半裸男」

グレイ「誰が半裸男だ！」

お前だよバカ

レイ「で、なんだよ？」

グレイ「俺と戦え！」

・・・は？

レイ「なんで？」

グレイ「ナツだけに修行つけやがってずりーぞ  
子供か！」

レイ「しよーがねえなー・・・ビーチに出るよ」

グレイ「よっしや！」

ーーギルド裏海岸ーー

レイ「さあかかってこいよ」

グレイ「『アイスメイク・戦バトルアックス斧!!』」

いきなり近距離か・・・

レイは氷竜剣を生成しグレイの斧を防ぐ

「キーン！」

グレイ「氷に対して氷かよ！『アイスメイク・大鎌デスサイクス!!』」

レイ「そんな攻撃きかねーよ！『氷竜牙ひょうりゅうが!!』」

グレイ「ぐあああ！」

こいつもまだまだな

レイ「終わりにするか？」

グレイ「まだだ！『スーパーフリーズアロー！！！！』」  
「バリーン！」

レイはグレイの渾身の一撃を一振りで粉々に砕き剣先をグレイに向ける  
グレイ「な!!」

レイ「お前こんなもんだったか？」

グレイ「ああ？」

「これで決める！『氷刃ひょうじん・七連舞ななれんぶ!!』」

レイ「『氷刃ひょうじん・五十連舞ごじゅうれんぶ!!』」

「ガキンガキンガキンガキン！」

グレイ「がああああああ！」

レイ「俺の勝ちだ」

グレイ「はあはあ、くそ！」

レイ「お前の氷さ・・・なんつーか核が柔い感じがするのよね

この際ウルに教えてもらったらどうだ？」

グレイ「あいつに・・・」

レイ「俺から頼んどいてやる」

グレイ「すまねえ」

ん？

ちよつといいこと思いついたぞw

レイ「おい 그레이、4日後ナツが修行から戻ったらあいつと戦え」

그레이「は？なんで？」

レイ「修行してどつちが強いかみてやる」

그레이「あいつには負けねーよ」

レイ「まあ、がんばれや」

ーギルドー

ギルドに戻るとさっそくりサーナが駆け寄ってきた

リサーナ「もう終わったの？」

レイ「ああ・・・ウルはどこにいる？」

リサーナ「バーで飲んでるよ」

バーを見るとウルがミラと飲みながら話していた

レイ「ウル、ちよつと頼みがあるんだけど」

ウル「なに？」

レイ「 그레이に修行をつけてやってくれ」

ウル「いいけどタダで？」

にやりとしてウルティアは言った

レイ「いやーウルティアさん？」

俺好きな人がいるんですけど・・・」

ウル「あらあたしは2番目でもいいわよ」

ミラ「ウルー？」

私が2番目よ？」

お前まで入ってくんなよ

レイ「ああー・・・はあ、考えとく・・・」

ウル「交渉成立ね

明日から始めるとグレイに言っておいて」

レイ「わかった・・・」

はあ・・・リサーナにばれたらやつかいだな

そう思いながらリサーナを見ると聞こえてたらしく笑顔で黒いオーラを出していた

レイ「終わった・・・」

そう思いながらあとでなんか買ってやるかと考えていたレイだった

## 第33話 ナツVS. グレイ

——無人島——

あれから4日がたった

「ドルルルルル」

レイ「ナツー迎えに来たぞ！」

ナツ「レイ！お前勝手に置いていきやがって！」

速攻で掴みかかってきやがったなこの野郎

レイ「ちゃんと修行したか？」

ナツ「当たり前だろ！」

レイ「じゃあ帰ったら早速グレイと戦ってもらおう」

ナツ「なんで？」

レイ「あいつも修行したからな」

ナツ「俺がグレイに負けるはずねえよ」

とりあえず戻るかー

ー マグノリアー

ナツ 「ただいまー！ グレイ！ 勝負しろ！」

グレイ 「おせーよバカ！」

ナツ 「ああ？ やんのかコラ！」

グレイ 「今からやんだよバーカ！」

レイ 「お前から外でやれー！」

「はい！」

ー ー 海岸ー

レイ 「先に倒れたほうの勝ちなー。 始め！」

ナツ 「修行の成果見せてやる！ 『火竜かりゆうの翼撃よくげき!!!』」

ナツは右と左を時間差で撃つたな

あれで範囲を広げるつもりか

グレイ 「『アイスメイク・盾シールド!!!』」



「ガン！ガン！ガン！」

あいつの氷も一層固くなつたな

ウル「私の修行の成果はどう？」

いちいち自慢してきやがったなこいつ

レイ「なかなかやるな

さすがウルの娘だ」

ウル「でしょ？」

ウルは笑顔で言った

ウルの事も怒らなくなつたな

グレイ「そんなもんかよ？」

ナツ『「ああ!? 『火竜の炎肘＋鉄拳』！」

炎肘でスピードアップした鉄拳か

普通の鉄拳よりは威力は上がるな

もー、なかなか頭使うね」

グレイ『「アイスメイク・城壁<sup>ランバート</sup>」

「ガゴオオオン！」

ナツ「痛つてー！」

おう、あれはさすがに痛いな・・・

レイ「グレイ！」

守ってばっかじゃ倒せないぞ〜」

グレイ「わかってる！」

『アイスキャノン  
氷雪砲!!』

ナツ『火竜の煌炎』

さつきからお互いの魔法ぶつけてばっかだな

レイ「お前から次で最後の攻撃にしろ

キリがね——しお互いの最強の魔法を使い」

ナツ「だってよ・・・『滅竜奥義・・・』」

グレイ「お前には負けねーよ『アイスメイク・・・』」

グレイのやつもしかして・・・

ナツ『不知火型しらぬいがた紅蓮鳳凰劍!!』

グレイ『限界突破!! 一勢乱舞!!』

へ〜『第二魔法源』解放してないのにできるのか

修行の賜物だな

ナツ「うおおおおお!!」

グレイ「はああああああ!!」

「ズドオオオオオオン!!」

すさまじい程の土煙がたった

その中から姿を現したのは・・・

「バタツ！」

2人とも息を切らし倒れていた

レイ「引き分けか・・・けどいい感じに修行できたらしいな」

ナツ「はあはあ、次は勝つ」

グレイ「言ってる・・・」

もつと修行すればおもしろいかもな・・・

## 第34話 S級魔導士昇格試験

ナツ「仕事仕事オーっ!!」

ハッピー「あいさーっ!」

ルーシイ「ちよっと!」

仕事ならあたしもー!」

ナツ「悪いルーシイ!」

この時期は一人で行くんだー!」

ハッピー「帰って来たら遊んであげるねー!」

そのまま前を見ずに走ったナツはグレイと衝突した  
まあ予想通り喧嘩するわな

レイ「お前ら喧嘩してる暇あんのかよ?」

「は!? そうだった!」

エルフマン「姉ちゃん!俺はこの仕事に行つて来る!」

ミラ「はい、いってらっしゃい」

アルザツク「僕はこの仕事にー！」

ビスカ「私はこの仕事ねー！」

ジエツト「おい、てめエ！それは俺が先にっ」

ドロイ「知るかよ！ 取ったモン勝ちだ！」

「チーム、シャドウギアはこの時期解散だー！」

みんながんばるね、もう試験者決まってんのに

そーいやあいつ止めとくか

そーいい俺はある男に近づいた

レイ「おい、メスト・・・いやドランバルト」

ドランバルト「な!? 魔法が効いてないのか？」

レイ「俺を誰だと思ってんだバーカ」

ドランバルト「くそ！」

レイ「そんなことしても『妖精の尻尾』フェアリーテイルは悪い事してねーよ」

ドランバルト「器物損壊やらなんやらあるだろ」

レイ「・・・それより頼みごとがあるんだが」

ドランバルト「はあ・・・なんだ？」

レイ「なにか合った時の為に天浪島の近くに艦隊置いといてくれ」  
ドランバルト「なぜだ？」

レイ「なんか悪い予感がするんだよね」  
ドランバルト「・・・わかった」

もうここにおいても意味ないからな」

そーいいドランバルトは消えた

これで原作ブレイクはたぶん大丈夫だな

さて俺もじいさんのところ行くか

「ガキン！キイン！」

レイ「うお！なんだよお前ら」

エルザ「ふう、ちよつとりりーとアビーに手合わせをな」

「ポーン！」

りりー「この姿でいられる時間は短いな」

アビー「ええ、もって10分つてところね」

エルザ「だが2人ともたいしたものだ」

りりー「いや、さすがはエルザと言ったところだ」

レイ「アビーはどうだった？」

エルザ「アビーは多彩な武器を自由に使えるところはすばらしい」  
アビー「どうも」

レイ「俺が教えてるおかげだな」

アビー「自慢しないの」

レイ「あーい」

アビー「・・・」

レイ「はいすみません」

そんなくだらない話をしてるとルーシイが寄ってきた

ルーシイ「レイー、なんでみんな急に働いたりいつも通りの人がいるの？」

レイ「んゝ明日になればわかるよ」

ー次の日ー

「がやがやがやがや」

ギルドのほぼ全員がそろってるなー

俺は幕の内側から見ていた

マカロフ「こらレイ、じつとしとらんか」

レイ「だって今年のS級試験おもしろそうじゃん」

するとステージの幕が上がった

ステージにはマスター、その後ろに俺、エルザ、ミラ、ギルダーツがたたずんでいる

マカロフ 『妖精の尻尾』古くからのしきたりにより……

これより、S級魔導士昇格試験出場者を発表する！」

「「おおおー!!」」

ルーシィ 「S級魔導士昇格試験!」

ギルダーツ 「静かにしろ、マスターの話の途中だろ！」

マカロフ 「今年の試験会場は天狼島！我がギルドの聖地じゃ！」

各々の力、心、魂！わしはこの1年見極めて来た！……参加者は8名！

……ナツ・ドラグニル！」

ナツ 「よつしやあ！」

マカロフ 「……グレイ・フルバスター！」

グレイ 「やつとこの時が来た……！」

マカロフ 「……ジュビア・ロクサー！」

ジュビア 「ええ!?! ジュビアが？」

マカロフ 「……エルフマン！」



エルフマン「漢たる者、S級になるべし！」

マカロフ「・・・カナ・アルペローナ！」

カナ「・・・」

マカロフ「・・・フリード・ジャステイーン！」

フリード「ラクサスの後を継ぐのは・・・」

マカロフ「レビイ・マグガーデン！」

レビイ「私とうとう！」

マカロフ「・・・ジェラール・フェルナンデス！」

ジェラール「俺が？」

これは俺とエルザの推薦だ

ルーシイ「みんなこのメンバーに選ばれたいから自分をアピールしてたのねー！」

マカロフ「今回はこの中から合格者を一名だけとする！試験は1週間後

各自体調を整えておけい！」

ミラ「選ばれた8人の皆は準備期間の1週間以内にパートナーを1人決めて下さい」

レイ「えーと、パートナー選択のルールは2つある

1つ、『妖精の尻尾』のメンバーである事

2つ、S級魔導師はパートナーにできない」

マカロフ「試験内容については天狼島に着いてから発表するが、今回もエルザ達が貴様らの道を塞ぐ！」

「「えええー！？」」

ミラ「今回は私も皆の邪魔をする係をしまーす」

「「えええー！？」」

ルーシイ「もしかしてエルザやミラさんを倒さないとS級になれないわけ!?」

ここまで話してエルフマンがある事に気付いた

エルフマン「ちよ、ちよつと待てよ・・・！」

グレイ「まさか!？」

ナツ「ギルダーツとレイも参加するのにかあー!？」

レイ「もち」

「「あああああ!!」」

悲鳴に近い声が鳴り響いた

レイ「そんな喜ぶなよ」

「「喜んでねえよ！絶望してんだよ！」」

・・・傷ついてないよ？

グレイ「今年はえらくハードルが高えな」

ルーシイ「意外ね、アンタ達みんな初挑戦なんて」

ナツ「俺は燃えてきた！

絶対S級になってやるあー！」

エルフマン「ぬあー!!」

漢エルフマン！S級への道が遠ざかる!？」

ジエラール「なんで俺が選ばれたんだ？」

ウエンデイ「大変そうですね」

リサーナ「皆頑張ってるね」

レイ「お前らパートナー決めたか？」

ナツ「俺はもちろんハッピーだ!!」

ハッピー「あいさー！」

こちら辺は原作どおりじゃないと困る

エルフマン「ハッピーはずりーだろ！」

試験内容がレースだったら勝負にならねえ」

レイ「S級候補がそんな事言ってるのか？」

グレイ「俺は別にかまわねえよ

戦闘になつたら困るだけだしな」

ハッピー「ひどい事言うねグレイ・・・」

ここでハッピーが気合を入れた

ハッピー「オイラは絶対ナツをS級魔導士にするんだ！」

レイ「お、がんばれよ」

ナツ「こればかりは仲間といえどぜってー譲れねえ！」

ハッピー「あい！」

ナツ「てな訳で・・・修行だー！ー！」

ナツとハッピーは勢いよく飛び出していった

レイ「いやー若者は元気がいいね〜」

リサーナ「レイも私達とそんな年変わらないでしょー」

レイ「あははははは」

リサーナ「でも私がない2年の間にレイはS級と聖十大魔導になつちやうし

ナツはS級試験に参加するようになってるなんてねえ〜」

レイ「まあ俺も必死にがんばったからな

グレイはパートナ誰なんだ？」

グレイ「俺か？俺はー」

ロキ「僕だよ」

みんな久しぶりだね」

ルーシイ「ちよつとおー!?」

すげーナイスリアクションだなルーシイ

グレイ「去年からの約束でな」

ロキ「ルーシイ、悪いけど試験期間中は契約を解除させてもらうよ

心配はいらない、僕は自分の魔力でゲートをくぐってきた

だから君の魔法は使えなくなったりしないよ」

ルーシイ「な、なんて勝手な星霊なの？」

そう呆れた顔するなよルーシイ

エルフマン「でもおめえギルドの一員って事でいいのかよ？」

ロキ「僕はまだフェアリーテイルの魔導士だよ」

ギルドの誇りをかけてグレイをS級魔導士にする」

グレイ「頼りにしてるぜ」

ロキ「任せて」

ルーシイ「この2人ってこんなに仲良かったっけ？」

レイ「ルーシー嫉妬してんのか？」

ロキ「もちろんわかってるさ」

ルーシー「ちよつと!!」

リサーナ「じゃあ私ジュビアのペアになる！」

レイ「はあ!?!」

試験自体俺にもどうなるかわかんねーからな・・・

リサーナ「私、エドラスじゃジュビアと仲良かったのよ、いいでしょジュビア？」

ジュビア「リサーナさん・・・」

リサーナ「決定ね！」

ジュビア「この子レイ様と仲が・・・」

レイ「ジュビア・・・一応言っとくがメンバーとの絆も大事だからな？」

ジュビア「はい!ジュビアがんばります！」

なんだかんだで決まっていくな

エルフマン「ちよつと待てよリサーナ!?

それじゃ、俺のパートナーがいねーじゃねーか!

リサーナ「そう?さつきから熱い視線を送ってる人がいるわよ?」

エルフマン「へ？」

熱い視線の主はエバークグリーンだった

エルフマン「熱いってより石にされそうなんだが・・・」

エルフマンはしぶしぶパートナーに誘いに行った

ジェラール「俺はどうしよう・・・」

ウル「私が組んであげるわ」

お、意外な誘いが来たな

ジェラール「よろしく頼む」

レイ「よし、俺は準備があるから帰るわ。お前らががんばれよ」

リサーナ「あ、レイ、ミラ姉が今日みんなでご飯食べようって」

レイ「わかったよ、夜行くよ」

こうして1週間後、波乱巻き起こるS級魔導士昇格試験が幕を開ける！

## 第35話 最悪の組み合わせ

——天浪島・Fルート——

俺はここまで自分が不幸だと思ったことはない  
だつて8ルートもあるんだよ？

当たるとは思わないじゃん？

レイ「・・・うそだろ？」

リサーナ「私達運いいみたい♡」

ジュビア「そうですね

レイとあたるなんて♡」

・・・なんて曰だ！

レイ「てかお前からその格好どうにかしろよ！」

リサーナ達はちよーかわいい水着だった

刺激が強いよ！

リサーナ「あれーレイ何考えてるの〜？」



ジュビア「もうレイつたら／＼」

レイ「ちげーよバカ！」

もうかかってこい！」

ダメだ！

このままペース崩されるわけにはいかねえ！

ジュビア『水流斬破!!』  
ウォータースライサー

「パアン！」

俺はジュビアの魔法を片手ではじく

レイ「おいおい、手抜いてねえか？」

リサーナ「これならどう？」  
テイクオーバー 接収・ホワイトタイガー!!』

「ドゴオオオン！」

レイ「・・・は？」

俺がとつさに危険を感じ避けたところにはクレーターができていた

レイ「ちよ、ちよつと待て

威力おかしくねえか？」

リサーナ「ただのホワイトタイガーじゃなかったみたい♡」

ジュビア「よそ見してる暇はないよ！』  
ウォータージグソー 水流激鋸』

レイ『『水竜剣ガラティーン』うおー！』

俺はギリギリのところまでジュビアの突進を受け止める

リサーナ「体がガラ空きよレイ！」

リサーナは俺の横腹を爪で狙ってきた

レイ「ちっ！」

もう片方の手に剣を出し受け止める

「キーン！」

こいつらコンピネーションなかなかいいなコノヤロー

レイ『『斬波!!』』  
ざんぱ

2人に向かって弱めの斬撃を放つ

これくらいなら避けられるだろ

ジュビア『『水流昇霞』』!  
ウオーターネブラ

「ゴオオオオオオ！」

俺はジュビアの水を剣で纏った

これくらい朝飯前だ！

ジュビア「ジュビアの水が!?!」

レイ「おらあ、返してやる！数倍でな！」

「ザッパアアアン！」

ジュビア「あああああ！」

リサーナ「きやあああ！」

さすがにやりすぎたか？

正直ギブアップして欲しいんだが。

レイ「ギブアップか？」

ジュビア「まだです！」

リサーナ「そうだ！ジュビア耳かして！」

なんだ？

作戦会議か？

時折ジュビアが顔を赤くしてるが・・・

ジュビア「・・・わかりました／＼」

リサーナ「よーし

レイ〜見て〜」

レイ「あ？」

リサーナ達を見ると水着をずらし前かがみで誘惑してきた

あ、もうちよつとで・・・

ジユビア「隙あり！リサーナさん！」

リサーナ「ええ！リサーナパンチ！」

ジユビアの水に乗りものすごい勢いでリサーナが攻撃をしてきた

レイ「なあ!？」

ぐはあ！」

俺はもの見事に吹っ飛んだ

リサーナ「やったあ！レイに勝ったあ！」

ジユビア「はい！1次試験突破です！」

レイ「おい・・・ちよつと卑怯じゃないか？」

リサーナ「あんな手に引つ掛かるレイが悪いでしょ、やらしく」

ジユビア「レイってやっぱエロいんだねえ〜」

レイ「いや、お前らが言える事じゃねえだろ！」

ベッドの上でどんな顔してるか自分でわかってんのか？」

「  
／  
／  
／  
」

まるでゆでダコだな

レイ「まあ、1次試験突破だ早くいけ！」

俺はその場からそそくさと立ち去った

## 第36話 襲撃

——キヤンプ地——

レイ「おいおいうそだろ？ S級魔導士全滅かよ？」

エルザ「……」

ミラ「……」

レイ「ギルダーツも負けたんだろ？」

S級のメンツ丸つぶれだな……」

「めんぼくない……」

レイ「てかギルダーツ達はどうした？」

エルザ「先に船で帰ったぞ」

これから戦争なのにいとけや！

ミラ「レイ、スープ作ったんだけど味見して？」

レイ「ああ、んくちよつと薄いな」

ミラ「わかった」

暇だなく俺も作るか

レイ「ミラく俺も作る

エルザもなんか喰うか？」

エルザ「甘いものを頼む」

ミラ「私も同じの」

レイ「オツケー

イチゴあるか？」

ミラ「こっちにあるわよ」

ミラはバスケットの中からイチゴを取り出した

この材料ならムースを作ろうかな

く5分後く

レイ「お待たせいたしました。『イチゴのきらきらムース』でございます」

俺はウエイターの格好でしつかり決めた

ミラ「わくおいしそう！」

エルザ「いただきます」

「パクッ」

エルザ「おいしい！」

ミラ「ほんと!？」

「じゃあ私も」

「パクッ」

ミラ「おいしい！」

「どうやって作るの？」

レイ「企業秘密だ」

「そういやお前から誰に負けたんだ？」

エルザ「私はジェラールとウルに……」

ミラ「エルフマンとエバーグリーンに……」

レイ「ぶふっ！ジェラールはともかくエルフマン!？」

エルザ「お前が負けるとはな」

ミラ「ええ、エバーグリーンがエルフマンと結婚するって言つて油断したすきにね」

エルザ「な!？」

「あ、あいつらいつの間にな！」

「そそそそれで式はいつだ!？」

レイ「油断させるための作戦に決まってんだろバカ」

こいつ恋愛事になるとおかしくなるな

そんなことを考えていると・・・

「ゴゴゴゴゴゴゴゴ」

エルザ「なんだ!?!」

・・・来たか

レイ「この魔力・・・じいさんだな」

エルザ「なぜここまで・・・」

レイ「普通に考えろ」

ミラ「ま、まさか!?!」

レイ「ああ、敵襲だ!」

エルザ、信号弾を!」

エルザ「わかった!」

「びゅー・・・ドン!」

空に赤い火花が上がった

それと同時に空からグリモアのザゴが降ってきた

レイ「おいおい、数多いな



エルザ！みんなを探しに行け！」

ミラ「私は？」

レイ「ここを俺と一緒に守るんだ！」

エルザが走って行った方向からリサーナが走ってきた

リサーナ「レイ！ミラ姉！」

ミラ「リサーナ！」

レイ「ジユビアはどうした!?!」

リサーナ「エルザと一緒に行ったわ

それよりこれ・・・」

レイ「『グリモアハート悪魔の心臓』だ」

ミラ「闇ギルド最強がなんでこんな所に!?!」

レイ「さあな、行くぞ！」

グリモア「妖精を潰せえ！」

レイ「てめーらに潰されるほどやわなじやねえよ！」

リサーナ「『テイクオーバー接収・ホワイトタイガー』！」

ミラ「『テイクオーバー接収・サタンソウル』！」

レイ「『テイクオーバー魔装・火竜!!』」

俺達はグリモアの殲滅を始めた

レイ『火竜剣式ノ型 爆竜乱舞!!』

リサーナ『白虎衝波斬!!』

ミラ『イビルエクスプロージョン!!』

グリモア「ぎやああああ!」

???「おもしろそうな事やってるじゃねえか!」

レイ「誰だお前は!」

上空を見ると黒い人影が浮かんでいた

???「俺は煉獄の七眷属の頭、ジユダル・アルギオン」

見た目もまんまマジのジユダルだな

レイ「いきなり大物登場だな」

ジユダル「お前が『神竜』のレイか?」

おお、初めて聞く通り名だな。

ちよつとテンション上がるw

レイ「初耳だがあつてるぞ」

ジユダル「それだけ分かればいい

お前からこいつは俺が殺る!その女どもは好きにしろ!」

レイ「・・・今なんて言った？」

ジユダル「あ？そんなのどうでもいいんだよ、かかってこいよ！」

レイ「望み通り跡形もなく消してやるよ！」

『火竜剣零ノ型 獄炎・烈炎ノ太刀!!』

ジユダル『水神ウツイネル・カネツギ召海』

「シユウウウウ・・・」

ジユダルは陸地なのにジユビアと同じように大波を作り出し俺の魔法を打ち消した

な!?

こいつまさか！

・・・試してみるか

レイ『氷竜の咆哮!!』

ジユダル『灼熱ハルハル・インフカールの双掌!!』

ジユダルの魔法が俺の氷を溶かしていく

・・・やはりな

こいつはマジの魔法全部使えるようだな

レアグローブばりにやっかいだな

レイ「お前ここで潰しとかないとやっかいだな」

ジュダル「そのセリフそのまま返すぜ」

もう後の事考えて魔力使うのやめた

レイ「全力でいかせてもらう」

「キイイイン」

俺の指輪がレアグローブ戦の時のように輝きだす

レイ『『モード神竜』』

ジュダル「最初からそうしとけよ『バララク・サイカ雷光剣!!』』

レイ『『神竜剣レイヴェルト』』

「ガキイイン!」

ジュダル「な!?!」

レイ「お前は今ここで消す」

## 第37話 絶体絶命

俺達は長い事戦っていた

もう魔力が尽きそうなほどに

ジユダル「おいおいさっきまでの威勢はどうした？」

レイ「はあはあ・・・うるせーよ」

くつそなんでこいつは魔力が切れねえ

ジユダル「俺の魔力が切れないの不思議がつてやがるな？」

レイ「ああ・・・だったらどうした？」

ジユダル「俺の魔力はマスターハデスの心臓と共にある

あれが壊されない限り俺の魔力は切れない！」

レイ「ご丁寧な説明どーも」

ジユダル「まあ、お前はここで終わりだ！

『ゼツルゼツル・サラーム  
万華影陣!!』

ジユダルは自分の分身を無数に作りだした

ジユダル「死ねえ！」『サルグ・アルサーロス  
降り注ぐ氷槍!!!』

これはヤバい！

「ザクザクザク！」

レイ「ぐあああああ！」

俺の体中から氷が突き出ている

この出血量はマジでヤバいぞ！

ジュダル「くたばれえ！

レイ・グロリー！」

レイ「ぐっ……」

ナツ「させるかー！ 『火竜の鉄拳!!』」

ジュダル「ぐはあ！」

レイ「ナ……ツ……か？」

ナツ「おい、しつかりしろ！レイ！」

レイ「ナツ……今すぐここから……逃げるぞ！」

ナツ「く！わかった！」

1 回体制立て直さねーと……魔力が……

ーベースキャンプー

ナツ「リサーナ！レイが！」

リサーナ「レイ！しつかりして!!」

レイ「リサー・・・ナ・・・」

視界がかすんでいるがリサーナの顔から血の気が引いているのはよくわかる

アビー「レイ忘れ物届けに来たわよ！」

リサーナ「アビーなんでここに!?!」

アビー「今言っただでしょ」

アビーはカバンから液体の入ったビンを取りだし俺の口へ突っ込んだ！

マジでこれには驚いた

俺、怪我人だよ？

レイ「ごふ！」

とりあえず全て飲みほした

すると傷、体力、魔力が元通りになった

リサーナ「すごい・・・なんのビンなの？」

レイ「昔ポーリュシカさんにもらった秘薬だ」

アビー「レイがそこまでやられるなんてさうとう強敵なようね」

レイ「ああ、正直厄介だな」

リサーナ「これからどうするの？」

ナツ「俺はじつちゃんの所に戻るぞ」

レイ「俺はとりあえずここを死守する・・・怪我人もいるしな」

アビー「それじゃあ私の弓貸して」

レイ「ああ、そうだな」

リサーナ、お前は少し休んでろ」

アビー「そこに50人ほど隠れてるわ」

レイ「わかってる・・・やるぞ」

アビー「ええ『ホーミングアロー!!』」

レイ「『シャイニーブルーム!!』」

グリモア兵「うああああ!」

2人は敵を的確に追撃する魔法でここ一帯を一掃する

レイ「とりあえずこちら辺はもう大丈夫だろ」

アビー「そうね、もう気配は感じないわ」

その時、空が輝きだし光の魔力が一点に集まった

リサーナ「あれはなんなの!？」



レイ「妖精三大魔法『妖精の輝き』だな」

アビー「だれがあんなものを!？」

レイ「さあな？」

カナだよな

そこでお父さん登場な訳だ

レイ「とりあえずちよつと休むか」

アビー「そうね」

今は最終決戦の為に休むか

原作と違ってジユダルがいるからどうなるかわかんねえからな

## 第38話 創造

「グオオオオオオ！」

突如耳をつんざく様な雄叫びをあげながら謎の魔物が襲ってきた

レビィ「きやあああ！」

リサーナ「魔物!！」

レイ「うおお!？」

何だ!？」

ラストイローズ「迅雷のベルクーサス!

そいつらを殺せ!」

レイ「煉獄の七眷属 ラステイローズか!」

ラストイローズ「名前を覚えてもらえて光栄だね!」

レイ「お前と同じような魔法をサブで使ってるからな」

ここで忘れていたが創造魔法を持っている事を思い出した!

ラストイローズ「俺の『具現のアーク』の敵じゃねえ！」

レイ「言ってる！『白竜の咆哮!!』」

あんな魔物1撃で十分だ

ラストイローズ「な!?!ベルクーサスが1撃で!?!」

レイ「『神足の翼』」

俺を創造魔法で背中に超スピードの翼を生やす

ここは創造魔法をフルで使わせてもらおう

ラストイローズ「ちっ『天馬の翼』!」

たかが足に生やしてジャンプ力あげるだけだろ?

レイ「しょぼい想像力だな!

『火竜の鉤爪え!!』」

さくすくに神がかったスピードの蹴りは効くだろ

ラストイローズ「ぐああ!」

鈍い音とともにラストイローズは吹き飛んだ

レイ「おいおい、そんなもんか?」

ラストイローズ「くそが!『ブリテイアの亡霊!!』」

なんだこれ体に纏わり付いてくる!

気持ちわる！

レイ「邪魔くせえ！『滅竜奥義 聖刀狼!!!』」

狼の形をした聖なる光が亡霊を次々に喰らっていく

レイ「お前見たいな想像力じゃ俺には勝てねーよ」

ラストイローズ「だまれー！『デインギルの塔!!!』」

「ゴゴゴゴゴゴ」

レビィ「うわあああ！」

リサーナ「私達まで！」

アビー「抜け出せないわよ!?!」

レイ「お前の想像力じゃ俺の創造を超えられない！」

「バァン！」

レビィ「解けた！」

ラストイローズ「俺の想像を超えている！」

ラストイローズの顔を恐怖で歪んでいた

レイ「俺のいるところを攻めてきたのが間違いだつたな！」

ラストイローズ「くそおお！『黄金の盾!!!』」

そんなガードじゃ俺の攻撃は防げねえよ！

レイ『モード白雷竜』『滅竜奥義・改 白雷・・・麒麟』！』  
「ズガアアアアアン！」

ラストイローズ「がああああ！」

リリー「雷!?!」

レイ「ふう、男のくせに雷ごときでビビンじゃねえよ」

リサーナ「やったあ！」

「グラッ・・・」

なんだ!?

急に魔力が!?

体中から魔力が抜けていくレイ達は次々と倒れていく

リサーナ「なに・・・これ？」

レビィ「魔力が・・・」

リリー「くそ・・・力が・・・」

アビー「うう・・・」

くそ・・・アズマか・・・

エルザ早くしてくれ！

## 第39話 VS. ジュダル

s a i d エルザ

——エルザ……

失っていた意識を取り戻し、目を開くエルザ

勝利を確信していたアズマは驚いていたようだ

アズマ「馬鹿な！天狼島の膨大な魔力をぶつけたんだぞ!？」

エルザ「がはっ！はあ……はあ……」

今……レイの声が聞こえた？

——負けるな、エルザ

みんなが待ってる……

エルザ「……!!」

私は皆を守る為に……立ち上がるんだ！

エルザ「うおおおおお！」

エルザは己の最後の力を振り絞り仲間達の為にアズマに立ちはだかる  
アズマ「傷つきながらも仲間の為に・・・」

エルザ「はあああ！」

踏み込みが甘いか、私の魔力を持つてしても勝てるかどうか分からない・・・  
だが、奴と私とは背負っているものの『重み』が違う!!

エルザ「(私が守らねば!ギルドを、仲間を・・・!)」

アズマ「・・・来い！」

エルザ「必ず・・・勝つ！」

私が勝たなければみんなを守れない!

エルザ「はああああ！」

アズマ「恐ろしくて胸が弾むね!!妖精の尻尾の妖精女王エルザ・スカーレット!  
お前の名は生涯忘れる事はないだろう！」

エルザの手足を根でぐるぐる巻きにし封じる

エルザ「く・・・そ!動・・・け・・・え!動けえーっ!!」

アズマ「これで終わりだ!!もう一度天狼島の魔力を喰らうがいい!

『大地テラ・ククラマールの叫び』!!

「ゴオオオオオオ！」

エルザ「(此処まで・・・か・・・)」

「——おいおい、もう終わりかよだらしねえな

エルザ「(レイ!?)」

レイに続き次々と仲間の姿が現れていく

エルザ「(そうか・・・そういう事か・・・)」

アズマ「な!?!」

エルザ「(私とした事が・・・肝心な事を忘れていた)」

天狼島の魔力を突破したエルザに目を見開きその後ろにエルザの仲間達を見た

アズマ「これは!?!」

エルザ「(私が皆を守っていたのではない・・・いつだって守られていたのは・・・私の方だ!?!)」

アズマ「くっ!?!」

アズマは根を防御に回しエルザの行く手を遮る

しかし、エルザの前に出た天狼島の魔力がその身を守っていく

アズマ「俺の支配下にある筈の天狼島の魔力がエルザを加護したと!?!」

エルザ「はああああ!?!」

アズマ「信念・・・絆・・・コイツらの本当の強さは『個』ではなく『輪』!?!」



エルザの刃は迷いなくアズマに一太刀を浴びせる  
アズマ「見事！」

自らの敗北を認めたアズマの表情は柔らかく見えた

s a i d o u t

「戻った!!!」

よし魔力が戻ったぞ！

ナツ「レイー！」

レイ「ナツ！ハデスを倒しに行くぞ！」

ナツ「ああ！行くぞ！ルーシィ、ハッピー、アビー！」

ルーシィ「私!？」

ハッピー「あい！」

アビー「しようがないわね」

リリー「俺も行くぞ

ガジルの仇を取らねば」

・・・震えながら言うなよ・・・

リサーナ「帰ってきてねレイ．．．約束だよ？」

レイ「当たり前だ」

誰にも言っただバカ」

ナツ「おし行くぞ!!」

「おお!!」

グレイ「(くそ．．．目が霞む．．．もう．．．ダメか．．．)」

グレイはナツの替わりにザンクロウと戦いポロポロになっていた

「ガシツッ!」

グレイを支えたのは同じくポロポロになっているエルザだった

グレイ「エルザ．．．」

エルザ「大丈夫か？」

グレイ「俺はいつも誰かに助けられてばかりだな．．．」

エルザ「フツ．．．私も同じだ」

エルザが促した視線の先にはみんながいた

グレイ「みんな．．．」

ルーシイ「グレイ!! エルザ!!」

ナツ「俺も同じだ!!」

レイ「助け合うのが仲間だろ？」

さあ、最終決戦だ!!

ハデス「まさかジュダル以外の七眷属にブルーノートでやられるとは

・・・ここは素直にマカロフの兵を褒めておこうか」

レイ「ハデス・・・ジュダル・・・」

ジュダル「おいハデス、まず『神竜』は俺にやらせろ」

ハデス「いいだろう」

ハデスは戦艦のなかに戻って行った

レイ「お前ら下がつてろ」

さすがにこいつらには戦わせられないな

ナツ「俺にもやらせろ！」

レイ「ダメだ!!」

ナツはあまりの大声にビクつく

レイ「あいつだけは俺が倒す」

ジュダル「来いよ」

レイ『『モード氷幻竜』『氷点霞月』』

俺は自分の分身を5体作りだした

ジュダル「へく俺と同じような技使えるんだ〜」

あの戦闘で思いついた戦い方だ

全部が俺の魔力を持つてるならいける!!

レイ「悪いが悠長に戦ってられないんでな・・・一発で決める」

ナツ「レイが5人!？」

ハッピー「それにそれぞれ違う魔力纏ってるよ!？」

ジュダル「いけ魔人ども!」

「ウオオオオオオ!!!」

ルーシイ「な、なにあれ!？」

エルザ「黒い魔人!？」

おいおい黒いジンまで出すのかだが・・・

レイ「さつきまでの俺とは違う・・・帰るって約束したんだ!!!」

『火竜剣零ノ型 獄炎・烈火ノ太刀!!』

『雷竜剣零ノ型 雷皇・紫電槍!!』

『氷竜剣零ノ型 氷淵・零ゼロキャン砲!!』

『天竜剣零ノ型 絶空・風かぜわらし風!!』

『白竜剣零ノ型 聖光・天界ホーリーグリッターの輝き!!』

ジュダル「な?! 俺の魔人達が!! ぐああああ!!」

俺はジュダルと共に魔人を無に葬り去った

グレイ「す、すげえ・・・」

エルザ「ジュ、ジュダルはどこへ飛ばしたんだ?」

こいつら怯えすぎだろ・・・

てかエルザまで怯えてるよ・・・

レイ「さあ?とうぶんは動けないと思うぞ」

さあ、次で最後だ・・・俺の本気をぶつけてやる!!

## 第40話 妖精の力

ジュダルがやられたのを感じたのかハデスが戻ってきた  
ハデス「ジュダルまでやられるとは・・・この私が兵隊の相手をする事になろうとは  
な

悪魔と妖精の戯れもこれにて終劇・・・どれどれ、少し遊んでやろう」

レイ「後はお前だけだハデス!!」

ハデス「三代目妖精フエアリーテイルの尻尾

来るが良い、マカロフの子らよ」

そういうとまたもやハデスは戦艦の中へ帰って行った

ナツ「だあー!」

てめえが下りて来い!」

みんなを見ると目に闘志があふれていた

そしてナツはハッピー達に声をかけた

ナツ「お前たちに頼みがある」

ハッピー「なに?」

ナツ「この船を探って動力源みてるのを壊してくれ」  
ハッピー「万が一飛んだら大変だもんね、ナツが」

アビー「だらないわね」

リリー「そう言う事なら任せておけ」

実は俺だつて乗り物に弱くない訳じゃねえんだよ

すこしは我慢しろよ

グレイ「そろそろ始めようか！」

「ダンシー」

グレイが手を地面につけ戦艦まで1本の階段を作る

レイ「行くぞ!!」

「おう!!」

俺達は勢いよく階段を駆け上がっていく

エルザ「アイツはマスタをも凌駕する程の魔導士。開戦と同時に全力を出すんだ

!!」

グレイ「持てる力の全てをぶつけてやる!!」

ルーシィ「後先の事なんて考えてられない!!」

レイ「俺達しかアイツを倒す事ができない!!」

ナツ「やつとアイツを殴れるんだ・・・燃えて来たぞ!! ハデスー!!!」

階段を駆け上がり先陣きつてナツはハデスに攻撃をぶち込んだ!!

ナツ「『妖精の尻尾』の力を喰らいやがれええ!!!」

ハデス「『妖精の尻尾』の・・・力?」

ハデスは簡単にナツの攻撃をはじき返した

しかしその後ろから俺、エルザ、グレイが距離を詰める

レイ「『神竜剣壺ノ型 神光牙!!』」

エルザ「『黒羽・月閃!!』」

グレイ「『氷 聖 剣!!』」

ハデス「むう!!」

ルーシイ「開け!! 『金牛宮の扉』 タウロス!!」

タウロス「Mオーれつ!!」

レイ「『霸竜送魔』」

全員に霸竜の魔力を送り能力を強化する

俺達はハデスへ攻撃の手を休めない

ハデス「ちよこまかと!!」

ハデスは金色の鎖を俺とグレイとエルザに巻きつけた



グレイ「ぐう!!」

エルザ「うあ!!」

レイ「ぐ．．．らあ!!」

ハデス「なに!？」

ナツ「『火竜の．．．』」

レイ「『神竜の．．．』」

「『翼撃!!!』」

ハデス「ぐおおおお!!!」

グレイ「ナツ!!」

ナツ「おう!!」

グレイ「い．．．けえ!!」

グレイはナツをハンマーに乗せおもいつきし吹き飛ばした  
ルーシイ「スコープオン!!」

ナツ「『火竜の．．．』」

レイ「エルザ!!」

エルザ「『天輪．．．』」

レイ「ゴッホ・オブ・フレイズ神の剣!!!」

ナツ「『儉角!!』」

俺とナツはそれぞれの連携で合体魔法をハデスに向け放った

ハデス「がはああ!!」

ハデスは俺とナツの攻撃を受け後方に吹き飛んで行った

・・・が

ハデス「人は己の過ちを経験などと語る」

「!!!」

ハデス「しかし本当の過ちには経験など残らぬ・・・」

私と相對するという過ちを犯したうぬらに未来などないのだから」

ルーシイ「全く効いてないの!?!」

グレイ「おい、こっちは全力出してんだぞ!?!」

エルザ「魔力の質が変わった!!」

ハデス「準備運動はこれくらいでよいか?」

ここまですはな・・・潰しがある!!

レイ「ああ、俺も体が温まってきた・・・」

ハデス「うぬは自らの力を過信しすぎておる」

レイ「過信なんかしてねえよ

俺が信じるのは絆の力だ!!」

ハデス「笑わせるな!!」

レイ「『ゴッドドライブ!!』」

エルザ「レイの魔力が上がった!!」

ハデス「ほうまだ魔力が上がるのか」

レイ「『神竜の鉄拳!!』」

「ガアアアアン」

ハデス「ぐあっ!!」

レイ「自分の力を過信しているのはお前の方だ!!」

ハデス「ぬぐう・・・貴様の言う仲間はずれまといにしかならん!!!」

『天照二十八式魔法陣』!!」

ナツ達がいる周囲に魔法陣が展開された

レイ「しまっ!!」

ハデス「うぬらは消えよ!!!」

「ズドオオオオン!!!」

ナツ「げほ・・・げほっ!!」

ルーシー「なにが起きたの!?!」

レイ「お前ら・・・大丈夫か？」

ナツ達の目の前には自分達を庇ってボロボロになったレイが立っていた

「!!?」

くっそ・・・俺はハデスにしか頭がいつてなかったな・・・

ナツ「レイ!!!」

ハデス「妖精に尻尾はあるのかないのか？」

永遠の謎、故に永遠の冒険・・・ギルドの名の由来はそんな感じであったかな」

レイ「ぐ・・・」

ハデス「しかしうぬらの旅はもうすぐ終わる」

ナツ「ぐあ!」

ハデスはナツの頭を踏みつけた

ハデス「メイビスの意志が私に託され、私の意志がマカロフに託された

しかしそれこそが間違いであった・・・マカロフはギルドを変えた」

ナツ「変えて何が悪い!!」

ハデス「魔法に陽の光を当て過ぎた」

レイ「それが俺達の『妖精の尻尾』だ!!」

魔法は闇に生きているんじゃない!!」

ナツ「てめエみたいに死んだまま生きてんじゃないやねんだっ!!」

こっちは命かけて生きてんだコノヤロウツ!!」

俺達は体を動かそうとしたがどうにもならない

ナツ「変わる勇気がねえならそこで止まってやがれっ!!」

ハデス「やかましい小童よ」

ナツ「ぐあああ!」

レイ「ああ!」

ハデス「マカロフのせいであぬは苦しみながら死ぬのだ」

エルザ「よせえ!!」

ナツ「はあ・・・はあ・・・じっちゃんの・・・仇だ」

レイ「お前は・・・俺達が倒す!!」

ハデス「もう良い・・・消えよ!!」

ルーシイ「やめてえーっ!!」

ルーシイの悲痛な叫びが戦艦にこだまする・・・

その時!!!

「バチバチ・・・ズドオオオン!!!」

ラクサス「こいつがじじいの仇か・・・ナツ」

ナツ「ラク・・・サス？」

レイ「なんで・・・お前が？」

ラクサス「おいおい、レイまでボロボロじゃねえか」

ハデス「小僧!？」

ぐうつ!？」

ラクサスはハデスに頭突きをかまし怯ませた

ルーシイ「ラクサスが・・・来てくれた・・・!!」

レイ「来るの・・・おせえんだよ」

## 第41話 炎と雷と魔導の深淵

ラクサス「情けねえな。揃いも揃ってポロ雑巾みてえな格好しやがって」  
レイ「うるせーよ」

エルザ「何故お前が此処に……」

ラクサス「先代の墓参りだよ」

これでも元『フエアリーテイル妖精の尻尾』だからな」

よく言うぜ

そんな理由でこんなところ来ねえだろ

ラクサス「俺は初代の墓参りに来たつもりだったのになあ

こいつは驚いた、二代目さんがおられるとは」

ラクサスの顔から笑みが消え怒りでいっぱいになった

ラクサス「せつかくだから墓を作って拜んでやるとするか」

ハデス「やれやれ……小僧にこんな思い上がった親族がいたとは」

2人は魔力を放出したまま睨みあう……

ラクサス「おらあつ！」

ハデス「ぬあ！」

ラクサスとハデスは激しい戦闘を繰り広げた

ラクサスは咆哮を放ちハデスはそれを避け

地球儀をラクサスにたたきつける

しかし!!

ラクサス「これは!! 『天照百式』の!？」

「ドオオオン」

レイ「うおっ!!」

ラクサス「が・・・ああああ!!」

爆風の中からラクサスは飛びだしハデスの頭に強烈な蹴りを入れる

ハデス「ぐううう!!」

グレイ「すげえ・・・」

ラクサス「!! がはっ！」

ナツ「ラクサス!!」

突如ラクサスは崩れ落ちた

レイ「さっきの魔法喰らってやがったか」

ナツ「しっかりしろよラクサス!!」



ラクサス「・・・世界つてのは本当に広い

こんなバケモンみてえな奴がいるとは・・・俺もまだまだ・・・」

ナツ「何言ってるんだ!!!」

ハデス「やってくれたのう・・・ラクサスとやら・・・うぬはもう消えよ!!!」

立ち上がれないラクサスにハデスは容赦なく魔法を放つ

ナツ「立てよ!!ラクサスツ!!」

ラクサス「俺はよう・・・もう妖精の尻尾の人間じゃねえけどよ・・・

じじいをやられたら怒っても良いんだよな」

エルザ「!!!」

ナツ「当たり前だあああー!!」

「バチバチバチ!!」

ナツ「雷・・・ラクサスの・・・!」

「ズドオオオオン!!」

ラクサス「俺の・・・おごりだ・・・ナツ」

爆発をうけラクサスは落下していく

ナツは立ちあがったその体から電気が迸る

ナツ「ごちそうさま・・・」

ハデス「帯電？」

ラクサス「俺の全魔力だ・・・」

グレイ「自分の魔力をナツに？」

ナツ「何で・・・俺はラクサスより弱え・・・」

ラクサス「強えか弱えかじゃねえだろ・・・傷つけられたのは誰だ？」

ギルドの紋章を刻んだ奴がやらねえでどうする？」

ナツ「・・・」

ナツは自分の顔を腕で覆う

ラクサス「ギルドの受けた痛みはギルドが返せ・・・100倍だな」

ラクサスは笑みを浮かべながら言った

その言葉にナツは腕を下げ両手に炎を宿す

ナツ「レイと同じ雷炎竜・・・100倍返しだ!!」

レイ「行つて来い!!」

ナツ「うううおおお!!」

すさまじいスピードでハデスまで距離をつめ拳を振り下ろす

ナツ「らあ!!」

ハデス「ぬう!!」

ハデスは簡単に攻撃を防いだ

「バリバリバリ!!」

ハデス「ぐああああ!!」

だがその上空から雷が降り注いだ

ナツ「俺達のギルドを傷付けやがって!!」

お前は・・・消えろおおー!!!」

ナツは両腕に炎と雷を纏いハデスに振り下ろした

ハデスはナツの腕に鎖を巻きつける

ハデス「はっはー!!」

両腕を塞いだぞ!!」

ナツ「うおおお!!!」

ハデス「な!?!」

ナツは無理やり鎖を引きちぎった

ナツ「『雷炎竜の・・・咆哮ー!!』」

ハデス「がああああ!!!」

ナツの咆哮をハデスを巻き込み戦艦に大穴をあけた

レイ「すげえな・・・俺も周りから見たらあんな感じなのね」

ナツ「はぁ・・・はぁ・・・やつ・・・たぞ・・・」

ナツの体は力なく崩れ穴の中に落下していく

ルーシィ「ナツ!!」

ルーシィの手はナツの手をがっしり掴んだ

ナツ「た、助かった・・・もう完全に魔力がねえや」

レイ「終わった〜」

エルザ「我々の勝利だ・・・みんなの所に戻ろう」

ウエンディ「はい!!」

「ゾクゾクゾク」

レイ「!!!」

ハデス「たいした若造どもだ・・・」

「!!!」

みんな信じられないという表情を浮かべる

ハデス「マカロフめ・・・全く恐ろしいガキ共を育てたものだ」

レイ「くそが・・・」

ハデス「私がやられたのは何十年ぶりかのう・・・」

「このまま片付けてやるのは容易い事だが楽しませてもらった札をせねばな」

ハデスは再び立ちあがった

その体に傷はない

グレイ「うそ・・・だろ？」

ハデスは自分の眼帯を外す

ハデス「悪魔の眼・・・開眼!!!」

「ゴゴゴゴゴ」

ハデス「うぬらには特別に見せてしんぜよう

魔導の深淵、ここからはうぬらの想像を遥かに超える領域!!!」

## 第4 2話 暁の天狼島

ハデスは恐ろしいほど邪悪な魔力を放っている

レイ「くっ……こんな魔力感じたことねえぞ……」

ハデス「終わりだ『妖精の尻尾』フェアリーテイル」

もう少し……もう少しで魔力が……

ハデス「魔の道を進むとは深き闇の底へと沈む事

その先に見付けたるや、深淵に輝く『一なる魔法』あと少しで『一なる魔法』に  
辿り着く

だが、その『あと少し』が深い……

その深さ埋めるモノこそ大魔法世界……ゼレフのいる世界!!」

レイ「そんな世界は存在しねえ……幻だ!!」

ハデス「すぐにわかる……」

ハデスは空中に魔法陣を描く

ハデス「ゼレフ書 第四章十二節より 裏魔法 ネメシス 天罰」

「オオオオオオ」

グレイ「が、瓦礫から化け物を作っているのか・・・？」

ハデスが唱えると瓦礫から絶望的な魔力を持つ化け物を作り出していく  
ハデス「深淵の魔力をもってすれば土塊から悪魔をも生成出来る

悪魔の踊り子にして天の裁判官、これこそ『裏魔法』

ルーシイ「ひっ・・・」

俺の脚は情けなくガタガタ震えていた

くそ、何びびってやがる!!

そう自分に言い聞かせるが震えはおさまらない

ナツ「・・・なんだ、こんな近くに仲間がいるじゃねえか・・・」

レイ「・・・」

ナツ「恐怖は『悪』ではない・・・それは己の弱さを知るという事だ

弱さを知れば人は強くも優しくもなれる」

レイ「ナツ・・・」

ナツ「俺達は自分の弱さを知ったんだ。だったら次はどうする？」

そうだ誰にだって弱いトコ、恐怖はある!!





『裏魔法』が効かぬのか?!』

ナツの体には俺が魔装をしている時の黒と赤をベースとした服を羽織っていた  
ハデス「ありえん!!」

私の魔法は・・・!! (まさか・・・!? 私の心臓を!?)

ルーシイ「天狼樹が!!」

天狼樹をみるとその勇ましい姿が再び島の中心にそびえ立っていた

レイ「ウルか!!」

いいことしてくれるぜ

グレイ「魔力が・・・」

エルザ「戻っていく!!」

ナツ「勝つのは・・・俺達だー!!!」

ハデス「否ー!!」

魔導を進む者の頂きに辿り着く日までは悪魔は眠らない!!」

ハデスはナツに攻撃をしかけようとしたがラクサスの拳によって防がれてしまう

ラクサス「行けえ!!」『妖精の尻尾!!』

ルーシイ「開け!!」『磨羯宮の扉』!! カプリコーン!!」

グレイ「『氷魔剣アイスプリングァー』!!」

エルザ 「『天輪・五芒星の剣!!』」  
ペンタグラムソード

レイ 「『天竜剣壱ノ型 絶刀空閃!!』」

ハデス 「ぬぐうう!!」

次々と決まるそれぞれの魔法その威力にハデスが呻く

ナツ 「『滅竜奥義・改 紅蓮爆雷刃!!』」

ハデス 「ぐあああああ!!!」

もうハデスから魔力は感じない

俺達の勝ちだ!!!

ナツ 「これが俺達のギルドだー!!!」

ナツがそう叫ぶと水平線から朝日が昇り天狼島を暁に照らした

## 第43話 親子の絆、愛する資格

レイ「今度こそ終わつたろ・・・

おい、プレヒト・・・」

ハデス「・・・」

レイ「お前に聞きたいことがある」

ハデス「なんだ？」

レイ「ゼレフを求めていたなら聞いたことがあるはずだ

ゼレフ書最強最悪の悪魔・・・END・・・」

ハデス「ああ・・・正体不明、どんな悪魔かもわからないがの

レイ「あつそ、ならいいや」

素晴らしいながらレイはナツの方へと視線を移した

ルーシィ「はい、マフラー」

ナツ「ありがとな」

ハッピー「ナツー!!」

ナツ「お前ら・・・」

ハッピー「助けてナツー!!」

ハッピー達の後ろからグリモアの下っ端どもが追いかけてきている

グレイ「まずいぞ・・・」

エルザ「さすがに魔力が0だ・・・」

リリー「すまん・・・俺も魔力が」

アビー「私もよ・・・」

その時!!

マカロフ「そこまでじゃ!!」

朝日に照らされ俺達の背後から頼りになる仲間達が姿を現した

ルーシィ「みんな・・・」

グリモア「うおお!増えた!!」

「あれは・・・マカロフか!？」

「てかあそこ見ろ!!」

「マスターハデスが・・・倒されてる!!」

マカロフ「今すぐこの島から出ていけ!!」

グリモア「ひいひい!!」

「わ、わかりましたー!!」

グリモア兵は一目散に逃げ出していく

さすがじいさんだ!!

「よつしやあああああ!!!」

みんなが一斉に歓声を上げる

俺達はみんなとハイタッチしたり抱き合ったりした

レイ「あ、ジエラールとウルは？」

リサーナ「ジエラールは外にいた評議員に報告

ウルはメルデイって子と帰ったわ」

レイ「そうか・・・」

ウルとメルデイは原作通りだな

ジエラールはどうなる？

このまま進めば記憶は・・・

そう思いながらラクサスを見るとじいさんに怒られていた

せつかく助けてくれたのにな

レイ「よーしひとまずキャンプに戻るかー」

ミラ「そうね、みんなの治療しなくちゃ」

レイ「つて言う事でそこで倒れてる桜色のバカを連れてこいよー」  
ルーシィ「え!? ちょ、私がナツ運ぶの!？」

ーキャンプー

ナツ「ぐがーぐごー」

レイ「すうーすうー」

エルフマン「うるせえなナツ!!」

レイみたいに静かに寝れねえのかよ!!」

ミラ「いいじゃない

それにしてもレイの寝顔かわいー♡ 食べちゃいたい♡」

リサーナ「ちょ、ミラ姉!!」

ミラ「フフフ」

ハッピー「オイラ達が壊したのがハデスの心臓だったのかー」

アビー「私の予測どおりね」

ガジル「おい!! 怪我はねえかりりー!!」

りりー「うむ、お前よりはマシだ」

ビッグスロー「よく帰ってきたなあラクサス!!」

ラクサス「いや、帰ってきたわけじゃねえよ」

フリード「ラクサスが帰ってきた〜!!」

ラクサス「だから・・・」

レイ「お前らうるせー!!」

寝れねえだろー!!」

静かに寝させろよマジで!!

リサーナ「うわぁ!起きた!」

「ガサガサ」

ジュビア「みな・・・さん・・・」

エルザ「ジュビア!!」

グレイ「無事だったか!!」

ジュビア「すみません・・・ジュビアはゼレフを逃がしてしまいまじだあ〜」

エルザ「そ、そうか」

ジュビア「レイ!! お仕置きしてえ!!」

さあ好きだけぶってえ♡」

レイ「あ、後でな」

リサーン「レイ!!」

レイ「は、はい!!」

ルーシイ「あとはギルダーツ」

カナ「うん・・・」

ルーシイ「大丈夫・・・きつと無事よ」

ギルダーツ「おめえ破門になったんだってなあ

ぶはーだせえw」

ラクサス「やかましいぞオツサン!!」

カナ「ぶふー!!」

さすがのカナも父親の突然の登場に驚いたようだ

ーー天狼島内 湖?ーー

ギルダーツ「なんだよお前ら

そのしけたツラはよお」

ナツ「だって全然面白くねーんだもん」

レイ「しかも俺達激戦のあとだぜ?」

ギルダーツ「わかってねえな」



釣りは男のロマンだろうが」

レイ「いや女の存在こそ男のロマンだ」

ギルダーツ「・・・一理ある」

ナツ「意味わかんねえ」

リサーナ「でもこの4人で釣りも久しぶりだね」

ナツ「そーいやそうだなー」

ハッピー「リサーナがいなくなっ行って行かなくなっただもんね」

ナツ「お！なんかかかった！」

ギルダーツ「いいぞナツ!!」

引けっ引けっ!!」

ルーシイ「ギルダーツ!」

ギルダーツ「ちよつと待て!

今ナツが男のロマンに目覚める瞬間なんだ!!」

俺達は邪魔だな

陰から見守るか

レイ「リサーナ散歩にいこうぜ」

リサーナ「え? うん」

ルーシイ「カナがちよつと大事な話があるんだつて」

ギルダーツ「ん？」

ルーシイ「ナツもハツピーもこつちこつち!!」

ナツ「うわつ魚が!!」

ハツピー「みんなのエサが」

ハツピー「そこはエサじゃなくて食事にしろよ」

ルーシイ「あ!レイ、リサーナ!なんでそんな所に?」

レイ「今から感動的な場面なんだろ?」

ルーシイ「!! なぜそれを!?!」

ギルダーツ「どうした?」

カナ「私・・・ギルドに來た理由つて父親をさがして・・・なんだよね」

ギルダーツ「そりや初耳だな、つー事はあれか?」

お前の親父さんは『妖精の尻尾』フェアリーテイルにいたのか?」

カナ「う、うん・・・」

ルーシイ「がんばれ!! カナ!! あんた達は帰ってなさい」

「え?え?」

ナツ、リサーナ、ハッピーは意味不明という顔をしている

カナ「・・・ギルダーツなんだ・・・」

ギルダーツ「え？」

「「ああああ!!」」

ギルダーツ「ええーっ!?」

めっちゃおもしろい反応だなこいつらw

カナ「いろいろあつて・・・ずっと言えなかつただけど・・・」

ギルダーツ「ちよ、ちよつと待て・・・お前!!」

あのギルダーツが口パクパクしてるよ!!

カナ「うん・・・受け入れがたいよね・・・」

ギルダーツ「誰の子なんだ!!」

サラ、ナオミ、クレア、ファイナ、マリィ、イライザ・・・

いやいや!!髪の色が違う!!

エマ、ライラ、ジーン、シドニー、ミシエル、ステファニー、フランソワ

ズ・・・」

カナ「オッサン!! どんだけ女作つてんだよ!!」

ギルダーツ「わ、わかつた!! シルビアだな!!」

そっくりだぜ、性別とか!!」

カナ「あくもう!! ハラ立つくく!!」

こんなしょうもない女たらしが親父だなんてえくく!!」

そういつてやるなよカナ・・・いちよ『妖精の尻尾』フェアリーテイルの最強候補だぞ?

カナ「とにかくくそういう事だから!! それだけ!!」

ギルダーツ「ま、待って」

カナ「私が言いたかったのはそれだけ!!」

別に家族になろうとかそういうのじゃないから!! 今まで通りでかま

わ・・・!!」

「ぎゅっ・・・」

ギルダーツ「・・・コーネリアの子だ・・・間違いねえ」

カナ「放せよ・・・」

ギルダーツ「なんで今まで黙ってたんだ?」

カナ「いい出しづらかったんだ・・・そんなこんなで今頃になっちまったのさ」

ギルダーツ「コーネリアは俺が唯一愛した女だ・・・結婚したのもコーネリアだけさ

仕事ばかりの俺に愛想つかして出ていったのが18年前・・・

風の便りで逝っちまったのは知ってたが子供がいたなんて・・・」

カナ「……」

ギルダーツ「すまねえ……お前に気付いてやれなかった……」

カナ「いいよ……わざとバレないようにしてたの私だし……」

勝手に悪いけどさ、私はこれで胸のつかえがとれた」

ギルダーツ「こんな近くに……娘がいたのに……」

カナ「よせて……責任とれとかそういうつもりで話したんじゃないんだ……いつも通りでいいよ」

ただ……一回だけ言わせて……会えてよかったよお父さん」

ギルダーツの頭の中にギルドで見た幼少期のカナの姿が浮かんでは消えていきその眼には涙が溢れていく……

ギルダーツ「カナ!!!」

カナ「……」

カナは静かに抱きしめ返す

ギルダーツ「もう寂しい思いはさせねえ!!! 二度とさせねえ!!!」

これからは仕事行くのも酒飲むのも……ずっと一緒にいて

やる……」

カナ「それはちよつとうざいかな？」

ギルダーツ「だから・・・俺にお前を愛する資格をくれ・・・」  
やばい、マジで泣けてきた・・・

俺の後ろにいたナツ達も顔をぐちゃぐちゃにして泣いていた

レイ「いいもんだな・・・家族って」

リサーナ「ぐすつ・・・ギルドのみんなだって家族でしょ？」

レイ「ああ、そうだな」

X784年12月16日

この時まで忘れていた・・・最悪の瞬間が訪れるのを・・・



ギルダーツ「こいつは・・・あの時の・・・」

空を見上げると俺が今まで見たドラゴンの中で最大の影が見えた

ガジル「マジかよ・・・」

ナツ「やつぱり・・・ドラゴンはまだ生きていたんだ・・・」

マカロフ「黙示録にある黒き竜・・・アクノロギアというのか!!」

ギルダーツ「ああ・・・」

ナツ「お前!! イグニールが今どこにいるのか知ってるか!?

あとグランディーネとメタリカーナも!!」

ギルダーツ「よせナツ!!」

フリード「降りてくるぞ!!」

「ズドン!!!」

おいおい・・・デカすぎんぞ・・・

「オオオオオオオ!!!」

ギルダーツ「逃げろお!!」

ギルダーツがそう叫んだ瞬間アクノロギアが暴れ出し俺達は吹き飛ばされた

その時俺達の頭上が再び暗くなった

エルフマン「も、もう1頭来たぞ!!」



やつと来たか!!

「ズドオオオオン!!」

オルフェウス「レイ!! なぜここにアクノロギアがおる!!」

レイ「知るかよ!! てかあいつなんなんだよ!!」

オルフェウス「やつは黒き翼・・・竜の王だ・・・」

ナツ「レイ!! そいつ知り合いなのか!!?」

レイ「ああ、友達だ」

ナツ「マジか!! お前イグニール達がどこにいるか知ってるか?」

オルフェウス「今はそれどころじゃなからう!!」

ナツ「そ、そうだな・・・」

レイ「お前ら!! 船まで走れ!!」

マカロフ「バカ者!! ガキを置いて行けるマスターがどこにいる!!」

レイ「じいさん・・・ドラゴンを倒せるのは滅竜魔導士だけだ・・・ラクサス!!」

俺はラクサスにみんなを連れていくように目で合図をした

ラクサス「っ・・・行くぞ、じじい!!」

マカロフ「ぐっ!!」

ナツ「俺だって滅竜魔導士だ!!」

そいつが敵っていうなら俺が・・・うが!!」

ラクサス「走るぞナツ!!」

ナツ「ラクサス!!! お前・・・」

ラクサスの眼から涙がこぼれ落ちた・・・

その姿にナツも驚きを隠せない

リサーナ「レイどうして・・・」

レイ「悪いなりサーナ

これは俺の役目だ」

リサーナ「せつかくまた会えたのに!!」

これからはずっと一緒にいるんじゃないの!?」

リサーナは涙を浮かべているがあまりの剣幕にさすがのおれも怯む

レイ「・・・アビー」

アビー「ええ・・・」

アビーはリサーナを掴み船へと向かう

リサーナ「ちよつとアビー!! 放して!!」

アビー「・・・」

アビーは黙ったままりサーナを放さない

オルフェウス「よかったのか？

お前の思い人だろう？」

レイ「ああ、いつか分かってくれるさ」

オルフェウス「生きて帰れぬかもしれぬ」

レイ「あいつを救うためなら命だって捨ててやる」

オルフェウス「・・・行くぞ」

俺はオルフェウスに飛び乗った

レイ「魔装・火竜!!」

俺が魔力を纏った瞬間オルフェウスの体も炎のように赤くなった

レイ「なんだ？」

オルフェウス「お前の魔力がわしの魔力に呼応したのだろう」

おもしろいな。

魔力も上がってる

レイ『『火竜剣七ノ型 紅炎旋回塵!!』』

「ドドドドドドド」

俺は爆発する赤い塵をアクノロギアに放った・・・が!!

「ギャオー!!!」

爆風から姿を現したアクノロギアの体には傷一つついていなかった

レイ「な!? マジか?」

オルフェウス「あのような細かい攻撃は効かぬ!!」

レイ「だったら!! 『雷竜剣参ノ型 紫電轟雷刃!!』」

効くだろ!!

雷なら避けられねえし!!

アクノロギア「オオオオオオ!!」

予想通り、アクノロギアは苦しそうに呻いている

レイ「よし効いてる!!」

オルフェウスあいつに突っ込んでくれ!!」

オルフェウス「どうする気だ?」

レイ「永遠に凍らしてやる!!」

オルフェウス「ぬん!!」

オルフェウスはアクノロギアを地面に押さえつけその上から俺が魔法で追撃する

レイ「『アイシクルシエル永久氷結!!!』」

アイスドシエルほどじゃねえがこれもなかなかの威力だ!!

みるみる内にアクノロギアは氷漬けにしていく

「バリン!!!」

アクノロギア「ギャオオオオ!!」

しかし、アクノロギアは氷を破り俺とオルフェウスを吹き飛ばし俺は崖に叩きつけられた

レイ「ぐあああ!!」

オルフェウス「ぐうううう!!!」

くそ・・・強すぎんだろ

ヤバイ・・・意識が・・・リサーナ・・・

「タタタタタタ」

アクノロギアの体に仲間思いの桜色が登っている・・・

・・・!!?

ナツ「レイを返しやがれ!!!」

レイ「ナツ!!」

俺の意識はナツが戻ってきたという驚きに戻された

エルザ「かかれー!!」

「オオオオオオ!!!」

レイ「お前ら・・・ラクサス!!」

ラクサス「俺は反対したんだ

けど・・・仲間を1人置いて逃げれるような奴らかよ、お前の仲間は？」

レイ「俺のいるギルドはバカしかいねえのかよ・・・」

リサーナ「バカーーーー!!!」

「ボコ!!」

レイ「ぐはあ!!!」

リサーナ「次こんな事したらホント知らないから!!!」

レイ「お、おお」

その時は気付かなかった・・・木々の間から俺達の事を見守り祈りをささげる少女のすがたを・・・

「ズバア!!」

ナツ「うあつ！」

ルーシイ「きやあ！」

エルザ「みんな無事か!!」

「バサツ!!」

アクノロギアは空へ飛びあがった

リリー「飛んだ!!」

ハッピー「帰ってくれるのかなあ？」

アビー「油断しないで!!」

アキノロギア「コオオオオオオ」

アキノロギアは息を大きく吸いブレスの力を溜める

ガジル「ブレスだー!!」

カナ「ちよつと!! 島ごと消すつもりじゃないでしょうね!!」

エルザ「防御魔法を使える者は全力展開!!」

レイ『『氷竜壁!!』『岩竜壁!!』』

俺は二重に防御魔法を構えた

フリード「術式を書く時間は無い!!」

レヴィ「文字の魔法には他にも防御魔法がたくさんあるよ!!」

リサーナ「みんな!! レイ達に魔力を集めて!!」

ミラ「手をつなごう!!」

俺達は手をつなぎ一つの円になる

ナツ「俺達はこんな所で終わらねえ!!」

ルーシィ「うん、絶対にあきらめない!!」

グレイ「みんなの力を一つにするんだ!! ギルドの絆をみせてやろーじゃねーか!!」

レイ「みんなで帰るんだ!!!」

「『妖精の尻尾』へ!!」

その刹那アキノロギアはブレスを放った

「カッ!...ドゴオオオオン!!!」

ゼレフ「——終わったんだね...ナツ、レイ」

アキノロギアは再び姿を消した...

その後半年にわたり近海の調査を行ったが生存者は確認できず...

そして7年の月日が流れた...



## 漆黒の不死鳥編

## 第45話 X791年『妖精の尻尾』

——ハルジオン港——

妖精の紋章を刻み海を見つめる少年・・・

その瞳は何を見ているのか・・・

ビスカ「いつまで海を見てるんだい？」

アルザツク「仕事も終わったしギルドに戻ろう

早く帰らないと父さんが心配するよ」

ビスカ「マカオからあんたの事頼まれてんのよロメオ・・・気持ちはわかるけどさ」

アルザツク「ビスカ」

アルザツクは無言で首を振る

——『フェアリーテイル妖精の尻尾』——

『フェアリーテイル妖精の尻尾』では外で紫色の髪的女性が洗濯物をしている

「ガコン!!」

マカオ「まだ帰ってこねえのか!!?」

アルとビスカの奴ロメオをほったらかしにしてイチャイチャしてるんじゃないやあ  
るめえな!」

ワカバ「うるせえなあ

いい年なんだから少しは落ち着けよマカオ」

マカオ「俺の事はマスターって呼べつつつてんだろ!!」

ワカバ「こんな貫禄のねえマスター見た事ねーよ!!」

マックス「それにしても・・・また人減ったかな?」

『フェアリーテイル妖精の尻尾』は昔のような活気はなくならんとしていた

ウオーレン「しょうがねえよ。こんな弱小ギルドじゃない仕事まわしてもらえねー  
し」

ナブ「見ろよ!! この依頼書の数!!」

ビジター「見てほしい、新しい舞が完成したのである

名付けて『弱小の舞』

マックス「気分悪いからこいつ追い出せよ」

ラキ「ねえドロイ

また大地への圧力が増えた？」

ドロイ「太ったって言いてえのかこの野郎」

ジェット「自覚ねえのかよ？」

リーダス「俺達を見やがれ」

リーダス「うい、俺元々こつちが本当の体だよ」

ウエンディ「私変わりました？」

素晴らしいながらもウエンディは19歳になり胸が大きく育ちエドウエンディに近い体になった

ドロイ「俺は鍛えてんだよ!!」

わからねえのか!? この筋肉!!」

ジェット「レビイが今のお前見たらなんていうかね」

ドロイ「レビイは帰ってこね・・・あ」

メンバーの表情はドロイの一言により曇っていく

???「おやおや、相変わらず昼間っからしんみりしてるねー」

これだから弱小ギルドはやだよなー」

ワカバ「ティーボ」

マカオ「ここにはもう来んなって言つたろーが!!」

ギルドに5人の男『黄昏の鬼』トワイライトオウガのメンバーが入ってきた

ティーボ「おいおい・・・俺達にそんな口きいていいのか?」

マグノリアを代表する魔導士ギルド『黄昏の鬼』によお

マカオ「ぐ」

ティーボ「かつてはフィオーレ最強だったかどうかわからねーけど

もうお前らの時代は終わってんだよ」

ジェラルル「その辺にしてもらおうか」

3人の人影がティーボ達の背後に現れる

マカオ「お前から帰ってきたのか?」

ティーボ「ぐ、チーム『魔女の罪』クリムソルシエール」

ウル「帰ってきて早々面倒な事しないでくれる?」

メルディ「ごめん、今ちよつとウル機嫌悪いからさ」

ジェラルル「今すぐギルドに戻れ」

ジェラルル、ウルティア、メルディから構成されているチーム『魔女の罪』クリムソルシエールは

『妖精の尻尾』フェアリーテイルのトップチームだ

他のギルドにもなにかと顔が利く

ティーボ「ちつ金は来月取りに来る」

マカオ「すまねえ・・・」

ジェラール「いや、いいんだマスター」

ワカバ「で、なにか手掛かりは見つかったのか？」

ウル「なにも見つからなかったわ

情報はガセだったみたい」

ワカバ「ふう・・・あれからもう7年か・・・」

マックス「懐かしいな」

ウオーレン「あれ以来何もかも変っちゃまった」

ジェット「天狼島が消滅したって話を聞いて必死にみんなを探したよな」

ビジター「だけど誰一人見つからねえなんて・・・」

ナブ「評議院の話が本当ならアクノログアってのに島ごと消されたんだ」

リーダス「実際のいろいろな機関が捜査に協力してくれたけど、何も手がかりは見つか

らなかった」

ジェット「そりやそうだよ・・・あの日・・・」

天狼島近海のエーテルナノ濃度は異常値を記録してる

あれは生物が形をとどめておけないレベルの・・・」

ドロイ「何て威力なんだ!!!」

アクノロギアの咆哮ってのは……!!!」

ウオーレン「だって……大昔にたった1頭で国を滅ぼしたっていう竜なんだろう!!!」

人間がそんなの相手に生きていられる訳が……」

ウエンデイ「何で私達の仲間を……」

マックス「あいつらがいなくなつてから俺達のギルドは弱体化する一方……」

マグノリアには新しいギルドが建つちまうし」

ワカバ「たたむ時がきたのかもな」

メルデイ「そんな話やめて!!」

ワカバの言葉にメルデイは声を荒げる

入つて7年、もう彼女も立派な『妖精の尻尾』フェアリーテイルの一員なのである

ワカバ「どうしたマカオ?」

マカオ「……俺はもう心が折れそうだ」

ワカバ「お前はよくやつてるよマスター」

マカオ「あれ以来……ロメオは一度も笑わねえんだ……」

マカオの眼から涙がこぼれ落ちる

「ゴゴゴゴゴゴ」

ドロイ「なんの音？」

ジエツト「またオウガがいやがらせに来たか？」

ギルドにいた全員が外に出て空を見た

マックス「あ、あれは・・・!!」

ウオーレン「オオ!!?」

ウエンデイ「『<sup>ブルーベガサス</sup>青い天馬』のクリスティーナ改!!?」

一夜「くんくん・・・辛気くさいパルファムはよくないな・・・とう!!!」

クリスティーナ改から突如異形な物体が落下してくる

その様子にだれもが口を開ける

「ゴシヤ!!!」

一夜「メエーン!!」

「落ちんのかよ!!」

一夜「あなたの為の一夜でえす」

決め顔をする一夜だったがまったく決まっていな

マカオ「お前・・・!」

ヒビキ「一夜様、気持ちはわかるけど、少し落ち着いたら?」

レン「俺・・・空気の魔法使えるし」

イブ「みんな久しぶり」

クリスティーナ改から空気魔法でヒビキ達が降下してくる

降りてくるやすぐさまラキ達にナンパを始めた

ヒビキ「ウルティアさん相変わらず綺麗だ」

レン「お、お前その服似合いですぎだろ？」

イブ「お姉さまって呼んでいいかな？」

ウル「私を口説ける男は1人だけよ」

そう言われたトライメンズはすぐさま目標を変える

ヒビキ「メルデイちゃんこの後お茶しない？」

レン「お前そのリボン似合いですぎだ」

イブ「僕は君の奴隷になるよ」

メルデイ「私にナンパなんて10年はやいよ」

一夜「これお前達!!」

「失礼しやした!!」

ウエンデイ「なんなんですかね？」

キナナ「さあ？」



女性陣は呆れていた

ジェラール「一夜どうしたんだ？」

一夜「共に競い、共に戦った友情と私の永遠のライバルのパルファムを私は忘れない」

ヒビキ『古文書』の情報解析とクリステイーナの機動力をもつてファイオーレ中のエー

テルナノ数値を調べたかいがあつたよ」

ワカバ「なっ！」

一夜「天狼島はまだ残っている！」

——天狼島近海——

ウル「本当にこの辺なの？」

望遠鏡を片手に不満を漏らすウル

メルデイ「何も見えてこないじゃない」

ウオーレン「天馬の奴等の話じゃ、この海域でエーテルナノが何とかつて……」

マックス「そもそもエーテルナノってなんだよ」

ジェラール「本当にロメオを連れてこなくて良かったか？」

ウエンデイ「無理矢理でも連れて来るべきだったですかね？」

マックス「まだ生きてるって決まった訳じゃねえんだ」

ウオーレン「ぬか喜びさせる訳にはいかねえよ」

しばらくするとマックスが海に立つ少女を見つけた。

その少女が腕をあげると・・・

「ゴゴゴゴゴゴゴゴ」

ウル「あれは!!!」

ジエラール「天狼島!!!」

——『フェアリーテイル妖精の尻尾』——

マカオ「ついていかなくてよかったのか？」

マカオはロメオを心配して声をかける

ロメオ「天狼島が見つかってもみんな・・・生きてるかわからねーだろ」

マカオ「そんな事ねーって!!」

信じなきやよ、そこは!!」

ロメオ「7年も連絡ねーんだぞ」

マカオ「はあ・・・」

ロメオの言葉にため息を漏らす

「ガコオ!!」

ティーボ「おいおい、今日はまた一段と人が少ねえなア」

ワカバ「ティーボ!! 支払いは来月のはずだろ!？」

ティーボ「うちのマスターがそうはいかねえって」

ロメオ「お前らに払う金なんかねえよ」

マカオ「よせロメオ!!」

ティーボ「なんだクソガキその態度」

我慢の限界だったロメオはティーボ達に向かっていく

ロメオ「こんな奴らにいいようにされて父ちゃんもみんなも腰ぬけだ!!」

オレは戦うぞ!! このままじゃ『妖精フェアリーの尻尾』の名折れだ!!!」

「フシユウ・・・」

しかし、発動したロメオの炎魔法は一瞬で吹き消される

ロメオ「!!!」

ティーボ「名前なんてとつくに折れてんだろ」

ティーボは背中に背負っていた金棒をロメオに向けて振り下ろす

ティーボ「てめえらは一生俺達の上にはいけねえんだ!!!」

「ドッコーン!!」

ティーボ「あ？」

「んだあ？」

レイ「お前ら失せろ!!」

俺は殺気を全力で放ち威嚇する

「ひいひいひい!!!」

ナツ「ただいまー!!」

ロメオ「・・・」

ロメオは口を開けたまま動かない

レイ「おいおいリアクション遅いんじやねえの？」

マカオ「お、お、お前ら・・・」

ラキ「若いつ!!!」

ナブ「7年前と変わってねーじゃねーか!!」

ビジター「どうなってんだー!!」

ルーシイ「えーと・・・」

ー数時間前ー

??? 「・・・!! ・・・イ!! レイ!!」  
ん?

誰か呼んでるよな・・・

「バチイ!!」

その瞬間俺の頬に鋭い痛みが走った

レイ「痛つてえ!!」

メルデイ「起きた!!」

レイ「あくウルと・・・えーと・・・メルデイか?」

実際見たらウルの格好そーとーエロいな

ウル「いつまで寝てんのよ、起きなさい」

レイ「俺達さつきアクノロギアのブレスを食らって・・・リサーナは!!」

ウル「あつちで倒れてるわ」

ウルが指さした方向に脱兎のごとく走って行った

レイ「リサーナ!! 起きろ!! リサーナ!!」

俺はリサーナを揺すつたがまったく起きない

・・・ウソだろ?

そう思ったのが間違いだった

リサーナ「ん〜レイ〜そこはだめえ〜」

レイ「……………」

「バシャー!!」

俺は水を手のひらからだしリサーナの頭からかぶせた

リサーナ「きやつ!! 冷たい!! ちよつとレイ!!」

レイ「なんつー夢見てんだお前は!!」

リサーナ「う……………」

レイ「ウル、他のみんなは?」

???「こちらです」

メルディ「…………誰?」

???「私の名はメイビス『フェアリーテイル妖精の尻尾』初代マスターメイビス・ヴァーミリオン」

「…………!!」

とりあえず俺達はみんなを見つけ初代の前に集まった

メイビス「あの時……私は皆の絆と彼の揺るぎない心、その全てを魔力へ変換させ

ました

みんなの想いが妖精三大魔法の1つ『フェアリースフィア妖精の球』を発動させたのです

この魔法はあらゆる悪からギルドを守る絶対防御魔法……

しかし貴方達を凍結封印させまますま解除するのに7年の歳月がかかってしまいました」

マカロフ「なんと……初代が我々を守ってくれたのか……」

メイビス「いいえ……私は幽体、皆の力を魔法に変換させるので精一杯でした

揺るぎない信念と強い絆は奇跡さえも味方につける

よいギルドになりましたね、三代目」

おお、さすが初代

めっちゃ眩しい笑顔だ

オルフェウス「おいレイ、わしの事を忘れていないか？」

その声とともにオルフェウスが島の反対側から姿を現した

ジェラル「な!？」

「ぎゃー!!」

ウル「ドラゴン!!」

レイ「あーこいつは味方だ」

オルフェウス「わしはもう行く

これからの戦いに備えねば」

レイ「ああ、じゃあな」

オルフェウスはすぐに見えなくなつた

これからの戦い・・・竜王祭か？

マカロフ「・・・と・・・まあ・・・こんな感じじゃ」

ロメオは震えながらナツに近づいていく

その姿にナツも気付いた

ナツ「大きくなつたなロメオ」

ロメオ「お帰り!! ナツ兄!! みんな!!」

この時ロメオは7年ぶりに涙と笑顔を取り戻したのであつた



## 第46話 邂逅

レイ「あくなんか暇だな」

ナツ「仕事もいいのなしな」

ハッピー「あい」

絶賛暇人中

あまりにも仕事がないのである

マカオ「お前らきちんと仕事しろよ

ほらこの仕事行って来い」

あ？

仕事内容は『謎のギルドの正体を突き止めろ』？

レイ「なんだよ謎のギルドって？」

俺は気になってジェラールに話しかけた

ジェラールはこの7年で記憶を取り戻していた

別に元々ウルティアに洗脳されてたわけだから悪いやつじゃない

ジェラルル「最近各地を荒らしまわっている闇ギルドだ

人数、戦力共に不明のギルド・・・今じゃ大陸の脅威とされている」

へへおもしろそうじゃん!!

レイ「よし!!

この仕事行くぞナツ!!」

ナツ「よっしゃー!!」

とりあえず連れていくのは最強チーム+アビー、ウエンデイ、シャルルだ

ーーーーフィオーレ王国・国境の街ーーーー

俺達は謎のギルドの正体を突き止めるべく目撃情報のあつた街に向かった

ナツ「うぷっ・・・もう列車には乗らねえ」

ハッピー「それ毎回言ってるよナツ」

グレイ「しっつかし謎のギルドってなんだよ?」

エルザ「わからないから謎なんだろ」

レイ「とりあえず手あたり次第に探す・・・」

「ドゴオオオオン!!!」

レイ「・・・必要もないみたいだな」

俺達は街の中心部に急いだ

レイ「お、お前は!!?」

ルカ「久しぶりねえ、レイ」

なんでこいつがここにいる!?

ナツ「こいつ誰だ?」

レイ「滅神魔法の使い手・・・なんでここにいる?」

ルカ「探しものよ」

私ギルドに入ったの」

謎のギルド・・・こいつが入ってるのか

レイ「噂のギルドはお前らのギルドか?」

ルカ「さあ?」

ナツ「ぐだぐだ言ってるねえで教えろや!!」

「ガン!!」

ナツ「ぐ!!」

ナツはルカに飛びかかったが何者かに邪魔をされた

??? 「うちの双輪に何しやがる」

突如6人の魔導士が姿を現した

グレイ「何もんだ!!」

??? 「我ら闇ギルド『漆黒の不死鳥』ダークフェニックスの六帝」

レイ「どうでもいい!!」

「ここで潰してやる!!」

ナツ『火竜の咆哮!!』

グレイ『氷欠泉!!』アイスゲイザー

レイ『雷竜方天戟!!』

「シユウウウウ」

俺達は遠距離系の魔法を放ったが3人の魔導士に遮られる

ナツ「な!？」

グレイ「魔法を吸収した!？」

??? 「俺は炎帝のフレイ」

??? 「私は氷帝のアイス」

??? 「雷帝のトルス」

へく属性で六帝か・・・

レイ「ルカ、お前がマスターか？」

ルカ「さつきフレイが言ったでしょ？」

私はただの幹部よ

マスターはあなたなんて足元にも及ばないわ」

言ってくれるじゃねえか・・・

レイ「他にはどんな魔導士がいるんだ」

とりあえず情報収集が先決だ。

情報がないと対策が立てられねえ

「風帝のヴァーユ」

「水帝のヴィネラ」

「岩帝のアース」

ルカ「それぞれがかなりの魔導士よ

あと3人メンバーがいるけど・・・」

レイ「そこまで喋ってくれば十分だ・・・行くぞ!!」

「おう!!」

ナツ「『火竜の儉角』!!」

フレイ「『コロナブレイズ』」

ナツ「ぐあ!!」

さつそくナツは同属性のフレイに勝負を挑むが軽く遊ばれているだけだった

アイス「『フリーズレイド』」

グレイ「ぐうう!!」

ヴァーユ「『サイクロンフェード』」

ウエンディ「きやあ!!」

ビネラ「『スプレッドスクリュー』」

ルーシイ「うう!!」

トルス「『ラティオランス』」

エルザ「くっ!!」

アース「『ロックストライカー』」

ルカ「『雷神の怒号』」

レイ「がああああ!!」

俺達はルカ達に一方的にボロボロにされた

レイ「な、なんで・・・」

ルカ「当たり前でしょ

あなた達が7年眠ってる間に私たちは7年経ってる

その分強くなってるのよ」

くそ・・・

みんな倒れてる・・・

今の俺たち・・・じゃ・・・

俺はそのまま意識を失った

ルカ「フフフ、今のあなた達じゃ私達を止めることはできないわ

世界を変える為のピースはあと4つ・・・」

## 第47話 洗礼

俺達は『漆黒の不死鳥』ダークフェニックスにやられた後、偶然通りかかったジユラ達に運び込まれたらしい

ウエンディとポーリユシカさんのおかげで怪我は一通りなくなっていた

とりあえずベッドの上でじいさんとギルダーツ達に報告をしていた

ギルダーツ「・・・となると『漆黒の不死鳥』ダークフェニックスの目的はそのピースつてのを集める事か」

レイ「ああ、なんのピースかはわかんねーけど」

マカロフ「ピース・・・はて・・・どこかで聞いた気が・・・」

レイ「で、敵の人数ルカの話からすると約10人

『六帝』つてやつかいのと滅神魔導士・・・あとはしらん」

マカロフ「何人かでチームを組んでピース捜索に行くのが先決じゃ」

ギルダーツ「だな

レイ、お前がチーム編成をしろ」



レイ「わかった」

んん敵に耐性をもった魔導士を軸に考えるか。

行く場所はカナに占ってもらって・・・

軸にするのは俺、ナツ、グレイ、ラクサス、ジュビア、ガジル、ウエンディだな  
それをベースにして・・・

――翌日――

マカロフ「これよりピース搜索先鋭チームを発表する!! レイ!!」

レイ「まずリサーナ、カナは俺のチーム

ルーシィ、ジェラールはナツチーム

ウル、メルディはグレイチーム

雷神衆はラクサスチーム

エルザ、レビィはジュビアチーム

ガジルは・・・」

ガジル「俺はリリーだけでいい」

こいつ・・・後でしばく

レイ「まあいい

ミラはウエンディチームだ

エルフマン達はなにかあった時の為待機」

ナツ「よっしやあ!!」

燃えてきたぞ!!」

レイ「各自『漆黒の不死鳥』<sup>ダークフエニツクス</sup>と遭遇したら連携して倒せ!!」

「「おう!!」」

マカロフ「わしはピースがなんなのか評議院で調べてこよう」

レイ「よし、出発だ!!」

s a i d ナツ

ジエラール「『六帝』というのはどれぐらい強いんだ?」

ルーシイ「かなり・・・ナツでさえ一撃でやられちゃったの」

ナツ「別に一撃じゃねえよ」

いちいちいらねー事言いやがって・・・

ん?

このにおい・・・

そう考えるやナツはすぐさま駆けだした  
ルーシィ「ちよ、ナツ!!」

どこ行くの!?!」

ナツ「間違いいねえ!! 『氷帝』ってやつのおいだ!!」

ジェラール「早速カナの占いが当たった訳か!!」

ナツは森の中を縫うように駆けていく

アイス「あら、あの時の坊や達じゃない」

ナツ「誰が坊やだコラ!!」

ジェラール「こいつが『氷帝』・・・」

確かにすごい魔力だ」

アイス「残念だけどここにはピースは無かったわ」

ルーシィ「そんなの関係ない!!」

ナツ「『火竜の鉄拳!!』」

ジェラール「『流星!!』」

アイス「そんな魔法じゃ倒せないわよ?」

アイスはナツの拳を片手で受け止めジェラールにぶつけた

ナツ「ぐっ!」

ジエラール「な!？」

アイス「アイシクルブリザード!!」

「ぐあああああ!!!」

ルーシイ「ナツとジエラールが!？」

ジエラール「つ、強い・・・」

諦めてたまるか!!

ナツ「まだまだー!! 『火竜の翼撃!!』」

アイス『『アイスウォール』』

「ボフ!!」

ナツの炎は確かに氷を包み込んだがまったく溶ける気配がない

ルーシイ「ナツの炎で氷が溶けない!？」

ナツ「ぎげんな!! 『火竜の咆哮!!』』

アイス「あなたの魔法・・・芸がないわ

『エグズイスト・フリージング!!』』

その瞬間あたりが一瞬で凍りナツの炎までもが凍った

ジエラール「なに!？」

「一瞬で!？」

俺の炎が・・・

ナツ「俺じゃ・・・勝てない・・・」

ナツはあまりの力の差に愕然とし膝をついてしまった  
ルーシイ「ちよつとナツ!!

しっかりして!!」

ジェラール「くっ 『<sup>アルテアリス</sup>暗黒の楽園!!』」

「ドオオオオン!!」

ジェラールはアイスの足元に魔法を放ち一旦距離を取る

アイス「あなたはまだマシンなようね・・・『ダイヤモンドダスト!!』」

突然空中に小さな氷の粒が無数に浮かび始めた

ジェラール「なんだ?」

アイス「終わりよ、坊や達♡」

次の瞬間!!

「ザクザクザクザク!!!」

氷の粒がナツ達の体を切り始めた

ナツ「ぐああああ!!!」

ジェラール「くうううう!!!」

ルーシイ「きやあああ!!!」

アイス「じゃあね〜」

アイスは氷に包まれ姿を消した・・・

ナツ「くっそー！ー！ー！ー！ー！ー！」

森の中にはナツの叫び声が鳴り響いた

## 第48話 犠牲

s a i d グレイ

グレイ「たたく、ピースってのはホントにあんのかよ？」

ウル「あるから占って探してんでしょ」

メルデイ「でもここ暑い・・・グレイ氷作って」

俺達はカナに占ってもらった通りとある砂漠を散策中だった

グレイ「俺は氷製造機じゃねえよ!!」

「ゴッ・ゴオオオオ!!」

突然俺達の近くにあつたサボテンが発火し熱気が俺達まで伝わってきた

メルデイ「熱っ！なに!？」

フレイ「あく外しまったか」

グレイ「『炎帝』・・・」

ウル「その手に持つてるのって・・・」

フレイ「ああ、4つ目のピースだ」

メルデイ「ピースを集めて何をする気!？」

フレイ「答える必要はねえよ」

グレイ「いいさ、力づくで聞き出してやる」

フレイ「やってみろよ」

余裕ぶちかましやがって!!

グレイ「『アイスメイク・戦斧!!』」  
バトルアックス

フレイ「『ボンド・オブ・フレイム!!』」

フレイは手に火のチャクラムを作り俺の斧を溶かした

フレイ「ずいぶんやわい氷だな!!」

グレイ「ぐっ!!」  
アイスキャノン  
『氷雪砲!!』

フレイ「『獄炎砲!!』」  
メギドキャノンキャノン

「ドッカーン!!」

グレイ「あ・・があ・・」

ウル「グレイ!!」

煙が晴れグレイの姿が見えた時右腕が赤く焼けただれていた

メルデイ「『マギルティ||ソドム!!』」



ウル『フラッシュワード!!』

フレイ『アグラ・オゼオ!!』

フレイは炎の竜巻を巻き起こし攻撃を全て防ぐ

ウル「強い……!!」

メルデイ「こんな強いなんて……」

グレイ「まだ負けてねえぞ!!」

『氷刃・七連舞』!!』

フレイ「学習能力がねえのか!!」

この槍は触れたもの全てを焼き尽くす!!

『アッシュ・ヴァン!!』

フレイは白い炎の巨大な槍を両手に携える

ウル「グレイ!!!」

「ガバツ!!」

グレイ「な!?!」

「ザクツ!!!」

グレイを庇ったウルの体にフレイが放った魔法が深々と刺さる

ウル「うつ……」

メルデイ「ウル!!!」

フレイ「ちっ……」

俺のせいで……

フレイ「ピースは手に入った

これ以上長居しても無駄だな」

グレイ「待て!!」

メルデイ「グレイ!! 先にウルを!!!」

ウルの体からは大量に出血していた

このままじゃマズイ事は素人でもわかった

グレイ「なんで俺を……」

そういいながらウルの傷口を氷で止血する

ウル「はあ……はあ……母の弟子がそんな簡単にやられちゃつまらないもの……」

グレイ「く……」

ウルテイアの言うとおりで……

こんなんじやウルに顔向けできねえ!!

メルデイ「とりあえず急いでギルドに戻りましょ!!」

グレイ「……ああ」

## 第49話 守る力

s a i dラクサス

ラクサス達はマグノリアからちよつと行つた洞窟の中を探していた  
ビックスロー「しかしみつかんねーな」

ラクサス「カナはピースを占つた訳じゃねえんだ

見つかるとは限らねーだろ」

エバ「けどこの洞窟広くない？」

フリード「文句を言うな」

ヴァーユ「そうだぞ、文句言つてもピースが出てくる訳じゃない」

「!!!」

フリード「何者だ!!？」

ヴァーユ「俺は『風帝』のヴァーユ、よろ・・・」

ラクサス「『雷竜の咆哮!!』」

「バリバリバリ!!」

ヴァアーユ「ちよ、まだ話してる途中なんですけど!?!」

ラクサス「俺達の目的はピースの搜索及び『漆黒の不死鳥』ダイクフェニックスの殲滅だ」

フリード「貴様を倒しておけばピースが探しやすいということだ」

ヴァアーユ「あーそう……でも倒せるかな」

こいつ調子乗ってやがるな

エバ「『妖精機銃レプラホーン!!』」

ビックスロー「『バリオンフォーメーション!!』」

ヴァアーユ「『フルウイング!!』」

ヴァアーユは背中に翼を生やし空へ飛び立つ

フリード「『闇の文字』エクリテュール『翼』」

ヴァアーユ「な!?!」

ぐは!!」

フリードも空中に飛び出しヴァアーユをたたき落とす

ラクサス「『レイジングボルト!!』」

ヴァアーユ「はあ……あまり調子に乗るなよ!!」

!!!!

こいつ魔力の質が変わりやがった!!

ヴァーユ 『サイクロン・オブ・サプレイム!!』

ヴァーユは自分の足元から小型の竜巻を呼び出しラクサス達に向ける

ビックスロー 『エックスフォーメーション!!!』

ヴァーユ 「そんな防御じゃ防げねーよ!!」

「バキバキバキ!!」

竜巻はビックスローの人形を粉々にしていく

ビックスロー 「俺のベイビー達が!!」

ラクサス 「くっ!! 『雷竜方天戟!!』」

「パァン!!」

俺の魔法が風で消し飛んだ!!?

ラクサス 「ぐああああ!!」

ビックスロー 「うああああ!!」

エバ 「ラクサス、ビックスロー!!」

ヴァーユ 「よそ見してる暇はねえよ!!」

『ラウンド・フェード』!!

風の刃がエバ達を切り裂く

エバ「きやああああ!!」

フリード「ぐううう!!」

ヴァーユ「妖精なんて大したことねえな」

ラクサス「ぬかせ・・・!!」

ヴァーユ「そんな体で何ができる？」

『ストーム・キューブ』・・・死ねえ!!」

ラクサス「こいつらを守ることくらいはできる!!」

ヴァーユの手に凝縮された風の魔力をまともに受けたラクサスは腹部をズタズタに引き裂かれおびただしい量の血が出る

フリード「ラクサ——ス!!!!」

ヴァーユ「ピースはねえしこんなどこには用ねえな」

「ヒュウウウウ・・・」

ヴァーユは風に乗ってどこかに消えた

あれが『六帝』・・・

確かに強い・・・

俺は・・・

薄れゆく意識の中ラクサスは消えるヴァーユを眺めていた

## 第50話 竜と神とDB

俺達はワース樹海の中にある神殿でピースを探していた

リサーナ「レイくちよつと休もうよ」

レイ「そんな暇ねえよ」

カナ「そうよりリサーナ」

リサーナ「ぶ」

・・・子供か・・・

レイ「けど神殿って言ってもなんもねーな」

カナ「そうね、けどその方が探しやすいわ」

リサーナ「はあ」

ん？なにコレ？」

「ポチッ」

リサーナは明らかに不自然に置いてある石のボタンを躊躇なく押してしまった

「ゴゴゴゴゴゴゴゴ」

リサーナ「な、なに？」

レイ「おまつ！」

遺跡とか神殿とかでむやみにボタンとか押すなよ！」

リサーナ「なんで？」

レイ「だって映画とかで……」

「ゴォォォォー！」

例によって例のごとく奥から巨大の岩が転がってくる

レイ「こんなのよく見るだろー！ー！！」

カナ「いやー！ー！！」

リサーナ「ごめんなさーい！！」

こんなところで潰されてたまるか！！

レイ『『シャインーブルーム！！』』

「ドガアアアアン！！！」

リサーナ「た、助かった〜」

カナ「ずいぶん奥まで進んだわね」

レイ「どつちにしろ先に進まねえとな」



ルカ「そんなに行かなくていいわよ」

・・・一難去つてまた一難

カナ「誰!!」

レイ「ルカ・ミルフィ・・・滅神魔導士だ」

ルカ「またボロボロにされに来たの？」

レイ「なわけねーだろ」

リサーナ「ねえレイ、この人とどこで知り合ったの？」

レイ「は？」

ルカ「教えてあげるわ・・・」

あの日は雨が降っていたわ

道端で倒れていた私をレイが介抱して宿まで連れて行ってくれたの

そこで・・・」

こいつ作り話しやがって!!

「ギロツ！」

リサーナ「・・・レイ？」

レイ「ウソに決まってるんだろ!!

敵の言う事信じるなよ!!」

リサーナ「……………」

いやいやいや!!

ルカ「フフ♡」

レイ「だーめんどくせえ!!」

カナ「痴話げんかは後でにしなさい!! 『魔法の札? 爆炎』!!」

ルカ「そうよね〜 『水神の渦潮』」

リサーナ「黒い水!?!」

そっか、こいつら滅神魔法見た事ねえんだ

レイ『『氷竜壁!!』』

「ドドドドドドドド」

くっ、威力が!!

抑えきれない!!

「パリンッ!」

ルカ「あなたは7年前と何も変わらないわね」

レイ「しょうがねえだろ!!」

リサーナ『『接収・ホワイトタイガー』!!』

「ズドオオオン」

カナ「・・・なにあれ？」

すさまじい威力のパンチに見ていたカナも驚く

ルカ「あなたの彼女ずいぶんパワフルじゃない？」

レイ「いや、俺もあれを『接収』テイクオーバーさせて後悔してる・・・」

リサーナ「喋ってないでこいつ倒すんでしょ!!」

あ、忘れてた

レイ『『氷竜剣参ノ型 氷牙雪零刃!!』』

ルカ『『白神の聖槍!!』』

レイの魔法はルカの魔法にいとも簡単に碎かれる

使える属性まで増えてやがんのか・・・

ルカ「なんか弱すぎて面白くないわ」

ぐっ！舐めやがって!!

レイ『『モード神竜』』

ルカ「まだやる気？」

レイ『『神竜の・・・咆哮!!』』

ルカ「!!? 『雷炎神の怒号!!』』

2人の魔法がぶつかったが全属性の魔力を使用しているレイの魔法がルカの魔法を

飲み込んだ

ルカ「え!? きゃあ!!」

そろそろ話してもらおうか・・・

レイ「お前らの目的はなんだ？」

ルカ「・・・世界の再生・・・」

カナ「世界の・・・再生？」

ルカ「この世界を作りなおすのよ」

リサーナ「なんの為に？」

???「支配する為に決まってるだろ!!」

この声・・・まさか!!?

レイ「レイ・・・レアグローブ!!」

エドレイ「久しいなグローリー・・・」

カナ「レイが2人!？」

レイ「どうやってあの空間から脱出した!!?」

エドレイ「マスターとルカに助けてもらったんだ

おかげで使えなくなった力もあるがな」

ルカ「この子あなたよりいい男よ」

レイ「ふざけたことしやがって!!」

エドレイ「ピースが見つかったんならギルドに戻るぞ」

ルカ「ええ、じゃまた会いましょレイ」

エドレイ「『空間移動』」

レイ「待ちやがれ!!」

ルカ達はダークブリングを使い去って行った

リサーナ「レイ……」

レイ「大丈夫だ……あいつは俺が止める」

次は確実に息の根を止めてやる!!

## 第51話 氷

レイ「全滅か・・・」

正直7年の差がこんなにきついとは思わなかった・・・

グレイ「情けねえ・・・俺のせいでウルティアが・・・」

ウルは今ポーリユシカさんの家で治療を受けている

かなり危ない状態らしい・・・

「バン!!」

マカロフ『漆黒の不死鳥』の目的がわかったぞ!!」

エルザ「マスター!!」

マスター「奴らの目的は古代闇魔法『エンドレス』」

レイ「『エンドレス!?!』」

もしRAVEと同じ型ならかなりヤバいんじゃないか!!?」

マカロフ『『エンドレス』が発動したら誰にも止められない』

レイ「発動までどれくらいかかるんだ？」

マカロフ「早くてあと8時間・・・」

レイ「行くぞ!!」

今すぐ『エンドレス』を止めるんだ!!」

ギルダーツ「もしもの為に少人数で行った方がいいな・・・」

レイ「ああ、相手は10人」

マカロフ「それが得策じゃな」

レイ「ナツ、グレイ、エルザ、ガジル、ジュビア、ウエンデイ、ラクサスで行く」

マカロフ「よし行つて来いガキ共!!」

『エンドレス』を阻止するんじゃ!!」

「おう!!」

レイ達が戦いに向け準備しているとリサーナが心配そうに声をかけてきた

リサーナ「レイ、またレアグローブと戦うの？」

レイ「レアグローブだけじゃねえ、ルカやあっちのマスターもだ」

リサーナ「・・・帰ってきてね？」

レイ「当たり前だ」

俺が負けるはずねえだろ」

リサーナ「うん……」

「ちゅっ……」

俺はリサーナの額にキスをした

レイ「次やる時は唇だ

それまで待つてろ」

リサーナ「うん!!」

アビー「熱いわね〜」

ミラ「本当、嫉妬しちゃうわ」

カナ「お姉さんにもやらせなさいよ」

レイ「お、お前ら」

リサーナ「だめー!!」

はい、いってらっしやい!!」

レイ「お、おう

行つてきます!!」

レイ「おい!!」



もつと急げないのか!？」

一夜「これが最大出力だ!!」

俺達は天馬のクリステイーナ改で『漆黒の不死鳥』ダークフェニックスを直指していた

グレイ「見えてきたぞ!!」

前方を見ると『漆黒の不死鳥』ダークフェニックスが見えてきた

ギルドつつーより城だな・・・

レイ「お前から俺の周りに集まれ!!」

ラクサス「なにをする気だ？」

レイ「転移魔法で乗り込む」

ナツ「最初から使つとけよ!!」

レイ「目標を目視しないと使えないんだ!!」

一夜は待機してろ!!」

一夜「メエーン」

今のはオツケーの合図でいいのか？

「ヒュンッ」

俺達は一瞬で門の前に立つ

レイ「行くぞ!!」

ナツ 『火竜の咆哮!!』』

「ドオオオオン!!」

ナツはブレスでギルドの門を壊す

別に壊す必要はないと思うが・・・

レイ「くっそー!!」

なんでこんなに廊下が長いんだよ!!」

エルザ「レイ、少し冷静になれ!!」

うっわー・・・ないわー・・・

レイ「・・・ダジャレか?」

「・・・」

エルザ「・・・!!」

そ、そんなことはない!!」

「ヒュウウウウ」

ウエンデイ「ちよつと寒いですね」

エルザ「ウ、ウエンデイまで!?!」

いや、この寒さは・・・

レイ「お前らとまれ!!」

アイス「『アイシクルダーツ!!』」

レイ「『岩竜壁!!』」

グレイ「『アイスメイク・盾』シールド」

「ガンガンガンガン!!!」

アイス「あらく防がれちゃった」

あぶねく俺だけだったら確実に貫いてたな

グレイ「こいつは俺がやる」

ナツ「なに!?!」

おっいい目してるねく

レイ「わかった

先に進むぞ!!」

ナツ「ちよつと待て!!」

何勝手に決めてんだよ!!」

レイ「お前1回負けてんだろ?」

ナツ「う・・・負けんじゃねーぞグレイ!!」

グレイ「当たり前だバカ」

said グレイ

アイス「あら今度はあなたが相手してくれるの？」

グレイ「ああ、女だろーが容赦しねえ!!」

アイス「『フローズンサーベル!!』」

グレイ「『氷魔剣アイスプリンガー!!』」

「キイン キイン」

グレイ「邪魔だあ!!」

アイス「あなた達こそ私達の邪魔はさせない!!」

こいつ強え!!

グレイ「『アイスゲイザー氷欠泉!!』」

アイス「『エターナルブリザード!!』」

「ガアアアアアン!!!」

俺の氷が力負けした!?

グレイ「ぐあああああ!!!」

アイス「あなたの造形魔法、大したことないわね」

もう負けるわけにはいかねえ・・・

これ以上ウル顔に泥を塗るわけには!!

グレイ「お前は俺の造形魔法で倒す・・・」

アイス「ふーん、次で終わらせてあげる」

グレイ「『アイスメイク・・・リミットブレイク限界突破』!!」

アイス「我、氷を使役する者

生きとし生けるものの命を凍てつかせる!!」

グレイ「『一勢乱舞!!』」

アイス「『ヴァージカルド・ゼロ!!』」

「ズガガガガガ!!!!」

グレイ「ウオオオオオオ!!!!」

アイス「はあああああ!!!!」

「バリン!!!!」

静かな空間に氷が響く

割れたのはアイスの氷だった

アイス「私が・・・負・・・け・・・」

グレイ「はあはあ、勝った・・・ぞ」

「ボタン・・・」

グレイはあまりの魔力消費量に気を失った  
勝者グレイ!!

## 第52話 雷&amp;突風

ウエンディ「グレイさん大丈夫ですかね？」

レイ「あくあいつはやる時はやる男だ、大丈夫だろ」

その時俺の後ろを走っていたラクサスが立ち止った

レイ「ラクサス？」

ラクサス「レイ先に行け」

俺達の背後にはラクサスと睨み合っている『雷帝』がいた

レイ「わかった」

ナツが珍しく何も言わないな・・・

いやラクサスの凄みにビビってるだけだな、あれは

saidラクサス

トルス「お前がラクサス・・・マカロフの孫か」

ラクサス「だったらどうした？」

トルス「同じ雷使い・・・どちらが強いかな勝負だ!!」

ラクサス「おらあ!!」

「バリバリバリ!!」

両者は体を雷にし激しくぶつかり合った

トルス『オリュオス!!』

「ヒュン ヒュン!!」

早い!?

だが俺に雷は効かねえ!!

「バチバチバチ」

ラクサス「ぐっ!!」

なに!!?

トルス「なんだその程度か？」

ラクサス「黙れ!!」

トルス『オリュオス・アゼ!!』

なんだ？

今度は遅い・・・



ラクサス「そんな魔法効かね・・・」

「バリバリバリバリ!!!」

ラクサス「ぐあああああ!!!」

なぜだ!!

俺に雷系の魔法は効かないはず!?

トルス「なぜお前に雷が効くか考えているな？」

ラクサス「!？」

トルス「単純な話だ

俺の方が!! お前より!! 強い!!」

ふぎけやがって!!!

ラクサス「『雷竜方天戟!!!』」

トルス「『ライトニング・ランサー!!』」

トルスの魔法はラクサスの魔法を吸収し撃ち返してきた!!

ラクサス「な!？」

「ドオオオオオン!!!」

トルス「あつけなかつたな・・・」

「バチ・バチバチ」

煙が晴れると雷を食べているラクサスがいた

トルス「おもしろい!!」

ラクサス「次で終わらせてやる!!」

ぶつつけ本番だ、できるかわからねえがやるしかねえ!!!

トルス「我、雷を使役する者

一閃の稲妻となり降り注げ!!!

『ボルティック・ゼロ!!』

ラクサス『滅竜奥義 鳴御雷』!!!  
なるみかずち

「ズドオオオオオン!!!」

今までで最大の魔力が放出され空間が雷に包まれる!!

トルス「ぐ……あ……」

ラクサス「く……俺が……負けるはずねえだろ」

雷が晴れた先になっていたのはラクサス!!

ラクサス「あとは……任せたぞ……」

エルザ「雷が止んだ、どっちが勝ったんだ!?!」

ナツ「ラクサスに決まってんだろ!!」

「つーかこの通路どこまで続くんだよ!？」

エルザ「黙って走らんか!!」

レイ「でも確かに長いな・・・」

かれこれ20分は走ってるぞ!!

てかさつきからウエンデイの胸が揺れてるのが気になる・・・

7年で成長しすぎだろ？

ウエンデイ「レイさんどうかしましたか？」

レイ「いや、なんでもない」

そう言い何気なく後ろを振り返ると風の刃が飛んできていた

レイ「あぶねえ!!」

ウエンデイ「きやつ!!」

ナツ「うお!!」

エルザ「くつ!!」

ガジル「ギヒッ」

ジュビア「・・・」

俺達はギリギリのところで避けガジルだけは受け止めジュビアは流した

ウエンデイをかばった瞬間とつさにウエンデイの胸を揉んでしまった・・・

レイ「わ、わるい」

ウエンデイ「い、いえ／＼」

ジュビア「なにちよつといい感じになってるの!？」

このヤロゝ誰がやりやがった!？」

ヴァーユ「あららゝよけられちゃったかゝ」

レイ「『風帝』か」

ウエンデイ「この人は私が」

レイ「やれるのか？」

ウエンデイ「私だって成長してるんです!!」

俺は胸を見ながらつい口から出た

レイ「確かに・・・」

エルザ「レイ？」

やばい、エルザがイラついている

レイ「よしウエンデイがんばれ」

ウエンデイ「はい!!」

s a i d  
ウエンデイ

レイさんにかんばれって言われたんだ。  
がんばらなくちや!!

ヴァーユ「君みたいなかわいい子が相手？」

ウエンデイ「手加減はいりません!!」

ヴァーユ「あつそ『エデイ・ストーム』」

空気の流れが変わった・・・

これは・・・下からの竜巻!!

ウエンデイは空気の流れを一瞬で察知し軽々と避けた

ヴァーユ「へくやるね」

ウエンデイ「『アームズ×アーマー×バーニア!!』」

ヴァーユ「身体能力をあげる魔法か」

ウエンデイ「『天竜の翼撃!!』」

ヴァーユ「『トウアリアス・ハイウォール!!』」

「ビュウウウ!!」

ヴァーユは圧縮された風で壁を作りウエンデイの攻撃を防ぐ

ウエンデイ「え!？」

ヴァーユ「その程度の魔法なら軽く防げるよ」

この人・・・ふざけてるけど強い!!

ウエンデイ「なら『天竜の碎牙+鉤爪!!』」

ウエンデイは防御魔法を切り裂きヴァーユに蹴りを入れる

ヴァーユ「ぐあ!!」

ウエンデイ「私は負けるわけにはいきません!!」

ヴァーユ「小娘が・・・舐めやがって!!」

ラクサスさんが言ってたように性格が変わった!?

ヴァーユ「我、風を使役する者

天空を引き裂きこの地に吹き荒れる!!

『トユアリアスト・ゼロ!!!』

ウエンデイ「私だって7年なにもしてなかったわけじゃないの!!

『滅竜奥義 照破・天空穿!!!』

ヴァーユ「風の結界が俺の魔法を包んで!!?」

ウエンデイ「はあああああ!!!」

ヴァーユ「がああああ!!!」

ウエンデイの魔法はヴァーユの魔法を包みこみ逆流した

ウエンデイ「か、勝った・・・」

けど、もう魔力が・・・ちよつとだけ休ませてもらおう・・・  
勝者ウエンデイ!!

## 第53話 岩VS鉄

レイ「あーうん．．．はあー」

ガジル「どうした？」

レイ「走るのがだるくなってきた．．．」  
「バキッ!!」

レイ「痛って!!」

エルザ「マジメに走らんか!!」

ナツ「怖え．．．」

「ゴゴゴゴゴゴ」

突如として地面が揺れ始めた

ジュビア「地震？」

ナツ「エルザがキレすぎたからか!？」

ガジル「いや、違うな．．．」



レイ「そこにいるのはわかってる出てこい」

そう声をかけると廊下にある石像から『岩帝』が姿を現した

ガジル「こいつは俺の獲物だろ？」

レイ「ああ、粉々に砕いてやれ」

ナツ「また勝手に決めやがって!!」

エルザ「レイの指示に従え!!」

ナツ「は、はい!!」

ナツが恐怖で震えてる・・・

さすがに今のエルザは俺でも言い返せない・・・

レイ「まあ、急ぐぞ」

s a i d ガジル

ガジル「岩と鉄どっちが硬えか勝負だ!!」

アース「『ロックストライカー』」

ガジル「『鉄竜棍!!』」

ガジルに向かって来た巨大な岩を鉄竜棍で砕く

アース「『フォービッド・グレイブストーン』」

アースはガジルを岩の筒状の檻で閉じ込めた

ガジル 「こんなもんで俺を閉じ込めたつもりか？

『鉄竜剣!!』

「ガキン!!」

な!?

碎けねえ!?

アース 「俺を舐めるな

さっきの攻撃はお前の硬さを調べただけだ」

この野郎、ずいぶん無口だと思つたら・・・

アース 「『ロックレイン』」

ガジル 「!!」 ぐああああ!!」

ガジルの頭上から岩の雨が降り注ぐ

閉じ込められているから回避はできない

アース 「『鉄竜』などたいしたことはない」

ガジル 「あ？」

アース 「『グランド・ダッシャー!!』」

ブレスか!?

ガジル 『鉄竜の咆哮』!!』

アース 「ブレスだと思うか？」

そういう口からの魔法をやめ腕を振るうと全方向からさつきと同じ魔法が向かってくる

ガジル 「がああ!!!」

アース 「だらしなない奴だ

滅竜魔法などたわいもない」

ガジル 「てめえいいかげんにしろよ」

アース 「お前もいいかげんに死ね

お前にかまっている時間が無駄だ」

ガジル 「やなこつた

俺だつてお前を倒してレイ達に追いつかなくちやなんねーんだよ!!!」

アース 「なら次で終わりにしてやる

我、大地を役する者

大地を砕きこの者に牙をむけ

『アークエリア・ゼロ』

ガジル 「岩が鉄より硬えわけねえだろ!!!」

『滅竜奥義 業魔・鉄神劍!!!』

「ゴゴゴゴゴゴゴ!!!」

くっそ硬え!!

だが!! 負けるわけにはいかねえ!!!!

ガジル「うおおおお!!!」

アース「!!!?」

ガジル「おらあ!!!」

「ズドオオオオン!!!」

アース「ぐああああ!!!」

ガジル「ギヒッ!

俺の勝ちだ!! 岩クズ野郎」

勝者ガジル!!!

## 第54話 分かれ道

レイ「・・・どうする？」

エルザ「いや、どうするといわれても」

ジユビア「・・・」

ナツ「もうどれでもいいだろ!!」

俺達は大きな壁にぶつかっていた・・・

道が4本にわかれているのだ!!

レイ「お前の鼻でわかんねえのかよ？」

ナツ「いろんなにおいがゴチャゴチャになってんだよ!!」

てか、お前も鼻いいだろうが!!」

エルザ「ええい!!」

もう誰がどれでもいい選べ!!」

俺は右真ん中、エルザは右、ナツは左真ん中、ジユビアは左を選んだ

レイ「よし、もう誰もサポートには行けねえ……死ぬなよ!!」  
「おう!!」

s a i d ジュビア

この先……ジュビアと似たような魔力が

ジュビアがドアを開けて入るとそこにはプールが広がっていた

ヴェネラ「あら『神竜』じゃないの?」

ジュビア「ジュビアが相手です!!」

レイをこそ望ですってー!?

ヴェネラ「まあいいわ

始めましよ」

この人には負けたくない!!

ジュビア「『水流斬破!!』」  
ウオータースライサー

ヴェネラ「『海流斬破!!』」  
ウエイブスライサー

「パァン!!」

魔法が似てる!!?

ジュビア「くっ!」  
ウオーターネブラ  
『水流昇霞』

ヴィネラ 『ウオーテス・ブレット』

「パアン パアン」

ヴィネラ 「フフ 『スプレッドスクリュー!!』」

ジユビア 「きやああああ!!!」

ヴィネラ 「私とあなたじゃ魔力の質が違うのよ」

そ、そんな・・・ジユビアの魔法が・・・

ヴィネラ 「あなたを殺して次は『神竜』を殺しに行つてあげる」

ジユビア 「!!」

そんなことさせるわけにはいかない!!!

闘志を燃やしジユビアは立ち上がる

ヴィネラ 「まだ立つの？」

ジユビア 「レイの所には行かせません!!」

ヴィネラ 「あつそ、次で終わらせてあげるけどね」

ジユビア 「はあああああ!!!」

「ゴオオオオオ」

ジユビアは全魔力を一点に集め始めた

ヴィネラ 「我、水を使役する者





フレイ「……………」

こいつシカトしやがって!!

力づくで吐かせてやる!!

ナツ『『火竜の咆哮!!』』

フレイ『『コロナブレイズ』!!』

「ドオオオオン!!」

フレイ『『火竜』の力はこの程度か?』

ナツ「舐めやがって!!

『『火竜の鉄拳!!』』

「パシッ!!」

フレイはナツの拳を軽々と受け止める

ナツ「こんにやろ!! うおおおお!!

『『紅蓮火竜拳!!』』

フレイはそれを全て避ける

ナツ「なんで当たらねえんだよ!!」

フレイ「お前の攻撃は単純なんだよ」

!?

前修行の時レイにも言われたな・・・だつたら!!

ナツ 『火竜の煌炎!!』

フレイ 「だから単純だと・・・!!」

ナツ 『火竜の儉角!!』

フレイ 「ぐう!!」

ナツは炎のすぐ後ろから現れフレイに最初の一撃を与えた

ナツ 「へへ、当たったぞ!!」

フレイ 「子供だましを!!」

『アグラデューズ・オゼオ!!』

フレイはあたりを巻き込むすさまじい爆風を放つ

ナツ 「ぐああ!!」

フレイ 「お前が俺を倒してもまだルカとレアグローブ、マスターがいる!!

もう『エンドレス』は止められない!!」

ナツ 「そいつらはレイがなんとかしてくれる!!

俺は今全力でお前を倒すだけだ!!」

フレイ 「所詮人任せか!!」

ナツ 「うるせえ!!」

俺達はいいつを信じてんだ!!」

フレイ「綺麗事を!!」

『メギドキヤン獄炎砲!!』

「グサツ!!」

フレイの煉獄の弾丸がナツの腹を撃ちぬく

ナツ「がはあ!!」

フレイ「お前はここで殺す!!」

あの時の力・・・今使えるか!?

ナツ「ぐっ!! 『モード雷炎竜!!』」

ナツはダメもとで試したら見事に『雷炎竜』に成功した

フレイ「ほう2つの属性か」

ナツ「『雷炎竜の咆哮!!』」

フレイ「『バーンブレイズ!!』」

2つの魔法はぶつかりはじけ飛ぶ

フレイ「その力おもしろい・・・」

俺の魔力が尽きる前に終わらせてやろう」

ナツ「『滅竜奥義・改!!』」

フレイ「我、炎を使役する者

燃え盛る業火の炎よ、すべてを廃塵と返せ!!」

ナツ「『紅蓮爆雷刃!!!』」

フレイ「『エルメキエスド・ゼロ!!!』」

「ズドドドドドオオオオン!!!」

ナツ「ぐあ……」

フレイ「ぐ……」

「バタツ……」

ナツ「はあはあ……俺の勝ちだ!!」

「……イグニールの事聞き忘れた……」

## 第55話 再来

s a i d エルザ

なんだ・・・このおぞましい魔力は？

どこかで感じたような・・・

??? 「おやおや、わたくしの相手をするのはあなたですか 『テイターニア妖精女王』」

エルザ 「!!!」

なぜだ!?

なぜここにこいつがいる!!

エルザ 「マスター・・・ジヨゼ!!」

ジヨゼ 「そんな怖い顔をしないで下さい。

ガジル君とジユビアさんはお元気ですか？」

エルザ 「貴様あ!!」

ジヨゼ 「まあ、そんなことはどうでもいいでしょう

かかってきなさい」

エルザ 「ジョゼーラー!!」

ジョゼは闇の魔法で剣を作り応戦する

エルザ 「換装『黒羽の鎧』」

ジョゼ 「攻撃力を上げる鎧ですか」

エルザ 『『黒羽・月閃!!』』

「キイン」

なに!?

片手で受け止めただと!?

ジョゼ 「ですがまだまだ・・・」

「ガスツ!!」

エルザ 「がはっ!!」

ジョゼはエルザの横腹に蹴りを入れる

ジョゼ 『『妖精女王』も今となってはその程度ですか?』  
テイターニア

エルザ 「黙れ!! 『天輪の鎧』『循環の剣!!』』  
サークル・ソード

「キイキイキイン」

またしてもエルザの剣は防がれる

エルザ 「くそ!!」

ジヨゼ 「まだレイ様の方が遥かにお強い

あの方でも今の私には勝てないでしょうが」

エルザ 「レイがお前に負けるだど？笑わせるな」

ジヨゼ 「あなたは私の足元にも及びません」

エルザ 「その言葉そっくりそのまま返してやろう」

ジヨゼ 「やれるものなら」

今『妖精の鎧』は使えない・・・なら!!

エルザ 『妖刀・紅桜』

ジヨゼ 『アッド・ウエイブ!!』

エルザ 「はああああ!!」

エルザはジヨゼの魔法を切り裂き進んでいく

ジヨゼ 「なに!？」

エルザ 「お前はレイにも私の足元にも及ばない!!」

「ザキイイン!!」

ジヨゼ 「この私があああ!!」

エルザ 「レイの事をバカにするな」

ルカ「やつと来たわね」

レイ「ここまで長えよ・・・」

俺はようやくルカとレアグロブの所にたどり着いた

エドレイ「俺にやらせろよルカ」

ルカ「勝てるならね」

エドレイ「余裕だ」

レイ「何が余裕だ、お前俺に負けてんだろ」

エドレイ『『ダークエクスプロージョン!!』』

レイ『『水竜剣!!』』

「キーン!!」

エドレイ「爆発が起きねえ!？」

レイ「水属性なんだから当たり前だろ」

エドレイ「ウザつてえ!!」

『『テネブラリス・エクスプロージョン闇の爆発剣!!』』

「ドオオオオオン!!」

レイ「な!？」



水属性の俺の剣が吹き飛んだ!!?

エドレイ「さつきとは威力が違えんだよ!!」

レイ「めんどーだなく」

エドレイ「『影人形!!』」

レイの影が突如レイの体自身の動きを止める

レイ「体が動かねえ!!」

エドレイ「死ねえ!!」

「ヒュン!!」

エドレイ「なに!?

消えた!?

俺は影竜の力で地面に潜り回避した

レイ「『影竜の咆哮!!』」

エドレイ「地面から!？」

レイ「『モード白影竜』『白影竜の縄!!』」

エドレイ「ぐああああ!!」

ん?

レイ「あれ〜? 『アナスタシス』はどうした?」

エドレイ「ぐっ、失った力もあると言っただろ」

アナスタシスがいないとはずいぶん楽だな

エドレイ「『闇テネブラリス・メル・フォーリスの真空剣!!』」

レイ「『天竜の咆哮!!』」

「ズドオオオオン!!!」

レイ「お前弱くなったな」

エドレイ「あ?なんだと?」

レイ「前ほど殺気を感じねえんだよ」

エドレイ「くそ!! 黙れ!! 『ダークエミリア!!』」

レイ「『モード天刃竜』『天竜剣零ノ型 絶空・風嵐!!』」

「ザンツ!!!」

エドレイ「ぐ・・・あ・・・」

レアグローブの剣は俺に届くことなく地面に倒れた

レイ「何があつたかはしらねーが勝ちも勝ちだ、レアグローブ」

ルカ「ふふ、あつけなかつたわね」

はあく連戦かよ・・・

レイ「このあとお前らのマスターと戦うと思うとお前とは戦いたくないんだが・・・」

ルカ「そうはいかないわ」

レイ「だよな〜」

ルカ「『天神の南風!!』」

ノトス・・・南風?

レイ「熱っ!!」

ルカ「『天神の北風!!』」

レイ「寒っ!!」

なんでこんなふざけた事してんだよ!!

レイ「『モード神竜!!』」

ルカ「『雷神の鉄槌!!』」

レイ「『神竜の皇!!』」

俺は神の盾で雷のハンマーを防御するが・・・

「バゴン!!」

ルカ「そんな盾で防げるわけないでしょ!!」

レイ「あーもう!!」

防御にも魔力を使うのやめた!!

攻撃に全魔力を回す!!

レイ『神竜剣レイヴェルト』

ルカ『モード白炎神』

レイ『神竜剣一ノ型 神焰刀!!』

ルカ『滅神奥義・改 天火明命』!!  
アミノホアカリ

俺達が大技を放とうとした時、俺とルカの間にはアグロブが割り込んだ

レイ「どけ!!」

エドレイ「俺が・・・負けるはずない・・・」

レアグロブはふらふらしながら右手を空にかざした

エドレイ『モンスタープリズン!!』

モンスタープリズン!!?

レイ「よせ!!!」

エドレイ「うおおおお!!!」

くそ!!

ここであの化け物になられたら勝てるはずがねえ!!

レイ『光輝・神竜拳!!』

「ド」オ!!」

レイ「がはあ!!!」

しかし俺の攻撃は当たらずレアグローブの拳が腹にめり込んだ

エドレイ「がああああ!!!」

ルカ「きやあ!!!」

レアグローブは見境なく破壊活動を続けていく

ルカ「な、なんなのあれ？」

ルカはガタガタ震えながら聞いてきた

まあ、かわいいな

レイ『『モンスタープリズン』をつかって怪物化したレアグローブだ』

ルカ『『モンスタープリズン』?』

レイ「自らを怪物と化し破壊を尽くす力……ちよつとやっかいだな」

エドレイ「オオオオオ!!!」

レイ「ちつ!! 『アイシクルエンゼル永久氷結』!!」

レアグローブの体をじわじわと氷漬けにしていく

レイ「これで時間稼ぎに……」

「バリン!!」

レアグローブ「グオオオオオオ!!!」

レイ「ならないか・・・」

ルカ「ど、どうするの？」

レイ「はあ、しようがない」

俺はため息をつきながらルカの手を取る

レイ「俺から離れるな」

ルカ「!!!／＼」

俺はルカの手を握ったまま魔力を高める

ルカ「んん!! なにをする気!？」

レイ「『合体魔法』だ」

ルカ「私とあなたが!？」

レイ「お前の意思は関係ねえ」

その間もどんだん魔力を上げる

ルカ「ちよつと・・・もう!!」

エドレイ「ガアアアア!!」

もうちよつと上げたかったがしようがない

レイ「『合体魔法』ユニゾンレイド 光と闇の鎮魂歌（レクイエム）!!」

ルカ「んんんん!!」

エドレイ「ギャアアアアア!!!」

白と黒の光が交差しレアグロープの体を包み消滅させた

レイ「ふうく勝ったか」

ルカ「勝ったかじゃないわよ・・・」

ちよつとルカがきつそうだな

体中ボロボロだし

レイ「しょうがねえなく」

俺はルカを抱きしめた

ルカ「ちよつ!!」

なにしてんのよ!?!?!

レイ「うるせえ、喚くな」

俺はルカを抱きしめ『天竜』の力で治癒を始めた

ルカ「はああ♡」

レイ「おまつ!!」

変な声出すなよ」

ルカ「出してないわよ!?!?!」

レイ「たく・・・」

そのまま5分くらい経過した

レイ「もういいだろ？」

ルカ「え・・・」

レイ「え、じゃねえよアホ」

ルカ「別にもうちよつとしてとか思っていないわよ!!」

レイ「誰もそんな事言つてねえよ!!」

ルカ「早く離れなさいよ!!」

「ボカッ」

レイ「痛っ、殴んなよ!!」

ルカ「これからどうする気？」

レイ「もちろんお前らのマスターを倒す」

ルカ「しようがないからついでに行つてあげる」

レイ「別に来なくていいし」

ルカ「行つてあげるって言つてんでしょ!!」

レイ「あーもう分かつたよ!!」

なんなんだよこいつ・・・

とりあえず勝者レイ!!



## 第56話 力量

俺はルカに『漆黒ダークフェニックスの不死鳥』のマスターの所へ案内されていた

ルカ「んこよ」

「ギイイイイ」

??? 「待ちわびたぞレイ・グローリー」

部屋に入ると黒い玉座に顔を隠した金髪の男が座っていた

レイ「この声・・・あの時の・・・」

男の声はエドラスから帰る時謎の空間で聞いた声だった

ルカ「あら知り合いなの？」

レイ「いやなんか俺を闇に染めるとか言ってた」

ルカ「素敵じゃない」

??? 「その計画は無しだ」

お前ではなくルカをつかう」

ルカ「私？」

??? 「レイはもう光に染まりすぎて闇には染まらぬ

だがルカはまだ何色にも染まってははいない」

レイ「悪いがこいつにそんな事はさせねえ」

いるよね、ダメと思っただけならすぐ降りかえる奴

レイ「てかお前名前なんだよ？」

??? 「貴様に名乗る名は無い」

うん、イライラする

レイ「まあいい『白竜のホーリーブレス!!』」

名もなき男はブレスを片手で弾き飛ばす

レイ「マジか!？」

??? 「貴様の攻撃を防ぐなどたやすいことだ」

舐めやがって!!

レイ『モード白雷竜』おらあ!!」

しかし俺の剣をこいつは指だけで受け止めた

レイ「な!？」

??? 「フン!!」

「ド」オ!!」

レイ「ガハア!!」

そのまま俺は地面に叩きつけられた

??? 「レイよ・・・レアグロブ戦で魔力を消費しすぎたのか?」

レイ「うるせーよ!! 『滅竜奥義・改 白雷麒麟・双雷!!』」

俺は2体の麒麟を作りそれをぶつける

「バリバリバリ!!」

これならさすがに・・・

??? 「これならまだマシだな」

レイ「う、うそだろ?」

攻撃は直撃したはずだが男の体には傷1つない

??? 「貴様に我の力の片鱗を見せてやろう」

レイ「ぐっ」

??? 「深淵より来たれ、天より堕ちし魔の住人『ルシファー!!』」

すると名もなき男の背後に黒き翼を持った男が現れた

ルシファー「主よ、なぜわたくしを?」

??? 「憑依だ、ルシファー」

ルシファー「御意」

するとルシファーは名もなき男を翼で包みそのまま黒い羽が舞う  
??? 「この姿も久しい」

羽の中から姿を現すと翼が生え黒く禍々しい姿になっていた

レイ「な、なんだよこのバカげた魔力・・・!!」

ルカ「私もこんなの見たことない!?!」

おいおい、マスターハデスと比べ物にならねえぞ!!

??? 「うなれ『ダークネスストリーム』!!」

名もなき男は黒き翼で暗黒の竜巻を放つ

レイ「ぐあ!!」

俺は避けたはずだったが左腕が巻き込まれる

吹き飛ばされた瞬間竜巻がルカに向かっていくのが見えた

「シュン!!」

レイ「じつとしてろ!!」

ルカ「きやあ!!」

俺はルカを抱え瞬間移動で回避する

いくら敵でも無視はできない

レイ「たくつ、無駄に魔力消費させんなよ」

ルカ「ご、ごめん」

とりあえずもう左腕折れちまつてるし使えないな

レイ「仲間じゃねえのかよ？」

???「しよせん人など手駒にすぎん」

ルカ「!!!」

レイ「人間は道具じゃねえ!!」

今を生きてんだろ!!」

俺は名もなき男に駆けていく

しかしかなりの距離がある

レイ『『モード神竜』『神竜剣零ノ型 神輝・羅刹ノ太刀!!』』

届けえええええ!!

「パキン!!」

レイ「は!？」

俺の魔法はたしかに名もなき男を切ったが切った瞬間・・・

男は割れ別の男に変わった

レイ「どういうことだ!？」

ルカ「マスターの魔法『ネクロマンサー』よ」

レイ「人形って事か？」

ルカ「ええ、生身のね」

レイ「だったらあの魔力はなんだ!？」

魔法だって!!」

ルカ『ネクロマンサー』は他者に自分の魔力を送ることで自分の分身を作れるの」

レイ「くそっ!! あの野郎!!」

ルカ「どつちにしろもうここにはオリジナルはいないわ」

レイ「しようがねえ、ギルドに帰るか

．．．お前は どうするんだ？」

ルカ「私は．．．」

レイ「しようがねえ、とりあえずはお前も来い

どうするかはそこで決める」

ルカ「はあ、わかったわ」

こうして俺達の戦いはひとまず終わった

しかしまだ『漆黒の不死鳥』の脅威は去っていなかった．．．

## 第57話 戦いの後

俺はとりあえずルカを連れてクリスティーナ改まで戻った

一夜「レイ君!!」

無事だったか!!」

レイ「ああ、みんなは!？」

一夜「みなさんは部屋で休んでいる

おや? そちらの綺麗なお方は?」

レイ「ノーコメント

フェアリーテイル  
『妖精の尻尾』に向かってくれ」

一夜「了解」

レイ「お前も部屋行って休んでろ」

ルカ「うん」

「……休憩室……」

「ガチャ」

ウエンディ「レイさん!!」

ナツ「無事だったか!!」

こいつら毎度毎度俺をなんだと思ってるんだよ……

グレイ「レイ、そいつは!!?」

ルカはみんなに見られビクつく

エルザ「なぜこいつがここにいる?」

エルザ「……殺気溢れ出すぞだろ……」

レイ「まあ、いろいろ事情があんだよ」

ルカ「……」

レイ「お前も休んでろ」

ルカ「うん……」

さてどうすつかなく

「……『フェアリーテイル妖精の尻尾』」

「「ただいま……!!!」」



リサーナ「レイー!!」

「ギューー!!」

レイ「痛つてー!!!」

リサーナは俺をおもいつきし抱きしめ、折れている腕もしつかりホールドしていた

リサーナ「な、なに!?!」

レイ「左腕折れてんだよ!!」

リサーナ「ごめーん♡」

こいつ・・・

ウエンデイ「レイさん!!」

なんで早く言わないんですか!!」

レイ「いやだつてお前魔力切れかかってただろ?」

ウエンデイ「う・・・」

マカロフ「よくぞ帰ってきた・・・その子は?」

レイ「あくこの子ギルドに入れようと思つてんだけど」

ルカ「え!?!」

エルザ「なに!?!?」

グレイ「レイ!! そいつは!!」

レイ「わかってる・・・お前は どうしたい？」

ルカ「私は・・・まだ・・・」

まだかゝ

どうするかなー・・・

レイ「じゃあとりあえず従業員として入れば？」

ミラ「あら、それなら大歓迎よ」

ルカ「まあ・・・それなら・・・」

レイ「よし決まり!!」

ミラとキナナこいつの世話頼んだ」

キナナ「任せといて!!」

ミラ「でも住む所どうするの？」

レイ「とりあえずは俺名義でどっかの家買ってやるよ」

リサーナ「お金はどこから出てくるの？」

レイ「俺の貯金で足りるだろ」

リサーナ「あれ私のお金でしょー!!」

レイ「いつからお前のがなったんだよ!?!」

リサーナ「昔からレイの財布は私のもものよ!!」

うわっひでえ!!

マカロフ「よし!!」

レイ達の帰還とルカの歓迎を祝って宴じやー!!」

「おおー!!!」

始まったよ・・・

エルザ「マスター、あの子は・・・」

マカロフ「分かっておる・・・レイがなんとかするじやろう」

レイ「そーゆー事」

俺は酒を飲みながら悠々とした態度で説得する

ギルダーツ「お前はまーた女作ったのか？」

レイ「ギルダーツと一緒にすんな

だからカナが呆れんだよ」

ギルダーツ「言つとくが娘はやらんぞ」

レイ「わかつてるよ!!」

リサーナ「言っておくけどレイの彼女は私だからね!!」

・・・さつきのお返しにちよつといじめよう

レイ「そうなのか？」

リサーナ「な、な・・・!?」

レイ「嘘よ嘘

まあ、うやむやになってたから今言うよ

俺と付き合ってくれ」

リサーナ「ーっ／／ うん!!」

ギルダーツ「お前らー!!」

ここにカップルが誕生したぞー!!」

リサーナ「これでミラ姉達もレイと遊べないわね」

ミラ「あたしはまだまだ狙うわよ♡」

リサーナ「・・・え?」

エルザ「私もだ」

ルーシィ「一応私も」

ジュビア「ジュビアも負けません!!」

レビィ「私だつて!!」

ウル「私達もよ」

ウエンデイ「すみませんリサーナさん」

そーいうルとメルデイ、ウエンデイも立候補する

ルカ「じゃあ私も」

リサーナ「ルカまで!？」

ちよつとレイ!!」

レイ「し、知らねえよ!!」

ナツ「そんな事どうでもいい!! ルカ勝負しろ!!」

出たよ、戦闘バカ・・・

レイ「やめとけ、お前なんか瞬殺だぞ」

ナツ「知るか!! おらあ!!」

ルカ「レイ、やっていいの?」

1回痛い目に合わせないとわかんねーよな

レイ「いいぞ、あいつ外に出せ」

ルカ『水神の海流』

「バツシャーン!!」

ナツ「ぎゃー!!!」

ナツ瞬殺

グレイ「だっせえ」

ガジル「まったくだ」

ナツ「あ!? 今なんて言った!?!」

こうしてナツ、グレイ、ガジルの乱闘が始まりエルザのケーキが吹っ飛びエルザがぶち切れ3人をボコボコにした

ルカ「楽しいギルドね」

レイ「だろ？」

リサーナ「ちよつとー、レイの彼女は私よ？」

ルカ「でもレイに強く抱きしめてもらったわ♡」

リサーナ「レイー!!!」

レイ「治療の為だって!!」

リサーナ「言い訳するなー!!」

レイ「おわー!!」

こうして俺とリサーナは晴れて恋人になった・・・が!!  
同時に女達によるレイ争奪戦が始まるのであった・・・

## 大魔闘演武編

## 第58話　ファイオーレー1へ!!!

俺がギルドに着いたのは昼ごろ

ギルド内ではマカオとロメオが親子喧嘩をしていた

レイ「どうしたんだ？」

ルーシィ「知らない

私達も今来たところ

ロメオ「出るつたら出る!!」

マカオ「出ねえつたら出ねえ!!」

レイ「さつきからなにもめてんだよ？」

ロメオ「レイ兄達がいけない間にファイオーレーのギルドを決める大会が出来たんだ」

レイ「へー」

ナツ「おもしろそうじゃねえか!!」

ロメオ「ファイオーレー中のギルドが集まって魔力を競い合うんだ!!」

その名も大魔闘演武!!!」

レイ「そいつで優勝すれば俺達はフィオーレ1ってことだな!!」

ロメオ「そう!! しかも優勝したら3千万J入るんだぜ」

マカロフ「出る!!!」

「「なーーーーー?!!」」

ナツ「燃えてきたぞ!!!」

レイ「大会はいつだ?」

ロメオ「3ヶ月後だよ」

マカロフ「チーム『妖精の尻尾』!!」

大魔闘演武に参戦じゃあああ!!!」

俺達はギルドの中でこれからどうするかを話し合っていた

レイ「この前の戦いで俺達の力は今について行けてない事がわかった

このままでは勝てないので修行しようと思いまーす」

エルザ「しかし修行といってもどこでやるんだ?」

レイ「季節は夏・・・夏と言えば・・・海だろ!!!」

「よっしゃー!!!」



ナツやグレイ達から歓声上がる  
レイ「場所はアカネビーチ!!

今すぐ出発だ!!」

メンバーは俺、リサーナ、ナツ、グレイ、エルザ、ルーシイ  
ジュビア、ジェラルル、ウル、メルデイ、レヴィ  
ジェット、ドロイ、ハッピー、アビー、シャルルで出発!!!

ーアカネビーチー

レイ「夏だー!!!」

ナツ「海だー!!!」

グレイ「水着だー!!!」

シャルル「あんた達、遊びに来たんじゃないわよ」

ハッピー「そうだぞーっ」

おいおいアビーまで海完全装備じゃんw

ナツ「レイ泳ぎで勝負だ!!」

グレイ「俺もやるぞ!!」

レイ「俺に勝てると思ってんのか？」

ナツ「余裕!!」

レイ「ハンデに5秒やろう」

ハッピー「よーい・・・どん!!」

ナツ「おっしやー!!」

グレイ「負けるかー!!」

レイ「1、2、3、4、5。行くぞ!!」

俺は素晴らしい水竜の力を使い海の上に浮かび滑った

ナツ「なに!?」

グレイ「そんなのありかよ!!」

レイ「ハハハハ!!! 遅い遅い!!」

リサーナ「大人げない・・・」

ルーシィ「リサーナ、みんなでバレーしよ!!!」

リサーナ「うん!!」

こんな事してるが午後はしつかり修行したぜ!!

俺はとりあえず今より数倍魔力を上げることにした

『神竜』のまま魔力を開放し続ける

レイ「くっ・・・」

アビー「もうちょっと開放しても大丈夫じゃない？」

言ってくれる・・・

レイ「よ、余裕っ」

「ドオオオン!!」

さらに魔力を開放した瞬間魔力が吹き飛んだ

レイ「きつつ!!」

ウル「苦戦しているようね」

俺が寝転んでいるとウルが歩いてきた

レイ「まあー簡単にはいかねえよな」

ウル「みんなを集めて」

レイ「どうする気だ？」

ウル「さあ?♡」

まさか・・・

俺の予想は見事に当たった・・・

ウルはみんなが集まった所でこれから行うことの説明を始めた

ウル「私の進化した『時のアーク』であなた達の第二魔法源セカンドオリジンを開放させるわ」

レイ「第二魔法源セカンドオリジンの事は大体調べたがそんな簡単にできるものなのか？」

ウル「想像を絶する痛みと戦うことになるわ」

レヴィ「目が怖い・・・」

レイ「俺から頼む」

ウルは俺の体に魔法陣を書いていく

ウル「相変わらずいい体ね♡」

素晴らしい書きながら俺の体を撫でまわす

リサーナ「ちよつとウル？」

ウル「はいはい・・・これでOKよ」

ん？

じわじわと痛んでくるが耐えられなくはないな

レイ「んく、次はナツやったらどうだ？」

ナツ「よし!!」

ウル「なんで動けるのよ・・・」

ウルはナツに魔法陣を書き始めた

グレイ「レイが大丈夫なら俺達も・・・」

ナツ「が・・・ああ・・・があっ!!」

グレイが喋っているとナツが苦しみ出した

グレイとルーシイの顔から血の気が引いていく

ルーシイ「グレイ・・・レイだから大丈夫なのよ」

グレイ「そ、そうだな」

リサーナ「あ、あれ私達もやるの？」

ジュビア「え、ええ」

リサーナ「レイ、あれやる時私の手握っておいて」

ジュビア「ジュビアもお願ひします・・・」

あまりの恐怖でジュビア敬語に戻ってるよ

リサーナ「ジュビア、今回だけはさすがに許すわ・・・」

レイ「まあがんばれ・・・」

昼から始めたので夜までには全員開放が完了した

しかしおれにとっては悪夢の始まりだった・・・

## 第59話 星座の世界

——海合宿2日目——

ナツ「うーん充実してるなあー!!」

グレイ「『セカンドオリジン第二魔法源』のおかげで新しい技も考えられるし!!」

エルザ「この調子なら3カ月鍛えればこの時代に追い付くのも夢ではなさそうだ」  
リサーナ「レイどうしたの?」

俺は朝からビーチマットの上でだらーっとしていた

レイ「……………」

リサーナ「ちよつとー?」

そう……こいつらは昨日の出来事を覚えていないのだ!!

バルゴ「姫!! 大変です!!」

突然ルーシイの真下からバルゴが現れた

ルーシイ「キヤーー!!」

どこから出てきてんのよー!!」

フェアリースワイア

『妖精の球』の中にいたって事は・・・」

ジェラール「契約している星霊もずっと星霊界にいたということになるな」

バルゴ「いえ・・・それは大した問題ではないのですが」

レヴィ「何かあつたの？」

バルゴ「・・・星霊界が滅亡の危機なんです・・・みなさんどうか助けてください」

ルーシイ「・・・!!」

エルザ「なんだと？」

グレイ「そりや一体・・・」

バルゴ「星霊界にて王がお待ちです」

みなさんを連れてきてほしいと」

ナツ「おし!! まかせとけ!!」

友達の頼みとあっちゃあ・・・」

ルーシイ「待つて!!」

星霊界に人間は入れないはずじゃ？」

バルゴ「星霊の服を着用すれば星霊界にて活動できます・・・いきます」

ルーシイ「ちよ、まだ心の準備が」

そう言ってる間に地面に魔法陣が展開された

「ボッシュン!!」

ドロイ「なんで俺達だけ」

ジエツト「おいてけぼり？」

おいてけぼりを喰らったのは

ジエツト、ドロイ、ジエラール、メルデイ、ウルだ

——星霊界——

「スタツ」

リサーナ「きゃー!!」

俺は見事に着地し、落下してくるリサーナをお姫様キャッチした

レイ「大丈夫か？」

リサーナ「うん」

ジュビア「リサーナさんばっかり!!」

ジュビアは頬を膨らませている

リサーナ「へへーん」

「!!!」



俺達は周りの景色に驚いた

ルーシイ「ここが星霊界!？」

ウエンデイ「わあ」

リサーナ「きれい・・・」

???「よく来たな古き友よ・・・」

突然目の前に巨大な老人が姿を現した

ルーシイ「あんたは・・・星霊王!!」

ナツ「でかつ!!」

ハッピー「ヒゲー!!」

エルザ「お前がここの王か」

「(お前って言ったー!!)」

さすがにこれは失礼だろ・・・

星霊王「いかにも」

ルーシイ「星霊界が滅亡の危機って・・・」

星霊王「・・・ニカ」

重い沈黙がながれる・・・が星霊王はにやけた

星霊王「ルーシイとその友の!!」

時の呪縛からの帰還を祝してえ!!!

宴じゃー……っ!!!  
」

「……へ?」

ルーシイ「星霊界の滅亡って?」

バルゴ「……てへ」

ルーシイ「なにー!!!」

タウロス「ガハハハッ!!」

MOだましてスマネツス

キャンサー「驚かせようと思ったエビ」

カプリコーン「ルーシイ様達の帰還を祝してメエたちなりに考えたのです」

リラ「みーんなでお祝いしたかったけどいっぺんには人間界に顕現できないでしょ?」

アリエス「だからみなさんを星霊界に呼んだの……すみません」

スコルピオン「今回だけだからな、ウイ」

アクエリアス「そう!! 特別よ」

ジェミニ「ピーリピーリ」

ナツ「なーんだそーゆー事かー!!!」

サジタリウス「もしもしー!!」

グレイ「ビックリさせやがってー!!」

ロキ「久しぶりだねみんな!! さあ!!

僕の胸に飛び込んでもいいよルーシイ

ルーシイ「・・・もう」

星霊王「さあ!!! 今宵は大いに飲め!!

歌え!! 騒げや騒げ!!

古き友との宴じゃ!!!」

「おーおーおー!!!」

俺達は各自散らばり宴会を楽しんだ

グレイ「元気だったか?」

ロキ「試験は残念だったね

それとレイ、リサーナと付き合ってたんだってね」

レイ「ああ、知ってたのか」

ロキ「昔から好きだったもんね」

レイ「うるせーよ」

リサーナ「この料理おいしーよ!!」

レイ「おー今いくー」

俺は2人から離れリサーナと星霊王の近くで飯を喰い始めた

星霊王「古き友レイ・グローリーよ・・・そなたに頼みがある」

レイ「なんだ？」

星霊王「数年前、何者かが星霊界に封印してあった『デビル・キ悪魔の鍵』を盗んだのだ」

『悪魔の鍵』・・・まさか・・・

レイ「それは人間が盗んだのか？」

星霊王「いや、盗んだのは星霊であつた・・・

しかしあれが人間の手に渡るとなると・・・」

レイ「おそらくもう人間の手に渡っている」

星霊王「うーぬ・・・」

レイ「手合わせしたが正直ヤバい力だな・・・」

星霊王「倒して取り戻す事は可能か？」

レイ「微妙だな・・・俺が倒したのはやつ<sup>の</sup>分身だつた

オリジナルとなると・・・」

星霊王「だが『悪魔の鍵』を使いこなすのには最低8年かかる

まだ使いこなせてないとすれば・・・」

レイ「やつを倒せるって事か。」

しかもやつは『エンドレス』で世界を破壊しようとしている」

いちよ俺達が止めたがピースはまだあちら側にある・・・」

星霊王「たしか『エンドレス』は再起動までかなり時間がかかったはず」

レイ「どのくらいだ？」

星霊王「詳しく話わからぬ

だが3カ月は大丈夫だろう」

レイ「それまではどうにかするか」

リサーナ「大変な事になったわね」

レイ「けどやらなくちゃいけねえ」

「ポロロン♪」

俺達の話が終わるとハーブの音とリラの歌声が聞こえてきた

リラ「古き友　私に見える　あなたがそこにいる」

古き友　私は誓う　決して途切れぬ絆

歩き出す　無限の荒野　涙こらえて　明日へと進む

あなたの為の　星だから　私は輝ける

あなたの為の　歌だから　笑顔をみせて

ルーシイの頭の中には父親との幼いころの記憶、つらい記憶、悲しい記憶が次々と蘇り涙があふれていく

ルーシイ「みんな・・・ありがとう・・・大好き!!!」

星霊王「ニカ」

エルザ「うむ・・・存分に楽しんでしまった」

グレイ「こんなうめえもん食った事ねえよ」

レイ「レシピもらったし今度俺も作ってみるか」

リサーナ「やったー!!!」

ナツ「食ったのか!?

食ったのかおまえらー!!!」

レヴィ「本当にこの本貫っていいの?」

ウエンディ「私この服が欲しいです!!」

あれ着てると子供っぽいよな・・・

ちよつとサイズ小さいからパツツンパツツンで胸強調されてるし・・・

ハッピー「変なブルーが離れないよ」

シャルル「あつちも妙に気が合っちゃって」

アビー「恋バナしてたからね」

アクエリアス「苦労してんだねアンタ」

ジュビア「アクエリアスさんこそ!!」

星霊王「古き友よ、そなたには我々がついている」

ルーシィ「うん!!!」

星霊王「それとレイ・グローリーよ・・・例の件頼んだぞ」

レイ「まかせとけ」

星霊王「では!! 古き友に星の導きの加護があらん事を!!!」

エルザ「本当にお前は星霊に愛されているな」

ルーシィ「みんな最高の仲間だよ」

リサーナ「私は最高の彼氏に愛されてるわよ」

レイ「なんの自慢だ」

ナツ「さーて、だいぶ遊んじまったし帰ったらたつぷり修行しねーとな」

グレイ「そうだ!! 3か月で他のギルドの奴らに追いつかねーと!!」

バルゴ「そういえば言い忘れたことが」

ナツ「？」

バルゴ「星霊界は人間界とは時間の流れが違うのです」

ナツ「まさかそれってこっちでの1年が人間界での1日・・・みてーな？」

グレイ「夢のような修行ゾーンなのか?!?!」

バルゴ「いいえ逆です。星霊界で1日過ごす人間界では3カ月経ってます」

「「・・・え？」」

ウル「ヤーと帰ってきたわね」

ジェラール「きちんと修行できたのか？」

メルデイ「大魔闘演武はもう5日後よ」

「「終わった・・・」」

ルーシィ「ヒゲー!! 時間返せー!!」



## 第60話 Bチーム

——『フェアリーテイル妖精の尻尾』——

レイ「ただいま」

「「はあく」」

マカロフ「なんじゃ？修行はうまくいったのか？」

ウル「セカンドオリジン第二魔法源を解放したくらいね」

マカロフ「そうか・・・今からここにいるメンバーでチームを決める!!」

ルーシィ「ラクサスとかは!!」

マカロフ「まだ帰ってきてこないんだもん・・・」

さあ、俺はどっちに入るかな♪

マカロフ「まずナツ、グレイ、エルザ!!」

カナ「ここは当然ね」

マカロフ「そして・・・ルーシィとウエンディ!!」

ルーシイ「ええ!! レイは!？」

レイ「じいさんが決めたんだ、それに従え」

マカロフ「ガチで挑むならギルダーツとラクサス、ミラジエーンが欲しかったなあ…  
と思ったり…」

「口に出してんぞ!!!」

リサーナ「残念だったねレイ…」

レイ「それはどうかな？」

俺はにやけながら答えた

マカロフ「それではおぬしらは先にクロツカスに向かえ!!」

後から応援にいく!!」

ナツ「おっしやー!! 燃えてきたぞ!!!」

そしてナツ達は花の都クロツカスに向かった

――数時間後――

ラクサス「戻ったぞじい」

マカロフ「遅いぞバカタレ共!!!」

ミラ「もうチーム決まっちゃいました？」

マカロフ「うむ、じゃがおぬしらにはBチームとして参加してもらおう!!」  
ミラ「Bチーム？」

レイ「おう、2チームまで出せるらしいぜ？」

勝つためにはなんでもしねーと優勝できねーぞ」

マカロフ「メンバーはレイ、ガジル、ラクサス、ミラ、ジュビアじゃ!!」

ガジル「冗談じゃねえ

そんな見せモンに誰が出るかよ」

ラクサス「出るのはかまわねーがBチームつてのが気にいらねえ」

マカロフ「じゃあこうしよう

勝った方のチームがもう一方のチームを1日好きにできる」

ラクサス「好きに・・・」

ガジル「できる？」

ミラ「おもしろそうね」

ジュビア「そうですか？」

なんならジュビアはAチームに行つてレイを・・・」

レイ「俺あんまりしたい事がない・・・まあやるか!!」

マカロフ「よししナツ達は先にクロツカスに向かつておる!! お前達も向かえ!!」

ナツ達にはBチームのことは言うのではないぞ!!」

レイ「よし妖精フェアリーテイルの尻尾Bチーム出発だ!!」

ガジル「なんででめえが仕切ってたんだよ!!」

ジュビア「ジュビアはレイがいいです!!」

ミラ「私も」

ラクサス「誰でもいい」

レイ「決まりだな」

ふっふっふ、ガジル悔しそうだな

よし新技たっぷりと試してやる!!

## 第61話 空中迷路

「クックカスー」

レイ「おー!! やっぱ首都は華やかだな!!」

ガジル「でけー街だな」

マカロフ「来たかお前達」

もう参加申請は済ませたぞ」

レイ「ルールはもう調べてあるし規定の夜中の12時まで時間あるな」

ラクサス「俺は宿で寝とく」

ガジル「俺はリリーと特訓だな」

ミラ「こんな大きな街来たからにはショッピングでしょ」

リサーナ「さんせー!!」

ジュビア「ジュビアも行きまーす!!」

レイ「お前ら金は?」

3人はそろって俺の方を眼を輝かせて見た  
レイ「・・・マジか？」

「服屋」

リサーナ「見てレイ」

「この服どう？♡」

リサーナはピンクのシャツとジーパンを穿いて試着室から出てきた  
レイ「んん似合ってるよ」

ミラ「これはどう？」

ミラは黒と白のドレスで出てきた

ミラ「んんいいんじゃない？」

ジュビア「ジュビアはどう？」

ジュビアはいつもと違う胸が開けた青いドレスで出てきた

レイ「似合ってる」

「髪も下ろしたらいいと思うぞ」

「「じゃあこれにする♡」」

誰も買ってやるなんて言ってるのに・・・

レイ「はあ、会計お願いしまーす」

俺は服の合計金額にあごが地面に着くほど口を開けた  
それぐらい驚く金額だったんだ

店員「4点合わせて36万Jでございます」

レイ「・・・は？」

店員「36万Jでございます♡」

ちよつと待て!!

ルーシイの家賃約5か月分だぞ!!

アビー「諦めなさい」

レイ「はい・・・」

店員「ありがとうございますー」

俺の金が・・・いくら俺だって月に使う金決めてるんだよ？

次からは値札見よう・・・

レイ「ミラ、ジュビアもう宿に戻るぞ・・・」

「はーい♡」

リサーナ「2人だけじゃ心配だから私も行くー!!」

レイ「おーう・・・」

「……宿屋トワイライトムーン……」

ラクサス「12時まであと10分か……」

レイ「なぜ12時に宿に居るように言われたか気になるな」

ジェラール「レイ……」

レイ「ジェラールか、どうした？」

ジェラール「実は7年の間に大魔闘演武で気になる事があるんだ」

レイ「なんだ？」

ジェラール「この大会の間いつもゼレフに似た魔力を感じる……」

レイ「ゼレフだ?!」

ジェラール「ゼレフだとは言い切れないが……」

その魔力を選手の中から探ってほしいんだ

レイ「わかった」

お前は どうする気だ？」

ジェラール「俺は主催者側から探してみる」

レイ「りよーかい、1日ごとに報告する」

ジェラール「ああ、がんばれよ」



そう話してうちに10分が経ち鐘が鳴り響いた

ガジル「12時か・・・」

マトー「大魔闘演武にお集まりの皆さん、おはようございます」

ミラ「外よ!!」

俺達はベランダに飛びだし空を見た

ガジル「なんだあれ!!」

ラクサス「かぼちゃ・・・か?」

マトー「これより参加チーム113を8つにしぼる為の予選を開始します」

ジユビア「予選なんて聞いてませんよ?」

ミラ「113チームって・・・」

フィオーレのギルドの数にしては多くない?」

レイ「ギルドから2チーム出せるからだろ?」

マトー「毎年参加ギルドが増えて内容が薄くなつてるとの指摘をいただき

今年は本選を8チームのみで行うことになりました。予選のルールは簡単」

「ゴゴゴゴゴゴゴ」

突如俺達の宿が変形を始めた

ラクサス「なんだ!？」

レイ「宿が変形してる!？」

マトー「これより皆さんには競争をしてもらいます

ゴールは本選会場ドムス・フラウ

魔法の使用は自由、早くゴールした上位8チームのみ予選突破となります」

レイ「魔法の制限がないなら俺達が有利だな」

マトー「それでは大魔闘演武予選!!! 空中迷路開始!!!」

レイ「よし行くぞお前ら!!」

「おう!!!」

リサーナ「みんながんばってねー!!!」

アビー「間違えても予選落ちはしないようにねー!!!」

リースカイラビリンスー

ラクサス「レイどうやって進むつもりだ?」

レイ「俺の転移魔法で

ゴールの方角はどっちだ?」

ミラ「東のはずよ」

レイ「おしお前ら俺の周りに集まれ」

「シュンツ!!」

俺達は東の方角に足を進めた

「シュンツ!!」

俺達が瞬間移動した先には別のギルドの奴らが争っていた

ガジル「なんだありや？」

ミラ「なにかを奪い合ってる？」

レイ「確かめるか『時竜の咆哮!!』」

俺は『セカンドオリジン第二魔力源』を開放したときに自分の中に見つけた新たな力『時竜』であいつ

らの動きを止めた

ラクサス「動きが止まった!？」

レイ「『時竜』は時を司る力だ

さすがに魔力の消費が尋常じゃないが」

今ので俺の魔力の3分の1は持つてかれたな

実戦には使えないな

ジュビア「これは・・・地図？」

レイ「なるほど地図をメモっとけばどこか分かるな」

ガジル「ギヒツ、これ奪つとくか？」

レイ「ああ、一応持つとくか」

その後も俺達は東に瞬間移動し続けた

マトー「おめでとうございます

予選通過決定です」

レイ「はあはあ・・・俺達何位だった？」

マトー「2位です、すばらしいですね」

ミラ「レイさまさまね」

瞬間移動の連発かなりきつっつ!!

まあなんとか原作どおりに2位だな・・・

## 第62話 開会式

ーードムス・フラウーーー

「オオオオオオオ」

レイ「歓声がすげーな!!」

ガジル「ギヒツ、『妖精の尻尾』<sup>フェアリーテイル</sup>の力見せてやろーぜ」

チャパティ「今年もやってきました!!」

年に一度の魔法の祭典!!! 大魔闘演武!!

実況は私チャパティ・ローラ

解説には元評議員のヤジマさんにお越しいただいております」

ヤジマ「よろしく」

チャパティ「1日目のゲストにはミスフェアリーテイルにも輝いた

<sup>ブルーベガサス</sup>『青い天馬』のジェニー・リアライトさんをお招きしています」

ジェニー「今年はウチが優勝しちゃうぞ♡」

チャパティ「さあ・・・いよいよ選手の入場です」

ヤジマ「よろしく。あー・・・あー・・・よろしく」

チャパティ「ヤジマさん!! ちゃんと拡声器音でてますから」

「あははっははっ」

ヤジマさんも相変わらずだな

チャパティ「まずは予選8位!! 過去の栄光を取り戻せるか?

名前に反した荒くれ集団『妖精の尻尾!!!』

「ブーブーブーブー」

レイ「すげえブーイングだなおい・・・」

ラクサス「てかあいつら8位かよ」

チャパティ「毎年最下位だった『妖精の尻尾』が予選を突破しすでに8位以内確定で

すからねえ」

「さあ・・・続いては予選7位

地獄の猟犬軍団『四つ首の番犬!!!』

「6位には女性だけのギルド

大海原の舞姫『人魚の踵!!!』

レイ「・・・女だけだと?」

ミラ「レイ？」

ミラがすげー目つきで睨んでる・・・

チャパティ「5位には漆黑に煌めく青き翅『青い天馬!!!』」

「4位・・・愛と戦いの女神、聖なる破壊者

『蛇姫の鱗!!!』」

「続いて第3位おおつとこれは意外・・・

初出場のギルドが3位に入ってきた!!

真夜中遊撃隊『大鴉の尻尾!!!』」

レイ「・・・ラクサス」

ラクサス「ああ、親父のギルドだ」

チャパティ「予選通過のチームも残すとこあと2チーム!!

さあ!! 予選2位のチームの入場です」

レイ「よし行くぞお前ら!!」

チャパティ「おおつとこれは意外!!

堕ちた羽のはばたく鍵となるか!!?

まさか!! まさかの・・・」

ナツ「んな・・・!!!」

チャパテイ「『妖精の尻尾』<sup>フェアリーテイル</sup> Bチームだあ!!!」

「キヤーレーレイ様ー!!!」

レイ「うお!? なんだ!!!」

ミラ「7年経ってもレイの人気は衰えないわね」

Aチームとは違って俺達（俺）は大歓声かw

ナツ「なにー!!!?」

ウエンデイ「ミラさん!!!」

ナツ「ガジル!!!」

グレイ「ジユビア!!!」

ルーシイ「ラクサスとか反則でしょーっ!!!」

エルザ「レイが入っていなかった理由はこれか!!!?」

チャパテイ「いやー今回からのルール改正による戸惑ってる方も多みたいですねヤ

ジマさん」

ヤジマ「ウム・・・今回の大会は各ギルド1チームないス2チームまで参加できるん

だよなあ」

マカロフ「かーっはっはっはっはっ!!!」

見たかーっ!!! これが妖精の尻尾<sup>フェアリーテイル</sup>じゃーっ!!!」



レイ「すげー大声で自慢してんなじいさん・・・」  
チャパティ「決勝では各チームごとの戦いになる訳ですが

同じギルド同士で争う事ができるのでしょうか？」

ヤジマ「大丈夫じゃないかねあそこは」

ナツ「冗談じゃねえっ!!!!

たとえ同じギルドだろうが勝負は全力、手加減なしだ!!!

別チームとして出場したからには敵!!! 負けねえぞコノヤロウ!!!

ガジル「望むところだよ予選8位のチームさん」

ナツ「ぬぐっ・・・」

レイ「エルザ、ぶつかっても手加減はしねえからな」

エルザ「こちらも全力でやらせてもらおう」

ジユビア「ルーシイには負けませんよ」

ルーシイ「私だつて!!」

ぶつかんのが楽しみだねえ〜

チャパティ「さあ、いよいよ予選突破チームも残すとこあと1つ!!

そう!!! 皆さんすでにご存じ!!! 最強!!! 天下無敵!!!

これぞ絶対王者!! 『剣咬セイバートウリスの虎』だあ!!!!

『セイバートゥース剣咬の虎』が入場してくると会場のボルテージが一気に上がった

ナツはステイングと、ガジルはローグと目が合う

ガジル「何ガンたれてんだコラ」

ローグ「ガジル」

ナツ「出てきたか」

ステイング「楽しもうぜナツさん、それと・・・」

俺は2人と目があつた

ステイング「レイさん」

レイ「お前らが双竜か・・・」

ボコボコにしてやるから安心しろ」

ステイング「尊敬してるアンタと戦えるなら願ったり叶ったりだ」

チャパティ「では・・・皆さんお待ちかね!!!」

大魔闘演武のプログラム発表です!!!」

地響きとともに地面からプログラムが書かれた石板が出現した

チャパティ「まずは競技の方ですが、これには1位〜8位までの順位がつきます

順位によって各チームにポイントが振り分けられます

競技パートはチーム内で好きな方を選出する事ができます

続いてバトルパート、こちらはファン投票の結果などを考慮して

主催者側の方でカードを組ませてもらいます」

ラクサス「勝手に決められんのかよ」

レイ「楽しみが増えていいじゃねえか」

チャパティ「バトルパートのルールは簡単

Aチームvs Bチーム、Cチームvs Dチーム、Eチームvs Fチーム

Gチームvs Hチームとこのように各チーム対戦していただき

勝利チームには10P、敗北チームには0P

引き分けの場合は両者5Pずつ入ります

では、これより大魔闘演武オープニングゲーム『ヒドゥン隠密』を開始します

参加人数は各チーム1名、ゲームのルールは全選手出そろった後に説明し

ます」

ラクサス「さーて誰が出る？」

レイ「ジュービアお前が行け」

ジュービア「はい!!」

チャパティ「各チーム出そろいました!!」

『クワトロケルベロス』  
『四つ首の番犬』からはイエーガー!!」

『人魚の踵』からはベス・バンダーウッド!!

ブルーベガサス  
『青い天馬』からはイブ・テイルム!!

セイバートウース  
『剣咬の虎』からはルーファス・ロア!!

ラミアスケイル  
『蛇姫の鱗』からはリオン・バスティア!!

フェアリーテイル  
『妖精の尻尾』 Aからはグレ・フルバスター!!

フェアリーテイル  
『妖精の尻尾』 Bからはジユビア・ロクサー!!

レイ「ジユビア本気で行けよ!!」

グレイ「お前には負けねえよリオン」

リオン「こつちのセリフだ」

チャパテイ「それでは第1競技『ヒドゥン隠密』開始します!!!」

## 第63話 かくれんぼ

レイ「さーでどんな競技かな？」

マトー「フィールドオープンカポ!!!」

「ギユウウウウウン」

グレイ「なんだ!？」

ジユビア「え？」

レイ「街・・・か？」

ラクサス「街を具現化するとはな」

チャパティ「会場の皆さんは街の中の様子を魔水晶ビジョンにてお楽しみください

隠密のルールは簡単、互いが鬼であり追われる側なのです」

ガジル「意味がわからねえ・・・」

チャパティ「この街の中で互いを見つけてどんな魔法でもかまいません

一撃与えるとダメージの有無を問わず攻撃を与えた側が1P獲得」

「ビビビビビビ」

グレイ「な、なんだこれは？」

突如として街の中に参加者8人の分身が無数に現れた

レイ「ただのかくれんぼだと思ったがそうはいかないか」

チャパティ「これは皆さんのコピーです

間違えてコピーへ攻撃をしてしまった場合IPの減点となります

さあ!! 消えよ静寂の中に!!

闇夜に潜む黒猫が如く!!

『隠密』ヒドゥン開始!!!」

「ジャーン!!!」

レイ「これは俺が行った方が良かったかもな」

ミラ「どうして？」

レイ「俺の『氷幻竜』なら俺とまったく同じ分身を作れる

魔力も同じだから探られることはないからな」

さっそく『大鴉の尻尾』レイブンテイルのナルプテイニングがグレイを騙しAチームがマイナスされる

ラクサス「あーゆー使い方もあるのか」

レイ「グレイのやつキョロキョロしすぎだ・・・」

あんなんじや・・・」

またもグレイはナルプティングにやられる

レイ「ほらな」

ガジル「ジュビアのやつはどうしたんだ!!」

ジュビア「グレイさーん」

リオン「んがっ!!」

そのときジュビアが空から落下しリオンの上へ着地、1Pが入った

グレイ「おいおい手助けは無用だぜ」

ジュビア「ジュビアはあなたに勝ちます

マスターと約束しましたから」

グレイ「じいさんと約束だあ?」

ジュビア「ええ

ジュビア達が勝ったらグレイさん達のチームを好きにできるんです」

グレイ「ふざけんなっ!!」

ジュビア「でもジュビアはレイを・・・♡」

ジュビアの脳内には1日俺と付き合ってるイメージが浮かんでいく

レイ「それ無理だろ!!!」

グレイ「おいじーさん!!! 聞いてねえぞ!!!」

そのローカルルール俺達のチームにも適用されんדרוןな?!

マカロフ「も、もちろん」

レイ「あーあ、ばれちやつた〜」

そんな事しているとグレイとジュビアにナルプテイグが割り込み攻撃する

ガジル「あの野郎俺達ばかり・・・」

そのとき突然雪が降り始めた

ミラ「雪?」

レイ「イブだな」

雪を降らせて体温を下げるのが目的か

イブは狙い通り連続でポイントを獲得していく

その後も各地で静かな攻防が繰り広げていく

ラクサス「ん?」

『剣咬セイバートウリスの虎』のやつがいねえな

ルーファス「この競技は地味すぎる

私は覚えているのだ、1人1人の鼓動・足音・魔力の質・・・」



ミラ「あんな目立つ所に？」

ガジル「ジュービアやつちまえ!!」

ルーファス「憶えている・・・憶えているのだ『記憶造形メモリーメイク・・・

レイ「造形魔法か!？」

ルーファス「・・・星降ル夜二!!!」

「ドババババ!!!」

ナルプテイニング以外の魔導士が喰らっていく

ナルプテイニングが反撃に向かうがそれをも撃破する

チャパティ「ぜ、全滅!!! 一瞬で首位に立った!!!

これがルーファス!!! これが『剣咬セイバートゥースの虎』!!!

ルーファスの行動に会場が盛り上がる

グレイ「造形魔法だあ？」

ふざけやがって!!

『隠密ヒドゥン』つてルールを守りやがれ!!」

しかし例によって例のごとくナルプテイニングがグレイの邪魔をする

レイ「確実に俺達のギルドを潰したいみたいだな」

ラクサス「クソ親父が!!」

「ビーーーーー」

チャパティ「ここで終了ー!!」

順位はこのようになりました!!

これは第一競技ですので順位がそのまま暫定順位となります」

1. 剣咬の虎 10P
  2. 大鴉の尻尾 8P
  3. 蛇姫の鱗 6P
  4. 青い天馬 4P
  5. 人魚の踵 3P
  6. 四つ首の獵犬 2P
  7. 妖精の尻尾B 1P
  8. 妖精の尻尾A 0P
- チャパティ「やはり予想通り1位は剣咬セイバートウリスの虎でしたねー!!」

ヤジマ「見事だったねえ」

レイ「このスタートはまずいな・・・」

問題は俺が誰と当たるかだな

ジェラールと変わって入ってる訳だから流れるにはジュラ・・・

レイ「しんどいな・・・」

チャパテイ「それではバトルパートに移りましょう!!」

早速私の手元に対戦表が届いています!! 1日目第1試合!!

『妖精の尻尾』フェアリーテイル Aチーム ルーシィ・ハートファイリア!!」

ルーシィ「あたし!!」

チャパテイ「VS!! 『大鴉の尻尾』レイブンテイル フレア・コロナ!!」

フレア「金髪う」

この時まで俺は原作どおりに進むと思っていた

## 第64話 0P

レイ「よしルーシイぶちかましてやれー!!」

ルーシイ「(レイが応援してる!!)」

ミラ「けど心配なのは・・・」

レイ「レイブンが何かしでかさないかってことだな」

たしかフレアはアスカちゃんを狙うんだよな

ナツが守ってくれるか・・・

チャパティ「制限時間は30分

その間に相手を戦闘不能にできたら勝ちです

それでは第一試合・・・開始!!!」

ルーシイ「行くわよ!!」

開け!!! 『金牛宮の扉』 タウロス!!」

タウロス「MOオーー!!」

フレアはタウロスの一撃を軽々と避ける

ルーシイ「スコープオン!!!」

スコープオン「ウィーアー!!!」

『サンドバスター』!!!

フレアは髪を伸ばしガードする

ルーシイ「タウロス!! スコーピオンの砂を!!!」

タウロス「MOバツチリ!! 吸収!!」

スコープオン「いきなタウロス!!ウィー!!!」

タウロス「MOオオオオ!! 『砂塵斧アルデバラン』!!!」

ミラ「すごい!! 2体同時開門!!」

フレア「ぐう!!」

金髪う『髪しぐれ狼牙』!!」

ガジル「髪が狼に!!?」

・・・ジュラが反応してる・・・気がする・・・

ルーシイ「開け『巨蟹宮の扉』キャンサー!!!」

キャンサー「カットならおまかせエビ」

キャンサーはフレアの髪を綺麗にカットしていく

フレア「私の髪が!!!」

おのれえつ!!」

ルーシイ「え?」

きやああああ!!!」

フレアの髪が地面からルーシイの足を掴み叩きつける

フレイ「私の赤髪は自由自在に動く」

ルーシイ「だつたら私の『星の大河』エトワールフルークも・・・自由自在なの!!!」

フレア「なに!?!」

2人はお互いを回しすごいスピードで回転していく

チャパティ「これは一回戦から息つくヒマもない攻防戦ー!!!!」

親子ギルド対決!! 女騎士の戦い!! どっちも引かず!!!!」

ジェニー「妖精の尻尾の方がちよつと優勢に見えるわね」

ルーシイ「痛つ・・・ブーツが」

フレア「私の・・・焼ける髪・・・赤髪がその程度のダメージ・・・」

そろそろか・・・

フレア「オオオオツ!!!」

フレアは髪を地面に突っ込んだ

ルーシイはどこから出てくるか警戒する  
ルーシイ「アスカちゃん!! リサーナ!! んぐ!!」

ちよつと待て!!?

アスカちゃんだけじゃねえ、リサーナもだど!!?

周りの奴は明らかに聞こえてないよな・・・

ガジル「おいレイ・・・」

そっかこいつも耳良かったな

レイ「お前も聞こえたか？」

ガジル「ああ」

レイ「行つてくる」

「シュンツ!!」

俺はリサーナの元へ瞬間移動した

ナツも俺と同じタイミングでアスカちゃんを抱いているリサーナの元へ着いた

「シュンツ!!」

リサーナ「レイ、ナツ!?

どうしたの？」

ナツ「俺達は耳がいいんだよ!!」

レイ「お前ら誰の彼女を傷つけようとしたかわかってんだろ？なあ!!？」  
「ブチブチブチ!!」

ナツ「ルーシイ今だあ!!!」

ルーシイ「ジエミニ!!!」

ジエミニはフレアの髪を切断し突撃した

ルーシイ「あれ・・・やるわよ!!」

ジエミニ「まだ練習不足だよ」

「できるかわからないよ?」

ルーシイ「とにかくあたしに変身!!!」

ジエミニ「了解」

ジエミニはバスタオル姿のルーシイに変身した

ルーシイ「何よその格好ーッ!!!」

ジエミニ「しょうがないよ、コピーした時の服装なんだから」

ルーシイ「そっか、昨日のお風呂上がりに・・・」

レイ「格好なんてどうでもいいからやれ!!」

ルーシイ「うゝ・・・天を測り天を開き あまねく全ての星々

その輝きをもって我に姿を示せ・・・テトラビプロスよ・・・



我は星々の支配者 アスペクトは完全なり 荒ぶる門を開放せよ

全天88星、光る『ウラノ・メトリア!!!』

ルーシイはエンジェル戦で使用した超魔法をジェミニと魔力を合わせて発動した……  
しかし!!

「バヒュンツ!!!」

ルーシイ「……え？」

フレア「……!？」

ルーシイ「か、かき消された……」

チャパティ「これは一体何が起きたのか!!? ルーシイの魔法は不発!!!

ヤジマさん!! つこれは……!?! ヤジマさん?」

ヤジマさんは厳しい顔をしてレイブンの面々を睨みつけている

ルーシイはそのまま力なく倒れた

チャパティ「おーとルーシイがダウン!! 試合終了ー!!!

勝者、大鴉<sup>レイブン</sup>の尻尾<sup>テイル</sup>フレア・コロナ!!!」

ルーシイには会場から笑い声が浴びせられる

俺は瞬間移動してルーシイを抱えAチームのベンチに向かった

レイ「泣くなよルーシイ」

ルーシー「ひぐつ．．．だって．．．悔しいよお．．．」  
レイ「0点なんて気にすんな

まだ始まったばかりだろ？

俺達が泣いていいのは優勝した時だけだぞ

俺はそう言いルーシーの頭を撫でた

ルーシー「うん．．．」

レイ「シャワーでも浴びてさっぱりするか？」

ルーシー「うん．．．」

ナツ「俺も行くー」

レイ「エルザ」

エルザ「ああ」

「ガスッ!!」

ナツ「ごはっ!!」

ナツは意識を失った．．．

## 第65話 聖十対決

俺はルーシイをシャワー室に送った後Bチームのベンチに戻った

ミラ「ルーシイ大丈夫だった？」

レイ「かなり泣いてたけど大丈夫だろ

他のギルドはどうだ？」

ミラ『剣咬の虎』が相手を一撃で倒したわ

レイ「一撃かよ・・・」

チャパテイ「さあいよいよ1日目最後の試合となりますが」

ヤジマ「残ってるのは『妖精の尻尾B』と『蛇姫の鱗』だね」

ジェニー「昔はこの2つのギルド実力が均衡してたから面白い試合になりそうね」

チャパテイ『妖精の尻尾B』レイ・グロリー!!! VS

『蛇姫の鱗』ジユラ・ネエクス!!!

「来たー!!!」

「ジユラだー!!!」

「相手はレイ様よー!!」

チャパティ「多数の滅竜魔法を使う聖十の称号を持つレイ・グローリー

対するは同じ聖十の称号を持つジユラ・ネエキス

どちらも今大会最強候補です!!!」

ラクサス「ついてねえな」

ミラ「まあ、レイなら大丈夫じゃない？」

ガジル「そんなに強えのか？」

あのボウズ」

ミラ「私とエルザの2人がかりでも勝てるかどうか」

レイ「なーに余裕余裕」

俺は手をひらひらさせ会場に向かった

レイ「お前と手合わせするのも久しぶりだな」

ジユラ「手加減はせんぞ」

リサーナ「レイー!!!」

がんばってー!!!」

レイ「悪いが俺も彼女の前で負けるわけにはいかねえよ」

チャパティ「本日の最終試合開始ー!!!」

「ゴォーン」

レイ「はぁー!!!」

俺はまっすぐジユラに向かって走り出した

ジユラ「バツ!!」

ジユラが指を動かすと俺の足元から岩が突き出してくる

レイ「よっと

吹き荒れる『アイスストーム!!』

ジユラ『『岩鉄壁』・・・ぬ?』

ジユラは防御したがその背後に俺が回り込んだ

レイ『『雷竜剣』おらぁ!!!』

「ガリガリガリツ!!」

惜しくも俺の攻撃はジユラに当たらず岩を削る

レイ「一筋縄じゃいかねえな」

ジユラ「ぬしもまた腕を上げたな」

レイ「まだだぞこっからは新技のオンパレードだ!!!!」

『雷竜剣四ノ型 絶雷竜閃牙!!!』

ジユラ「『岩鉄壁!!』」

ジユラは岩の壁を無数に重ねる

俺の攻撃はもちろん通らない

レイ「だー!!! 防御ばっかしてんじやねえよ!!」

『雷竜剣五ノ型 紫電麒麟槍!!!』

「バキバキバキ!!!」

俺は貫通性の魔法で岩を粉々に破壊する

ジユラ「ふんっ!!!」

レイ「しまっ!!!」

ジユラは俺を岩を破壊するのを待っていた

俺の体に粉々になった岩がまとわりつく

ジユラ「『霸王岩砕!!!』」

レイ「ぐああああ!!!」

チャパテイ「おおっと!! ジユラの強烈の一撃がレイを捉えた!!」

レイはジユラの攻撃を受けた瞬間に属性を切り替え次の攻撃に移る

レイ「『天竜剣!!』『天竜剣参ノ型 螺旋烈風刃!!!』」

俺は吹っ飛ばされた状態でジユラに魔法を投げる

ジユラが風の刃に包まれる

レイ「これならさすがに・・・」

ジユラ「『巖山』」

ジユラの絶対防御のせいでもったたく攻撃が通らない

・・・守りだけなら強すぎだろ・・・

レイ「はあ、まだ完成してないから使いたくないんだけどな」  
ジユラ「手加減は無しだろう」

レイ「『モード神竜』はあああああ!!!」

俺が魔力を溜め始めると大気が震えはじめる

「カーンカーンカーン!!」

チャパティ「タイムアップ!!! そこまでー!!!」

レイ「ええええええ!!!」

「ええええええ!!!??」

めつちやいとこだっただろ!!??

チャパティ「引き分けー!!!」

これにて大魔闘演武1日目終了!!!」

俺がベンチに戻るとみんなに笑われた・・・

ガジル「なにカッコつけて終わってんだよ!!!」

レイ「時間わかんねえんだからしようがねえだろ!!!」  
チャパティ「総合順位はこのようになりました」

1. 剣咬の虎 20P
  2. 大鴉の尻尾 18P
  3. 蛇姫の鱗 11P
  4. 青い天馬 14P
  5. 妖精の尻尾B 6P
  6. 人魚の踵 3P
  7. 四つ首の獵犬 2P
  8. 妖精の尻尾A 0P
- やべえ、原作と変っちゃった・・・  
まあ、A・B合同チームになるから大丈夫か

s a i d シャルル

・ ・ ・

シャルル「な、なに!? 今の予知・・・」



## 第66話 仲間のために

「……とある酒場……」

カナ「天下の『妖精の尻尾』フェアリーテイルがレイはともかくなさけないねえ!!」

レイ「お前は酒を飲む前に応援に来いよ」

カナ「酒場から見えたよ」

どこでも魔水晶ラクリマビジョンがあるんだ」

ナツ「明日は俺が出る!!」

絶対巻き返してやるんだ」

ガジル「火竜サラマンダーが出るなら俺も出ようか」

ミラ「どうするレイ?」

レイ「ん〜明日はラクサスにでも……」

ガジル「はあ!?!」

レイ「冗談だ、そのかわり絶対勝てよ」

ガジル「ギヒッ」

レヴィ「そういえばルーちゃんとグレイは？」

レイ「今頃お互いを慰め合ってイチャイチャいてんじやねえの？」

ルーシイ「なわけないでしょ・・・」

レヴィ「ルーちゃん大丈夫？」

ルーシイ「全然平気!! 逆にやる気出てきちゃった!!」

マカロフ「よし!! 全員揃ったな!! 聞けいガキ共!!」

今日の敗戦は明日勝利の糧!!

登ってやろうじゃないか!!

ワシらに諦めると言う言葉は無い!!

目指せえ!! フィオーレー!!!

「オオオオオオ!!!」

リサーナ「ねえレイ、今日最後に使おうとした技なんなの？」

レイ「最終日までのお楽しみ」

??? 「よおレイ」

俺がリサーナ達と酒を飲みながら談笑していると1人の男が声をかけてきた

レイ「・・・なんでもここにお前がいるんだよバツカス」

バツカス「その姉ちゃんと飲み比べしてたんだよ」

「そういやなんかマカオ達が騒いでたな」

レイ「あ!! お前それカナの服だろ!?!」

バツカス「戦利品よお〜」

レイ「返せよバカ!!」

バツカス「それよりその女お前の女か?」

バツカスはリサーナを指さす

レイ「そうだが?」

バツカス「ほ〜う」

レイ「なんだよ?」

バツカス「いや〜なんでもねえ・・・じゃあな」

————大魔闘演武・2日目————

現在競技パート『戦車』チャリオットが繰り広げられている

チャパティ「この競技は連結された戦車の上から落ちないように

ゴールを目指すというものです」

ヤジマ「ただ普通のレースじゃないんだよなあ」

ジェイソン「COOL! COOL!! COOL!!!」

相変わらずうるさいな・・・ジエイソン

レイ「てかガジル!!」

しっかりしやがれ!!」

現在ナツ、ガジル、ステイングが最下位争いが繰り広げられ会場は爆笑の渦  
ガジル「乗り物に弱えのは・・・火竜サラマンダーの・・・アレだろ?」

現在バツカスがゴールしクロヘビ、リズリー、ユウカ、一夜と続く

ナツ「おほ・・・おぼほ」

ガジル「バ、バカな・・・俺は乗り物など平気・・・だった・・・うぶ」

ステイング「じゃあ・・・うぶ・・・やっとなれたんだな

本物の滅竜魔導士に・・・おめでとう新入り・・・おぶ」

ガジル「ぬぐっ・・・てめえっ!!」

ナツ「おぼっ!!」

ステイング「うぼっ!!」

ガジルは怒ってナツもろともステイングによるよろながらも突進する・・・が、乗り物酔いのせいでまったくダメーじがない

ガジル「がはっ、力が出ねえ!!」

ミラ「もしかしてレイとラクサスも?」

レイ「俺は乗り物に乗る時は常に強力なトロイアをかけてる」  
ラクサス「他の奴らには黙つとけよ」

ジュビア「もうバレバレだと思っけど」

ナツ「うおおお!! 前へ・・・進む!!」

ステイング「カッコ悪い・・・」

力もだせねえのにマジになつちやつてさ」

ナツ「進むうううう!!!」

ステイング「いいよ・・・くれてやるよこの勝負

俺達はこの後も勝ち続ける

たかが1点2点いらねーっての」

ガジル「その1点に泣くなよボウズ」

ステイング「・・・一つだけ聞かせてくんねーかな？

なんで大会に参加したの？アンタら

昔の『妖精の尻尾』<sup>フェアリーテイル</sup>からは想像できねーんだわ

ギルドの強さとか世間体的なモノ気にするとか

俺の知ってる『妖精の尻尾』<sup>フェアリーテイル</sup>はさもつと・・・

こうマイペースっつーか他からどう思われようがきにしねーっつーか」

ナツ「仲間の為だ!! 7年も・ずつと・俺達を待っていた・・

どんなに苦しくても、悲しくても、バカにされても耐えて耐えて・

ギルドを守ってきた・仲間の為に俺達は見せてやるんだ

『妖精の尻尾』の歩き続けた証を!! だから前に進むんだ!!!」

ナツ・・・・

チャパティ「ゴオール!! 『妖精の尻尾A』 ナツ6位!! 2P!!

『妖精の尻尾B』 ガジル7位!! 1P!!!

『剣咬の虎』 スティングはリタイア0Pです!!!」

『妖精の尻尾』・・ちよつといいかもな」

「少し感動しちゃった」

「俺・・!! 応援しようかな!!」

「パチパチパチパチ」

『妖精の尻尾』の絆が会場に拍手の嵐を巻き起こした

スティング「仲間の為？」

「くだらねえよそういうの」

## 第67話 愛する者の為に

俺はナツの具合を軽くして医務室から帰ってきたとこだった  
バトルパートはクロヘビがトビーの靴下を破いてるところだ  
レイ「レイブンの奴らマジでクズだな」

チャパテイ「さあ・・・気を取り直して第2試合

『四つ首の獵犬』クワトロケルベロス バッカス!!!

対するは『妖精の尻尾B』・・・レイ・グロリーー!!!」

レイ「はあああ?!!」

ミラ「またレイ!?!」

ラクサス「たしか人気投票で組まれるんだよな?」

ジュビア「大人気ね」

「キヤー!! 今日もレイ様よー!!!」

カナ「キター!! レイー!! 私の仇をとって!!!」

レイ「まさかこんな早く当たるとはな」

バツカス「なあ・・・さっきの奴らみてーに俺らも賭けをしねえか？」

レイ「俺さっきの試合みてねえがいいぞ」

バツカス「お前の彼女エレエ美人だよなあ？」

俺が勝ったら一晩貸してくれや」

リサーナ「ええ!!!／＼」

レイ「バツカス・・・知り合いでも許せない範囲つてもんがあんだよ

お前はその一線を越えた・・・覚悟しろ」

バツカス「成立って事でいいんだな？」

久しぶりに本気のお前とやれんだ・・・魂が震えてくらあ」

レイ「俺が勝ったら今年中俺のギルドの女に手を出すな

それとお前らのギルド名『四つ首クワットロバビの子犬』な」

チャパティ「試合開始ー!!!」

「ゴォーン!!!」

レイ『『モード神竜』『神速拳!!!』』

「ゴゴゴゴゴ」

レイは光速でバツカスの腹に拳を叩きこむ



バツカス「ぐふっ・・・やっぱお前相手は全力じゃねえとなあ」  
バツカスはそういうときなり酒を飲み始めた

エルザ「もう酒を飲んだだと!？」

バツカス「おらあ!!」

「ガシッ」

俺はバツカスの拳を軽く受け止める

レイ『神竜の咆哮!!!』

バツカスは俺の手から離れ壁まで吹っ飛ばされる

バツカス「ううっ・・・さすがに強えなあ」

レイ「もっと本気出して来いよ」

バツカス「ははははは!!!」

「ガガガガガガ!!!」

一瞬で7発か・・・少ないな

レイ「そんなもんか？」

『神竜の閃撃!!!』

俺は一筋の光となりバツカスを貫く

バツカス「がはあ!!」

レイ「お前はリサーナに手を出そうとしたんだ

俺が負けるはずねえだろ」

バツカス「ははっ魂が震えてくらあ『酔・臂卦掌 月下?!』」

レイ「『神竜剣参ノ型 神淵閃煌刃!!』」

俺とバツカスの攻撃がぶつかり会場が爆風に包まれる

レイ「……………」

バツカス「ぐ……はあ……やっぱ……かなわねえな……」

バツカスは倒れた

チャパティ「バツカスダウン!!! 勝者レイ・グロリー!!!」

『妖精の尻尾B』フェアリーテイルに10P入ります!!

やはり強い!!! レイ・グロリー!!!」

リサーナ「レイー!! やったあ!!!」

チャパティ「続いて第3試合『妖精の尻尾B』ミラジェーン・ストラウス

V.S.『青い天馬』ブルーベガサス ジェニー・リアライト」

レイ「ちよつと待て!!」

なんでまた俺達のチームからなんだ!？」

チャパティ「これは主催者側と人気投票、ジェニーさんの強い要望から実現しました

しかしミラジェーンが勝った場合『妖精の尻尾A』フェアリーテイルにPが入ります」

レイ「・・・ルール上いいのか？」

ミラ「固い事言わないで応援してね♡」

レイ「で、なんでこうなんだよ？」

スタジアムではグラビア対決が繰り広げられている

ミラ「こんな感じ？」

ジェニー「こう？」

ミラとジェニーがポーズをとるたびに歓声が上がる

その時『人魚の踵』マーメイドヒールのメンバーが乱入し、それにつれ各ギルドの女性陣が乱入する

チャパティ「次にお題はスク水、ビキニにニーソ、

メガネっ子、ネコ耳、ボンテージ!!!」

ガジル「どんどんお題がマニアックになってやがる・・・」

チャパティ「次はウエンディングドレスです!!

それぞれパートナーを決めてください!!」

リサーナ「レイー!! 降りてきてー!!」

レイ「・・・行つてくる・・・」

ラクサス「この後どうなるか大体読めるな・・・」

ガジル「ああ・・・さすがに同情する」

リサーナ「どうレイ?」

リサーナは純白のドレスを着て1回転した

リサーナ「早くレイとの結婚式で着たいな♡」

ミラ「リサーナ、レイと組むのは私よ」

リサーナ「ミラ姉!?!」

ジェニー「私よ!!」

ルーシィ「あたしと!!」

ジュビア「ジュビアです!!」

レイ「結婚前にウエディングドレス着たら婚期遅れるって知ってるか?」

てかお前から引つ張んな!! やめ・・・ぎやー!!!」

俺はいろんなギルドの女にもみくちやにされ群衆の中に消えていった・・・

ベンチに戻る頃にはラクサスに支えられながら歩いてた

レイ「はあはあ・・・死ぬかと思つた!!」

ラクサス「予想通りだったな」

チャパテイ「次で最後の1回です」

ジェニー「ミラ!! これが最後よ!!」

ミラ「うん!! 負けないわよ!!」

ジェニー「今までの試合の流れにそつて私達も賭けをしない?」

ミラ「いいわね、何を賭けるの?」

ジェニー「負けた方は週刊ソーサリーでヌード掲載つてのはどうかしら?」

ミラ「いいわよ」

「ええー!!!」

チャパテイ「な、なんととんでもない賭けが成立してしまったー!!!」

・・・アホどもが・・・

ジェニー「これが私の戦闘形態!!!!」

ミラ「じゃあ私も行くわね」

今までの流れにそつて賭けが成立したんだから

今までの流れにそつて最後は力のぶつかり合いでいいのかしら?」

ジェニー「・・・は?」

ミラは接収・ミラジェーンシュトリになった

レイ「おお!!

あの姿久しぶりに見たな!!!」

ガジル「なんだありや？」

見た事ねえぞ」

レイ「俺が知ってる中で最強のサタンソウルだ」

ミラ「私は賭けを承諾した

今度はあなたが力を承諾してほしいかな」

ジェニー「きやあああああ!!!」

ミラ、一閃!!!

チャパテイ「グラビア勝負から一転・・・最後は力の勝負に!!!」

ヤジマ「まあ・・・これが本来のルールだスね」

ジェイソン「COOL COOL COOL!!!」

チャパテイ「勝者ミラジェーン!!!

Pは『妖精の尻尾A』に入ります!!」

ミラ「ごめんね、生まれたままの姿のジェニー楽しみにしてるわ」

ジェニー「いゝやあゝゝ」

レイ「やったなミラ」

ミラ「はしたない格好たくさんした気がする」

ガジル「1番エグかったのは最後だけだな」

ミラは恥ずかしそうにモジモジしたがガジルが冷静なツツコミを入れた

ミラ「レイにはいつでも生まれたままの姿見せてあげるわ♡」

ジュビア「ジュビアもです!!」

レイ「はりあうな・・・」

こうして俺達は徐々に順位を上げていく

その裏では謎の計画が進められているのであった・・・

## 第68話 人魚と虎

チャパテイ「さあ本日の最終試合『マイメイドヒール人魚の踵』カグラ・ミカツチ!!

V.S. 『セイバートウース剣咬の虎』ユキノ・アグリア!!」

レイ「おつかグラが出んのか!!」

ミラ「知り合いなの?」

レイ「仕事先で何回か会った事あんだよ

それにちよつと剣を教えてやった」

そんな時は俺がジェラールをギルドに入れた事知らないから・・・  
シモンは生きてるとしてもずっと楽園の塔にいたわけだし・・・  
もし知ってたらジェラールだけじゃなく俺も恨んでる・・・か?  
チャパテイ「カグラの強さは皆さんもうご存知の通り『マイメイドヒール人魚の踵』

最強の魔導士であり現在週ソライチオシ女性魔導士!!!  
対するユキノは初参戦!!



しかし最強ギルド『剣咬セイバークロウの虎』に所属しているというだけでその強さに期待がかかります

・・・それでは試合開始い!!!

ユキノ「よろしく願います」

カグラ「・・・こちらこそ」

ユキノは礼儀正しくあいさつしカグラもそれに返す  
てか思ったんだがユキノって誰かに似てんだよね

ユキノ「あの・・・始める前に私達も『賭け』というものをいたしませぬか」

カグラ「申し訳ないが興味がない」

ユキノ「敗北が恐ろしいからですか？」

カグラ「そのような感情は持ち合わせていない」

しかし賭けとは成立した以上必ず行使する主義である故

軽はずみな余興は遠慮したいのだ

ユキノ「・・・では重たくいたしましたしょう

命を・・・賭けましょう」

カグラ「その覚悟が誠のものならば受けて立つのが礼というもの

よからう、参られよ」

相変わらず硬い言動だね

顔は可愛いんだからにっこりすればいいのに・・・

チャパテイ「こ、これはちよつと・・・大変な事に・・・」

ヤジマ「うゝむ」

ジェイソン「COOL・・・じゃないよコレ!!!」

ユキノ『剣咬セイバートゥースの虎』の前に立ったのがあなたの不運

開け『双魚宮の扉』ピスケス!!!」

レイ「黄道十二門か」

10本はルーシイが持つてるから残り2本はこいつが・・・

ピスケスはカグラに向かって直進するがカグラはジャンプで避ける

ユキノ「開け『天秤宮の扉』ライブラ!!!」

ライブラ、標的の重力を変化」

ライブラ「了解」

「ズシイン」

カグラ「くっ」

カグラにはとんでもない重力がかかる

ユキノ「ピスケス」

戦術としては申し分ないな・・・  
だがカグラは重力から抜け出す

ユキノ「私に開かせますか・・・十三番目の鍵を・・・それはとても不運な事です」  
カグラ「運など生まれた瞬間よりアテにしておらん

全ては己が選択した事象!!」

ユキノ「開け『蛇遣座の扉』」

カグラ「それが私という存在を未来へと導いている」

ユキノ「オフィウクス!!」

ユキノが門を開くと黒い霧のようなものがドムス・フラウを包み巨大な影が浮かんで  
いる

でっけえ!!

実物でかすぎだろ!!!

カグラ「『怨刀・不俱戴天 抜かぬ太刀の型』」

「ズバア!!!」

カグラは抜刀せずにオフィウクスを切り刻んだ  
あんなの教えてねーんだけど・・・

ミラ「なにあれ!？」

ジユビア「剣を抜かないで!？」

ユキノ「うそ・・・？」

カグラ「安い賭けをしたな、人魚は時に虎を喰う」

「ドツ!!!」

カグラの一刀により会場が沈黙に包まれる

チャパテイ「し、しし・・・試合・・・終了・・・」

勝ったのは『人魚の踵』カグラ・ミカツチ

『剣咬の虎』・・・!! まさかまさかの2日目OP——!!!

相変わらず強ええな

ユキノ「わ、私が・・・敗北・・・『剣咬の虎』が・・・」

ユキノの眼には涙が浮かんでいく

カグラ「命・・・そなたの命は私が預かった・・・よいな」

ユキノ「はい・・・仰せの通りに・・・」

チャパテイ「これにて大魔闘演武2日目終了——!!!」

ヤジマ「また明日ね」

ジェイソン「COOL COOL COOL!!!」

ーとある酒場ー

レイ「ジェラール例の魔力はどうだ？」

ジェラール「まだ感じていない」

レイ「俺もだ怪しいというのは感じないな」

ジェラール「まだあと3日ある。なんとかなるだろ」

ナツ「ルーシイ、ハッピー帰ろうぜー」

ウエンデイ「私も帰ります」

レイ「俺も途中まで一緒だから帰るぞアビー」

じゃあなくリサーナ」

リサーナ「うんじゃあね〜」

酒場からの帰り道、レイはナツ達の様子を聞いていた

ナツ「ぷはーっ!!」

食った食った」

シャルル「あんた食べすぎなのよ」

ハッピー「オイラもおなか一杯」

アビー「ハッピーは魚しか食べてないでしょ」

レイ「お前らの宿近くていいよな」

ルーシイ「レイ達の宿もちよつと行ったとこでしょ」

レイ「てか女子3人で男子と同じ部屋って大丈夫なのか？」

ルーシイ「最悪よ．．．ナツはイビキうるさいし、グレイはすぐ脱ぐし

エルザはあたしのベッドに入ってくるし．．．レイ達は？」

レイ「似たようなもんだ．．．ガジルはイビキうるせーし

ミラとジュービアはベッドに入ってくるし．．．ラクサスは比較的静かだな」

ルーシイ「．．．今日レイのとこ行っていい？」

レイ「なんでだよ!？」

ナツ「ん？」

宿屋の前に誰かいるぞ」

ウエンデイ「本当だ．．．あの人は．．．」

ルーシイ「目えいいわねアンタら」

ナツ達の宿の前にはユキノが立っていた

ナツ「お前は」

ウエンデイ「『剣咬セイバートウクスの虎』の」

ルーシイ「星霊魔導士？」

## 第69話 女の涙

レイ「で、なんでこいつらの宿の前にいたんだ？」

ユキノ「ルーシイ様に用事が・・・」

ルーシイ「用事？」

あたしに？」

ユキノ「はい、ルーシイ様に大切な用事がありました」

ナツ「セイバーが何の用だよ」

いやナツ敵意剥きだしすぎだつて

ウエンデイ「ナツさん話くらい聞いてあげましょ？」

ユキノ「あつかましい申し出ではありませんが、これを」

ユキノはルーシイの前に2つの鍵を差し出した

ユキノ「『双魚宮』の鍵と『天秤宮』の鍵

この2つをルーシイ様に受け取っていただきたいのです」

ルーシー「え？」

そんな・・・無理よもらえない」

ユキノ「1日目、あなたを見たときから決めていました

大会が終わったらこの鍵をお渡ししよう」と

ナツ「まだ大会終わってねーじゃん」

ユキノ「私の大会は終わりました

私の代わりにはおそらくミネルバ様加わるでしょう

これで『セイバートゥース剣咬の虎』を変えた最強の5人がそろいます」

ハッピー「それって・・・」

シャルル「アンタは入ってなかったのね」

ユキノ「私などまだ新米でした

「仕事でだったミネルバ様の替わりを任されていたにすぎません」

ウエンディ「でもどうしてですか？」

それはあなたの大切な星霊ですよね？」

ユキノ「だからこそ私より優れた星霊魔導士である

ルーシー様の許においていた方が星霊達も幸せなのです」

ルーシー「嬉しい申し出だけど・・・やっぱりあたしには・・・」



ユキノ「あなたはすでに黄道十二門の鍵を10個も揃えています

この2つと合わせて十二の鍵全てが揃うのです

世界を変える扉が開く……」

ルーシイ「世界を変える扉？」

ユキノ「ただの古い言い伝えです

私にもその意味はわかりません

もうお気づきかもしれませんがこの数年で星霊魔導士の数は激減しました

先日のゼントピアの件もあり、もはや星霊魔導士は私達のみかもしれません

あなたは星霊に愛され星霊を愛する方です

十二の鍵を持って星霊と共に歩むべきなのです」

2人の間に沈黙が流れる

ルーシイも思うところがあるのだろう

ルーシイ「やっぱり受け取れない」

ユキノ「!?!」

ルーシイ「星霊魔法は絆と信頼の魔法……」

そんな簡単にオーナーを代わる訳にはいかない」

ユキノ「簡単……な決意ではないのですが」

ユキノは小さな声でつぶやいたが俺にはきちんと聞こえた  
ルーシイ「え？」

ユキノ「いいえ・・・あなたならそう言うと思っております

いずれ時が来ればおのずと十二の鍵は再び揃うでしょう」

ルーシイは笑顔でうなずいた

ユキノ「またお会いにできるといいですね」

ユキノは帰っていった

さしてナツを行かせねーとな

レイ「おーしナツ、お前謝りに行け」

ナツ「は？」

レイ「結構失礼な態度しただろ」

ハッピー「オイラも行った方がいいと思うよ」

アビー「行かないと男として最低よね」

ナツ「ぐぐぐ・・・わかったよ」

レイ「俺もついて行ってやる」

宿から少し走るとすぐユキノは見えた

その後ろ姿はどこか寂しそうだつた

ナツ「おい!! 待ってくれーっ!!!」

ハッピー「待ってー!!」

ユキノ「ナツ様、レイ様、ハッピー様」

ナツ「いやー悪い悪い

お前悪い奴じゃねーんだよな」

ハッピー「ほら・・・ナツつてば『セイバートゥース剣咬の虎』つてだけで悪者だつて決めつけちゃつ

てさ」

ナツ「だからこーして謝りに来たんだろーが」

レイ「俺が言ったからだろ」

ユキノ「謝る?」

ナツ「ごめんなーっ」

「軽っ!!」

ハッピー「ごめんね、これでも少しは大人になつたんだよナツは」

ナツ「どーゆー意味だよそれ!!」

ユキノ「わざわざその為に私を追つて・・・?」

ナツ「お前ずいぶん暗い顔してっからさ」

俺・・・気分悪くさせちまったかな・・・つて」

ユキノ「いいえ・・・すみません」

ナツ「いやいやいやいや謝れても困るんだけど」

ユキノの眼から涙がボロボロとこぼれ落ちる

ナツ「泣かれても困るんだけどー!!」

ナツはゆつくりと俺の方を振り返る

レイ「昔つから女は泣かせるなつて言つてるよなあナツ」

ハッピー「ど、どうしたのー!？」

ユキノ「もう・・・ダメです・・・」

私・・・このように気を遣われた事がないもので・・・

私・・・ずっと『剣咬の虎』に憧れていました・・・

去年やつと入れたのに・・・私はもう・・・帰る事は許されない」

ナツ「はあ？」

ユキノ「たった1回の敗北で・・・やめさせられたのです・・・

大勢の人の前で裸にされて・・・

自らの手で紋章を消さなければならなくて・・・」

俺とナツの中にはふつつつと怒りが湧き上がっていく

ユキノ「くやしくて恥ずかしくて・・

自尊心も思い出も全部壊されちゃって・・・

それなのに私には帰る場所が無くて・・・!!」

ナツ「・・・悪いけど他のギルドの事情は俺には分からねえ」  
ハッピー「ナツ」

ユキノ「はい・・すみません・・私・・つい・・・」

ナツ「他のギルドだけど〃同じ魔導士〃としてならわかるぞ

辱められて紋章を消されてくやしいよな

仲間を泣かせるギルドなんてそんなのギルドじゃねえ!!」

ユキノ「・・・」

レイ「ナツ行つてこい。俺が許可する」

ナツ「ああ!!」

ナツは『セイバートゥース剣咬の虎』の宿に向かった

レイ「ユキノ、今日泊まるとこあんのか?」

ユキノ「いいえ・・」

レイ「じゃあ一緒に探してやるよ」

ユキノ「いえ・・そこまでは」

レイ「いって

こんな夜に女一人じゃ心配だから  
俺はユキノと宿を探しに歩いた

## 第70話 再臨『妖精女王』

——大魔闘演武3日目——

俺は宿に戻らずそのままドムス・フラウに向かった

ガジル「やつと来たか」

ラクサス「朝帰りかよ」

レイ「うるせーな」

チャパティ「大魔闘演武もいよいよ中盤戦3日目に突入です」

ヤジマ「今日はどんな熱いドラマを見せてくれるかね」

チャパティ「本日のゲストは魔法評議院より

ラハールさんにお越しいただいております」

・・・あいつこんなものにも参加すんのかよ

チャパティ「3日目の競技は『伏魔殿』バンデモニウム」

参加人数は各ギルド1名です!!」

カナ「Bチームは私が出るよ」

さりげなくベンチに座っているカナが意気揚々と手を挙げた  
ガジル「ちよつと待て!!」

ミラ「あれ？」

なんでカナが？」

レイ「俺がリザーブ枠に入れた」

ラクサス「お前は出ねえのか？」

レイ「腰が痛え・・・」

ジュビア「・・・なんでですか？」

これ以上は口は割らん!!

「ゴゴゴゴゴゴゴ」

初日のようにフィールド上に不気味な建物が出現する

チャパティ「邪悪なるモンスターが巣くう神殿『伏魔殿』」  
バンデモニウム

ガジル「でけえ・・・」

神殿の中には100体のモンスターがいるらしいな

D・C・B・A・Sの5段階がいてSが一番強いってことだな

全員で順番に戦うモンスターの数は選択し戦う

これを挑戦権って事



撃破した数がポイントに反映される、1体1Pだな

レイ「俺出たかった・・・」

ミラ「まあレイなら余裕そうね」

クジはエルザが1番を引いたようだ

エルザ「この競技くじ運で全ての勝敗がつくと思っていたが・・・

いや・・・これはもはやゲームにならん

100体全て私が相手をする・・・挑戦権は100だ」

エルザの宣言に会場がどよめく

マトー「む、無理ですよ!!」

1人で全滅できるようには設定されてません!!」

エルザ「構わん」

レイ「ははっ!!」

あいつならマジでやっちまうかもな!!」

エルザは入っていきなりDランクの敵に攻撃を当てる

さしずめ個体ずつの属性とステータスを分析を始めたな

その後もエルザは戦い続けた

キズだらけになりながら地に落ちた妖精が舞う

『妖精女王』テイターニアここにあり!!!

エルザは最後のスクラスを倒し己の剣は高々と上げる

それはまるで・・・凜と咲き誇る緋色の花

ミラ「やったあ!!」

ガジル「ギヒツ」

レイ「よつしやあ!!」

チャパテイ「し、しし・・・信じられません!!!」

なんとたった1人で100体のモンスターを全滅させてしまったあー!!

これが7年前最強と言われていたギルドの真の力なのか??  
!!!」

「す、すげえ!!!」

「なんだあいつ・・・」

「私・・・覚えてる」

『妖精の尻尾』フェアリーテイル最強の女魔導士エルザ・スカーレット」

『妖精女王』のエルザ!!!  
テイターニア

チャパテイ「未だに鳴りやまないこの大歓声!!!」

ヤジマ「こりや参ったね」

ラハール「言葉も出ませんよ」

フィールドではエルザにナツ達が駆け寄る

レイ「いやー負けてらんないね〜」

チャパティ『バンデモニウム伏魔殿』完全制圧!!

『フェアリーテイル妖精の尻尾A』10P獲得!!

えー協議の結果残り7チームにも順位をつけないとならない

という事になりましたのでいささか味気は無いのですが簡単なゲームを

用意しました」

マトー「魔力測定器MPF」

チャパティ「この装置に魔力をぶつける事で魔力が数値として表示されます

その数値が高い順に順位をつけようと思います」

レイ「おい・・・カナのやつ酔ってないか？」

フィールドにはいつの間にか酒樽がたくさん転がっていた

ガジル「あの酔っ払い!!」

ラクサス「ダメだなありや」

ジュビア「カナさん!!」

まだ競技終わってないですよ!？」

カナ「ほえ？」

レイ「つーかどうやって酒持ち込んだんだよ？」

順番はさっきのくじ通りだな

レイ「ちよつとトイレ行ってくるわ〜」

俺は素晴らしいトイレに向かった

トイレから出てくると正面に女が立っていた

レイ「カグラ・・・」

カグラ「レイ、久しぶりだな」

素晴らしいカグラは俺に斬りかかってきた!!

すぐに反応し無属性の竜剣を生成し防ぐ

レイ「いきなり師匠に斬りかかるとはいい度胸だな」

カグラ「お前がジェラールを『妖精の尻尾』フェアリーテイルに入れた事は聞いた

私はあの男を許さない、そしてお前の事も!!」

ちよつと待て!!

シモン生きてるのになんでこんなに恨んでんだよ!?

カグラ「私はジェラールを殺す!! お前も!!」

兄と私を引き裂いた事を許さない!!」

レイ「このブラコンが!!」

カグラ「うるさい!!」

カグラは不倶戴天の鞘に手をかけた

ヤバい!!

さすがに俺も不倶戴天を抜かれたらどうなるかわからねえ!!

レイ『天竜剣』『天竜剣式ノ型 春疾風!!』

俺は相手を押し戻すほどの突風を巻き起こす

いちよ威力はセーブした

そうじゃないと相手をズタズタにしてしまう

レイ「たしかに7年前よりは腕を上げたな

だが俺を殺すほどではねえよ」

カグラ「くっ!!」

レイ「復讐に生きるな・・・そんな人生楽しくねえよ」

そう言ってその場を後にした

トイレから戻るとカナの番まで進んでいた

ジユビア「その傷どうしたの!？」  
傷?

頬を触ると生温かい液体が指についた

俺に一太刀入れるとはな・・・

レイ「なんでもねえよ

それよりカナを応援しねえと」

ラクサス「でもあいつ酔ってるだろ」

ミラ「ジユラの後はきつそうね」

レイ「おーしカナがんばれよー!!!」

カナ「うーんレイにいいトコ見せないとね」

そういうながら上着を脱ぎ始めた

その腕には『妖精の輝き』フェアリーグリッターの紋章

カナ「さ、ぶちかますよ」

ミラ「なにあの紋章?」

レイ「まあ見とけや」

初代もよく貸すよな・・・

カナ「集どえ!! 妖精に導かれし光の川よ!!」

照らせ!! 邪なる牙を滅する為に!!

『妖精の輝き!!』  
フェアリーグリッター

M P F の数値は 9 9 9 9 を記録している

チャパテイ「な、なんとということでしょう・・・M P F が破壊・・・

カンストしてきます!! な、なんなんだこのギルドは!!

競技パート1・2ファイニッシュ!!

もう誰も『妖精の尻尾』フェアリーテイルは止められないのかー!!!

カナ「止められないよ!!!

なんとって私たちはだからね!!!

俺達の躍進の裏で大鴉の毒牙が牙を剥こうとしていた

## 第71話 妖精の闇

3日目バトルパートの初戦はミリアーナVSセムスから始まった

ミリアーナは最初は苦戦していたが最後はネ拘束チューブで決めた

第2試合はイブVSルーファス

ルーファスの魔法ってなんか俺のと被りそうだな

結局ルーファスの勝ち

さして第3試合ラクサスVSアレクセイが始まった

レイ「レイブンの奴らなにもしなきゃいいが」

ミラ「マスターはリサーナ達に見張らせてるらしいわよ」

レイ「リサーナに!?!」

ミラ「ちよつと過保護すぎよ」

いや〜でもね〜・・・

まあこつち見とくか



チャパテイ「試合開始!!!」

ラクサス「親父のトコのギルドか・・・っーかお前何者・・・」

アレクセイはラクサスに攻撃をしかけまともに受ける

ラクサス「コイツ・・・」

その後もラクサスは攻撃を受け続けた

ミラ「そんな・・・」

ガジル「冗談だろ？」

カナ「やられてんの？」

信じられない光景にみんな動揺を隠せない

レイ「・・・」

ジュビア「レイ？」

何も動じない俺にジュビアは不信感を持っているようだ

俺には幻術の類の魔法は効かないからもちろん真実が見えている

ラクサス「幻なんか関係ねえんだよ

今ここで現実のてめえを片づけて終わりだ」

フレア「それは無理」

ナルプディング「現実にはキビシイでサー」

アレクセイ「いかにお前と言えど『大鴉レイフンテイルの尻尾』の先鋭を同時には倒せんよ」  
ラクサスの前に『大鴉レイフンテイルの尻尾』のメンバーが立ちはだかる  
アレクセイ「そしてもう1つ俺の強さは知ってんだろお？」

「バカ息子お」

ラクサス「そんな事だろうと思っただけクソ親父」

アレクセイは兜を外し素顔を見せた

その顔はマスターイワン・・・

俺も行くかー!!

『氷幻竜』でベンチに俺の幻を作りフィールドに飛び降りる

レイ「そっちが5人だったらこっちは2人でもいいよなく？」

ラクサス「レイ!？」

イワン「なぜお前に幻影が効いていない!？」

レイ「俺に幻術の類は効かないよ」

イワン「まあいい、教えてもらおうか」

『ルーメン・イストワール』の在り処を」

ラクサス「何の話だ？」

イワン「とぼけなくていい・・・マカロフはお前達に教えているはずだ」

ラクサス「本当にしらねえんだけどな」

レイ「つーかその言葉すら初めて聞いた」

イワン「いいやお前達は知ってるはず」

ラクサス「まあ、たとえ知っててもアンタには教えねーよ」

イワン「オイオイ・・・この絶望的な状況下で

『勝ち』を譲るって言うってんだぜ？

条件がのめねえってんならオメエ・・・

幻で負けるだけじゃ済まねえぞ」

レイ「いちいちめんどくせえよオツサン

絶望的？　こんな少人数で俺らに勝てると思ってるの？」

ラクサス「ジジイが見切りつけたのもよくわかる」

「まとめてかかって来いよ。マスターの敵は俺達の敵だ」

イワン「どうやら教えてやる必要があるみてえだな

対妖精の尻尾特化型ギルド『大鴉の尻尾』の力を」

早くボコリたい!!

まだかよ!!

ラクサス「対妖精の尻尾特化型ギルドだあ？」

フレア「その通り」

イワン『フェアリーテイル妖精の尻尾』のメンバーそれぞれの苦手とする魔法の使い手のみで構成されているのだよ」

クロヘビ「僕たちはその中の精鋭4人だ」

イワン「その俺達と戦争するつもりか？」

弱点は知りつくしている

我がギルドの7年間ためた力を開放しちゃうぜ？」

ラクサス「ジジイはアンタの事なんぞとくに調査済みだ」

レイ「構成人数、ギルドの場所、活動資金

この7年間の動向……全てつかんでいる」

イワン「何?！」

フレア「ガジルだ!!」

あいつが謀ったんだ!!」

イワン「2重スパイだったのか」

つか気付かないってそうとうアホだよな？

ラクサス「ジジイはそこまでつかんでいながら動かなかった

たぶんジジイは心のどこかでアンタの事を信じてたんだろうな

親子だから」

イワン「黙れえ!!!」

ついにイワンの怒りが爆発しラクサスと俺に攻撃を放つ

レイ「ふっ!!」

その攻撃を片手で防ぐ

イワン「俺はこの日の為に日陰で暮らしてきたんだよお!!!」

全ては『ルーメン・イストワール』を手に入れる為!!!

7年間危害を加えなかったただあ?当たり前だろ!!!

残ったカス共が『ルーメン・イストワール』

の情報を持つてるハズがねえからな!!!!

ギルドの中も!! 街も天狼島も!!

ギルドゆかりの場所は全部探した!!

『ルーメン・イストワール』はどこだ!?!

どこにある!!!!

言ええええええっ!!! ラクサスウウウ!!!!

俺の息子だろおがああああ!!!

レイ「親だったら息子の手本になる立派な親になりやがれ!!!」

イワン「黙れええ!!!」

オーブラ!!! やれ!!! 魔力を消せ!!!」

オーブラ「シャツ!!!」

イワン「今こそ対妖精オエアーリーティルの尻尾特化型ギルドの力を解放せよ!!!」

レイ「させるかあ!!!」

俺はオーブラに飛び出し蹴りを入れる

フレア「赤髪!!!」

ナルプディング「『ニードルブラスト』!!!」

ラクサス「これはグレイの分だ」

ナルプディング「ぐおおおおお!!!」

ラクサスはフレアの攻撃を避けナルプディングに一撃を入れる

その腕にフレアの赤髪が巻きつく

フレア「つかまえたぞっ!!!」

「スパッ!!!」

レイ「これはルーシイとりサーナを狙った分!!!」

フレア「うっ!!!」

俺はフレアの髪を切り腹に刀で峰打ちを入れる

ラクサス「おまえは・・・よくわからん」

クロヘビ「ぬあああああ!!!」

クロヘビはラクサスの前に姿を現したが瞬殺

イワン「わ、我が精鋭部隊が・・・!!!」

ラクサス「アンタの目的が何だか知らねえがやられた仲間のケジメはとらせてもらうぜ」

イワン「ま、待て!!! 俺はお前に父親だぞ!!!!

家族だ!!! 父を殴るといいうのかっ!!!!

ラクサス「俺の家族は『妖精の尻尾』だ

家族の敵は俺が潰す!!!!

ラクサスの拳がイワンを捉えそのまま吹き飛ばす

イワンが飛ばされると幻影も消えた

チャパテイ「こ、これは一体!!!」

マトー君はイワンの顔を見に行った

マトー「ギルドマスターカボ!!!」

アレクセイの正体はマスターイワンカボ!!!」

レイ「ラハール!!!」

今すぐこいつらを捕えろ!!!」

ラハールはすぐにうなずき検束部隊をフィールドに送りこんだ

チャパティ「先ほどまで戦っていたラクサスとアレクセイは幻だったのか!?

立っているのはラクサスとなぜかレイ!!! 試合終了!!!」

ヤジマ「そして我々の見えぬ所で5人がかりの攻撃・・・

さらにマスターの大会参戦・・・

これはどうみても反則じゃな

レイ君は幻が効いていないから応戦したんじやろう」

チャパティ「協議の結果『大鴉の尻尾』<sup>レイブンテイル</sup>の反則により

『妖精の尻尾B』<sup>フェアリーテイル</sup>不戦勝となり10P獲得!!!」

俺とラクサスが控室に戻ろうとするとイワンが話しかけてきた

イワン「ラクサス、レイ・・・今回は俺の負けだ・・・

だが・・・これだけは覚えとけ・・・

『ルーメン・イストワール』<sup>フェアリーテイル</sup>は『妖精の尻尾』の闇

いずれ知る時が来る・・・『妖精の尻尾』<sup>フェアリーテイル</sup>の正体を・・・

『ルーメン・イストワール』・・・

一体何なんだ?



## 第72話 フードの人物

チャパテイ「さて何とも後味の悪い結果となりましたが

続いて第4試合。本日の最後の試合です

『妖精の尻尾A』ウエンディ・マーベルVS

『蛇姫の鱗』シエリア・ブレンディ

レイ「おつウエンディか？」

フィールドではシエリアが転びすぐにウエンディも転んだ

レイ「あれで19歳なんだよな・・・」

ミラ「中身はあまり成長してなさそうね」

チャパテイ「それでは試合開始い!!!」

あれ？チャパテイのキャラが変わらねえ・・・

そうか!! ウエンディが小さくないからか!!!

ウオーレン「レイ!!!」

突然俺の頭の中にウオーレンの声が響いた

レイ「なんだ？」

ウオーレン「ジェラールが話があるから外まで来てくれだ」と

レイ「りよーかい」

俺は急いでドムス・フラウの入り口に向かった

入り口にはジェラールが辺りを見回しながら立っていた

レイ「ジェラール!!」

ジェラール「レイ、ゼレフに似た魔力を感じる」

レイ「どこからだ？」

ジェラール「わからんがおそらくドムス・フラウの中・・・」

レイ「手分けして探すか」

ジェラール「ああ、なにかあればウオーレンを通じて連絡する」

こうして俺達は別れゼレフに似た魔力の正体を探した

でもここであいつを見つげる訳にはいかねーしなー

そんな事を考えていると屋台のところにルカとりサーナがいた

レイ「おーまーえーらー!!」

ルカ「わっ!! なんだレイか」

レイ「なんだじゃねえよ・・・なにしてんだよ？」

リサーナ「お腹すいたからご飯選んでるの」

レイ「応援してこいよ・・・」

ルカ「もう終わったわよ？」

・・・は？

なんか違うかね？

レイ「どつちが勝ったんだ？」

リサーナ「引き分けで終わったよ

両方倒れちゃって」

引き分けならまあいいか

ルカ「そうそうあのシエリアってこの魔法・・・」

レイ「滅神魔法だろ？」

「さんざんお前に見せられてんだからわかる」

ルカ「あらそう？」

リサーナ「ねえレイ、これ買って〜？」

ルカ「私はこれ〜」

2人は焼き鳥とたこ焼き、わたあめを差し出した

レイ「……太るぞ？」

「ガンッ!!!」

レイ「っ痛!!!」

リサーナ「……買って?♡」

レイ「……はい」

結局2人に奢るはめになった……

ジェラール「レイ!!!」

レイ「あ？」

ジェラール「あいつだ!!!」

ジェラールの先にはフードをかぶった人物が外に出ようとしていた

俺はジェラールと共に走り出した

レイ「くそ!! この人混みじゃ転移もできねえ!!」

その時俺とジェラールの前にカグラが立ちはだかる

カグラ「ジェラール!!!」

ジェラール「!!!」

レイ「おりや!!!」

すかさずカグラの腹にパンチを入れ気絶させる

ジェラールはすぐにフードの人物を探したが見失ったようだった  
ジェラール「くそ・・・」

レイ「あと2日ある、なんとかなるさ」  
とりあえずカグラは届けないとな

## 第73話 リュウゼツランド

「……とある酒場……」

「かんばーい!!」

ナツ「今日は気持ちよかったなー!!」

レイ「そうか?」

リサーナ「レイブンのやり方はむかつくわね」

ルカ「所詮そういう奴らなんですよ」

ナツ「おっしやー!!」

酒樽サーフィンだー!!」

ハツピー「あいさー!!」

ジエツト「うわっ危ねっ!!」

ドロイ「やめろナツ!!」

人が飲んでるときにうるさくしゃがって……

レイ「静かに飲ませろバカナツ!!!」  
ナツ「ぎやーっ!!」

レイがキレたー!!」

グレイ「誰かレイをおさえろー!!!」

俺はかかってくる野郎どもを薙ぎ払っていく

するとそこへ・・・

リサーナ「レイそこまで!!」

レイ「はい」

ナツ「レイが犬みてえだ・・・」

グレイ「尻尾あつたら絶対振ってるよな・・・」

聞こえてるぞくお前ら

俺は手を後ろに組み片手でナツ達に雷を落とす

「ぎやーーー!!!」

ふふふふ天罰だ!!

レヴィ「ねえ今からプール行かない!？」

リサーナ「プール?」

レヴィ「そおプール!!」

ルーちゃん達は行くって!!」

ナツ「行くしかねーだろ!!」

グレイ「暑いもんな!!」

レイ「おーし水着持って集合だー!!!」

そして酒場の外では1人の人物が唇を噛みしめ  
騒がしい酒場を眺めていた・・・

ーーーリュウゼツランドーー

レイ「でっけえ!!!」

〇〇〇えんのプールよりすげえぞ!!

レイ「よっしやー遊びつくすぞー!!」

ルーシイ「なんであんなにはしゃいでるの?」

リサーナ「レイって昔から遊園地とかそういう所大好きなのよ」

ルカ「普段はかっこいいのに子供っぽいわね」

リサーナ「そこがかわいいじゃない」

ルーシイ「ギャップ萌えってやつね」

レイ「リサーナ早くいこーぜ!!」



リサーナ「はいはい」

どれ乗ろつかなく♪

リサーナ「あのでかいのから乗ろ？」

リサーナが指をさしたのは園内でも一番でかいウォーターライダーだった

レイ「オツケー」

2人で階段を登りきったのだが・・・

リサーナ「ラブラブスライダー？」

・・・これだけは回避しなければならないと思ってたのに

リサーナ「抱き合って滑るんだって!!」

レイ「いやゝあのーうん・・・」

どうしよう・・・覚悟決めるか

「ガバツ!!」

リサーナ「へ？」

レイ「俺は覚悟決めたから」

リサーナ「ちょ!! 待って!! きゃーーーーーー!!!!!!」

俺はリサーナを抱いたまま倒れるようにスライダーに飛び込んだ

リサーナ「きゃーーーーーー!!!!!!」

レイ「バカ!! 暴れんな!!」

リサーナ「いやあああああ!!!」

その後2、3分リサーナの悲鳴は鳴り響いた

ルーシイ「ちよ、大丈夫!？」

リサーナ「ぐす・・・うん・・・」

レイ「お前が乗りたいつて言ったんだろ？」

リサーナ「いきなり行くなんて思わないわよ!!」

レイ「悪い悪い、機嫌直せよ」

リサーナ「かき氷買ってくれなきやヤダ」

えー・・・

レイ「しょうがねえな」

なんでこんなハメに・・・

レイ「これでいいか？」

リサーナ「うん」

俺がリサーナにかき氷を届けるとラブラブスライダーの方から喧嘩している声が聞

こえてきた

リオン「さあジュビア俺と滑ろう!!」

グレイ「だから人のギルドの奴連れていくな!!」

ジュビア「ジュビアはレイ一筋なんです!!」

あんな大きな声で・・・

そこにどこからかナツが飛んでいき2人にぶつかりそのまま滑り落ちていった

レイ「あいつらなにやってんだよ・・・」

グレイとリオンはプールを次々と凍らせていく

ルーシイ「ちょ、ちよつとこれヤバいんじゃない?」

例によって例のごとくナツが飛び出す

ナツ「バカ野郎!! プールを凍らせる奴があるかー!!!」

「ドゴオオオオオン!!!」

レイ「な、なんでこうなんだよ・・・」

ナツ「はっはっはっはっは!!」

ルーシイ「やっぱりこうなるんだ・・・」

## 第74話 統合

チャパテイ「4日目競技パート始まりましたね」

ヤジマ「水中相撲っていったトコかね」

ラビアン「楽しみですですねありますがとうございます」

フィールドの中心に浮かべられた水の球の中に次々と各ギルドの出場者が着水して  
いく

レイ達のチームからはからはジュビアが出場した

レイ「これは俺達の勝ちだろ」

ミラ「まあ水の中だしね」

チャパテイ「これはまた華やかな絵になった!!!」

各チーム女性陣が水着で登場!!!」

ルールは簡単!!! 水中から出たら負け!!!

ナバルバトル  
『海戦』開始です!!!」

ルーシイ「早速だけど・・みんなごめんね!!!」

開け!! 『宝瓶宮の扉』!!! アクエリアス!!!」

アクエリアス「オオオオオオツ  
水中は私の庭よお  
!!!!!!」

ジュビア「させない!!!」

『水流台風』  
!!!!!!」

ジュビアは魔法を発動させアクエリアスの水に対抗する  
ルーシィ「ジュビア!!」

ジュビア「恋敵!!」

リズリー「何だいこれは!!?」

アクエリアス「互角!!」

ジェニー「だったら今のうちに・・・まず1人!!!」

ロツカー「ワールドオ!!!!」

ジェニーはロツカーにワールドな蹴りを入れ失格にする

レイ「あいつマジでせこいな」

ミラ「ジェニーらしい攻撃じゃない」

シエリア「その間にあなたも」

シエリアはリズリーと対峙する

リズリー「ぼっちゃりなめちやいけないよっ!!!」

しかしリズリーはぼっちゃりしていない

アクエリアス「このままじゃラチがあかない!! 一旦戻るよ!!!」

ルーシイ「え!? なんでよ!!」

水中じゃあんたが一番頼りになるんだから!!!」

アクエリアス「デートだ♡」

ルーシイ「ちよつとおろつ!!!」

ジュビア「スキありっ!!!」

アクエリアスが消えたルーシイをジュビアが容赦なく狙う

ルーシイ「ひええええっ!!!!」

バルゴ!!! アリエス!!!」

バルゴ「セクシーガードです!!! 姫!!」

アリエス「もこもこですみませーん」

一回でいいからあのもこもこで寝てみたいよな

ジュビア「全員まとめて倒します!!!」

水中でジュビアに勝てる者などいない!!!!

第二魔力源セカンドオリジンにより身に付けた新必殺技・・

『届け!!! 愛の翼!!! レイ様ラブ!!!』

レイ「な、なんなんだあの必殺技は……」

ジュビアが放った魔法はハートを纏いながら水流を巻き起こす技名はどうかと思うがルーシイとミネルバ以外を脱落させる

ガジル「おい、ジュビアが見てるぞ？」

レイ「あ？」

ジュビアの方を見るとこつちを笑顔で見ている

俺は笑顔でガッツポーズをした

ジュビア「ジュビーン!!♡」

レイ「あ!!」

ジュビア「え?きやうん!!」

ジュビアよそ見で失格

ガジル「あのバカ!!」

カナ「外に出ちやった」

ミラ「なんで？」

ラクサス「レイのせいだろ」

レイ「俺のせい!?」

チャパテイ「残るはミネルバとルーシイの2人のみ!!」

ここからは5分間ルールの適用らしいな

まあ5分以内に場外にならなきゃいいだけだが・・・

ミネルバ「妾の魔法なら一瞬で場外にする事もできるが

それでは興がそがれるというもの

耐えてみよ『妖精の尻尾』フェアリーテイル

ルーシイ「なにこれ・・・きやあ!!」

突然ルーシイの近くの水が破裂した

レイ「なんだ?」

ルーシイ「今度は重い・・・鉛のような・・・

やられてばかりじゃいられない!!」

ルーシイは自分の鍵に手を伸ばしたが・・・

ルーシイ「!! あれ!? あたしの鍵が」

ルーシイの鍵はミネルバの手の中にあつた

「ドオン!!!」

ルーシイ「きやああああああ!!!」

ミラ「あの魔法何なの!?!」

レイ「さあ、俺も見た事がねえ



空間系の魔法だと思うが・・・」

ルーシイはミネルバによりもてあそばれている

ルーシイ「あたしは・・・どんな攻撃にも耐えて見せる!!」

ミネルバ「そろそろ場外に出してやろうか」

ルーシイ「こんな所で負けたら・・・」

ここまで繋いでくれたみんなに合わせる顔がない・・・

あたしはみんなを裏切れない

だから絶対あきらめないんだ!!」

チャパティ「ど、どんしたのでしょう？

ミネルバの攻撃が止まった

そのもも時計は5分を経過!!!」

しかしミネルバの目つきが急に代わりルーシイに魔法を放つ

ルーシイ「ああああああ!!!」

レイ「な!?!」

ミネルバ「頭が高いぞ!!! 『妖精の尻尾』!!!」

我々をなんと心得るかっ!!!

我らこそ天下一のギルド!!!

『セイバートゥース  
剣咬の虎』ぞ!!!

ルーシイ「きやああああ!!!」

チャパテイ「これはさすがに場外・・・消えた!!?」

ルーシイは場外へ飛ばされたはずだがミネルバの魔法により戻される

ルーシイ「いあああああ!!!」

ミラ「なんで場外にださせないの!？」

ガジル「痛めつける為か・・・」

ラクサス「もう勝負はついてんだろ・・・」

レイ「このやろう・・・」

チャパテイ「こ、ここでレフェリーストップ!!!」

競技終了!!! 勝者ミネルバ!!!

『セイバートゥース  
剣咬の虎』やはり強し!!!

ルーシイ・・・さつきから動いてませんが大丈夫でしょうか!？」

ナツ「ルーシイー!!!」

ナツとグレイが落下してくるルーシイを受け止める

ナツ「なんて事するんだこのヤロウ!!」

ミネルバ「その目は何か？」

妾はルールにのっとり競技を行ったままでよ

むしろ感謝してほしいものだ、2位にしてやったのだぞ  
そんな使えぬクズの娘を」

ナツ、グレイ、エルザの前にローグ以外のメンバーが立ちはだから  
俺はその間に転移する

ナツ「レイ!!」

レイ「クズはお前らの方だろ」

ミネルバ「なに？」

レイ「最強だかフィオーレーだか知らねえが1つだけ言っておく

お前らは1番怒らせてはいけねえギルドを敵に回した」

「――医務室――」

ジュビア「ルーシイは無事ですか!？」

ミラ「ルーシイ!!」

グレイ「お前ら」

カナ「チームは違っても同じギルドでしょ」

ポーリユシカ「ウエンディとレイのおかげで命に別条はないよ」

ウエンデイ「いいえ、シエリアとレイさんの応急処置がよかったです」

ナツ「あいつら……」

ラクサス「言いてえ事はわかってる」

ルーシイ「う……」

ハッピー「ルーシイ!!」

ルーシイ「みんな……ごめん……またやつちやつた……」

グレイ「何言ってるんだ、2位だぞ? 8Pだ」

エルザ「ああ……よくやつた」

ルーシイ「か、鍵」

ハッピー「ここにあるよ」

ハッピーはルーシイの鍵を差し出す

ルーシイ「よかった……ありがとう」

ルーシイは鍵があつた事に安心したのかそのまま眠りにつく

ミラ「眠っちゃつたみたいね」

カナ「なんか……こうモヤつとするねあいつら!!」

グレイ「『……』」

ガジル「気に入らねえな」

マカロフ「AチームBチーム全員集まっとったか、丁度よかった」  
医務室のドアを開けマスターが入ってきた

カナ「マスター」

マカロフ「これが吉と出るか凶と出るか・・・」

たった今AB両チーム統合命令が運営側から言い渡された」

ナツ「何!？」

ラクサス「ABチーム統合だ?!」

ミラ「どうしてですか？」

レイ「大方レイブンが失格したからチーム数が奇数になって

バトルパートの組み合わせができないって事だろ」

マカロフ「うむ、なので両チームを1つにして

新規で5人チームを再編成しろと・・・な」

シャルル「点数はどうするの？」

マカロフ「低い方に準ずるらしい」

つまりAチームの35Pじゃ」

ハッピー「ひどいねそれ」

エルザ「しかし運営側の判断なら仕方ないか・・・」

カナ「考えようによつてはさらに強いチームが作れる訳だしね」

グレイ「けど、今から決めても残る種目はこれからやる

タツグバトルだけなんだろう？」

ポーリユシカ「いいや、明日の休みをはさんで最終日

5人全員参加の戦いがあるはず」

ナツ「俺は絶対にルーシイの仇をとる!!!

仲間を笑われた!!! 俺は奴等を許さねえ!!!」

こうして運命のチーム編成がおこなわれる・・・

## 第75話 覚醒

チャパテイ「『フェアリーテイル妖精の尻尾』チーム編成も終了し

いよいよバトルパートに入ります」

ヤジマ「4日目のバトルパートはタッグマッチなんだね？」

ラビアン「2体2ですか楽しみですね!! ありがとうございます!!」

チャパテイ「今回はすでに対戦カードも公表されています」

青い天馬V.S. 四つ首の仔犬

人魚の踵V.S. 蛇姫の鱗

剣咬の虎V.S. 妖精の尻尾

チャパテイ「やっぱり注目は一発触発の

『フェアリーテイル妖精の尻尾』V.S.『セイバートゥース剣咬の虎』でしょうか?」

ヤジマ「さつきはどうなるかと思っただよ」

ラビアン「熱かったです、ありがとうございます!!」

チャパテイ「さあ・・・その新・妖精の尻尾フエアリーテイルが姿を現したぞーっ!!」

マカロフ「我らギルドの想いは1つとなった

この想い主らに託すぞ」

メイビス「今こそ見せる時です

私たちの絆の力を」

「オオオオオオッ!!」

チャパテイ「会場が震えるーっ!!!」

今ここに・・・妖精フエアリーテイルの尻尾参上!!!!」

ナツを中心に俺、ガジル、グレイ、ラクサスと並びフィールドに姿を見せる

チャパテイ「1日目のブーイングが嘘のような大歓声!!!」

たった4日しかつての人気を取り戻してきたー!!!」

俺達は剣咬セイバートゥースの虎と目を合わせる

ナツ「燃えてきたぞ」

ー控室ー



メイビス「レイ、あなたにはやっってもらう事があります」  
レイ「うわっ!! なんすか?」

突然現れたメイビスに驚きながらも返事をした

メイビス「ルカに協力してもらい力を覚醒させるのです」  
いや、あれ完璧じゃねえの?

レイ「ルカは?」

メイビス「すでに外に出ています」

レイ「はいはい」

てかなんで俺だけ?

魔装だつてあんま効果ねえし・・・

ーードムス・フラウ外ー

ドムス・フラウの裏手に行くとルカが立っていた

ルカ「やつと来たわね?」

レイ「で、なにすんだ?」

ルカ「初代からはあなたを追い込みなさいって言われてるわ」

追い込みなさいって・・・

ルカ「この範囲だけはフリードの術式で守られてるから大丈夫よ」

レイ「はあく……お前本気でやんの？」

ルカ「とーぜん♡」

もう腹くくるか……

レイ「おっしや来い!!」

ルカ『白神の聖槍!!!』

ルカは黒き光の槍を投げつけすぐに間合いを詰める

レイ「くっ!! らあっ!!」

ルカ「魔装使わなくちゃ意味ないでしょっ!!!」

レイ「あ、そっか『魔装・火竜!!!』」

俺は炎に包まれ赤と黒の衣で姿を現す

レイ「久しぶりだなー!!」

ルカ「喋ってる暇はないわよ!!」

レイ『火竜の爆炎花!!!』

俺は火の花を咲かせ爆発させる

しかしルカは水の防壁を張り全ての爆発を防いだ

ルカ『雷炎竜の怒号!!!』

レイ「ぐああああ!!!」

俺に隙が出来た途端ルカの攻撃が次々と当たっていく

火、雷、風、氷、水、様々な属性の魔法が俺の体を痛めつけていく

ルカ「・・・やりすぎた？」

レイ「ぐ・・・はあ・・・はあ・・・」

さすがにきつい・・・

けど・・・

レイ「まだまだー!!!!」

「キイイーン」

すると俺の指輪が光り出しエドラスの時のように俺の体を光で包みこむ

レイ「これは・・・」

ルカ「うわあ!!」

俺の体は少し空中に浮き金と黒の衣を羽織り

背後には各属性の竜剣が円になりゆっくり回っている

しかし、円には明らか剣が1本足りていない

メイビス「それがあなたの隠されていた力・・・まだ不完全のようですが

その指輪の宝石は自身の想いに呼応する魔石

「あなたが作ったのですか？」

俺達の背後から初代がゆっくりと歩いてくる

レイ「そうだけどなんで!？」

なんで初代がこの石と力の事知ってんだよ!？」

俺ですらわかんねえのに!!

メイビス「昔、古い書物で読んだ事がありました

〃数多の竜の力を使いし者

金色の光りに包まれ真の力を開放するであろう〃

それはあなたの事だったのですね、レイ」

レイ「俺と同じ力を持った奴が前にもいたのか!？」

メイビス「おそらく」

ルカ「じゃあ私のは!？」

メイビス「ルカのは残念ながら・・・」

レイ「俺のが昔いたんならルカのも同じタイプだしいるんじゃないか？」

メイビス「レイの推測通りだとは思いますが」

ルカ「そう・・・」

レイ「さてそろそろナツ達の試合始まるだろ」

ルカ「そうね、戻りましょう」  
俺は新たな力を携えドムス・フラウに戻る

## 第76話 Happy Birthday♪

レイ「あれ？もう終わりそうじゃん」

俺が控室に戻るころにはすでにガジルはいなくナツがステイングとローグ相手に戦っていた

ステイング「一人で・・・十分・・・だど？」

ふざけやがって・・・」

ローグ「お前に用は無いガジルとやらせろ」

ナツ「だったら俺を倒していくんだな」

ステイング「ドラゴンフォースは竜と同じ力

この世にこれ以上の力なんてあるはずねえんだ!!」

レイ「ドラゴンフォースね・・・」

神竜とか魔装とかは使えるけどさ・・・

俺って発動できねえの？

ナツ「完全じゃなかったんじゃねーのか」

ステイングの振りかざした腕を軽く防いだ

ステイング「俺はこの力でバイスロギアを殺したんだーっ!!!」

ナツ「そうか、だったら俺はこの力で笑われた仲間の為に戦う」

ナツの拳はステイングの顔面を捕えローグの攻撃に対応した

ローグ「『影竜の・・・咆哮!!!』」

ナツ「『火竜の咆哮!!!』」

2つのブレス、ナツのブレスがローグのブレスを飲みこみローグを飛ばした

しかし、ステイングとローグは立ち上がり7年前から憧れていた男へ向かっていく

ステイング「まだまだあ!!!」

ローグ「くっ」

ナツ「来いよ」

双竜は立ち向かい続けた

たった1人で仲間の為に戦う竜に

ローグ「ステイング!!!」

ステイング「おう!!!」

レイ「へく合体魔法」

「『聖影竜閃牙!!!』」

ナツ「『滅竜奥義 紅蓮爆炎刃!!!』」

「ドガガガガガガ!!!」

2つの魔法がぶつかりドムス・フラウの地下が崩壊していく  
煙が晴れそこにたっていたのは・・・

チャパテイ「ここ、こここここれは!!!」

『妖精の尻尾』だー!!!  
フェアリーテイル

双竜破れたりー!!!

ここに来て『妖精の尻尾』1位に躍り出たー!!!  
フェアリーテイル

これにて大魔闘演武4日目終了ー!!!

1日休日をはさんで明後日最終戦が行われます!!

最終日はなんとメンバー全員参加のサバイバル戦

果たして優勝はどのギルドなのか!!!

皆さんお楽しみにー!!!

レイ「さーて帰るかー!!」

今夜は宴だろーっ!!

グレイ「おっしゃーっ!!」

こうして4日目トップになった俺達は自分たちの宿に帰っていった



——大魔闘演武中日——

ミラ「レイ？今日どうするの？」

レイ「今日なにかあつたつけ？」

もう、とミラは呆れながら教えてくれた

ミラ「今日はリサーナの誕生日でしょ!!」

レイ「・・・あ!!!」

大魔闘演武のせいで忘れてたけど・・・

今日リサーナの誕生日だ!!

アビー「彼女の誕生日忘れてるなんて最低ね」

レイ「どーする!?!」

なにもプレゼント買ってねえぞ!!?」

ミラ「とりあえずデートにでも誘いなさいよ」

正直かなり焦ってるぞ俺!!

とりあえずプレゼントかなんか買いに行くか・・・

それと確か近くに水族館もあつたからそこに連れてって・・・

——水族館——

リサーナ「わぁー!! 見てみて!!」

俺は途中でプレゼントを買ってリサーナと水族館を見て回った  
レイ「最近2人きりにもなれなかったしな

俺にとっちゃいい気分転換だよ」

とりあえず誕生日忘れてたって事はバレてねえな・・・

リサーナ「見て、ペンギン!!♡」

こうやってはしゃいでるの見てるとただの子供だなw

連れて来たかいたがあつたもんだ

リサーナ「なにニヤニヤしてるの?」

レイ「いやあ、かわいいなあ・・・とね」

リサーナ「もう／＼」

そういつてリサーナは俺の腕に抱きついてくる

リサーナ「えへへ、彼女だけの特権♡」

レイ「たくっ」

只今最高に幸せです!!

ーーーレストラナーー

リサーナ「んくおいひい〜♪」

レイ「水族館のレストランで魚介類を食べるのはどうかと思うが・・・」

俺は魚介類のドリア、リサーナは海鮮パスタを食べていた

レイ「ほら、誕生日おめでどうりサーナ」

リサーナ「わあ!! 覚えてたの!?!」

レイ「当たり前だろバーカ、開けてみるよ」

罪悪感を覚えながらリサーナにプレゼントを渡す

リサーナが箱を開けると猫の形をしたネットクレスが入っていた

猫の瞳にはピンク色の宝石が埋め込まれている

リサーナ「かわいい!!」

レイ「つけてやるよ」

リサーナ「ありがと／＼」

レイ「さてそろそろ帰るか」

リサーナ「うん、レイ明日試合だもんね

がんばってね!!」

レイ「余裕」

その頃ナツ達はドムス・フラウの地下であるものを発見していた・・・

## 第77話 魔導士バトルロワイヤル

——大魔闘演武前日・夜——

俺がデートを終え酒場に戻るとエルザ達が集まっていた

エルザ「なんだと？」

ルーシイが王国兵に捕まった？」

ラクサス「よくわからん計画の関係者にされちまったのか？」

レイ「俺がいない間に何してんだよ」

ちよつと眼を放すところの騒ぎ・・・はあ・・・

ラクサス「つまり何だ？」

大魔闘演武で優勝しなきやルーシイを取り返せねえのか？」

グレイ「その話も信用していいのかわからねえがな」

ナツ「俺は今すぐ助けに行くぞ!!!」

ウエンディ「落ち着いてくださいナツさん」

ジタバタしだしたナツをなだめるウエンデイ・・・  
大きくなっても変わらんないつは

ハッピー「相手は王国なんだよ」

エルザ「マスター」

マカロフ「うむ・・・」

王国相手ゆえにうかつな事はできんが・・・

向こうもまた国民をざんがい扱おう事はできんじやろう

エクリプス計画とやらが中止されるまで人質と考えるべきか」

ガジル「だが腑に落ちねえな・・・」

それほどの国家機密を知っちまった

俺達を開放する意味がわからん」

リリー「のちのちあのアルカディオスとかいう者を

断罪する為の証人として開放する可能性もあるな」

シャルル「極秘情報が拡散する危険もあるのに・・・」

アビー「ルーシイが人質にとられてるし

情報漏えいの危険はないと考えたかしら」

エルザ「これ以上隠し通せんと判断したのか」

グレイ「俺達が全員捕まっていたら情報は外に出なかつただろ」  
ミラ「それはどうかしら？」

グレイ達は大魔闘演武も出場者でしょ」

レイ「明日出場しなかつたら不審点が出てくる・・・」

ジュビア「王国としても魔導師ギルドは敵に回したくないと思います」

エルザ「ルーシイが捕われたのは我々にとつては不条理だが

王国軍の正義には反してないという事だ」

ナツ「だーっ!!!」

「ごちやごちや言つてねえで助けに行くぞーっ!!!」

レイ「うるせえっ!!!」

「ガンッ!!!」

ナツ「ごぼっ!!」

俺が振りかざした拳でナツが地面にめり込んだ

マカロフ「家族とられちゃ祭りどころじゃねえわい

皆・・・同じ気持ちじゃ

いつもみてえに後先考えんで突つ込んで

今回ばかりは相手が悪い・・・

が、黙ってられるほど腰ぬけじゃねえぞ妖精の尻尾は」

「……大魔闘演武・最終日……」

チャパティ「いよいよ!!! いよいよやって参りました!!!!

魔導師達の熱き祭典大魔闘演武最終日!!!!

泣いても笑っても今日、優勝するギルドが決まります!!!!

レイ「じゃールーシーが人質にされてるけど」

ナツ達に任せて俺達はやるべきことをやるだけだ」

チャパティ「そして現在1位!!!」

7年前最強と言われていたギルドの完全復活の日となるか!!!

『妖精の尻尾』<sup>フェアリーテイル</sup> 入場……!!!……おや?!

こちらは何とメンバーを入れ替えてきた……!!!

俺を中心にエルザ、グレイ、ガジル、ラクサスというチームに観客席からは驚きの声  
が聞こえてくる

ローグ「ナツ・ドラグニルがいない!?!」

ステイング「いいよローグ」

むしろラツキーだと考えよう」

レイ「俺がいるのを忘れんなよ？」

ステイング「……………」

チャパティ「タツグバトルであれだけ活躍したナツがない……とは一体!?!」  
ヤジマ「うむ……何かあったのかねえ？」

カナ「エルザー!!」

ナツの代わりにがんばりなさいよー」

リサーナ「レーイー!!! がんばれーっ!!!」

エルフマン「グレイ!!! 漢をみせろお!!!」

マカオ「ガジルー!!! ぶちかましてやれー!!」

フリード「ラクサス!!! その勇士を見せてやれ!!!」

チャパティ「己が武を……魔を……そして仲間との絆を示せ

最終日……全員参加のサバイバルゲーム……

『大魔闘演武』を開始します!!!」

「オオオオオオオオ!!!」

チャパティ「バトルフィールドは何とクロツカスの街全域

各ギルドのメンバーはすでに分散して待機しています

街中を駆け廻り敵ギルドと出会ったら戦闘となります



相手を戦闘不能にするとそのギルドに直接1P加算されます

又、各ギルドには1人だけリーダーを設定してもらいます

これは他ギルドにはわかりません

リーダーを倒せば5P加算されます

これで最多Pの理論値は45

どのギルドにも優勝の可能性はあります

チーム一丸となって動くか

分散するか戦略が分かれるところです」

相談した結果俺がリーダーになった

レイ「この大会俺達はルーシーを取り戻すために優勝するしかねえ」

エルザ「ナツ達が救出してくればよいが」

ガジル「それにこした事はねえがな・・・」

グレイ「だとしても優勝にはもう1つの目的もある」

ラクサス「7年間苦い思いをしたギルドの奴らの為にもな」

チャパティ「栄光なる魔の頂は誰の手に!!!」

『大魔闘演武』開始です!!!」

レイ「行くぞ!!!」

「オオツ  
!!!!  
」

## 第78話 新しい造形

チャパテイ「始まりましたねー最終戦」

ヤジマ「やはり分散ス各個撃破の作戦をとるチームが多いね」

マトー君「みんながんばるカボー!!」

チャパテイ「一人一人が高い戦闘力を持つ『剣咬みの虎』はやはり分散しています  
他にも二人一組で行動する者や三人一組もあります

・・・おーつとこれは・・・

ど、どうしたのでしょうか!!? 『妖精の尻尾』!!!  
全員目を閉じたまま動いていないぞーっ!!!

レイ「・・・(ヤバイ・・・動きたい!!)」

初代の作戦だからしょうがないが・・・

こーやってジツとしてんの苦手なんだよなー

マカロフ「何やっとなじやー!! あいつら」

リサーナ「ど、どういう事?」

カナ「知らないわよ」

マックス「エモノは早いモンがちだぞ!!」

エルフマン「早くやっちまえっ!!」

チャパテイ『妖精の尻尾』の奇妙な行動は気になりますが……

すでに敵と接触している者もいるぞーっ!!!

マカオ「おい!! エルザア!!!」

ワカバ「早く倒しに行けよオ!!」

マカロフ「何のマネじゃ!!」

ルーシイを助ける為に勝たなきゃならんのだぞ!!!

メイビス「だからこそ冷静にならねばなりません」

マカロフ「!?」

メイビス「私は今までの四日間で敵の戦闘力

魔法、心理、行動パターン全てを頭に入れました

それを計算し、何億通りもの戦術をシミュレーションしました」

ロメオ「初代……何を……?」

メイビス「敵の動き予測と結果、位置情報

ここまでは私の作戦はすでに伝えてあります

仲間を必ず勝利へと導く、それが私の「戦」です

『妖精の星作戦』開始!!!

「了解!!!」

チャパティ「『妖精の尻尾』が動いたー!!!」

レイ「さあ、Show Timeだ」

メイビス「各自散開!!! 次の目的地まで進んでください!!」

メイビスが指示を出す様子がギルドの面々がポカーンとする

メイビス「この時点で97%の確率でルーファスが動きます」

初代の言った通りに空にルーファスの魔法が打ち上げられた

レイ「あれだな」

メイビス「上空に光を目視してから2秒以内に緊急回避でかわせます

この魔法の属性は雷、レイとラクサスだけはそれをガード」

レイ「フツ」

うーん弱い雷だな」

受け応えがねえよ

メイビス「敵は動揺し思考が乱れます

この事項の乱れによりルーファスは

68%の確率で我々への接近を試みます

32%の確率で現位置にて待機……

しかしその場合も私たちの作戦にさほど影響はありません」

マックス「何言ってるんだ？ 初代は……」

エルフマン「さあ……」

リサーナ『『妖精の星作戦』……』

カナ「勝利する為の作戦って事はわかるけどね」

俺とガジル、グレイはトライメンズの撃破だったな

俺とグレイが噴水広場に逃げてきたヒビキとレンと対する

レン「くそ!! どうなってやがる!?!」

ヒビキ『『妖精の尻尾』には僕の『古文書』の計算を越える者がいるのか?』

グレイ「そーゆーこった」

レイ「悪いなヒビキ」

「……!!!」

メイビス「噴水広場に逃げてきた敵をグレイとレイが撃破後

そのままそれぞれポイントB―4、D―1に直行」

チャパティ「またもやトップに並んだーっ!! 『妖精の尻尾』ーっ!!!」

メイビス「ラクサスはそのままF―8へ

エルザはSー5へ、この辺で敵に動きがあります」

マカロフ「お、思い出したぞ・・・初代の異名・・・」

その天才的な戦略眼をもって数々の戦に勝利をもたらした・・・

『妖精軍師』メイビス」

マカオ「できる子だ・・・」

ワカバ「ただの癒し系じゃなかった」

アル「ああ見えて一応・・・『妖精の尻尾』作った人だし」

メイビス「ここからはかなりの激戦が予想されます」

キナナ「これ・・・最終的にジユラはどうするの？」

ラキ「ちゃんと考えてあるんですか？」

メイビス「考えてはいますが・・・」

「?」

s a i d  
グレイ

——図書館エリアー

グレイ「ここに来ればアンタに会えるって聞いてたが・・・さすが初代」

ルーファス「これはこれは・・・」

記憶は君を忘れかけていた・・・思い出させてくれるか？」

グレイ「無理して思い出すことはねえや、お前はここで終わりだから」

チャパ「図書館エリアで『妖精の尻尾』フェアリーテイルのグレイと『剣咬の虎』セイバートゥースのルーファスが激突だー!!」

映像魔水晶に映し出されている映像に観客のボルテージも上がり熱気が増していく

ロメオ「これも計算通りなのか!?初代」

メイビス「はい」

ウォーレン「じゃあグレイが勝つんだな!!この勝負」

メイビス「それはわかりません」

エルフマン「なに!？」

メイビス「しかし勝たねばなりません。ルーファスという者は『剣咬の虎』攻略のキーなのです」

ウル「グレイなら大丈夫よ。私の母の弟子だもの」

メイビス「時に想いは計算を越える・・・見せてください、あなたの想いを」

2人の間に流れる沈黙・・・



その沈黙を破ったのはグレイだった!!

グレイ「いくぞ仮面野郎!! 『アイスメイク・・・氷創騎兵!!』」  
フリーメランサー

ルーフアスは本を閉じグレイの魔法をよけながら魔法を記憶する

グレイ「逃がすかよ!! 『氷撃の鎚』!!」  
アイスインパクト

ルーフアス「記憶」

グレイ「何をもうもご言ってやがる」

ルーフアス「記憶は武器になる

私は『見たことある魔法』を記憶し記憶を元に新たな魔法を造形できる」

グレイ「なんだそりゃ？」

ルーフアス「君の記憶『氷』の魔法、オルガの記憶『雷』の魔法

覚えている・・・『記憶造形凍エル黒雷ノ剣!!』」  
メモリーメイク

地面に当たった所から凍りつく黒い雷がグレイを襲う!!

ルーフアス「『荒ブル風牙ノ社』」

今度は無数の竜巻を発生させるがグレイは防御魔法でガード、しかし・・・

ルーフアス「盾・・・記憶、そして忘却」

グレイ「!! 盾が消え・・・ぐあああああ!!」

突如グレイの氷の盾が消え竜巻がグレイを巻き込んで旋回する

ルーファス「この戦いは私が君に詩う鎮魂歌

記憶していたまえ君は私に勝てない」

グレイ「そいつあ．．．どうかな．．．？」

その言葉と共にグレイは服を脱ぎ捨てる

チャパ「脱いだー!! 脱いだ!! 脱いだー!!!!!

グレイ『妖精の尻尾』の紋章刻んでるからには同じ相手に二度はやられねえ」

ルーファス「ほう、策でもあるのかね？」

グレイ『アイスメイク．．．』

ルーファス「記憶」

グレイ「限界突破!!!」  
アンリミテッド!!!

グレイはすさまじいスピードで剣を造形していきその様子にルーファスも驚愕の表

情を浮かべた

ルーファス「これは．．．なんとという造形の速さだ!!!」

グレイ「覚えたかい？」

ルーファス「記憶が．．．おいつか．．．ない!!!」

グレイ『氷皇の鎧!!!』  
アイス・アームド!!!

グレイが作り出したのは自ら身に纏う氷の騎士の鎧

手にする剣でルーファスを氷漬けにした  
ルーファス「ぬあああああ!!!

しかし、氷属性だけなのが惜しい!!

私はその氷を滅する炎を覚えている

『記憶造形 燃ユル大地ノ業!!!』

ルーファスは炎の魔法を放つ、しかしグレイはその炎の中ルーファスに向かっていった

グレイ「俺はもつと熱い炎を覚えてる

『氷皇剣ーアイスプリンガーー!!!』

ルーファス「ぐあああああ!!!」

グレイの一撃によりルーファスを撃破

その様子に安堵するメイビスとウルティア、歓喜するメンバー

チャパ「グレイだーっ!!!

『妖精の尻尾』が勝利ーっ!!! ルーファス敗れるー!!!

## 第79話 風神と弟子

グレイがルーファスに勝利したころ・・・

レイ「あく・・・俺は基本自由にしていいって言われたけどさ」

周りに誰もいないし心配するんだけど・・・

たしか街の建物破壊してもなんとかなるんだよね？

俺は右腕を鉄の剣にし体をねじり構える

レイ『鉄竜の・・・円撃!!』

??? 「きやあつ」

体を一回転させて周囲の建物を切り倒した

すると2、3 km先に急いでしゃがんだ影を目の端に捕え急いで向かいそこに斬撃をた

たき込む

??? 「もく服がポロポロ」

俺の攻撃を受けても立ちあがったのは『蛇姫ラミアスケイルの鱗』のシエリアだった

レイ「よりによってお前かよ」

シエリア「レイさんか、手加減は無しだよ？」

レイ「できねーよ、お前すぐ回復すんだもん」

シエリア「それじゃあいくよ!!」『天神の怒号!!』

シエリアは至近距離からブレスを放ってきた

レイ「なっ!?」『火竜の鉄拳!!』

ブレスを片腕で受け止め相殺する

レイ「おいおい・・・躊躇ねーな」

俺はシエリアに向かって火の球を投げつけるがすべて風で吹き消す

シエリア「いつまでも子供扱いしないで!!」

レイ「じゃーちよつと本気でいこうか」

『天竜剣アルデバラン!!』

俺は一太刀でシエリアの周りの地面をえぐりシエリアにぶつける

シエリア「痛い痛い痛い痛いっ!!」

・・・やりずれっ!!

しかしシエリアもすぐに回復し応戦する

シエリア「えーい!!」

シエリアは巨大な黒い竜巻を作りだし俺に向かってものすごいスピードで投げつけてくる

レイ「ちよつと待て!!」

竜巻を投げるってなんだよ!?

うおおおおおおおとおおおおおつ!!!」

ものの見事に竜巻に巻き込まれた俺は中に投げ出される

アビー「レイが押されてる!?!」

リサーナ「レイってば女の子に甘いもんね」

ちよつとふくれっ面でリサーナは言った

ルカ「私にもとどめ刺さなかったし」

ハッピー「レイなら大丈夫だよ!!」

ここまでもろに喰らってたらS級の威厳もくそもねーな・・・

レイ「だーもう終わらす!!」

回復の隙なんて与えねえ!!」

俺は猛スピードでシエリアに詰め寄った

シエリア「『風神の舞!!』」

シエリアが防御として使用した魔法を切り裂きさらに詰め寄る

レイ「『天竜剣一ノ型 絶刀空閃!!』

式ノ型 春疾風!!

参ノ型 螺旋絶風刃!!

四ノ型 絶空竜閃牙!!』

俺は次々とシエリアに風の剣技をたたき込む

シエリア「くっ!! 回復ができない!!」

そして俺は今まで違う構えで剣を構える

レイ「これは俺の新技・・・『天竜剣五ノ型 夏終涼風!!』」

大気中の空気を刀の表面に凝縮させ留め、振り切った瞬間に爆発的な暴風を吹き荒ら

させる

シエリア「キャアアアアツ!!」

シエリアは魔法をまともに喰らい地面に倒れ気絶した

レイ「悪いけど、もつと強い滅神魔法の使い手がうちにいるんでね」

シエリアを撃退した俺はエルザ、ミネルバがぶつかるとは場所へ向かっていた。

レイ「なくんか嫌な予感すんだよね・・・」

・ ・ ・と目的地に着いた俺は嫌な予感の中

眼下ではエルザ、カグラ、ミネルバが三つ巴の戦いを繰り広げていた

レイ「お嬢さん方、俺も参加させてくれません ・ ・ ・かつ!!」

俺はカグラとミネルバを気迫で吹き飛ばす

エルザ「レイ、手助けはいらんが？」

レイ「嫌な予感したから来たら初代の予感外れてんじやねーか」

ミネルバ「レイ・グローリー ・ ・ ・聖十の称号を持つ滅竜魔導士」

レイ「さて、誰が俺とやりあうんだ？」

カグラ「私だ!!」

すると、俺の予想通りカグラが切りかかってきた!!

レイ「あーじゃあおいつは貰うぞ、エルザ」

俺はカグラの剣を受け流し街の方へ吹き飛ばした

さてさて、そろそろ俺も弟子相手に本気出しちやおつかう

カグラ「はあああああつ!!」

態勢を立て直したカグラはすぐさま反撃に繰り出す

それを炎竜剣で受け止める

レイ「お前に剣を教えたのは一応俺だぜ？」



それなのに師匠に剣を向けるとか・・・」

カグラ「お前がジェラールを仲間にしなればこんな事はしなかった」

7年前、仕事先で出会ったカグラはとても強いとは言えない魔導士だったが俺が剣を教えてやったら3日でよくなった

つーか師匠にお前とか・・・

レイ「これは再教育が必要だな」

カグラ「来いっ!!」

レイ『火竜剣式ノ型 爆竜乱舞!!』

すさまじいスピードで飛ばしたつもりだったがカグラは全て見切り俺の懐に入り込む

カグラ「もらったっ!!」

カグラの攻撃は俺が左手を鉄竜にして受け止める

レイ「あつぶねえええ!!」

つーかいつまで鞘に納めてんだよ

本気でかかってこないと潰すぞ？」

俺はそういつて両手に炎竜剣を構える

するとカグラも不倶戴天の鞘を抜いた

カグラ「お前は昔から私の事をまともに見ようとしなかつたくせに・・・

『怨刀 不倶戴天 剛の型!!!』

レイ「おらああああっ!!!」

俺とカグラの剣が何度もぶつかり、衝撃で周りの建物が粉々に吹き飛ばす  
レイ「ジェラールは自分の罪を認めて未来に歩き出してるんだ!!」

その邪魔はさせねえ!!!」

カグラ「ジェラールの罪は拭いきれるものではない!!」

レイ「過去しか見てないお前が先を歩いてる奴を否定すんじゃねえ!!!」

カグラ「くっ!!」

『怨刀 不倶戴天 斬の型!!』

カグラの斬撃を受け止めた左手に持っていた剣を粉々に破壊された

レイ「なんつー斬れ味だよ・・・」

カグラ「この一刀で終わらせる!!」

カグラの魔力がどンドン上がっていくのが空気を通じてよくわかった

レイ「俺はこんな所で終わるわけにはいかない」

俺は炎竜剣を左手で生成した鞘に納める

カグラ「ふざけた真似を!!」

はああああああ!!!」

流れに身を任せろ……

自分の力は最小限に抑え相手の力を利用する……

カグラが俺を斬りつける瞬間、俺の新技が炸裂した!!

レイ「『炎竜剣居合 火焰桜……』」

カグラ「なっ……!!」

すれ違いざまにカグラは倒れた

レイ「お前も前を見て歩けよ

エルザに救ってもらった命を無駄にすんな」

カグラ「!!?」

どういう事だ!？」

俺はカグラにエルザから昔聞いた事をそのまま話してやった

カグラ「エルザが……ローズマリー出身……あの時私を助けた……」

レイ「そーゆー事だ

じゃ、俺は行くぜ」

カグラ「ま、待て……すみませんでした……師匠」

レイ「いまさら師匠なんていいつつの……」

まー稽古つけて欲しかったらいつでも言いな  
俺はカグラを置いて次の敵を探しに行く・・・

## 第80話 優勝

俺はカグラを倒した後、街中の魔力を探り誰が残っているかを探ってみた  
魔力を察知したと同時に空に『セイバートゥリス剣咬の虎』のギルドマークが浮かび上がる  
レイ「残るはステイング……か」

ぶつちやけカグラとの戦いで魔力残ってないんだよね……  
ブツブツ呟きながらレイはステイングのもとへ向かった

ステイングのもとへポロポロになった他のメンバーも集まってきた  
ステイング「壮観だね……」

7年前、俺が憧れた魔導士ばかりだ」

ガジル「御託はいい

これが最後の戦いだ」

グレイ「サシでやってやる……誰がいい？」

ステイングはグレイの言葉に鼻で笑った

ステイング 「レイさん以外ボロボロじゃねーか

そのレイさんも魔力切れみたいだけど」

レイ 「うるせーよ・・・」

『フェアリーテイル妖精の尻尾』なめんな」

ステイング 「とんでもない・・・」

アンタらには敬意を払ってるよ

だからこそまとめて潰す!!!!

この時を待っていた!!

レクターに見せてやるんだ!!

俺の強さを!!!」

レイ 「そこまで言うならかかってこいよ、相手になってやる」

俺の言葉にステイングは魔力を上げていく

ステイング 「見せてやる・・・覚醒したオレの力を!!!」

ステイングをにやけながら『フェアリーテイル妖精の尻尾』を見る・・・が

とても満身創痍とは思えない堂々さでステイングを見据える一同

そんなレイたちの姿にステイングは愕然とする

ステイング 「(全員もうボロボロじゃねえかよ・・・」

押せば倒れるくらいにポロポロで・・・

こいつらを倒せばレクターに会えるんだ・・・

進め・・・俺は強くなった!!!

レクターへの想いが・・・俺を強く・・・勝てる!!!」

勝てる・・・一步踏み出すステイング。

ところが途端に膝を突き、降参を宣言した

ステイング「勝て・・・ない・・・降参だ・・・」

チャパティ「決着!!!!」

大魔闘演武、優勝は!!!

・・・『妖精の尻尾』!!!!」

ステイングが戦意を喪失したことで、フェアリーテイルの優勝が決まった

沸き立つ観客たち、戦いの終わりにほっとした表情を見せる

レイ「なぜ向かってこなかった？」

今のお前ならポロポロの俺達に勝てたはずだろ？」

ステイング「会えない・・・気がした・・・」

勝てば会えると思っていたのに・・・

なぜか会えない気がしたんだ・・・

自分でもわからない……

アンタ達が眩しすぎて……

今の俺じゃ……会えない……って」

自分にも分らない不安に襲われるステイングだったが

レイの隣にいたエルザが優しく声をかける

エルザ「そんなことない……会えるさ」

ミリアーナ「エルちゃん!!」

その言葉の通りに、エルザを追って来たミリアーナの腕にはレクターの姿があつた

ステイング「レクター!!!」

レクター「ステイング君!!! ステイング君!!!」

ステイング「レクター!!! ああっ!!!」

涙しながら嬉しそうに駆け寄るステイングとレクター

フェアリーテイルのメンバーたちもその様子を暖かく見守る

そしてレクターを強く抱きし締めるステイング

微笑ましい光景に笑顔を見せるメイビス

だがすぐに何かを予期するように鋭い表情に変わる



所変わって華灯宮メルクリアス・・・

ダートン 「『妖精の尻尾』<sup>フェアリーテイル</sup>の無敗とステイングの降参・・・」

ヒスイ 「誰も予想できなかった未来を言い当てた

やはりあの方は正しかった・・・

あの方の言う未来は全て真実・・・」

地下へと続く階段を下りるヒスイとダートン

ヒスイ 「これより人類の存亡をかけた戦いが始まります

エクリプス2改め エクリプスキャノンを地上へ!!」

ついに動き出したエクリプス

祭の終わりが告げる破滅へのカウントダウン

人類は絶望的未来に抗えるのか・・・!!?

## 第81話 結束

大魔闘演武優勝を喜ぶフェアリーテイルの仲間たち

再会を喜び涙を流し抱き合うステイングとレクタ

優勝の光景をモニター越しに眺めるローグとフロツシュ

フロツシュ「『妖精の尻尾』すげーいい!!!」

ローグ「ああ・・・負けてこんなにすっきりした気分なのは初めてだ

フロツシュ「オレは・・・仲間を大切にしたい」

フロツシュ「フロローも!!!」

レイ「とりあえず終わった!!!」

エルザ「誰か信号弾を見たか？」

ラクサス「いや」

グレイ「俺も見てねえ」

ステイング「あの・・・さ」

ガジル「あん？」

ステイング「いや・・・なんでナツさんが参加してないのかと思って」

レクター「ナツ君に何かあつたんですか？」

レイ「(ナツ・・・)」

数時間後、全魔導士はり・イン・クリスタルに集められた

国王「・・・という訳で大魔闘演武の余韻にひたるヒマも無く

大変心苦しいのだが・・・

今・・・この国は存亡の危機にある

・・・とさつき聞いた・・・」

さつき聞いたって・・・いちおアンタ国王だろ・・・

国王「今、城では大規模な作戦が遂行されておる

エクリプス計画・・・

この作戦の目的は一万のドラゴンを一掃するというもの

しかし相手は大群ゆえ必ず数頭・・・

あるいは数百頭かが生き残ると推測される・・・

魔導士ギルドの皆さん・・・どうか私たちに力を貸してください

皆さんの力で・・・この国を救ってください・・・

やる気満々で国王の呼びかけに応える集まった国中の魔導士たち

魔法と共に歩んだ自分たちの国を守る

大魔闘演武で争っていた各ギルドもここに団結した

涙を流し頭を下げる国王

エルザ「我々の仲間が軍に捕らえられている」

エルザは近くにいた兵に問いかけた

兵士「それなら大丈夫だ

ちようど今彼らは姫様たちに合流したと伝えるようにと言われたところだ」

ガジル「オーケー!!

それじゃ、おっぱじめようぜ!!」

レイ「ドラゴンが相手なら滅竜魔導士の出番だろ

てかジェラール達は？」

ラクサス「しらん」

国王「ありがとう ありがとう」

深く頭を下げ涙する国王

国王「ありがとう・・・カポー」

国王の言葉に啞然とする一同

これだけの魔導師が一つに・・・

広場の様子を離れたところから見守るラハールとドランバルト

ドランバルト「エクリプスだと？」

存在しているだけで30の法律に触れるぞ」

ラハール「この事態・・・評議院本部に連絡したほうがよさそうだな」

そこへジェラールが現れ二人に声をかける

ドランバルト「少しはマジメになつてようだな」

ジェラール「まあな・・・それはそうと頼みがある」

そして王宮前では・・・

ギイイイイイ

ついにエクリプスの扉が開きだす!!

ルーシイ「扉が開く・・・」

エクリプスを見上げるルーシイ

ついに開かれた扉・・・その向こうに待つ未来とは・・・!?

## 第82話 開かれた扉

ゴーン ゴーン

クロツカスの街に午前0時を知らせる鐘が鳴り響く

ガジル「7月7日か・・・」

レビイ「確かドラゴンが消えた日だったよね」

ガジル「こんな日にドラゴンが現れるってのか・・・」

マカロフ「妖精<sup>フェアリーテイル</sup>の尻尾はこのセントラルパークの警護じや」

と皆に指示するマカロフ

エルザやグレイ達は怪我をしているが俺やシエリアのおかげでいくらかマシになっている

そんな風に喋っていると街に爆風が吹き荒れた!!

レイ「来やがった!!」

俺達の前に現れたのは、体が炎で出来たドラゴン

アトラスフレイム「我が名はアトラスフレイム

貴様等に地獄の炎を見せてやろう」

マカロフ「かかれーっ!!!」

マカロフの号令で一斉攻撃を仕掛けるフェアリーテイルだったが

アトラスフレイムの放つ地獄の炎によりその場の全ては成す術無く吹き飛ばされていく

しかしレイとラクサス、ガジルだけはその炎に耐え、アトラスフレイムに向かっていく

レイ「『水竜の……』」

ラクサス「『雷竜の……』」

ガジル「『鉄竜の……』」

「『咆哮!!!』」

3人の咆哮は1つになりアトラスフレイムに直撃した  
アトラスフレイム「ぐうううううっ!!!」

滅竜魔導士か!!!」

レイ「俺達の家族に何しやがる!!!」

ラクサス「『レイジングボルトオオオ!!!』」

ガジル「『鉄竜棍!!』」

レイ「『水竜剣壱ノ型 水飛斬!!』」

アトラスフレイム「多属性の滅竜魔導士!!

貴様は・・・!!」

次々にアトラスフレイムに攻撃をたたみかけていると

空中を飛んでいたデカイドラゴンが突如叫び声をあげ、ナツの声が響いた

ナツ「聞こえるかあ!!!」

滅竜魔法ならドラゴンを倒せる!!

滅竜魔導士は8人いる!!!

ドラゴンも8人いる!!!

今日・・・この日の為にオレたちの魔法があるんだ!!!

今・・・戦う為に滅竜魔導士がいるんだ!!!

行くぞ!!!!

ドラゴン狩りだっ!!!!

レイ「8人・・・ね」

ナツと未来ローグが乗るドラゴン、マザーグレア

マザーグレアは大量の卵を地上へと産み落とす



そしてその中から出てきたのは、人間ほどの大きさをした子型のドラゴンだった  
メイビス「レイ、ガジルは他のドラゴンの撃破を、他のメンバーは小型の撃破をお願  
いします」

ジェラール「俺もレイと一緒にいこう」

レイ「いや、お前は残ってエルザを助けろ」

リサーナ「そーよ、レイには私とアビー、ルカが付くから大丈夫よ」

ジェラール「なっ!?!」

レイ「お前の気持ちはバレバレだぞ〜ジェラールw」

リサーナ「そーよ、私たちの目は誤魔化せないわ」

ジェラールは顔を赤くして否定するが俺とリサーナは軽く受け流した

そして俺とリサーナ、ルカ、アビーの4人は他のドラゴンを探しに行った

俺達が5分ほど走ると複数のギルドが1体のドラゴンと対峙していた

そのドラゴンは漆黒の体の中に無数の煌きがある美しいドラゴンだった

レイ「お前らどいてろ!!!」

『火竜剣零ノ型 獄炎・烈炎ノ太刀!!!』

火竜剣最強の型を放つレイだったがその魔法はドラゴンの体に吸い込まれてしまっ

た

レイ「なに!？」

ルカ「吸い込まれた!？」

星竜「私の肉体は宇宙と同格の闇の物質を有する」

レイ「リサーナとアビーは下がってろ

俺とルカでやる!!」

ルカ「竜と神の双宴ね」

星竜「来い!!!」

レイ「さーでドラゴン狩りだ」

ルカ「久しぶりに本気が出せるわ」

星竜「グオオオオオオツ!!!」

ドラゴンの唸り声だけで凄まじい魔力が空気を通じて伝わってくる

リサーナ「空気がビリビリする・・・」

レイ「『モード白炎竜!!』」

ルカ「『モード影炎神!!』」

俺とルカは炎を操る光と影になり星竜に挑んだ・・・が

レイ「『白焰・陽炎!!』」

ルカ「『黒炎・天照!!!』」

レイとルカはそれぞれ白と黒の炎をドラゴンにぶつけたが吸い込まれるだけどまったくダメージを与えていない

アビー「2人とも全力でやってるのに全部あの体に吸い込まれてる・・・」

そう、2人は次々と魔法を撃ち続けたが星竜の体に吸い込まれてばかりなのだ

レイ「ハッ・・・もう魔力切れるぞ・・・」

ルカ「うう・・・」

星竜「ぬるい・・・ぬるいわあああ!!!」

星竜が唸り声を上げると体から次々と小さな隕石がレイ達に向けて飛ばされた

レイ「あ・・・がっ!!」

ルカ「痛ッ!!」

リサーナ「もう2人ともボロボロじゃない・・・」

レイ「まだ・・・だっつー・・・の!!」

レイ達が立ちあがったその時、その場にいる全員の頭の中にドラゴンの爪に貫かれたリサーナとルカのイメージが流れ込んできた

リサーナ「なに・・・今の？」

ルカ「私たちが・・・死ぬ？」

リサーナとルカは混乱していたが『時竜』の滅竜魔法を持つレイだけは状況を理解し、誰がなにをしたのかも理解することができた

レイ「(バカヤローが……)」

これ以上仲間は失つてたまるか!!」

俺は星竜に突っ込み肉体に片腕を突っ込んで小さな隕石を引き抜いた

リサーナ「えええええっ!!」

レイ「ドラゴンの肉体でできた隕石だ

もちろん魔力でできてんだろ?」

ルカ「……まさか?」

アビー「……食べる気ね」

そのとーり!!

俺は隕石をガブリと噛みしめ、飲み込んだ

しかしあまりに強大な魔力にさすがに全身の魔力が煮えたぎる

レイ「うああああ!!!」

星竜「たかが人間に星々の力を手にするなど愚か者があああ!!!」

レイ「ふ……やっど抑えこめた……」

そのたかだか人間に手こずる事になんだよ」

俺は体に炎と星の滅竜魔法を纏い始める

リサーナ「抑えこんじやった・・・」

アビー「あそこまで行くと化け物ね・・・」

ルカ『星炎竜』つてところね」

レイ「化け物ゆーな!!」

『星炎拳!!』

星竜の力を得たレイの魔法は吸い込まれることなくダメージを与えることができた

しかも、星竜の体が輝いていく

どうやらタイムリミットのようにだ

星竜「グッ・・・人間風情がアアアア!!!」

レイ「元の時代に帰りやがれ!!」

『滅竜奥義・改 星炎爆炎刃!!』

俺は右手に炎、左手に星の滅竜魔法を纏い、ドラゴンに向けて勢いよく振り抜いた

星竜「グオオオオオオオツ!!!」

レイの魔法は直撃したがさすがはドラゴン、息絶えることは無かった

星竜「人間にここまでやられたのは初めてだ・・・」

我から奪った星竜の力を持っておるんだ

無駄死にしたら我が殺しに向かうからの」

レイ「無駄死になった時点でお前に殺せるかバーカ」

星竜「む・・・やはり今殺しておこう」

そう言い星竜は腕をレイに振りかざした

レイ「んなっ!!?」

リサーナ「ちよっ!!」

しかし星竜の腕は俺を直撃することなく消え去り元の時代へ帰っていった・・・

レイ「び、びびったー!!」

こうして長かったドラゴン達との死闘は幕を閉じた

戦いが終わったのだと浮かれる一同の中で、メイビスは顔を曇らせた

メイビス「滅竜魔導士、誰一人としてドラゴンは倒せませんでしたか・・・」

## 第83話 大舞踊演舞

第111話 大舞踊演舞、その裏

レイ「ウルー!!!」

戦いの後、レイはウルティアを探す為に街中を走り回っていた  
そしてレイは時計塔の前で倒れているウルティアを見つけた

レイ「バカ野郎が!!!」

お前は妖精フェアリーの尻尾から抜けちゃいけねえ!!!」

どうすればウルの時間を戻せる?

時間・・・『時竜』は時を司る力・・・

レイ「仲間を失うくらいなら力の1つや2つくれてやる!!!」

レイは『時竜』の魔力をウルティアにすべて流し込む

『時のアーク』を使えるウルなら『時竜』の魔力に適合するはず・・・!!  
ウル「あ・・・う・・・」

魔力を全て流し切るとウルティアの体が徐々に戻っていく

レイ「ウル？」

生きてる？」

ウル「あ・・・私は・・・？」

レイ「もう二度のあんな事するな!!」

大魔闘演武から数日後・・・

クロツカスにドラゴンが襲ってきたことは、フィオーレの住人たちの間で噂になって  
いた

だが当時避難していた彼らには、それが真実だったのかを確かめることは無かった  
そして俺達は今、城で開催される大魔闘演武の打ち上げパーティーに招待されていた

レイ「うわー、みんなドレスコードかよ」

リリー「レイはなぜそんなに似合うんだ？」

ガジル「俺も似合ってるだろうが」

男組はみんなスーツに身を包みパーティー会場に向かっていた

レイ「てかナツはどこ行った？」



さきほどからナツの姿だけがまったく見えない  
グレイ「さあ？

見てねーけど？」

そんなこんなで喋っているとすぐに会場に着いた  
女性組はすでに到着しておりドレスに身を包んでいた  
リサーナ「レイー!!

こっちこっちー!!」

リサーナはピンク色のドレスを着ていた

レイ「へー、似合ってるじゃん」

俺達が談笑していると・・・？

突如としていたる所でギルド同士のケンカが始まる

レイ「なにがどーなってる？」

呆れた顔でレイはルカに訪ねた

ルカ「どのギルドがユキノを入れるかでもめてるのよ・・・」

レイ「んなの『剣咬の虎』でいーじゃねーか・・・」

アルカディオス「皆の者!!!

そこまでだ!!

陛下がお見えになる!!!」

アルカディオオスの一声に大喧嘩も沈静化する  
アルカディオオス「この度の大魔闘演武の武勇と

国の危機救った労をねぎらい

陛下直々にあいさつをなされる、心せよ」

フィオーレ王直々に挨拶がされるといふことで、皆の注目は俄然集まる。  
だがそこに現れたのはフィオーレ王・・・ではなく?

ナツ「皆の集!!!」

楽にせよ!!!

かーーーーーっかっかっかっかあ  
!!!!!!」

「んなーーーーっ!!!!!!」

ナツ「俺が王様だーーーーっ!!!」

王様になったぞ——っ!!!」

レイ「もう知らねー・・・」

こうして長かった大魔闘演武は幕を閉じた・・・

## 主な登場人物&amp;技一覧 Part. 2

レイ・グロリー

S級魔導士

聖十大魔導

年齢 16歳

容姿 黒髪に赤みがかかった目 イケメン

性格 基本やさしい・女に弱い・敵に容赦なし

魔法 神滅竜魔法

創造魔法

火竜・・・火竜の鉄拳

火竜の咆哮

火竜の翼撃

業火双炎波  
：炎の波

滅竜奥義 紅炎鳳凰閃

・火竜剣 クリムゾン

? ・火竜剣零ノ型 獄炎・烈炎ノ太刀

・火竜剣壱ノ型 炎刃・七連舞

・火竜剣弐ノ型 爆竜乱舞

・火竜剣参ノ型 紅蓮爆炎刃

・火竜剣四ノ型 業炎竜塵牙

・火竜剣五ノ型 紅蓮鳳凰儉

・炎竜劍居合 火焰桜

・魔装・火竜

? ・火竜の神拳

・火竜の爆炎花

・火竜剣六ノ型 炎刃・五十連舞

・炎竜剣七ノ型 紅炎旋回塵

水竜・  
・水竜の鉄拳

水竜の咆哮

・水竜剣ガラティーン

？・斬波

・水竜劍壺ノ型 水飛斬

岩竜・・・岩竜の剛拳

岩竜の層撃

岩竜壁

氷竜・・・永久氷結

氷竜晶

氷弾

アイスストーム

氷刃・五十連舞

・氷竜劍アブソリユート・ゼロ

？・氷竜劍零ノ型 氷淵・零砲<sub>ゼロキャノン</sub>

・氷竜劍壺ノ型 氷竜旋尾

・氷竜劍參ノ型 氷牙雪零刃

・氷竜牙

幻竜・・・幻竜の吐息

幻竜の咆哮

天竜・・・天竜の翼撃

滅竜奥義 照破・天空穿

・天竜剣アルデバラン

？・天竜剣零ノ型 絶空・風嵐かせおろし

・天竜剣壱ノ型 絶刀空閃

・天竜剣弐ノ型 春疾風

・天竜剣参ノ型 螺旋烈風刃

・天竜剣四ノ型 絶空竜閃牙

・天竜剣五ノ型 夏終涼風

雷竜・・・雷竜方天戟

・雷竜剣 ボルテックス

？・雷光閃

- ・雷竜剣零ノ型 雷皇・紫電槍
- ・雷竜剣壹ノ型 雷光招来
- ・雷竜剣参ノ型 紫電轟雷刃
- ・雷竜剣四ノ型 絶雷竜閃牙
- ・雷竜剣五ノ型 紫電麒麟槍

毒竜・・・毒竜剛牙

白竜・・・シャイニーブルーム

滅竜奥義 ホーリーノヴァ

滅竜奥義 聖刀狼

・白竜剣 ホワイトアーリー

？・白竜剣零ノ型 聖光・天界の輝きホーリーグリッター

影竜・・・影竜の咆哮

鉄竜・・・鉄竜の円撃

星炎竜・・・星炎拳

滅竜奥義・改 星炎爆炎刃

雷炎竜・・・雷炎竜の咆哮

滅竜奥義・改 紅蓮爆雷刃

白炎竜・・・白焰・陽炎

・白炎剣 ヒートアツシユ

?・滅竜奥義・改 白火衝霸斬

雷氷竜・・・雷氷竜の咆哮

滅竜奥義・改 雷光氷竜剣

白天竜・・・滅竜奥義・改 閃華裂風刃

氷雷竜・・・氷雷剣 コールドブリッツ



? 氷雷劍零ノ型 雷迅氷華槍

氷幻竜・・・氷点霞月

滅竜奥義・改 氷幻零魔槍

白影竜・・・白影竜の繩

滅竜奥義・改 聖影竜閃牙

白雷竜・・・滅竜奥義・改 白雷・麒麟

・魔装・白雷竜

?・聖雷砲

・滅竜奥義・極 白雷麒麟・双雷

氷天竜・・・魔装・氷天竜

? 滅竜奥義・極 氷天百華葬

邪影竜・・・エターナル・ダークネス

白火天竜・・・真・滅竜奥義 天照白火刃

白炎・霸竜モード・・・真・滅竜奥義 白火霸竜剣

炎天・霸竜モード・・・真・滅竜奥義 煉火絶空

神竜・・・神竜の鉄拳

神竜の翼撃

神竜の皇

神竜の閃撃

ゴッドドライブ（強化魔法）

滅竜奥義 光輝・神竜拳

神竜剣 レイヴェルト

？・神竜剣零ノ型 神輝・羅刹ノ太刀

・神竜剣壱ノ型 神焰刀

・神竜剣参ノ型 神淵閃煌刃

神竜王・・・

合体魔法・・・火竜爆炎脚（ナツ）

幻竜協奏曲（ミストガン）

クラウデイストーム（アリエス）

天輪・神ゴッド・オブ・ブレイドの剣（エルザ）

光と闇の鎮魂歌レクイエム（ルカ）

ルカ・ハート

年齢 16歳

容姿 金髪ロング 美少女

サイズ 約92 56 89

魔法 真滅神魔法

炎神・・・炎神の怒号

水神・・・・水神の渦潮

水神の海流

天神・・・・天神の南風ノトス

天神の北風ホレアス

雷神・・・・雷神の鉄槌

白神・・・・白神の聖槍

雷炎神・・・・雷炎神の宝クラウ・ソラス劍

白炎神・・・・滅神奥義・改アメノホアカリ天火明命

影炎神・・・・黒炎・天照

アビー・アルテミス

エクシード

容姿 銀色

女

・翼

・ホーミンググローブ

レイ・レアグローブ

年齢

容姿 金髪に青い目

性格 残虐的

魔法 ダークブリング

・空間移動

・ダークエクスプロージョン

・闇の爆発剣

・影人形

・闇の真空剣

・ダークエミリア

・モンスタープリズン

ジユダル・アルギオン

年齢 19歳

容姿 マギのジユダル

性格 戦闘狂

魔法 マギ

???

漆黒の不死鳥マスター

魔法 悪魔の鍵

・ルシファー・・・ダークネスストリーム

・ネクロマンサー

## 番外編

## 番外編 歌姫

これは大魔闘演武より前の話・・・

俺はギルドの中でまったりと音楽を聴きながら一杯の紅茶とパンケーキで優雅な朝のティータイムを迎えていた

レイ「ああ・・・平和だ・・・」

しかしその平和が続かないのが『妖精の尻尾』フェアリーテイル

ナイフでパンケーキを切ろうとするとそのパンケーキが突如、宙を舞い黒焦げになつた

レイ「俺のパンケーキイイイイ!!!」

ナツ「おわああ!!」

レイがキレたああ!!!」

ルカ「ほんと落ち着きないわね・・・」

リサーナがいないとレイを止めるのもいないし・・・」

そう、リサーナは今仕事で4日ほどギルドを空けている  
レイ「・・・仕事行くか」

思い立った俺はリクエストボードを見に行く

あんまし疲れるような仕事は嫌なんだよね・・・ん？

要人護衛

～仕事内容～

アシハラ・ユノを隣国まで護衛

～報酬～

500万J

レイ「アシハラ・ユノオオオオ!!？」

ルカ「もう!!」

さつきからうるさいわよ!!」

レイ「いやいやいやいや!!!」

ユノだぞ!!？」

アシハラ・ユノ!!!」



ルカ「誰よ？」

レイ「俺がさつき魔水晶ラクリマで聞いてた東洋出身の歌手!!

めっちゃかわいいし、歌ちよーうまいんだよ!!

よし!! 俺この仕事行ってくるからアビーに留守番頼むって伝えといて!!」

俺はミラに依頼書を渡し速攻でギルドを飛び出しマグノリア駅へ向かった

この依頼で新たな敵が現れるとはこの時はまだ知らなかった・・・

ーーマグノリア駅ーー

ちよつと早く来すぎたか？

まあ、早い事はいいことだな

??? 「お待たせしてすみません」

声のした方を振り向くとメガネをかけた女性とその後ろにアシハラ・ユノが立っ

た

レイ「い、いえ!!

『妖精の尻尾』のレイ・グローリーです!!」

??? 「知ってますよ『神童』の名は有名ですからね」

私、ユノのマネージャーを務めてますサツキと申します」

ユノ「アシハラ・ユノです

今日はよろしくお願ひします」

ユノはぺこりと頭を下げた

レイ「こちらこそお願ひします!!

あの・・・めっちゃファンです!!

今日の朝もユノさんの歌聞いてました!!」

ユノ「そんな、ありがとうございます

同い年なんですし敬語じゃなくても大丈夫ですよ」

サツキ「自己紹介はこれくらいにして今日はよろしくお願ひしますよ

最近ユノを狙ってる連中がいるんで」

——列車内——

レイ「それで、ユノさんを狙ってる奴らって?」

サツキ「どこかのギルドの連中なんですけどね

ユノの歌の力を狙ってるらしいんですよ」

レイ「歌の力?」

ユノ「私の歌にはね、人を癒したりする力があるんだって

それよりユノって呼び捨てで大丈夫だよ」

レイ「へー確かに聞いてたらすげー落ち着く」

それより、ユノの歌の力を狙うギルドね・・・まさか・

いろいろと考えていると突如前方車輛から女性の悲鳴が聞こえてきた

ユノ「な、なに!？」

突然の悲鳴に動揺するユノ

すると俺達のいる車両のドアが吹っ飛び魔法銃を持った男たちがゾロゾロと入ってくる

犯人A「はーい、この列車は我々『ブラックベガサス天駆の黒馬』が占拠しました」

犯人B「我々の要求はただ一つ

そこにいる女を渡してもらおうか!!」

犯人が指さしたのは予想通りユノ

レイ「渡すわけにはいかねーな」

俺は犯人の前に立ちはだかりユノを車両の奥へ移動させる

犯人C「こいつ『フェアリーテイル妖精の尻尾』の魔導士だ!!」

さして、こんな所で大きな魔法を使うわけにはいかないし

犯人A「やっつまえ!!」

犯人たちは揃いもそろって魔法銃を乱射してきた!!

レイ「こんな狭い所で撃ちやがって!!

『氷竜壁!!』

魔法弾は氷の壁に阻まれ消えていく

レイ「それで終わり？」

『氷竜の晶肘!!』

氷竜壁の表面の形を無数の柱に変えいつきに打ち出した

これなら周りに被害が及ぶこともなく犯人達を捕えられる

犯人「「ぎやああああ!!」

レイ「さてさて、なんでユノをさらおうとしたのかな？」

体を氷漬けにされた犯人達を徹底的に尋問を始める

こうゆうーの得意じゃないんだけどね

犯人A「俺達は頼まれただけなんだよ!!」

レイ「誰にだ!!?」

犯人B「名前なんてしらねーよ!!」

レイ「ほくそんな態度とっていいんだ？」

犯人C「すみませんすみません!!」

収獲なしか・・・

犯人A「あ、右手の甲に黒い鳥のギルドマークがあつたぜ!!」

レイ「黒い・・・鳥!?!」

ユノ「知ってるの?」

レイ「『漆黒の不死鳥』・・・」

俺の考えていた最悪の可能性が現実となつた

この仕事、一筋縄じゃいかなさそうだな

サツキ「まさかユノを狙つてるギルドが巷で噂の闇ギルドだったとはね」

ユノ「なんで私を・・・」

たしかになんでユノを狙う?

あいつらの狙いは『ピース』

ユノの歌の力は必要とは思えないが・・・

レイ「とりあえず隣国まであと少しだ、気抜かない様に・・・」

???「気を抜かぬようにだど?

レイ・グローリー・・・」

突如レイ達の乗つてる車両だけが暗闇に包まれた!!

ユノ「な、なに!?!」

レイ「この声!!」

『漆黒の不死鳥』のマスター!？」

レイは暗闇の中でも目が利くので辺りを見わたすが姿は見えない

??? 「名がないのも何か悲しい・・・」

そうだな・・・メサイアとでも呼んでもらおう」

メサイア・・・救世主ね・・・

メサイア「さて、歌姫は頂いて行こう」

暗闇が晴れ、光が戻ったところにはメサイアの腕の中にはユノが捕われていた

レイ「しまった!!」

ユノ「いや!!」

離して!!」

ユノは必死に足をバタつかせるがメサイアが列車の扉に作りだした闇のゲートに飲まれていく

レイ「行かせるかあ!!!」

俺は両腕に光を纏いメサイアに飛びかかる

レイ「『白竜の聖拳!!!』」

俺の繰り出した拳はいとも簡単にメサイアに掴まれる

そしてそのまま地面に叩きつけた!!

レイ「がっ!!」

メサイア「芸がないぞ、レイ・グローリー」

魔法というのはこう使うのだ」

そういうメサイアはどこから漆黒の鍵を取り出した

レイ「やっぱりそれが『悪魔の鍵』か・・・」

メサイア「ある場所に封印されていたのだが・・・」

この鍵は非常に使い勝手がいい・・・

冥界より来たれ、獄炎の魔人『イフリート!!』

メサイアが鍵を突き出すと床から炎が吹き出し赤い甲冑を身に纏った悪魔が現れた

イフリート「ハハハハハハッ!!!」

久しぶりだなメサイア!!

どういう要件だ?」

メサイア「この者を殺す、憑依だ」

イフリートがメサイアの体に入っていくとメサイアの体に赤い甲冑と黒い刀身に炎

のラインが通った剣が身を纏った

メサイア「『メギド・プロミネンス!!』」

メサイアが剣を振るうと刀身から黒いマグマが噴き出しレイとサツキめがけて飛んできた

レイ「くっ!!」

『水竜の咆哮!!』

レイはマグマを水で固め、サツキを隣の車両に押し込む

サツキ「ちよつと!?!」

レイ「危ないから下がっててください!!」

ユノはなんとかするので!!」

そうやって俺は隣の車両に繋がる連結部分を叩き斬った

さてさてどうするかね〜

レイ「火には水だよな

『魔装・水竜』

俺の体は水に包まれ、黒と青の羽織りを身に纏う

レイ「ユノを・・・返せ!!」

俺は足から水を噴出させネメシスまで一気に距離を詰める!!

レイ「『水竜剣式ノ型 時雨竜!!』」



レイが剣を突き出すと剣が水を帯び、多数の刀身の形をかたどってメサイアに向かって飛んでいった

しかしメサイアは全ての水の剣を叩き落としレイと剣を相対させ火花を散らせる

レイ「なぜユノを狙う!？」

メサイア「貴様らが部下たちを倒したせいだ

思いのほか『ピース』の覚醒が遅くてな

この歌姫の持つ力で覚醒をうながすことにしたので

レイ『『エンドレス』なんてもの発動させるわけないだろ!!』

俺は左手から水をユノが捕われている闇のゲートへと飛ばしユノの体に纏わせると

こちら側へ引き込んだ

ユノ「きやつ」

ネメシス「なに!？」

ユノを奪われネメシスが油断する瞬間をレイは見逃さなかった

レイ「戦闘中に気抜くなんて甘いんじゃないやねーの？」

『真・滅竜奥義 蒼波水月!!』

俺が床に剣を突き立てると一面に水が静かに広がりネメシスを中心に巨大な水の剣が出現し円形に広がっていく

レイ「終わりだ」

レイが剣を鞘に納めると水の剣がネメシスの体を切り刻んだ

ネメシスの死体を確かめに顔を見に行ったがネメシスの姿は金髪から黒髪の男へと変わっていた

レイ「まくたネクロマンサーかよ

ユノ、転移するから掴まって」

ユノ「掴まりたいんですけど・・・腰がぬけちゃって・・・」

レイ「んくじや、しょうがないな」

ユノ「え!？」

俺はユノをお姫様だっこして先に到着しているはずのサツキのもとへと転移した  
サツキ「やつと来ましたか」

レイ「思ったより手こずりまして・・・」

ユノ「あのく・・・そろそろ降ろして頂いても・・・」

ユノは顔を真っ赤にしながら申し訳なさそうに言った

レイ「あ、ごめん」

俺はユノを脚からそつと降ろした

レイ「じゃあ俺の仕事はここまでですね」

サツキ「そうですね」

いろいろハプニングはありましたが」

レイ「じやあ帰る前にーっ」

俺は空の魔水晶ラブリマの中に白竜の魔力を送りこんだ

レイ「この魔水晶ラブリマの中に聖属性の絶対防御魔法を組み込んだので

お守りとして持ってて下さい」

ユノ「はい、それでは

私からも・・・」

そう言うとユノは俺の頬に静かにキスをした

サツキ「な!？」

レイ「・・・へ？」

ユノは顔を真っ赤にして駆けだしていった・・・

サツキ「世界で注目されてる歌姫に惚れられたんですから・・・

責任・・・とって下さいよ？」

レイ「えく・・・」

――妖精の尻尾――

俺はギルドに戻りこの1件についてじいさんに報告した  
マカロフ「ふむむ・・・『漆黒ダークフェニックスの不死鳥』がの〜」

レイ「ま、今回も影武者だったわけだが

思ったより『ピース』の覚醒は遅れてるみたいだな」  
マカロフ「しつかしよく1人で切り抜けたもんじやの〜」

レイ「あゝまあ・・・」

マカロフ「今日はもうゆっくり休んだらどうじや?」

レイ「そうする〜」

あゝ疲れた・・・

ルカ「あらレイ、帰ってたの?」

レイ「ああ、さつきな

ココアかなんか頼む」

ルカ「はいはい

アビーが怒ってたわよ?

留守番押しつけられたってw」

レイ「マジか、仕事だからしょうがねーのに・・・」

ルカ「それはアビーに言いなさいよ

「そういえばリサーナ達そろそろ帰ってくるんじゃない？」

「そういえばそうだな・・・」

「ユノの護衛の仕事は言わないこうな・・・」

リサーナ「ただいまー!!」

「キヤー!!」

「レイ会いたかったー!!!」

リサーナは帰ってくるなり俺めがけて飛びついて来た

レイ「おーうおかえりー」

大魔闘演武まであと数カ月・・・

## 冥府の門編

### 第84話 新たなる冒険へ

レイ「だー、忙しい・・・」

大魔闘演武で優勝してから休みなしで仕事してるな」

レイは仕事終わりでちよつとだけできた休憩時間を過ごしていた

聖十でS級というだけで名指しで高難度の依頼が舞い込んできている

リサーナ「ねーレイー」

ナツとグレイとハッピーってまだ帰ってきてないの？」

大浴場でシャワーを浴びてきたリサーナは髪を拭きながら歩いてきた

レイ「まーだみたいだな、なんで？」

リサーナ「ルーシイがね、簡単な仕事なのに遅すぎない？つて」

レイ「まー確かに・・・ん？」

「ギユッ」

レイはリサーナを抱きしめた

リサーナ「なっ／＼

ど、どうしたの!？」

レイ「シャンプー・・・いい匂い」

リサーナ「もう・・・」

ルカ「昼間つからイチャイチャしてんじやないわよ」

ルカはレイが注文していたコーヒーを届けて2人の前に座った

レイ「いいじゃん」

忙しすぎてろくにデザートとかもできないんだもん

てかウエイトレスも板についてきたな」

ルカ「まあね」

さすがに体が鈍らないように体は動かしてるけど

手合わせしてみる？」

レイ「やーよ、俺達が本気出したら地形変わるかもしんねーじゃん」

アビー「どんだけ本気でやる気よ・・・」

そんな話をしている時、マカロフの叫び声が鳴り響いた

マカロフ「レイは!!

レイはおるか!!?

レイ「うるせー!!!」

そんな大声出さなくても聞こえるっつーの!!!」

マカロフ「仕事の依頼じゃ!!」

レイ「えー・・・疲れたから今日はもう帰りたい

そしてリサーナと家でイチャイチャしたい」

マカロフ「いや、この仕事は受けねばならん

ウオーロッド様からの依頼じゃ!!」

レイ「なっ!?!」

リサーナ「誰?」

レイ「ウオーロッド・シーケン・・・聖十大魔道・イシユガルの四天王の一人

そして初代と一緒にフェアリーテイル妖精の尻尾を作った人でもある」

マカロフ「依頼書は2枚・・・1枚はナツとグレイを指名したものじゃ・・・」

ナツとグレイに依頼って・・・大丈夫かよ

レイ「俺の方の依頼はどんなの?」

マカロフ「月の村の調査・・・だそうじゃ

ちなみにナツ達の方は太陽の村・・・」



レイ「月の村・・・聞いた事ねえな」

マカロフ「うだうだ言つとらんではよ行かんかい!!!」

レイ「わーっつたよ!!」

ルカ、アビー、行くぞ!!」

ルカ「えー?」

私もー?」

アビー「文句言つてもついて行かされるんだろうけど」

リサーナ「私はー!?!」

次々と文句が飛んでくる・・・

レイ「リサーナは危険な目に遭わせたくないからダメ!!」

レイはルカとアビーを掴みギルドを飛び出した!!

んじや!!」

## 第85話 月の村

レイ「・・・なにこれ？」

レイ達は何事もなく3日かけて月の村へとたどり着いた・・・が

月の村は一面凍りついていた・・・

ルカ「ひっどいわね、これは」

アビー「自然災害・・・てわけじゃなさそうね」

凍りついた村には人の影1つ残っていない・・・

レイ「この村おかしすぎる

あとこの氷の魔力・・・」

ルカ「レイも気づいた？」

レイ「ああ・・・グレイの魔力に似ている・・・」

俺達が凍りついた村を眺めながら話していると後ろから1人の女が声をかけてきた

カグラ「レイ？」

レイ「ん？」

カグラ!?

「なんでここに？」

声をかけてきたのは人魚の踵マーズイドヒールのカグラだった

カグラ「私は仕事帰りで通りかかったただけなんだが・・・どうなっている？」

レイ「知るか、俺らもさつき着いたばっかだっつーの」

「ギョオオオオオ!!」

アビー「なに!？」

俺達の背後には突然2体の魔物が現れた

2体の間には見覚えのある男が立っている

レイ「お前は・・・ラストイローズ!!!」

ラストイローズ「久しぶりだね、レイ・グロリー」

レイ「ずいぶんみすぼらしい格好してんじやん

今さらなんの用？」

ラストイローズ「この村に冥府タルタロスの門の奴が現れたって聞いてな」

レイ「つてことはこれは冥府タルタロスの門の仕業ってわけね・・・」

ラストイローズ「冥府タルタロスの門はいなかったが代わりにお前に会えた

結果オーライ、お前をここで殺す!!」

レイ「あっそ、んじゃーそっちの2体はルカとカグラ、アビーに任せた」

「「りょかい」」

ラストイローズ「『漆黒の剣!!』『黄金の盾!!』」

レイ「この技の実験体になってもらうぞ

『モード神竜王!!』

レイは光に包まれ竜剣の王輪を背後に携え、黒と金色の装束を纏った

レイ「『ブルークリムゾン!!』」

火竜剣と水竜剣を両手に宿し、それぞれの属性の斬撃をラストイローズに叩きこんで

いく

しかしラストイローズも負けじと斬撃を流していた

レイ「いちお強くなってるみたいね」

ラストイローズ「無駄に7年も過ごすわけないだろ!!」

『銀色の弓矢!!』

レイ「『神威!!』」

ラストイローズは空中に無数の矢を創造しレイに向かって放った

しかし星竜剣で疑似ブラックホールを作り出し全ての矢を吸収する

ラストイローズ「くそ!!」

レイ「悪いけどお前みたいなザコを相手にしてる暇ないんだわ」

そう言うのとレイは右手に鞘付きの水竜剣を構える

ラストイローズ「だまれえええ!!!」

レイ「『水竜剣居合 鏡花水月・・・』」

レイはすれ違いざまにラストイローズに水を付着させ剣を鞘に戻すと同時にその水でラストイローズに一太刀を入れた

ラストイローズ「が・・・はっ・・・」

レイ「そんじやまく、この村の調査を始めようか」

## 第86話 月を崇める者たち

ラストイローズを撃破した俺たちは俺とカグラ、ルカとアビーに分かれ凍りついた月の村を散策していた

レイ「この村……家がやけに小さくないか？」

カグラ「確かに……こんな小さな家に入るのなんて小人くらいだ」

レイ「ぷっ……小人って……ずいぶんファンシーだな」

カグラのかわいい一言で思わずふきだした

カグラ「う、うるさい!!!」

レイ「ま、案外いい線いってるかもな」

レイはそういいながら丘の上の祭壇を指差した

そこには何百人もの小人が凍り漬けにされていた

カグラ「これは……」

レイ「この村の住人だろうな」

祭壇にはなにが祀られていた？」

祭壇にはなにかの・・・大きな力を感じる・・・

レイ「とりあえず溶かしてみるか」

レイは凍っている植物の一部を砕き口に含む

そして魔力を分析し体内で自分の魔力へと置き換えた

レイ「よしよし・・・はあああああ!!!」

「シユウウウウ・・・」

レイは祭壇に手を当て魔力をこめ氷を溶かした

氷を溶かしたとたん凄まじい魔力が吹き荒れる!!

レイ「この魔力は・・・星竜!」

カグラ「なに!」

魔力の渦から姿を現したのは思念体になった星竜だった!!

星竜「うぐ・・・何者だ」

レイ「いやいや、忘れんなよ」

星竜「貴様は・・・我が魔力を無理やり宿した者か・・・」

レイ「なにがあつた?」

星竜「よく覚えていない・・・」

ある男がこの村を凍らせ我の力も・・・」

レイ「ある男？」

カグラ「その者がこの村を凍り漬けにしたのか？」

星竜「そうだ・・・」

あの感じ・・・氷の滅悪魔導士<sup>デビルスレイヤー</sup>」

ルカ「滅悪魔導士・・・聞いたことあるわ」

俺達が星竜と話していると、ころへルカとアビーが合流した

ルカ「たしか悪魔を滅するための魔法を身につけた魔導士」

星竜「そのとおりだ・・・しかしその男は冥府の証を付けておった」

レイ「冥府の証!？」

冥府<sup>タルタロス</sup>の門か!!」

カグラ「バラム同盟の一角だな」

星竜「私の意識もここまでのようだ・・・私の最後の力をもってこの村を解放する!!」

星竜はひとたびうなり声をあげると、村の氷を次々溶かしていく

氷がすべて解けた頃には、星竜の姿はなく、月の形をした結晶が浮かんでいた

小人A「人間がいるぞ!!」

小人B「敵襲ー!!!」

レイ「待て待て待て待て待て!!!」



俺たちはこの村を救いに来ただけだっただけだ!!」

小人C「本当に？」

ルカ「ホントホント、すぐ出て行くからね？」

カグラ「この村、人間が近づかないようだな」

アビー「そんな事どうでもいいから早く出ましょ!!」

俺達4人はすぐさま月の村から出て、カグラと別れギルドへと戻っていった

## 第87話 妖精の唄

俺は月の村を出た後、カグラと別れルカ、アビーと共にウオーロツド様の家に向かった

1度だけ行ったことあるから一応場所は覚えていて  
ウオーロツド「やっぱり君たちにまかせて正解だったよ

いやーよくやった よくやった」

ナツ「楽勝だったな」

レイ「俺達もだ」

ウエンデイ「『冥府の門』<sup>タルタロス</sup>が関わっているのは驚きでしたけど」

ルカ「ナツ達も!？」

グレイ「なんだ？」

お前らの向かった村も凍りついていたのか!？」

レイ「まあー、溶かしたけどさ」

ウオーロッド「うむ．．．その件に関しては評議院に任せておけばよい

さて、君たちに報酬を支払わねば．．．」

そう言つてウオーロッドが懐から取り出したのは．．．？

ウオーロッド「このじやがいもじや」

「「なにいいいい!!」」

ウオーロッド「冗談じやよ

いい温泉を知つておる

その秘湯の情報が報酬じや」

まあ．．．それはそれでどうかと思うが．．．

その夜、俺とナツ、グレイ、ハッピーはその秘湯へと向かつた

ナツ「おわー!!

広つろ!!」

ハッピー「綺麗な風景だねー」

グレイ「疲れた体には最高だねー!!」

レイ「極楽極楽．．．」

俺達はだらけきつた顔で温泉につかっていた

そこへ来たのは．．．？

ルーシイ「な、なんでアンタ達がいるの!!？」

ナツ「いや、俺達先に入ってたし」

来た、巨乳4人衆 with ネコ2匹

レイ「あー、ここは混浴だ・・・気にせず入りなさい」

ルーシイ「なに悟り開いてんのよ!!」

レイはまだしもナツ達に見られるのは嫌!!」

ナツ「お前の裸なんか見飽きてるわ」

グレイ「新鮮味ねーもんな」

ルーシイ「うわー、超最低!!」

エルザ「まあ、ケンカなんかするな

仲間同士だこれくらいのスキンシップは普通だろ」

ウエンデイ「普通じゃないです!!」

レイ「それにしてもウエンデイ・・・改めて見ると立派に成長したな」

レイはウエンデイのたわわに実った大きな胸を見ていた

もうエルザやルーシイ、ルカに引けをとらないくらいに大きくなっていた

ウエンデイ「そ、そんなことないです・・・」

顔を真っ赤にするウエンデイ19歳・・・かわいい・・・

シャルル「あんまジロジロみないの!!」

レイ「へーい」

エルザ「どれ、ナツとグレイ、久しぶりに背中でも洗ってやろう」

ナツ「い、いいよ!!」

もうガキじゃねーんだ!!」

そこへウオーロッド入浴

ウオーロッド「仲間というのはいいいもんだのお」

ルーシー「あんた違うでしょうが!!」

レイ「あ?」

ウオーロッド様まだ言ってなかったの?」

ウオーロッド「そういえばまだいっとらんかったの・・・」

ワシはメイビスと共に『妖精の尻尾』フェアリーテイルをつくった創世期メンバーの1人

君らの大先輩じゃよ」

彼もまた左腕に妖精の紋章を刻むギルド創世期メンバーの1人だった

エルザ「それでウチのレイとナツ、グレイを指名されたのですね」

ウオーロッド「いかにも・・・君たちが私の家を訪れた時

ほのかに懐かしきギルドの古木の匂いがした・・・

君たち若き妖精たちに会えて私は本当に嬉しいのだ・・・  
メイビスの唱えた和・・・

血より濃い魂の絆で結ばれた魔導士ギルド『フェアリーテイル妖精の尻尾』

その精神は時が流れた今でも君たちの心に受け継がれておる  
それは仕事の成否にあらず、君たちを見た時に感じた事

かつてメイビスは言った・・・

仲間とは言葉だけのものではない

仲間とは心・・・無条件で信じられる相手」

――回想――

メイビス「どうか私を頼ってください

私もいつかきつと、あなたを頼る事があるでしょう

苦しい時も悲しい時も私が隣についてます

あなたは決して一人じゃない

空に輝く星々は希望の数

肌にふれる風は明日への予感

さあ、歩みましょう

妖精たちの詩にあわせて・・・」

—————

エルザ「代われ」

ナツ「あ・・・おう」

ウオーロツドの言葉を聞いたナツはしぶしぶエルザと交代した

ルーシィ「妖精の尻尾創始の言葉かあ・・・なんか感慨深いものがあるね」

エルザの背中を洗っているナツはあることを思いついた

ナツ「つー事はアレか!？」

じつちやんより年寄りなのか!？」

エルザ「失礼だぞ、ナツ!!」

ナツ「いや・・・もしかしてそんなに昔の人だとき

ENDって悪魔の話知ってるかなって」

ウオーロツド「END・・・終焉？」

ナツ「ゼレフ書の悪魔らしい

オレの親父のドラゴンが倒そうとしてたみてーなんだ

そのENDってのが何なのかわかればイグニールの居場所のヒントになると  
思っただけだな」

ウォーロツド「ウム・・・すまんが知らんおう

だが昼間に『冥府の門』と聞いてこんな話を思い出した

以前レイ君にも話したと思うが・・・奴等は正体が一切わからぬ不気味なギルド

本拠地も構成員の数も不明じや

だが、何度か集会を目撃した者の話を聞く事がある

その者たちは口々にこう言う

あの集会は悪魔崇拜だ・・・」

レイ「一応こつからは俺とイシユガル四天王の推測ではあるんだが・・・

おそらく『冥府の門』はゼレフ書の悪魔を保有してると思われる」

ルーシイ「ギルドがゼレフ書の悪魔を保有!?!」

ナツ「どこにいるかわかんねーってんならやりようがねえなっ!!!

見つけたら叩き潰して吐かせてやる!!!

こうやってギツタンギツタンにしてーっ」

グレイ「お、おいナツ・・・」





## 第88話 冥府の男

——『フェアリーテイル  
妖精の尻尾』——

ギルドのカウンターでは仕事から戻ったエルザがマカロフに報告をしていた  
マカロフ「あのミネルバが・・・闇ギルドに？」

エルザ「ええ・・・」

マカロフ「なんとまあ・・・軽率というか無謀というか・・・」

父親はどうしておる？

セイバトウリス 剣咬の虎のマスターじゃつたるる？」

エルザ「彼の居場所はまだに分かりません・・・」

マカロフ「いずれにしても評議院には報告せねばな」

エルザ「レイとジエールを評議院を向かわせました」

私はステイングに連絡してみようと思った所です」

——魔法評議院E R A——

レイ「だー、めんどくせーなー」

ジエラール「そう言うな」

『冥府の門』タルタロスが動き出してるかもしれないんだ」

評議院への道を歩いているレイとジエラール、その目の前で突如として評議院が爆発し砕け散った

レイ「なっ!!?」

ジエラール「爆発!?!」

目の前には崩壊する評議院・・・レイとジエラールは急いで建物の中へと入っていった

崩壊した評議院の中では爆発に巻き込まれた死体の数々・・・中にはラハールやオーグ老師の姿も・・・

オーグ老師の傍らにはドランバルトが座り込んでいた

レイ「ドランバルト!!」

何があった!?!」

ドランバルト「レイ・・・ジェラール・・・あいつがみんなを!!」

ドランバルトが指さした先には1人の男が立っていた

レイ「・・・ネコ耳？」

ジェラール「何者だ!？」

ジャツカル「オレの名はジャツカル

『冥府の門』<sup>タルタロス</sup> 九鬼門の1人

お前らを殺す男の名前や」

レイ「OK OK・・・とりあえずこいつを縛りあげればいって話だな」

ジェラール「話が早く済んでいいことだ」

ジャツカル「なめるなや、人間風情が」

レイ「ジェラールはドランバルト共に地下に行つて六魔を解放して来い

その後はお前らに任せる」

ジェラール「わかった」

ジェラールはドランバルト共に地下へ向かった

レイはジャツカルと対峙する

レイ「お前おもしろい格好してんなー」

ジャツカル「バカにすんなや・・・爆!!!」

レイ「!!?」

「ドオオン!!」

ジャツカルが腕をレイに向けた瞬間目の前の空間が直後として爆発を起こした  
しかしレイは瞬時に気付き後退する

レイ「物騒な魔法使いやがる」

ジャツカル「魔法やない・・・」

俺達『冥府<sup>タルタロス</sup>の門』が使うのは、呪法?・・・魔法の上位に存在する力」

レイ「んなもん知るかああああ!!」

ジャツカルは炎の蹴りを喰らい瓦礫の山へと突っ込んだ

ジャツカル「ぶはっ!!」

クハハッ、久々にガチでやれそうや」

レイ「そりやよかつた

『水竜の咆哮!!』』

レイはジャツカルへ水のブレスを放ったが爆発で防がれる  
ジャツカルもレイへ爆発を続けて放つが軽々と避けていく  
ただでさえ崩壊している評議院がどんどん崩壊していた

レイ「悪いがあんま悠長に戦っている時間がねーんだよ」

ジャツカル「そりゃこつちも同じや

『爆螺旋!!』

レイ「痛ツ!!!」

地面から現れた爆発の竜巻がレイの左腕を巻き込んだ

ジャツカル「これで左腕は使えんな」

レイ「うるさい・・・いい加減眠つてろ!!」

『蒼海水竜拳!!』

ジャツカル「ぐああああ!!!」

懐に飛び込んだレイの水竜の鉄拳の連撃魔法がジャツカルを捉え次々に殴りつけて

いく

レイ「これで終わりだ!!」

吹き飛ばえええ!!!」

最後の一撃がジャツカルの顔面を捉え空の彼方へと吹き飛ばした

ジャツカルが飛んでいった方角にはなぜか隕石・・・隕石!!?

レイ「ふー・・・あれは・・・ジェラールか・・・」

つーかやべえ・・・目的を聞くの忘れた・・・」

## 第89話 妖精対冥府

レイはジャツカルを吹っ飛ばした後、隕石が落ちたであろう場所に向かった  
そこには巨大なクレーターができ六魔が倒れていた

レイ「すさまじいな・・・」

ジェラール「うっ・・・その声はレイか？」

レイ「ジェラール!!」

お前目が!!」

ジェラール「気にするな、帰ったらポーリユシカさんに診てもらえばいい」

レイ「まあ・・・で、六魔はどうする？」

ジェラール「俺のチームに入れる」

レイ「は!？」

ギルドに入れるってことか!？」

ジェラール「もう評議院もないし問題はないだろう

7年前、お前が俺にした事と同じだ」

おお・・・痛い所つかれたな・・・

レイ「まあ、俺はいいけどね」

とりあえずギルドに帰ろう

この事態をじいさんに報告するんだ」

エリック「とりあえず・・・俺達を休ませてくれ」

レイ「わかつてる」

ソラノ「それより・・・レイの体・・・光ってるゾ？」

レイ「ん？」

ソラノに指摘され、自分の体を見ると確かに右足と右腕が光っていた

『ズドオン!!!』

レイ「が・・・はっ!!!」

爆発・・・だど!?

右足と右腕はジャツカルに触れた・・・触れた場所も爆弾にできるのか!?

リチャード「大丈夫デスカ!？」

レイ「問題ない・・・ギルドへ戻るぞ」



——『妖精の尻尾』——

俺はジェラールと六魔をリチャードと共にポリーリユシカさんの所へ運びギルドへ戻った

ラクサス達も別の冥府の男にやられポリーリユシカさんの所へ運ばれていた評議院であった事をギルドのみんなに説明をした

マカロフ「ポリーリユシカ!!

ラクサス達は大丈夫なのか!!?」

ポリーリユシカ「ラクサス達は魔障粒子にかなり侵されている

少量の摂取でも危険な薬物、回復するかどうかは・・・

ジェラールの視力はいずれ戻るよ」

レイ「現評議員は殺され、元評議員も狙われた・・・

おそらく『冥府の門』<sup>タルタロス</sup>は評議員の関係者を皆殺しにするつもりだろう」  
ウル「ならジェラールと私も標的ってこと?」

レイ「そうなるな」

ギルド全体が沈黙に包まれたがその沈黙を破ったのはナツだった

ナツ「じつちゃん・・・戦争だ!!

『冥府の門』は一人のこらずぶつ潰してやる!!」

レイ「落ち着けナツ、相手の居場所が分からない今できることは元評議員を護衛することだ」

グレイ「元評議員を護衛しとけば奴らの方から来る・・・一石二鳥だな」

マカオ「だが元評議員の住所は秘匿情報・・・知るものはいない」

ハッピー「なんで？」

シャルル「住所がわかったら悪者が報復に来ちやうでしょ」

ロキ「そうでもないよ」

全員ではないけど元評議員の住所は僕が知ってる」

ルーシー「ロキ!？」

ウエンディ「なんでロキさんが知ってるんですか？」

不思議そうにしているウエンディに耳打ちするロキ

みるみるウエンディの顔が赤くなっていく

ルーシー「・・・女ね」

マカロフ「ロキの情報により4名の居場所が分かった

まずはチームで動き元評議員を護衛

そして口は堅いと思うが他の元評議員の住所

『冥府の門』に狙われる理由を聞きだすのじゃ!!

敵は冥府の門!!

オランオンセイイス グリモアハート

『六魔將軍』『悪魔の心臓』に並ぶバラム同盟の一角!!

しかしワシらはその2つを撃破してきた!!

『冥府の門』も同じように我々を敵に回した事を後悔するだろう!!!

仲間がやられた!! それは自身の痛み!!

仲間が流した血は我が体より流れた血と同じ!!!

この痛みを・・・苦しみを闘志と変えて敵を討て!!!

我らは正義ではない!! 我らは意志で動く!!

我らが絆と誇りにかけて家族の敵を駆逐する!!!」

「オオオオオオオオ!!!」

今ここに『妖精の尻尾』V S . 『冥府の門』開幕!!!

## 第90話 不協和音

俺は元評議員の護衛をナツ達に任せ、俺の別荘で六魔の療養、ジエラールとウルの護衛をしていた

ここには俺、ルカ、アビー、リチャードがついている

レイ「この建物自体隠匿魔法で隠してあるから冥府の奴らにはバレないだろう

目の具合はどうだジエラール？」

ジエラール「ああ、ポーリユシカさんのおかげで少しは見えてきた」

レイ「お前らもちやつちやと怪我治せよ」

レイはソラノの頭をポンポンと叩きながらベッドに座り込んだ

ソラノはゆでダコのように赤くなる

ソラノ「うう・・・」

メルデイ「あたしもやって!!」

レイ「お、お・・・」

マクベス「ソラノも形無しだね」

リチャード「愛・・・デスネ!!」

エリック「つつーかよお、ジェラールは今回の件心当たりあんだろ？」

俺にはさつきからお前の心の声が丸聞こえだけど？」

レイ「そうゆうことは早く言えよ!!」

どうなんだ、ジェラール？」

ジェラール「ああ・・・さきほど気づいたが

おそらく奴らの目的は白き遺産・・・フェイス」

ソーヤー「白き遺産・・・聞いたことないな」

ジェラール「それはそうだ

フェイスは秘匿義務で誰も喋ることは許されない」

ルカ「そもそもフェイスってなんなのよ？」

ジェラール「フェイスは評議院の所有する兵器の1つだ

だがただの兵器ではない・・・エーテリオンとも比べ物にならない

フェイスは・・・魔導パルス爆弾・・・

大陸中のすべての魔力を消滅させる兵器だ!!!」

「!!!??」  
「」

アビー「大陸中の魔力を・・・消す!？」

ウル「そんなことしたら大陸中の魔導士が魔力欠乏症になるわね」

メルデイ「それに『冥府タルタロスの門』は呪法つてのを使うんでしょ？」

ソラノ「魔法が使えない中、呪法を使う『冥府タルタロスの門』だけは世界を自由にできる」

レイ「フェイスはどこにある？」

ジェラール「わからない・・・」

ただフェイスは元評議員の生体リンクにより封印されているらしい・・・  
その3人は元議長しかわからないそうだ」

レイ「手詰まりか・・・まさかお前らが封印を解く鍵なわけないよな？」

ウル「心当たりはないわね」

ジェラール「俺もだ・・・」

とりあえずまーじいさんに報告だな

レイは別荘に設置されている通信ラクリマでギルドへ連絡を取った

マカロフ「ワシらもミケロ老師から聞いたばかりじゃ

おそらく元議長も狙われる・・・既にエルザとミラを向かわせた」

レイ「OK・・・」

待てよ・・・なぜ『冥府タルタロスの門』は元評議員の居場所がわかった？

それにフェイスの情報はどこから・・・まさかっ!!?」

マカロフ「おいレイ!!」

元議長が『冥府タルタロスの門』と繋がっているというのか!?!」

レイ「そうとしか考えられないだろ!!」

マカロフ「ナツが今元議長の家に向かったらしい!!」

ここはナツに任せておこう!!」

そう言つてマカロフは通信を切つた

レイ「まさか元議長が裏切つていたとはな・・・」

マクベス「僕たちもそろそろ動くべきじゃないかい?」

レイ「ああ・・・ジェラルルの視力が戻り次第俺達も『冥府タルタロスの門』を潰しにかかろ」

「了解」

その頃・・・

ギルドではセイラに操られたエルフマンが爆弾ラクリマを手・・・

爆発までのカウントダウンが始まる!!!

## 第91話 謎

レイ「とりあえずルカとメルデイ、エリック、リチャード、ソーヤーは引き続き

ジェラールとウルスの護衛を

俺とアビー、マクベス、ソラノはギルドへ向かう」

ルカ「視力が戻ったとはいえ狙われてるわけだしね」

ジェラール「すまない、迷惑をかける」

ウル「隠匿魔法をかけてるんだから大丈夫じゃない？」

レイ「念には念をだ

エリックの耳は頼りになる」

エリック「こつちは任せとけ」

レイ「じゃー解散」

俺達はギルドへ急いだ

しかし俺達がギルドへ着くと建物は粉々に砕け、上空には四角い立方体が浮いていた



マグノリアの街も所々崩壊している

アビー「一体何が？」

マクベス「あの立方体が『冥府の門』タルタロスだろうね」

ソラノ「街もひどい状態だゾ」

レイ「許さねえ・・・」

レイの体から凄まじい量の魔力が溢れだし大気が震えはじめる

アビー「レイは先にあの立方体に転移したら？」

2人は私が運ぶわ」

レイ「そうしてくれ・・・」

「ヒュンッ」

俺は即座に立方体へと転移した

立方体ではすでに戦いが始まっており激しい戦いが繰り広げられていた

グレイ「レイ!!」

レイ「状況を教えろ」

グレイはレイの姿を見つめ駆け寄ったがにじみ出る魔力に後ずさりをする

グレイ「とりあえずギルドが爆破され

ナツ、エルザ、ミラ、リサーナが掴まってる」

レイ「・・・あ？」

グレイ「へ？」

レイ「リサーナが捕まってるだど？」

グレイ「お、お・・・」

中に入る道が見つからねえんだ」

レイ「んなもん作ればいいだろうがああ!!!」

とりあえず敵を一掃する!!!

『滅竜奥義 ホーリーノヴァアア!!!』

レイは向かってくる敵へ聖属性の滅竜奥義を放ち一帯をさら地に還した

グレイ「す、すげえ・・・」

レイ「この真下に穴をあける!!」

『モード神竜王!!』『神竜王の咆哮オオオ!!!』

レイは足元に全属性を含んだ最大火力のプレスを放ち立方体に穴をあけた

レイ「じゃ、俺は先に行つて皆殺しにしてくるから」

そういつて1人穴に飛び降りるレイ

その先にはななが待つのか・・・

レイ「リサナーナー!!」

レイは建物の中を叫びながらリサナーナ達を探しまわっている  
もちろん叫んでいるせいで敵はわんさか寄ってきていた

走っている通路には敵が既に配置されていた

まさに壁のように敵が待ち構えている

レイ「失せろよ

・・・今虫の居所が悪いからよ・・・」

レイは右腕を下に構え雷を蓄える

「バチチチチチツ!!」

レイ『雷竜・・・一閃!!』

レイが突撃しようとした瞬間、周りの時間は止まり、レイの魔法も消滅した

???「ここまで来たんだねレイ・・・」

レイ「誰だ?」

ゼレフ「僕はゼレフ・・・」

君のことはよく知っている・・・転生者ということも」

は?

なんでゼレフがわかるわけ?

ゼレフ「僕はね・・・

400年前から神竜の力を継ぐ者を見てきた

みんな異世界から来た者が力を継ぐんだけど

誰一人として僕を壊すまでの力は無かったんだ

神竜王の力を得た君なら・・・期待しているよ」

そう言いゼレフはその場を立ち去っていった

レイ「あ、おい!!

待ちやがれ!!!」

400年前から?

転生者は過去にも俺だけじゃなかったってことか・・・

ゼレフという謎の存在がレイの力の謎を呼ぶ・・・

## 第92話 鏡

さてさてさーて、まあゼレフの言ったことはとりあえず置いてこう

ここであれこれ考えてもラチがあかん

レイ「けどまー、嫌な魔力ばっか感じるな…いや呪力か…」

まわりには骸骨、なんか血肉のような壁ばかり

まるで地獄だな…

レイ「さて、リサーナはどこだ？」

捕まってるなら独房かなんかに入れられてるはずだが…」

敵兵「見つけたぞ!!？」

侵入者だ!!？」

レイが微弱なりサーナの魔力を探っていると雑魚どもに見つかりウジャウジャと湧いてきた

レイ「めんどい…魔力は温存しとかねーとな」

レイはポケットから魔法水晶ラクリマを取り出した

レイ「喰らえ!!?」

『スモークスクリーン  
煙 雲 !!?』

敵兵「ぶわっ!!?」

かつこよく言っているがようはただの目くらましである

体術で戦う体力すら惜しいからな

レイは煙が晴れないうちにリサーナの魔力を感じた所へ走り出した

レイ「たぶんこの辺に…」

リサーナ・ナツ「レイ!!?」

独房の通り道を歩いていると通りかかった独房の中から声がした

レイ「無事か、リサーナ!!?」

ナツ「俺は!!?」

リサーナ「私は大丈夫、けどエルザとミラ姉とエルフ兄ちゃんが!!?」

レイ「エルフマンは大丈夫だ

エルザとミラか…

てかお前の格好…」

今のリサーナはタオール一枚羽織っているだけ…

レイ「ナツ…」

ナツ「は、はい!!？」

レイの無言の圧力に怯えるナツ

何度この圧力を味わったことか：

レイ「今回は場合が場合だ、許す」

ナツ「ありがたき幸せ」

ナツは深々とお辞儀をした

初めて許したことに安堵していることだろう

レイ「さーて、出してやるか

お前から少し下がってろ」

そう言い、竜剣を生成して鉄格子を斬ろうと構えると：

☒? 「そうはさせないよ」

カツカツと暗闇から誰かが姿を現した

その者はレイと瓜二つ：：というかレイそのものだった

ナツ「レイがもう1人!?!？」

レイ「レアグロープは死んだ、ということはお前は誰だ？」

裏レイ「僕は君自身だよ、と言っても少し違うかな

鏡の表と裏といったほうがいい

ようは君の闇の部分と言ったほうがしっくりくるね  
僕は「ミラー」という悪魔の呪法で顕現している」

レイ「その悪魔叩けばいいんだろ」

そうすりやお前も消えるだろ」

裏レイ「その前に僕が立ちはだかるよ」

僕の力は君自身、わかるよね？」

レイ「簡単にはいかないってことね」

裏レイ「そうだ、さて始めようか」

僕は君を倒せばこの世界に永遠に顕現できる

この世界を手に入れるために消えてもらうよ!!？」

そう言つて裏レイは魔法を構える

表と裏、光と闇：勝つのはどっちだ！



## 第93話 表裏一体

レイと裏レイの戦闘はとても凄まじく、地面を破壊しながら戦い、いつの間にか戦いの舞台は水槽のようなものがある場所へと移動していた

レイ「しつつけーな、このヤロー!!?」

裏レイ「力が拮抗してるんだ、当たり前だろ?」

我ながら余裕ぶってるのが癪にさわる:

そう考えていると裏レイの魔法が直撃しレイは吹き飛ばされた

レイ「うぐっ!!?」

ミラ「きやつ」

吹き飛ばされた先には戦闘中のミラ、リサーナ、その他もろもろがいた

レイ「なんだ、ミラも戦闘中か」

ミラ「そっちもね

レイの方が大変そうだけど」

レイ「まーね、『火竜の咆哮!!?』」

レイはブレスを放つが容易に弾き消された

レイ「つとまあ、こんな感じですね

ぶっちゃけ相打ち覚悟だな」

自分相手にすんのがこんなに変だとは思わなかったな

俺の力が強大すぎるのもあるけど：

レイ「さてさて、そろそろ決着つけますか」

裏レイ「そうだね、全力で行こう」

2人のレイは互いに凄まじい魔力を解放し相対する光と闇の神竜王となった

レイ「これで消えろおお!!?」

裏レイ「消えるのは君だあ!!?」

2人は拳に魔力を込め走り出した

「うおおおおお!!?!!?!!?」

2人の拳がぶつかかる直前、レイは神竜王の魔力を解除し火竜を魔装した!!?

裏レイ「(フェイク!!?)」

レイ「悪いな、ここで倒れるわけにはいかないんだ!!?」

『火竜剣居合

火焰桜!!?』  
かえんざくら

すれ違いざまに抜刀、裏レイの横つ腹に見事な一太刀を浴びせた

裏レイ「ぐっ…さすが僕だ…」

レイ「お前は俺自身だ、このまま消えさせない

俺の中へ還れ」

裏レイ「優しいね、ミラーには気をつけるんだよ

彼の呪法は“ミラージュ”彼の体は鏡そのものに変化でき

る」

レイ「頭に入れておく」

裏レイはそれだけ言い残すと半透明になり、俺の中へと入ってきた

心なしか体力と魔力が回復した気がする

レイ「ミラはどうなった？」

ミラの方もエルフマンが駆けつけたおかげでセイラを気絶させたようだ

めんどいのはラミーとかいう増殖し続ける悪魔だな…

レイ「一掃する

『雷天竜の咆哮!!?』

ラミー「っ!?」

突如飛んできた光速のブレスに断末魔の叫びをあげることもなく瞬時に消し飛んで

行った

本体は先にどこかへ逃げたようだな

レイ「よし、お前らはとりあえずみんなに無事を知らせに行け」

リサーナ「レイは？」

レイ「俺はちよつと調べ物」

ここが悪魔を復活させる場所ならゼレフに関する書物の1つや2つ見つかるはず……だよな

リサーナ「わかったわ、無事でいてね」

レイ「はいよ」

さてさて、リサーナ達がいなくなったところで急いでさがしますか